

一般国道8号
糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅴ

前波南遺跡Ⅱ
伝極楽寺跡

2010

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道8号
糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書V

前^{ぜん}波^{なみ}南^{みなみ}遺跡Ⅱ
伝^{でん}極^{ごく}楽^{らく}寺^じ跡^{あと}

2010

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道8号は新潟市を起点とし、日本海沿いに北陸地方を縦断し、京都市に至る総距離561.2kmの幹線国道です。新潟県と北陸地方及び京阪神地方を結ぶとともに、新潟県の産業・経済・文化の交流発展に大きな役割を果たしてきました。

しかし、現在の糸魚川市域の国道8号は、交通混雑に伴う渋滞・騒音、事故等の交通環境の悪化が深刻な問題となっています。国道8号糸魚川東バイパス建設事業は、このような問題を解決し、幹線ネットワークの充実と強化を図り、幹線道路としての役割や地域の生活道路としての機能を回復させるために計画されました。

本書は、この糸魚川東バイパスの建設に先立ち、平成19年度に実施した前波南遺跡、伝極楽寺跡の発掘調査報告書です。調査によって、前波南遺跡では古墳時代から古代の河川跡や溝が見つかり、多くの遺物が出土しました。滑石製の白玉を主体とする玉類、田下駄や大足と想定される農具、多種多様な建築部材、曲物類、形代類など、土器以外にも様々な種類の遺物が見られ、当時の人々の暮らしぶりを知る貴重な資料となりました。また、「出雲」と墨書された木簡は当地と出雲地方の密接な関係（交流）を示唆する資料として注目されます。一方、伝極楽寺跡では寺院の痕跡を直接示す遺構を確認できませんでしたが、多数の柱穴があり、多くの掘立柱建物が存在していたことが分かりました。珠洲焼、青磁・白磁、土師質土器などの遺物と合わせ、山際に立地する12～13世紀の小規模集落の様子を知ることができました。

今回の発掘調査で得られた資料や本報告書が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されることを期待しています。

最後に、この発掘調査に対し多大な御理解と御協力をいただきました糸魚川市教育委員会、並びに地元の方々、また、発掘調査から本報告書の作成に至るまで格別な御配慮をいただいた国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所に対して厚く御礼を申し上げます。

平成22年3月

新潟県教育委員会

教育長 武藤克己

例 言

- 1 本報告書は、新潟県糸魚川市大字大和川字前波ほかに所在する前波南遺跡、同じく大字田伏字高畑1175-1ほかに所在する伝極楽寺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は一般国道8号糸魚川東バイパスの建設に伴い、国土交通省から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したものである。
- 3 発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。
- 4 埋文事業団は、掘削作業等を株式会社古田組に委託して発掘調査を実施した。
- 5 出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記は、前波南遺跡の略記号「07ゼンナミ」、伝極楽寺跡の略記号「ゴクラ」とし、出土地点や層位等を併記した。
- 6 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 7 本書に掲載した遺物番号は種別を問わず通し番号とし、本文及び挿図・遺物観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。
- 8 引用・参考文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。「第三章4 自然科学分析」については、引用文献を節末に掲載した。また、本文中の敬称は略した。
- 9 調査成果の一部は、遺跡速報会（平成19年12月8日）、広報紙『埋文にいがた』等で公表しているが、本書の記述をもって正式な報告とする。
- 10 自然科学分析の内、樹種同定はバリノ・サーヴェイ株式会社、放射性炭素年代測定は株式会社加速器分析研究所に委託した。
- 11 遺構断面図のトレース及び各種図版作成・編集は、株式会社セブアスに委託した。
- 12 本書の執筆は、石川智紀（埋文事業団 班長）、樋口重正（同 主任調査員）、相羽重徳（株式会社古田組 主任調査員）、松永篤知（同 調査員）、高橋敦（バリノ・サーヴェイ株式会社）、鹿又喜陸（株式会社加速器分析研究所）があたり、編集は石川が担当した。木簡（「出雲真山」）の読解は田中一穂（埋文事業団 嘱託員）が行った。また、第二章については、『六反田南遺跡 前波南遺跡』〔春日ほか2008〕から再録し、変更か所に下線を付した。執筆分担は以下のとおりである。
第1章1・2A2）・4、第三章1・2B1）〔河川1〕・3B・3D・5…石川
第1章2A1）・2B1）・3…樋口
第二章A…小川真一（埋文事業団文化財調査員）
第二章B…加藤 学（埋文事業団班長）・春日真実（同班長）
第1章2B2）、第三章2B6）・3A〔中世以後〕、第四章…相羽
第三章2A・2B1）～5）・3A〔古代以前〕・3C…松永
第三章4A…高橋敦
第三章4B…鹿又喜陸
- 13 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力をいただいた。ここに記して厚く御礼を申し上げる。（敬称略 五十音順）
安藤正美 伊藤啓雄 今村 克 岩崎 満 金子拓男 木島 勉 土田孝雄 長澤展生
長澤博之 能芝 勉 細井佳浩 水落雅明 宮田進一 森田喜久男 山岸洋一
糸魚川市教育委員会 糸魚川市田伏区自治会 糸魚川市大和川自治会 大雲寺

目 次

第 I 章 序 説

1 調査に至る経緯	1
2 調査経過	2
A 前波南遺跡	2
1) 試掘確認調査	2
2) 本発掘調査	2
B 伝極楽寺跡	4
1) 試掘確認調査	4
2) 本発掘調査	4
3 調査体制	6
A 試掘確認調査	6
1) 前波南遺跡	6
2) 伝極楽寺跡	6
B 本発掘調査	6
4 整理作業と整理解体	7

第 II 章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境	8
2 歴史的環境	9

第 III 章 前波南遺跡

1 概 要	13
A グリッドの設定	13
B 基本層序	13
2 遺 構	14
A 概 要	14
B 各 説	15
1) 自然流路	15
2) 溝状遺構	16
3) ビット	16
4) 土 坑	17
5) 性格不明遺構	17
6) 杭	17
3 遺 物	18
A 土器・陶磁器・土製品	18
1) 概 要	18
2) 遺構・自然流路内の出土遺物	18
3) 遺構外の出土遺物	20
B 石器・石製品	21
C 木器・木製品	25
D 金属製品	29
4 自然科学分析	30
A 樹種同定	30
1) はじめに	30
2) 試 料	30
3) 分析方法	30
4) 結 果	30
5) 考 察	32

B 放射性炭素年代測定 (AMS測定)	36
1) 測定対象試料	36
2) 化学処理工程	36
3) 測定方法	36
4) 算出方法	36
5) 測定結果	38
5 ま と め	40

第IV章 伝極楽寺跡

1 調査の概要	42
A グリッドの設定	42
B 基本層序	42
2 遺 構	44
A 遺跡の概要	44
B I 期	44
1) 掘立柱建物	44
2) 礎石建物	46
3) 櫓	46
4) 溝状・不明遺構	47
5) 沢状落ち込み	47
C II 期	47
1) 溝状遺構	47
2) 土 坑	47
3) ビ ッ ト	47
D III 期	47
3 遺 物	48
A I 期	48
B II 期	49
C III 期	50
D その他の遺物	51
4 ま と め	52
A 出土した土器・陶磁器からみた遺跡の消長	52
B 伝極楽寺跡における土地利用の変遷	54
《要 約》	55
《引用・参考文献》	56
《観 察 表》	59

挿 図 目 次

第 1 図 糸魚川東バイパスの法線と遺跡の位置	1	第 9 図 白玉の厚さ別数量表	24
第 2 図 前波南遺跡の試掘確認調査トレンチ位置と 本発掘調査範囲	3	第 10 図 白玉の孔径別数量表	24
第 3 図 伝極楽寺跡の試掘確認調査トレンチ位置と 本発掘調査範囲	3	第 11 図 河川 2 周辺の遺物出土分布図	27
第 4 図 調査範囲と埋設管位置図	4	第 12 図 木材顕微鏡写真 (1)	34
第 5 図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡	11	第 13 図 木材顕微鏡写真 (2)	35
第 6 図 前波南遺跡グリッド設定と基本層序	14	第 14 図 暦年校正結果	39
第 7 図 遺構の長軸方向	15	第 15 図 前波南遺跡の遺構分布図	41
第 8 図 白玉の外形 (長さ、幅) 別数量表	24	第 16 図 伝極楽寺跡基本層序	43
		第 17 図 建物分類表	45

表 目 次

第 1 表 樹種同定結果	31
第 2 表 放射性炭素年代測定の結果	38

第 3 表 伝極楽寺跡出土遺物一覧	53
-------------------	----

図 版 目 次

【図面目次】

図版 1 前波南遺跡	遺構全体図
図版 2 前波南遺跡	遺構分割図 (1)
図版 3 前波南遺跡	遺構個別図 (1)
図版 4 前波南遺跡	遺構分割図 (2)
図版 5 前波南遺跡	遺構個別図 (2)
図版 6 前波南遺跡	遺構個別図 (3)
図版 7 前波南遺跡	遺構分割図 (3)
図版 8 前波南遺跡	遺構個別図 (4)
図版 9 前波南遺跡	遺構個別図 (5)
図版 10 前波南遺跡	遺構個別図 (6)
図版 11 前波南遺跡	遺構個別図 (7)
図版 12 前波南遺跡	遺構個別図 (8)
図版 13 前波南遺跡	土器・陶磁器 (1)、土製品
図版 14 前波南遺跡	土器・陶磁器 (2)
図版 15 前波南遺跡	土器・陶磁器 (3)、瓦
図版 16 前波南遺跡	石器・石製品 (1)
図版 17 前波南遺跡	石器・石製品 (2)
図版 18 前波南遺跡	木器・木製品 (1)
図版 19 前波南遺跡	木器・木製品 (2)
図版 20 前波南遺跡	木器・木製品 (3)
図版 21 前波南遺跡	木器・木製品 (4)
図版 22 前波南遺跡	木器・木製品 (5)
図版 23 前波南遺跡	木器・木製品 (6)
図版 24 前波南遺跡	金属製品
図版 25 伝極楽寺跡	調査前地形測量図・グリッド設定図
図版 26 伝極楽寺跡	I 期・II 期 遺構全体図
図版 27 伝極楽寺跡	I 期 遺構全体図
図版 28 伝極楽寺跡	I 期 遺構分割図 (1)
図版 29 伝極楽寺跡	I 期 遺構個別図 (1)
図版 30 伝極楽寺跡	I 期 遺構個別図 (2)
図版 31 伝極楽寺跡	I 期 沢 堆積状況
図版 32 伝極楽寺跡	I 期 遺構分割図 (2)
図版 33 伝極楽寺跡	I 期 遺構個別図 (3)
図版 34 伝極楽寺跡	I 期 遺構個別図 (4)
図版 35 伝極楽寺跡	I 期 遺構個別図 (5)
図版 36 伝極楽寺跡	I 期 遺構個別図 (6)
図版 37 伝極楽寺跡	I 期 遺構個別図 (7)
図版 38 伝極楽寺跡	I 期 遺構分割図 (3)

図版 39 伝極楽寺跡	I 期 遺構個別図 (8)
図版 40 伝極楽寺跡	I 期 遺構分割図 (4)
図版 41 伝極楽寺跡	II 期 遺構分割図
図版 42 伝極楽寺跡	II 期 遺構個別図
図版 43 伝極楽寺跡	III 期 石垣 平・側・断面図
図版 44 伝極楽寺跡	土器・陶磁器 (1)
図版 45 伝極楽寺跡	土器・陶磁器 (2)、石器 (1)
図版 46 伝極楽寺跡	土器・陶磁器 (3)、石器 (2)
図版 47 伝極楽寺跡	土器・陶磁器 (4)、土製品、石製品

【写真図版】

図版 48 前波南遺跡	遺跡近景
図版 49 前波南遺跡	遺構個別写真 (1)
図版 50 前波南遺跡	遺構個別写真 (2)
図版 51 前波南遺跡	遺構個別写真 (3)
図版 52 前波南遺跡	遺構個別写真 (4)
図版 53 前波南遺跡	遺構個別写真 (5)
図版 54 前波南遺跡	遺構個別写真 (6)
図版 55 前波南遺跡	遺構個別写真 (7)
図版 56 前波南遺跡	土器・陶磁器 (1)、土製品
図版 57 前波南遺跡	土器・陶磁器 (2)、瓦
図版 58 前波南遺跡	石器・石製品
図版 59 前波南遺跡	木器・木製品 (1)
図版 60 前波南遺跡	木器・木製品 (2)
図版 61 前波南遺跡	木器・木製品 (3)
図版 62 前波南遺跡	木器・木製品 (4)
図版 63 前波南遺跡	金属製品
図版 64 伝極楽寺跡	遺跡近景 (1)
図版 65 伝極楽寺跡	遺跡近景 (2)、遺構個別写真 (1)
図版 66 伝極楽寺跡	遺構個別写真 (2)
図版 67 伝極楽寺跡	遺構個別写真 (3)
図版 68 伝極楽寺跡	遺構個別写真 (4)
図版 69 伝極楽寺跡	遺構個別写真 (5)
図版 70 伝極楽寺跡	遺構個別写真 (6)
図版 71 伝極楽寺跡	遺構個別写真 (7)
図版 72 伝極楽寺跡	遺構個別写真 (8)
図版 73 伝極楽寺跡	土器・陶磁器 (1)、石器 (1)
図版 74 伝極楽寺跡	土器・陶磁器 (2)、石器 (2)、土製品、石製品

第1章 序 説

1 調査に至る経緯

「一般国道8号糸魚川東バイパス」は、糸魚川市間脇を起点に、同市押上に至る延長6.9kmの幹線道路である。交通渋滞の解消、地域ネットワークの充実強化、沿道環境の改善などを目的に計画され、平成元年度に事業化された。その内、間脇～梶屋敷間3.8kmは2車線区間、梶屋敷～押上間3.1kmは4車線区間であり、平成4年度から用地買収、平成10年度から工事着手して整備を進めている。これを受けて、建設者（現国土交通省、以下、「国交省」）と新潟県教育委員会（以下、「県教委」）との間で、事業用地内の埋蔵文化財の取扱いに関する協議が本格化した。

梶屋敷～押上間の分布調査は、県教委から委託を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」）が平成11年10月に実施した。調査の結果、道路法線上に周知遺跡は存在しないが、5か所の遺跡推定地が存在し、これらについて試掘確認調査が必要である旨を県教委に報告した。

前波南遺跡に係る試掘確認調査は、埋文事業団が平成17年9月から11月にかけて実施した。古代が主体の遺構・遺物を検出し、前波南遺跡として新規登録した。この時点で報告した本発掘調査必要面積は、3,848m²である。その後の取扱い協議で、市道横道線及び埋設管の切回し工事に関係する範囲1,150m²が優先か所となり、埋文事業団が平成18年4月3日から7月31日にかけて本発掘調査を実施した。

伝極楽寺跡に係る試掘確認調査は、埋文事業団が平成18年7月から8月にかけて実施し、石垣で方形に区画された平坦面や中世以前の遺物を検出した。地元の聞き取りで寺院跡の可能性があること、石垣の積み方が戦国時代末から江戸時代初期の特徴があることから、伝承にある極楽寺跡と判断した。周辺に調査不可の範囲があったが、本発掘調査必要面積を2,170m²と推定し、県教委に報告した。

平成19年度の本発掘調査か所は、ほかの公共事業との調整もあり、最終的に平成19年3月に決定した。国交省から調査を受託した県教委は、埋文事業団に実施を依頼した。埋文事業団は前波南遺跡2,300m²の調査終了後、伝極楽寺跡2,170m²に着手することとし、4月23日から調査を開始した。



第1図 糸魚川東バイパスの法線と遺跡の位置 (原図 国交省作成 2.5万分の1を縮小)

2 調査経過

A 前波南遺跡

1) 試掘確認調査

前波南遺跡に係る試掘確認調査は、平成17年9月15日～11月10日に実施した。一般国道8号糸魚川東バイパス用地約26,400m²を対象として、約737m²を調査した。掘削深度の目的を2～3mとして調査範囲内に調査坑（トレンチ）を任意に設定した上で、重機（バックホー）及び人力による掘削・精査を行い、その後、土層の堆積状況、トレンチ位置、遺構・遺物の検出状況等を図面・写真等に記録した。

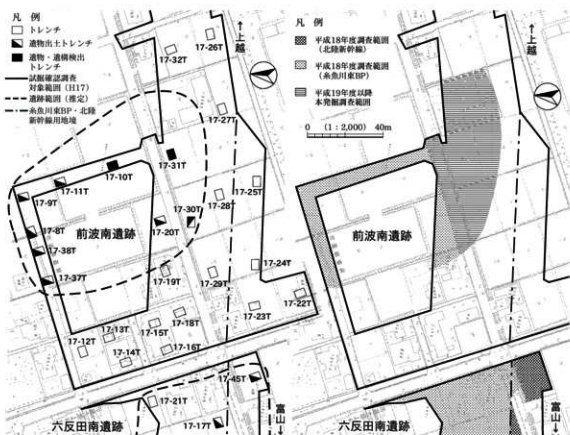
45か所のトレンチ（以下、T）を設定して調査した結果、遺構は3Tで土坑1基とピット1基、4Tで土坑1基、6Tで炭化物の集中1か所、7Tで溝1条、10Tと31Tで溝各1条が確認された。遺物は23か所のトレンチでⅢ層（平成19年度調査区は黒褐色砂質土）を中心に、土師器・須恵器・中世陶器・縄文土器・砥石・ヒスイ・鉄石英・軽石・木製品が出土した。

遺構・遺物が検出されたトレンチは、前川を挟み東西に分かれてまとまりのあることが確認できた。共に遺跡新発見の地点であったことから、東側を前波南遺跡、西側を六反田南遺跡と呼称することとした。前波南遺跡については3,848m²の本発掘調査が必要と判断した。

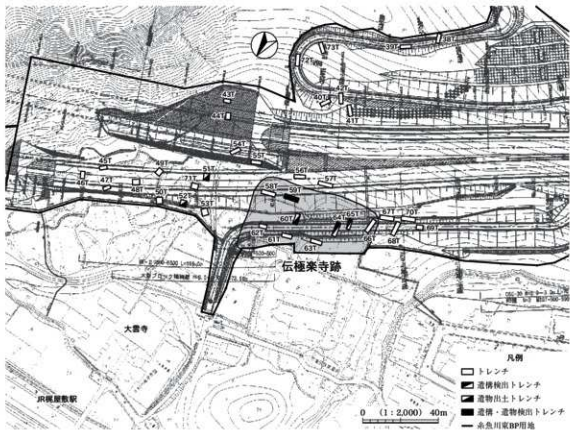
2) 本発掘調査

本発掘調査はバイパス建設工事の工程に合わせ、平成18年度と平成19年度の2か年にわたることとなり、平成18年度は市道を切り回す範囲の約1,150m²について調査を実施した。平成19年度は県教委からの依頼（平成19年3月30日付け教文第1601号の2）に基づき、当初2,300m²を対象に実施する予定であった。しかし、対象範囲の内、平成18年度調査区と隣接する市道は使用中であり、また埋設されている生活関連管や工業関連管も機能中であった。そのため、その範囲の取扱いは、周辺の遺構・遺物の検出状況から後日決定することにした。また調査対象範囲の南側の一部に工事用の仮設道路が建設されており、調査範囲に係る部分は国交省に除去をお願いした。

4月23日から宅地の盛土の除去、排土捨場の整備などを開始した。また地元から排水対策を十分に講じるように要望があったため、沈殿池を事業用地内に設け、遺跡内の溜り水が既存の排水路に直接流れ込まないように配慮した。表土掘削は4月27日から5月11日の間で、調査員立会いのもと重機（バックホー）で行った。基本層序を把握するためのベルトは調査区を3分割するように20mおきに設定し、表土層から残すことにした。また遺物が希薄な地点については包含層も含めて連続して掘削し、作業の効率化を図った。排水対策としては、表土掘削に平行し、調査区縁辺に開渠を人力で掘削した。包含層掘削・遺構確認・遺構掘削は、西側から東側に向かって順次作業を進めることにした。西側の範囲では、浅く広い不整形なプランを多く検出し、市道を挟んだ平成18年度調査区と同様の状況であった。流路など自然形成の痕跡である可能性が高かったが、耕作痕の可能性もあるため、一部について記録作業（図化・写真撮影）を行った。調査区中央部で自然流路（河川1）を検出し、トレンチ調査の結果、堆積土に含まれる遺物は希薄だが、加工の認められる木材が多く含まれることを確認した。また溝（SD1）との合流部付近から木簡が出土したため、小型の木片についても調査員が選別した後に保管・廃棄を決定することにした。東側の低地に調査が進むにつれ、包含層は厚くなり、木製品も多く遺存している状況になった。調査は予



第2図 前波南遺跡の試掘確認調査トレンチ位置と本発掘調査範囲 ([春日ほか2008] を一部改変)



第3図 伝極楽寺跡の試掘確認調査トレンチ位置と本発掘調査範囲

定どおり7月中には終了の見込みであったが、最も東側に自然流路（河川2）が存在し、その堆積土中には加工された部材や古墳時代の遺物が含まれていることが判明した。河川の対岸の一部は調査区外であること、またその近辺で遺物が多く出土したことなどから、東側へ拡張する必要が高くなった。7月25日に国交省と現地協議し、8月10日までに現地作業を終了することで了解を得た。また本発掘調査の着手を保留していた市道下部分については、周辺の遺構・遺物の状況から不要と判断した。

拡張する範囲以外は7月25日に空撮を実施した。7月30日から拡張区の表土掘削を開始し、拡張した範囲内で河川の立ち上がりを確認した。その後、8月7日に県教委の終了確認を受け、8月10日にすべての作業を終了して国交省へ引渡した。

B 伝極楽寺跡

1) 試掘確認調査

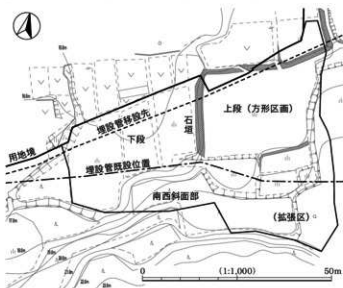
伝極楽寺跡に係る試掘確認調査は、平成18年7月6日～8月23日に実施した。大雲寺の南側にある畑と杉林の調査対象面積は約6,000m²であり、そのうち約270m²を調査した。掘削深度の目安を2mとして調査範囲内に調査坑（トレンチ）を任意に設定した上で、重機（バックホウ）及び人力による掘削・精査を行い、その後、土層の堆積状況、トレンチ位置、遺構・遺物の検出状況等を図面・写真等に記録した。

大雲寺の南側は、標高105.1mを最高点に北と東に急傾斜面を持つ。オクノエン（奥の院の転置か）と呼ばれる畑の一角には、寺院跡と伝えられる石垣を持つ平坦面と谷を埋め立てた一段低い平坦地が確認された。35か所のトレンチ（以下、T）を設定して調査した結果、遺構は59Tでピット4基、64Tの盛土層（礫を含む黄土色粘土）上面でピット2基、炭化物集中1か所、礎石状の石1基を検出した。65Tでも同様に盛土層上面で土坑1基を検出した。遺物は51Tで京焼風陶器碗1点、52Tで土師器9点（同一個体）、59Tで土師質土器4点、60Tで土師器2点が出土した。

石垣を持つ平坦面の規模は東西約30m、南北約23mで、これを画するかのよう三段ほどの石積がある。石垣は北面と西面の二辺に存在し、最大高約2mを測り、裏込め石も認められた。築造年代を特定できる遺物は検出できなかったが、積み方と伝承から戦国時代末から江戸時代初期の遺構の可能性があった。したがって、寺域と推定される範囲の約2,170m²について本発掘調査が必要と判断した。

2) 本発掘調査

4月9日の国交省との協議から、調査対象範囲内には使用中の工業用水管（石綿製）が埋設しており、また埋設管の移設先も調査対象範囲内であることが判明した。埋設管の敷設は古く、正確な位置も把握されておらず、埋設深度も浅い場所では約30cmと予想された。埋設管は石綿製で破損しやすく、位置・深度が把握されない状況では、重機の使用・排土方法・湧水対策など調査する上で支障が



第4図 調査範囲と埋設管位置図

大きいことから、その現状把握と移設予定の時期・方法が判明後、調査工程を決定せざるを得なかった。国交省側による位置把握後、7月6・10・11日の協議を経て、移設先となる調査区北側の範囲を先行して引渡すことに決定した。

本遺跡は「極楽寺」の伝承地である。方形区画と石垣が遺存しており、それに伴う寺院施設等の遺構が検出できる可能性が高いと判断した。したがって、現地形測量及び石垣の調査を先行して行い、遺跡の年代とその全容を速やかに把握する手掛かりを得る必要があった。7月下旬から石垣の表面清掃などを先行して開始し、8月20日から本格的に発掘調査を開始した。層位確認ベルトを残しつつ、裏込め土の一部掘削などを行った。裏込め土上位からは近世陶磁器が出土したものの、12世紀代の遺物も散見され、中世段階の遺跡も発見される可能性が生じたため、方形区画内を掘り下げ、遺構検出を行うことにした。方形区画内は遺構確認面までの深度が10～20cmと浅く、重機を使用すると遺構を破壊するおそれがあったため、人力で表土除去を行い、9月20日までにほぼ終了した。併行して遺構確認を行ったが、寺院に関連する明確な遺構は検出できなかった。9月10日から14日までは、石垣から西側の低位面（下段）の表土掘削を重機で行った。包含層（Ⅲ層）は認められたが、遺物量が少なかったため、包含層も重機で慎重に掘削することにした。9月15日からは下段の遺構確認及び遺構発掘を行い、9月21日には掘削作業を完了した。そこで、上段（方形区画及び石垣）と下段の遺構検出状況を空撮することにし、準備を行っていたが、9月24・25日の集中豪雨で、近隣のバイパス建設に伴う工事現場から土砂が調査区内に流入した。その復旧に3日間程要したが、10月1日に空撮を行った。

上段の方形区画内から明確な遺構が検出されず、石垣の構築年代が不詳であったことから、空撮終了後に石垣の断ち割り調査を行ったところ、近世後期以降の築造であることが判明した。また、下段で地山と認識していた層の約20cm下位の面でピットが検出できたことから、石垣の断ち割りに併行して間層を人力で除去し遺構確認を行った。遺構は一部の範囲に限られた。調査区北側の石綿管移設予定範囲の調査が終了したため、10月18日に一部を国交省に引き渡した。11月12日には石綿管の撤去工事が始まり、その間1週間ほど調査を休止した。管の撤去後、残った範囲の表土掘削に着手したが、石垣から東側は重機の進入路がなく、石垣や遺構を破壊するおそれがあったので人力で掘削することにした。石垣から南西に位置する丘陵は標高が急激に高くなるため、遺構の存在する可能性は低いと予想された。遺構・遺物の有無についてトレンチ調査したが、検出できなかった。当初予定範囲までの調査は順調に進行し、11月末にはほぼ終了できる見込みであった。しかし、上段平坦面の東側と南側は調査区際まで遺構が集中しており、さらに奥まで遺構が存在する可能性が生じた。そこで、11月29・30日に調査区の東側と南側に複数のトレンチを設定して調査を行ったところ、東に約4m、南に約10m、遺構が延伸していることが判明した。12月5日に国交省と現地協議を行い、調査範囲を約390m²拡張して平成19年度内に調査を行うことが決定した。仮設工事用道路の撤去も必要であり、冬期間の調査となるため、降雪時はテントを張るなどして作業環境の向上に努めた。12月27日には遺構の発掘作業をおおむね終え、ローリングタワーで完了写真を撮影した。その後、記録作業及び一部層位確認掘削作業を行い、平成20年1月23日にすべての発掘調査及び遺物水洗・注記を完了し、現地を国交省に引渡した。その後、図面整理・遺物整理及び撤収作業を行い、2月4日に撤収した。

なお近隣住民を対象に、12月8日に横マクリ遺跡現地事務所跡で遺跡速報会（スライド説明、遺物展示）を開催し、43人の参加があった。

3 調査体制

A 試掘確認調査

前波南遺跡と伝極楽寺跡に係る試掘確認調査は、以下のような期日と体制で行った。

1) 前波南遺跡

調査期間 平成17(2005)年9月15日～11月10日

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 武藤 克己)

調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括 波多 俊二 (事務局長)

管理 長谷川二三夫 (総務課長)

庶務 長谷川 靖 (総務課班長)

調査総括 藤巻 正信 (調査課長)

調査担当 寺崎 裕助 (調査課 課長代理)

職員 田中 一穂 (調査課嘱託員)

2) 伝極楽寺跡

調査期間 平成18(2006)年7月6日～8月23日

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 武藤 克己)

調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括 波多 俊二 (事務局長)

管理 斎藤 栄 (総務課長)

庶務 長谷川 靖 (総務課班長)

調査総括 藤巻 正信 (調査課長)

調査担当 田海 義正 (調査課 課長代理)

職員 田中 一穂 (調査課嘱託員)

B 本発掘調査

平成19年度の本発掘調査は、以下のような期日と体制で行った。

調査期間 平成19(2007)年4月23日～平成19年8月6日〔前波南遺跡〕

平成19(2007)年8月1日～平成20年1月23日〔伝極楽寺跡〕

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 武藤 克己)

調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括 木村 正昭 (事務局長)

管理 斎藤 栄 (総務課長)

庶務 長谷川 靖 (総務課班長)

調査総括 藤巻 正信 (調査課長)

指 導 寺崎 裕助 (調査課 課長代理)

調査担当 石川 智紀 (調査課班長)

職 員 樋口 重正 (調査課主任調査員)

支援組織 株式会社古田組

現場代理人 竹内 一喜 (遺跡調査研究室 管理課主任)

調 査 員 相羽 重徳 (同 調査課主任調査員)

松永 篤知 (同 調査課調査員)

補 助 員 安達 鉄雄、風間 梢、丸山 信子、葭原美恵子

4 整理事業と整理体制

平成19年度の整理事業は、現地作業と平行しながら進めた。遺物の水洗・注記及び接合の一部、台帳類の整備などを現地事務所で行い、遺物の注記の一部、接合・復元・実測・写真撮影、図面類の修正・レイアウト、原稿執筆などを株式会社古田組遺跡調査研究室（上越市柿崎区）及び埋文事業団（新潟市秋葉区）で実施した。平成19年度の整理体制は本発掘調査の体制と同じである。平成20年度に原稿執筆・編集・校正を主に実施し、平成21年度に印刷・刊行した。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

前波南遺跡・伝極楽寺跡が所在する糸魚川市は、平成17年3月19日に旧頸城郡能生町・同青海町と合併し、新潟県の最西端に位置することとなった。市域の北は日本海に面し、南を長野県、西を富山県と接する。糸魚川市は、古くから史跡松本街道の日本海側起点として知られている。「塩の道」とも呼ばれるこの古道は、糸魚川から長野県松本までのおよそ30里（120km）に及ぶ峻険な山越えの道であり、海をもたない内陸部へ塩や魚介類を送る道として重要な役割を担ってきた。現在は姫川沿いに長野県へ通じる国道148号線とJR大糸線、海岸線沿いを通過する北陸自動車道・国道8号線・JR北陸本線の交点にあたる交通の要所となっている。

糸魚川市には、南北に流れる姫川とほぼ一致するように、フォッサマグナの西縁にあたる「糸魚川―静岡構造線」が分布する。この構造線を境界にして、地質学的に西南日本と東北日本に分けられている。構造線以西の地層は、主に古生代石炭紀～ヘルム紀に至る青海―蓮華変成岩帯など、古生代・中生代の堆積岩・火成岩より成り立っている。青海―蓮華変成岩帯は、その断層面に蛇紋岩・輝緑岩・変はんれい岩などが介在する複雑な構造を有しており、ひすい輝石岩・青海石・奴奈川石など希少な岩石が含まれている。なかでも、「ひすい輝石岩」は小滝川や青海川で産出されることが知られており、「小滝川硬玉産地」・「青海川の硬玉産地及び硬玉岩塊」が国の天然記念物に指定されている。一方、この構造線以东の地層は主に新第三紀・第四紀の新しい時代の堆積岩・火成岩より成り立っており、構造線の東西で地質が大きく異なることがわかる〔鈴木2000・小林2000〕。

市域の南側には、飛騨山脈の北延主稜と西頸城山地がある。飛騨山脈には、県内最高峰の小蓮華山(2,769m)をはじめとして2,000m級の山々が連なる。その主稜は北に進むにしたがって高度を急速に減じ日本海に没している。この急崖が「観不知・子不知」である。石灰岩からなる黒姫山(1,221m)・明星山(1,188m)では山岳カルストが発達しており、日本最深の白蓮洞(513m)など多数の洞穴が存在する。市域には、ここから産出する石灰岩を資源とした化学工業地帯が形成されている。

西頸城山地は、新第三紀以降の堆積層が隆起した丘陵と、長野県との県境をなす雨飾山(1,963m)や海谷山地など火山性岩石を主体とする山塊から構成されており、さらにその背後には焼山(2,400m)が位置する。標高400m以下の小起伏山地域では、主に新第三紀の砂泥岩層から形成されており、地下水量が増大する融雪期、梅雨期、初冬などには、崩落・地すべりが発生する〔鈴木2000〕。地すべり等防止法制定のきっかけとなった棚口地すべり(1947年発生)など、著名な地すべり地が多い地域でもある。

これらの山地を源流にして、青海川・田海川・姫川・海川・早川などが北流し日本海に注ぐ。その中でも姫川はこの地方最長の一級河川であり、全長約60kmに及ぶ。長野県青木湖北部の湿地を源流とし、長野県小谷村を経て糸魚川市で日本海に注いでいる。これらの河川沿いには河岸段丘がみられるが、特に姫川と海川の河口岸に発達している。この段丘は高位の洪積段丘から低位の沖積段丘まで6段に細分されている〔鈴木1982〕。高位の段丘には縄文時代～弥生時代、低位の段丘には縄文時代～古代、沖積段丘には古代の遺跡が分布しており、遺跡の時期が下がるにしたがって高位から低位へとその分布する主体面

を移動させている〔寺崎1988〕。

これらの河川はいずれも急流で、かつ海底が深いため、沖積平野は発達していない。最も広い沖積地は姫川と海川の河口間に形成された扇状地で、この扇状地を中心に狭い海岸平野が広がる。このほかの平坦地は、河川沿いにわずかな谷底平野が細長く形成されるのみである。また、北東-南西に平滑に広がる海岸線沿いには砂丘列が形成されており、姫川河口左岸の須沢では最大幅300m、最大高11.5mを測る〔鈴木1982〕。市街地や主要幹線は、この砂丘上と沖積地など、限られた平坦地に細長く展開している。

2 歴史的環境

糸魚川市域における弥生時代～中世・近世の主な遺跡分布は、第5図のとおりである。姫川右岸の糸魚川地区では、標高100m以下の緩傾斜の丘陵が発達し、特に標高50m前後の河岸段丘上に遺跡が多く分布する。また、近年、北陸新幹線建設に伴う発掘調査等によって、狭い平野部においても遺跡分布が濃密であることが明らかになっている。居住に適した平坦地が限られるため、土地利用が特定の範囲に集中した結果と考えられる。

弥生時代

弥生時代の遺跡としては大塚(新洲)遺跡(12)、原山遺跡(46)、一の宮遺跡(18)、後生山遺跡(20)、笛吹田遺跡(22)などが存在する。

大塚(新洲)遺跡・原山遺跡は姫川右岸に位置し隣接する。ともに縄文時代晩期から弥生時代前期の遺跡である。大塚(新洲)遺跡出土の弥生時代前期の土器は、遠賀川式系・水神平式系・浮線文系・亀ヶ岡式系などで構成され、当地が東西日本あるいは日本海側と内陸(を通じて太平洋側)を結ぶ結節点であることをよく示している。また、ヒスイや滑石を素材とした玉作も行われている。玉類の組成や製作技術は縄文時代以来の伝統を受け継いだものと指摘されている〔寺崎・田中ほか1988〕。

一の宮遺跡は、延喜式内社奴奈川神社の論社である天津神社境内に所在する。古墳時代の滑石製玉類の製作遺跡として著名だが、弥生時代中期・後期の土器も確認できる〔糸魚川市役所1986〕。

後生山遺跡は、姫川と海川に挟まれた丘陵上に位置する弥生時代後期を中心とする遺跡である。竪穴建物4棟、土坑、溝などが検出され、北方に広がる平野部との比高差は約30mであり、いわゆる高地性集落と考えられる。ヒスイ・緑色凝灰岩の原石や筋砥石などが出土しており、集落内では玉作が行われていた〔木島ほか1986〕。また、3号住居跡から出土した土器群は北陸系土器を主体とし、後期初頭に位置づけられるもので、新潟県内における弥生時代後期土器編年の基準資料となっている〔滝沢2005など〕。

笛吹田遺跡は後生山遺跡の北方に広がる平野上に立地する遺跡であり、弥生時代後期の方形周溝墓と推測される溝が検出されている〔安藤ほか1978〕。

古墳時代

古墳時代の遺跡は、玉作に関連する遺跡が特徴的に発見されている。姫御前遺跡(21)と笛吹田遺跡(22)は近接する遺跡である。笛吹田遺跡は弥生時代後期から続く遺跡であるが、前期～中期を中心とする玉作遺跡で、白玉・勾玉・管玉・砥石等が出土し、玉作用の特殊ビットや方形周溝墓とみられる遺構が検出されている〔安藤ほか1978〕。また、近年、都市計画道路建設に伴う発掘調査が断続的に行われ、竪穴建物、井戸側や釣瓶を伴う井戸の検出や琴柱状石製品の出土などの成果が目目されている〔山岸2006・2007〕。なお、笛吹田遺跡と姫御前遺跡は、昭和50(1975)年に別個の遺跡とされるまでは、

「姫御前遺跡」という名称で同一の遺跡として捉えられていた [土田 1978]。両遺跡の間に遺跡の空白が存在することが確認されているようであるが、年代的に重複することから相互に関連する遺跡であろう。

大角地遺跡 (5) は、昭和 10 (1935) 年の朝日新聞に「石器時代の玉作り遺跡か。倉若七郎氏が青海町で発見した考古学上の宝庫」と紹介されている。その後、青木重孝氏によって蓄積された資料が契機となり、学会で注目されるようになり、勾玉の製作過程「オガクチ技法」[寺村 1966] の標識遺跡としても知られるようになった。昭和 45・48 (1970・73) 年には、都市計画道路建設に伴う発掘調査が行われ、工作用特殊ビットをもつ玉作工房跡が検出され [寺村・安藤ほか 1979]、中期の滑石製玉類の製作関連資料が多数出土している。また、平成 17 年には北陸新幹線建設に伴う発掘調査が行われ、勾玉・白玉の製作関連資料が出土している [加藤ほか 2006]。

田伏遺跡 (34) は、中期～後期の遺跡である。昭和 45 (1970) 年に行われた発掘調査では、滑石製の白玉・管玉・勾玉・子持勾玉や紡錘車の製作関連資料が多数出土しており、玉作遺跡であることが明らかにされている [関 1972]。また、祭祀系土器の出土や滑石製模造品の大量出土から、玉作に伴う祭祀が行われた可能性が指摘されている [糸魚川市役所 1986]。

一の宮遺跡 (18) は、天津神社境内に所在する。大正 8 (1919) 年に高橋健白氏によって発掘調査されており、後期の土器とともに有孔円板・勾玉・白玉等の祭祀遺物が多数出土している [糸魚川市役所 1986]。稻山林羅氏は一の宮遺跡を祭祀遺跡としており [稻山 1972]。一の宮遺跡から出土した玉類は、笛吹田・田伏・大角地など、近隣の製作遺跡との関連性が指摘されている [関 1972]。なお、天津神社境内の奴奈川神社は、『延喜式』神名帳に記載される「奴奈川神社」の論社である。

三ツ又遺跡 (45) は姫川右岸の山間に位置する遺跡で、古墳時代中期の竪穴建物 3 棟、土坑などが検出され滑石製白玉・勾玉・管玉・紡錘車・有孔円板やこれらの未製品、ヒスイ原石・剥片・勾玉未成品、緑色凝灰岩原石・剥片や砥石が出土している [木島 1988a・1989a]。

このように糸魚川地域では、滑石製の玉作が盛んに行われた遺跡の存在が特筆される。また、北陸新幹線建設に伴い発掘調査された六反田南遺跡 (27)、姫御前遺跡 (前期) (21)、横マクリ遺跡 (前期) (29) においても玉作の存在が確認されている [新潟県教育委員会ほか 2007]。小規模な集落においても、数は多くないものの未製品を含む玉類がほぼ例外なく出土しており、玉作が行われていたと考えられる。ヒスイ・滑石等の石材産地を控える当地域においては、縄文時代以来、伝統的に玉作が盛んに行われていた。

古 代

青海地区 (旧青海町域) における古代の遺跡は、集落跡と窯跡が検出されている。姫川河口近くに位置する須沢角地遺跡 (7) は、昭和 62 (1987) 年・平成 17 (2005) 年に発掘調査が実施され、7 世紀～10 世紀の集落跡であることが明らかにされている [土田ほか 1988, 辻 2006]。また、須沢角地遺跡の西南西 1km の丘陵裾には西角地古窯跡 (6) が所在する。窯体の一部・窯壁・焼土とともに多量の須須器が出土しており [寺村・安藤ほか 1979]、8 世紀末～9 世紀初頭の窯跡と考えられている [春日 1998]。

糸魚川地区 (旧糸魚川市域) の姫川右岸に位置する道者ハバ遺跡 (10) では、掘立柱建物や井戸といった遺構とともに、多量の須須器・土師器のほか、灰軸陶器・緑釉陶器が多く出土した。当地方の中心的役割を担った遺跡と推定されている。また、詳細は不明だが近接して須須器窯も存在する [山岸 2001a]。

糸魚川地区のうち海川と早川に挟まれた田伏・大和川・梶屋敷周辺では北陸自動車道建設に伴い、岩野下 (岩野 D) 遺跡 (47)、岩野 A 遺跡 (48)、岩野 E 遺跡 (32)、小出越遺跡 (33)、立ノ内遺跡 (41) 等が調査され、近年では工場・県道などの建設に伴い山崎 A・B 遺跡 (30・31) が調査された。



第5図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡

〔春日ほか2008〕を一部改変

岩野下遺跡は8世紀後半から10・11世紀にかけて断続的に営まれた遺跡で、掘立柱建物7棟、竪穴建物1棟が検出され、土師器・須恵器・灰軸陶器・墨書土器・転用硯・土錘・フイゴ羽口などが出土している〔高橋・連藤^{ほか}1987〕。岩野A遺跡は岩野下遺跡の北東に近接する遺跡、岩野E遺跡は岩野下遺跡の東に近接する遺跡で、ともに墓穴の可能性が考えられる長方形の土坑がまともって検出された。このうち岩野A遺跡では焼土とともに9世紀後半頃の土師器無台椀がまともって出土している〔高橋^{ほか}1986〕。

小出越遺跡では9世紀前半を中心とする土師器焼成遺構や竪穴建物などが検出されており〔鈴木1988〕、立ノ内遺跡からは焼土遺構とともに大型平底の製塩土器、フイゴ羽口など出土している〔高橋1988〕。

山崎A・B遺跡では大型の掘立柱建物に近接して数百点に及ぶ土師器食膳具を廃棄した土坑などが発見された〔木島2007〕。これらの調査成果により、丘陵部における奈良・平安時代の多様な生活が明らかになりつつあるが、六反田南遺跡・前波南遺跡の立地する平野部の遺跡については不明点が多い。

中 世

青海地区では、山城跡や経塚の存在が知られている。勝山城跡は、標高328mの勝山山頂に築かれている。天正年間(1573～1582)頃、越中への前進基地として築城されたといわれており、戦国時代は同方面を押さえる要衝であったと考えられている〔平野・渡辺1986〕。寺地の南方、松山の尾根上に南北500mにわたって築城された松山城跡(2)は、標高170mの地点に本丸跡があり、空堀や帯郭・裾郭で幾重にも固められている。石垣に所在する天神山経塚(1)は、1919(大正8)年に調査され、仁安2(1167)年の路のある珠洲焼の経筒が発掘されている〔金子1975〕。寺地遺跡(4)・須沢角地遺跡(7)は、遺構は明確ではないが中世の陶磁器が少量出土している〔佐藤・相羽^{ほか}2002、土田^{ほか}1988〕。

糸魚川地区では、御山遺跡(9)・中平遺跡(15)・古川遺跡(16)・水保観音堂境内(44)・北平遺跡(25)・クワノ町遺跡(24)・竹花遺跡(17)等が知られている。

観音菩薩立像(重要文化財)を安置する水保観音堂境内からは中世陶磁器類を出土していることから、水穂寺跡との関係が考えられている〔山岸・田村2004〕。また、段丘～丘陵上には、中世後期～近世初期の原山十三塚(14)や山崎十三塚(26)〔木島1989b〕が分布する。

糸魚川地区のうち田伏・大和川周辺では、岩野B遺跡(49)・山崎A・B遺跡(30・31)・立ノ内遺跡(41)・岩倉遺跡(39)等の調査が行われている。

岩野B遺跡は海川右岸の台地上に位置し15世紀後半頃と考えられる東西約50m、南北約60mに溝を巡らせた方形館とこれに伴う掘立柱建物跡などが検出され、青磁碗などが出土している〔山岸2001b〕。

立ノ内遺跡は、早川左岸の台地上に位置し15～16世紀と考えられる1×9間(4.6×19.7m)で二面に縁もしくは L (1.1m)が付く大型の掘立柱建物を中心とする建物群が検出され、多量の土師器皿が出土した〔高橋1988〕。西側の山頂に位置する金山城跡(40)は立ノ内遺跡に関連する山城と推測でき、要害と居館の関係と考えられる〔高橋1988〕。

岩倉遺跡は早川左岸の平野部に位置する遺跡で、15世紀の水田跡、中世末～近世初めと考えられる礎石建物が検出され、轡・小札・鉄鑑などの馬具・武具類や鉄鍋などが出土した〔山本^{ほか}2003〕。また、近年の北陸新幹線や国道8号糸魚川東バイパス建設に伴う山岸遺跡(37)、横マクリ遺跡(29)等の調査が行われている〔新潟県教育委員会^{ほか}2007〕。これらの調査により、平野部における中世遺跡の様相が明らかになれつつある。

第三章 前波南遺跡

1 概 要

A グリッドの設定 (第6図)

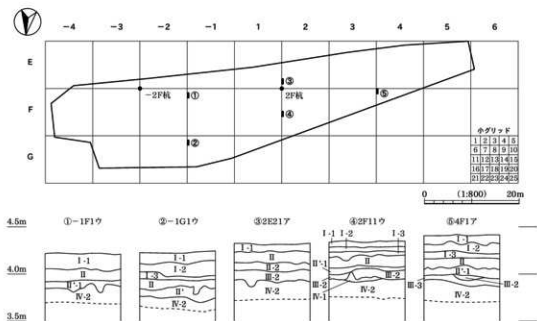
前波南遺跡のグリッドは、前川を挟んで西側に隣接する六反田南遺跡と共通したものが平成18年度調査時に設定されており、平成19年度調査区もそのグリッドに合わせた。ただし東西方向は算用数字の起線を越えて東側に延伸するため、東側に向かい「-1・-2…」とした。

グリッドの主軸方向は、糸魚川東バイパス建設予定地内のセンター杭No.56とNo.57を結んで東西ラインとし、直交する南北ラインはセンター杭No.56を基準交点として設定した。その結果、グリッドの基準線の方位は真北に対して7度16分30秒西偏している。グリッドは大小2種あり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25等分したものである。大グリッドの名称は、南東隅の杭を基点として東西方向を算用数字、南北方向をアルファベットとし、両者の組合せにより「1F」のように表示した。小グリッドは1～25の算用数字で表し、南東隅を1、北西隅を25とし、「1F13」のように大グリッド表示の後につけて呼称した。また必要に応じて、小グリッドを1m四方に細分した。ア～エのカタカナで表し、南東隅をア、北西隅をエとし、「1F13イ」のように呼称した。今回の調査区にあたる杭の座標値(世界測地系)は、2F杭(X=116498.242, Y=-53498.759)、-2F杭(X=116502.043, Y=-53469.001)を示す。

B 基本層序 (第6図)

平成19年度調査区の基本層序は、平成18年度調査区に合わせることを前提とした。しかし、平成18年度調査区には存在しなかった層がほぼ全域で確認できたので、新たに1層(Ⅱ層)を追加し、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層の5層に大別した。同一の地層でも土質に多少の差異があり、各層はさらに2～3層に細別が可能である。平成19年度は、Ⅱ層が室町時代～江戸時代初期の遺物包含層、Ⅲ層が古代の遺物包含層、Ⅳ層が古墳時代の遺物包含層及び古代の遺構確認面、Ⅴ層が古墳時代～古代の遺構確認面で地山である。調査時は便宜的にⅡ層を黒色層、Ⅲ層を茶色層、Ⅳ層を暗灰色層、Ⅴ層を灰～青灰色層と呼称した。以下に、各層の詳細を述べる。

- Ⅰ層：水田耕作土。上から順に、暗褐色(10YR3/3)土のⅠa層、褐灰色(10YR4/1)土のⅠb層、暗灰黄色(2.5Y4/2)土のⅠc層に細別が可能である。
- Ⅱa層：黒色(10YR2/1)粘質土 粘性弱く、締まり強い。φ1～3mmの橙色(7.5YR6/8)粒子を多量に含み、炭化物を少量含む。
- Ⅱb層：黒色(7.5YR1.7/1)粘質土 粘性あり、締まりあり。有機物、小礫、灰黄褐色粘質土を少量含む。Ⅱa層より赤みを帯び、粘性が強いが、締まりは弱い。SD1の上面で確認できる。
- Ⅱ'a層：にぶい黄褐色(10YR4/3)腐植質土 粘性弱く、しまり弱い。有機物、小木片等が多く含まれる。炭化物も少量含む。
- Ⅱ'b層：灰黄褐色(10YR4/2)腐植粘質土 粘性あり、しまり弱い。基本はⅡa層と同じだが、下層の粘



第6図 前波南道路グリッド設定と基本層序

質土が多く含まれる。根による攪乱か。

II'c層：灰黄褐色（10YR4/2）腐植粘質土 粘性あり、しまり弱い。灰黄褐色粘質土を斑状に少量含む。

II'd層：黒褐色（10YR3/2）腐植粘質土 粘性あり、しまりあり。有機質を多く含む。III b層を斑状に多く含み、混入物が多い。

III a層：褐灰色（10YR4/1）粘質土 粘性あり、しまりあり。比較的均質な土。炭化物を少量含む。

III b層：灰黄褐色（10YR5/2）粘質土＋灰白色（10YR7/1）粘質土の混じり。粘性あり、しまりあり。下層との混じり土で斑状になる。踏み込みの痕のような混じり。

III c層：灰黄色（2.5Y6/2）粘質土 粘性あり、しまりあり。下層に極めて近い。III b層より混じりが少なくなる。

IV a層：褐灰色（10YR6/1）シルト質土 粘性あり、しまりあり。地山の中に所々帯状に含まれる。

IV b層：褐灰色（10YR6/1）粘質土 粘性強く、しまりあり。粘質土が基本だが、IV a層に似たシルト質土が帯状、あるいは斑状に含まれる。

2 遺 構

A 概 要

今年度調査区では、自然流路2条、溝状遺構4条、ピット21基、土坑2基、杭状遺構22か所、性格不明遺構25基を検出した。それらのうち自然流路の一部（河川2下層）が古墳時代に遡ると見られるが、それ以外は基本的に古代の遺構と考える。不整形な遺構や小規模な遺構が大半を占め、その配置も疎なことから、本調査区は居住域とは考えられない。平面形が不整形であるにも関わらず、遺構の長軸が北西－南東方向でおおむね一致していることから（第7図）、これらの多くは人為的な掘り込みではなく、自然に形成された落ち込みであった可能性もある。ただし、2条検出された自然流路からは多量の木器・木製品が出土しており、注目される。また、自然流路の内外で杭状の木を地面に突き立てた遺構を多く検出し、

流路に伴う施設であった可能性が指摘できる。

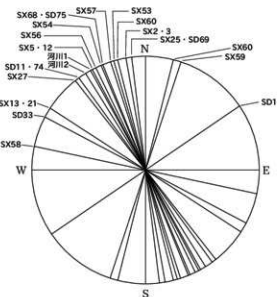
B 各 説

1) 自然流路

河川1 (図版4・5・6・49・52・53) 調査区中央を海側に向かってほぼ南北に横断し、底面や壁面が多段を形成する様相 (断面階段状) から、人工的に開削された溝ではなく、自然流路と考える。南東から北西方向に流れ、1F9グリッド付近でSD1が合流する。Ⅱ層以下で検出されたが、中央部は低地となっていたため基本層序Ⅱ層及びⅡ層が堆積する。中位以下の層は砂と粘質土の互層となり、加工木と共に多量の自然木、有機物等が出土した (168～193)。砂の粒径は基本的

に下層にいくほど粗くなる。中位以下から出土した土器等は少なく、覆土が堆積した時期は判別し難いが、古代の遺構と想定できるSD1との関連から考えて、古代には開口していた河川と考える。また1F13グリッドの下層から出土した加工材 (185) の放射性炭素年代測定をした結果 (第三章4B参照) でも、 1420 ± 30 年BP (AD610～655年) の値を示している。南側で幅広であった底面は、1F7グリッドで一段落ち込み、そのまま緩く傾斜しながら北側 (海側) へ続く。この一段落ち込む部分は、SD1との合流部 (1F9杭周辺) に近く、その水の流れ込みで削られた結果とも考えられ、また合流部で検出した小規模な数段の段差もその要因によるものであろう。そのような自然に形成された傾斜を持つ段とは異なる水平な平坦面を、1F22、1G2・3・8グリッドで検出した。この平坦面は幅が広い場所で約1.6mあり、滑ることなく立つことが可能である。その底面標高は、砂が多く含まれる覆土の上面標高とほぼ同じであり、通常時は水が被っていない範囲と考える。この平坦面に伴う明確な施設は検出できなかったが、水際を利用する作業場として、人工的に掘られた可能性がある。

木製品の集中区を2か所で検出した。1か所は1G3グリッド付近に位置し、上記の人工的な平坦面に隣接する。そのまとまりをSW1と仮称した。もう1か所はSD1との合流部付近で、SW2と仮称した。SW1では192・193のような長さ約170cm、幅4cm、厚さ0.5cmの薄く細長い板材が、川の軸に合わせて十数枚敷き詰められたような状況で検出した。北側は既設の用水路で破壊されている。また、その板材を取上げた下にも1cm程度の土を挟み、同様の板材が方向を同じくして敷かれていた。漁具のドウなどが潰れた可能性も考えたが、ほかの部材や紐などと結節したような痕跡は認められず、また水流によって移動したような状況でも無いことから、その場に意図的に敷き並べた可能性が高い。位置的には平坦面の周囲にかかるが、平坦面の底面から15cm程浮いた状況であり、平坦面が機能していた時期とは若干時間差がある。南側の一部に突き刺した材もあることから、自然流路が半分以上埋まった状況で、まだ埋まりきらないその低地部を利用する目的で設置した施設の一部と考える。SW2は合流部で検出した木製品・自然木のまとまりで、堰などの施設が想定できた。合流部ではSW2を含めて多くの木製品 (166～176) が出土している。杭のように底面に突き刺したものは何本もあったが、互いの関連性は見出せず、また横木などと組んだような加工や痕跡も認められないことから、水流で集まったものと判断した。この



第7図 遺構の長軸方向

木材の集積で流れが障害されたためか、それから北側のSD1寄りで小形の棒状木製品が多く出土し、木筒(166)もここから出土した。また河川1からは形代状木製品(178・179・182)が出土しているが、覆土中位の砂混じり層中からの出土であり、祭祀的な様相はうかがえなかった。

河川2(図版7・9～12・49・54・55) 調査区東端(-3F・-3G・-4Fグリッド)を、北西(N-32°-W)に向かって蛇行気味に走るもので、自然流路と考える。断面弧状を呈し、幅5.6～11.4m、深さ64～74cmを測る。覆土は、大きく分けて1層:基本層Ⅱ～Ⅱ'層が落ち込んだもの、2層:腐植物や炭化物粒子を含むシルトまたは粘質シルト層、3層:腐植物などを含む細砂層または粘質シルト層から成り立っている。一部に4層:地山に近い粘質シルト層、5層:腐植土層が存在するが、これらの層は縄文時代後期[小林2004、山本2001]の局所的な倒木(放射性炭素年代測定の結果、暦年較正年代2025～1935BC)に由来するものと見られ、河川の基本的な覆土は1～3層となる。各層の出土遺物(13～31)から判断して、1～2層が古代、3層が古墳時代に堆積した可能性が高い。また覆土の堆積状況や遺物の出土状況を踏案すれば、古墳時代と古代では流路が若干異なることが推測できる。この河川の覆土中からは、極めて多くの木器・木製品(194～225)が出土しており、特に建築材などの加工木が多いことから、本遺跡の近隣で木材加工を行っていたことが推測できる。また、東岸(-3F16・21・22、-4F13・15・25グリッド)からは古墳時代の土器(19～27)と玉類(132～147)が比較的多く出土しており、注目される。

2) 溝状遺構(図版2～5・7・8・12・50・53)

今年度調査区では、溝状の遺構を4条検出した(SD1・33・69・75)。ただし、直線的なもの(SD1・33・69)・蛇行するもの(SD75)、幅広で長いもの(SD1・75)・幅狭で短いもの(SD33・SD69)など形態や規模は様々で、それぞれ機能的な共通性はないものとする。特にSD1としたものは、河川1・2と比較して深度が浅いことから調査過程で便宜的に溝としたが、比較的大規模(検出長さ19.7m、幅4.48m)であり、自然流路の可能性もある。ただしほかの溝状遺構や性格不明遺構が基本的に南北に長軸を持つのに対し、SD1だけは東西に長軸を持ち、河川1とほぼT字状に合流する。河川1・2ほど木製品の出土は多くないが、大足の横木(150～164)などが沿うように散在しており(図版12)、また合流付近では棒状木製品が多く出土している。少なくともSD1と河川1が無関係であるとは考え難い。なお、これらの溝状遺構は、覆土などの特徴からいずれも古代に属すると考える。また細片のため固化していないが、土師器・須恵器も出土していることから、古代の遺構であることが確実である。

3) ビ ッ ト(図版2～5・51)

調査区西側を中心に、平面円形・楕円形の落ち込みを21基検出した(P4・6～8・14～20・22・26・28・29・31・34・36・61・62・70)。いずれも遺物が出土しなかったため明確な時期は分らないが、ほかの遺構の覆土との比較で、すべて古代に属するものと考えたい。ただし、SX21の底面で検出したP36と、SX68に切られるP70は、古代の遺構の中でもより古いものと見られる。これらは概して規模が小さく、長径24～80cm(P31を除けば24～48cm)、短径20～36cm、深さ3～26cmの範囲におさまる。また平面配置が不規則で、断面弧状を呈するものが大多数を占めることから、少なくとも建物の柱穴である可能性は低いと考える。断面形・覆土などから見て植物の根痕とも考え難いが、自然に形成された落ち込みであった可能性も否定できない。

4) 土 坑 (図版2・3)

楕円形に近い平面プランで、規模が前述のピットよりも若干大きいものを便宜的に土坑とした。SK30・32の2基で、いずれも調査区西部の3Fグリッドに位置する。SK30は長径76cm、短径50cm、深さ8cmであり、SK32は長径67cm、短径30cm、深さ4cmである。覆土の特徴などから判断して、2基とも古代に属するものとする。ただし、2基とも断面弧状で掘り込みが浅く、覆土中から遺物も出土していない。このことからこれらの土坑も、ピットと同様、自然に形成された落ち込みであった可能性がある。

5) 性格不明遺構 (図版2・5・7・8・50・51・53)

今年度調査区では、性格不明の落ち込みが25基検出された(SX2・3・5・9~13・21・25・27・35・53~60・66~68・74・76)。いずれも、覆土などの特徴から古代に属するものとする。これらの平面形を観察すると、不整形ながらも軸を同じくして長く伸びるものが多い(第7図)、また断面形を見ても浅い弧状のものが多い。それらの特徴を総合すれば、前述のピットや土坑と同様、人為的な遺構というよりも自然に形成された落ち込みとして捉えるべきかもしれない。覆土中から遺物がほとんど出土しなかったことから、その可能性は十分考えることができる。特にSX53は、落ち込み内から巨大な自然木が出土しており、明らかに倒木痕と考える。ただし河川2に接するSX76では、木組み状の構造物も検出しており、自然流路に伴う施設であった可能性がある。またSX35では、田下駄と考える木製品(148)が出土している。河川1・SD1などでも形態の異なる水田関連遺物が出土していることから、これらの一群は耕作で形成された可能性も残す。しかし、いずれにしても遺構の具体的な性格は不明である。

6) 杭 (図版4・5・7・8・12・55)

地面に刺さった状態で検出した加工痕のある木製品を杭として報告する。掘形がなく、打ち込まれたものとする。

杭は、71・72・77(149)及び杭101~105・107~120の22本が該当する。河川2の周辺からは杭101~105・107~119をまとめて検出しており、その並び方から3列の杭列が想定され、仮にA~C列とした(図版12)。いずれも、河川2の水流方向に対し、直交方向に列をなし、河川2に伴う施設の可能性がある。ただし、それぞれの杭の規模や深度、調整方法などに規則性は認められず、樹皮や節がついたままの材を使用しているなど、概して丁寧なつくりとはいえない。A列とB列は河岸に近い杭を、岸に対して斜めに打ち込む傾向が認められる。C列は、浅瀬の最深部に並列して2本打ち込んでいるので、断面ではほぼ垂直に見えるが、若干杭の頭部が上流方向に傾いている。検出された杭の内、もっとも残りの良い杭102(219)と杭118(218)を図化した。

杭列の年代については、A列を構成する杭102に対して放射性炭素年代測定を実施したところ、1520±30年BP(AD460~480年(6.1%)・530~600年(62.1%))との結果(第三章4B参照)が示されており、古墳時代後期頃に構築された可能性がある。また、B列を構成する杭103の底面とC列を構成する杭104の底面同士が接合することから、B列とC列は同時に構築された可能性が高い。B列とC列は河川2の本流に対し、南東方向から流れ込む浅瀬の合流部に位置する。この浅瀬からは古代の遺物が主体的に出土しており、これらの杭列の構築年代は古代まで降る可能性もある。

3 遺 物

A 土器・陶磁器・土製品 (図版13～15・56・57)

1) 概 要

縄文時代～江戸時代の遺物が出土した。基本層序(第三章1B)で述べたとおり、I層は水田耕作土で、すべての時期の遺物を含む可能性がある。遺物包含層はII層が室町時代～江戸時代初期、II層が古代、III層が古墳時代に堆積した可能性が高く、それぞれの時期の遺物を主体的に含む。自然流路(河川1・2)以外の遺構から出土したものは少なく、大半はこの遺物包含層から出土した。調査区の東側ほど低地であるため各遺物包含層は厚くなり、遺物もそれに伴い多い傾向にある。

中世以降の各遺物の分類・編年及び年代観については、青磁は[上田1982]、白磁は[森田1982]及び15世紀の青磁・白磁については[水澤2004]、青花は[小野1982]、瀬戸・美濃焼は[藤澤1993・1995]、珠洲焼は[吉岡1994]、越前焼は[田中・木村2005]、越中瀬戸焼は[宮田1997]、肥前系陶器は[大橋1993]、中世土師器は[水澤2005]を参考にした。

古代の土器には須恵器と土師器があり、施釉陶器類は出土していない。編年及び年代観については、[春日1999]を参考にした。

縄文時代～古墳時代の土器は、その大半が自然流路(河川1・2)の覆土中または付近から出土しており、本来はより上流に該期の遺跡があった可能性がある。ただし、調査区東端の河川2から出土した古墳時代の土器は、玉類などととも比較的まとまって出土しており、原位置を大きく離れていない可能性が高い。

1・9・38・101・102は弥生土器である。古代・中世の遺物包含層(II層・II層)及び遺構、表土層(I層)から出土したものであり、明らかに原位置を離れた混入品である。

2・8・19～27・98～100・110は、古墳時代の土器である。これらのうち2・8・98～100は、古代・中世の遺物包含層または遺構内から出土した破片資料で、混入品と考える。それに対し19～27は、河川2の下層(3層)からある程度まとまって出土したもので、比較的遺存状態が良い。これらの土器の多くは、形態や調整などの特徴から判断して、古墳時代中期、[川村2000]編年でいう8・9段階頃に属すると見られる。ただし2・24・108については、より新しいものと見られ、古墳時代後期の可能性がある。

2) 遺構・自然流路内の出土遺物

SD1 (図版13・56-1・2)

SD1は河川1に注ぎ込み深さ28cm程の浅い溝(または流路)である。大足などの木製品が本遺構の左岸及び隣接するSX25でまとまって出土した点が特筆される。しかしながら、出土した土器・陶磁器類は小片のみで、散見的で量も少ないため、本遺構の年代は特定できない。わずかに器形の判断できる資料を図化した。1は土師質の甕状の製品で、弥生後期の高杯の一部である可能性があるが、他時期のものである可能性も否定できない。2は古墳時代後期の須恵器で、壺の体部片と考える。タタキとカキメ皿が認められる。TK47～MT15様式頃の所産か。

河川1 (図版13・56-3～12)

3～6はII層対応層からの出土である。3は須恵器長頸瓶の口縁部である。春日V～VI期(9世紀～10

世紀初頭)の所産と考えられる。4は小泊産の須恵器甕の胴部片である。5は土師器鍋の口縁部で、断面がやや肥厚した方頭形を呈する。6は土師器の皿で、その形状・胎土から中世(13~14世紀)の所産の可能性がある。7は土師器無台椀またはロクロ成形の中世土師器皿の底部で、SD1との合流部から河川の深部へ落ち込む底面出土した。その形状・胎土から中世前期の所産の可能性が高いが、同層出土の他の遺物年代より明らかに新しく、混入した可能性が高いと考える。

8~11は最下層からの出土である。8は古墳時代の甕の体部片で、内面がヘラナデ調整される。9は甕の口縁部で、緩い段を持つ。弥生時代後期頃の位置付けが考えられるが、破片資料であり、古墳時代前期に下る可能性もあろう。10・11は縄文土器で、調査区中央部の最下層から出土した。10は結束羽状縄文が施される深鉢体部で、縄文時代前期前半に位置付けられる。11は網代痕を有する底部で、網代の編み方は2本超え1本潜り1本送りである。網代の種類や胎土から見て、おそらく後期~晩期のものであろう。12は管状土錘で、II層対応層からの出土である。一部を欠損するものの、残存部からいわゆる「太型」[関1990]の範疇でとらえられる。外面には手づくね成形された際の指押さえの痕が明瞭に残り、両端部には面を作出する。

河川2 (図版13・14・56-13~31)

河川2は調査区東端に位置する自然流路で、土器類と共に大小様々な木製品が出土した。南東から北西方向にかけて蛇行する比較的深い部分と、南西部から流れ込み、杭列B・C付近で合流する浅い部分からなる。深部は1~3層に分層され、浅部は2層に分層されるが、浅部は深部の1~2層と対応する。

13は1層からの出土で、珠洲焼の片口鉢である。吉岡IV 2期(14世紀第2四半期頃)に比定される。

14・16~18は2層からの出土である。17は深部から、そのほかは浅部からの出土である。15は浅部のプラン内に設定した開渠内からの出土で、出土層位は不明であるが、14・16・17との共通性から2層内の可能性が高い。14~17は須恵器である。17は杯蓋で、内面には墨痕が広範囲に認められることから、転用甕である可能性が高い。14と16は有台杯、15は無台杯である。14の底部中央には回転糸切り痕が明瞭に残る。18は土師器で、浅身の椀である。底部は回転糸切り技法で切り離されるが、渦巻き状(外→内、右巻き)の墨書がある。なお、渦巻文については12m程離れて出土した曲物側板(229)にも同様な文様が刻印されており、注目される。小出越遺跡4号住の出土品[鈴木・遠藤1998]に器形が類似することから、9世紀前半に位置付けられよう。

19~27は古墳時代の土器である。19は畿内系の屈曲脚を有する高杯で、直線的な口縁部が大きく外に開く。内外面ともに、ヘラズリとミガキで調整される。22は河川2から出土した短頸の小型鉢で、内外面ともヘラズリ調整される。23は河川2から出土した小型丸底壺である。球形の体部に、大きく開く口縁部が付く。20は河川2から出土した小型器台の脚部で、透かしのない脚が大きく開く。21は椀形の鉢で、内外面ともハケ調整される。24~26は甕である。下層からの出土で、比較的残りがよい。26は口縁部がく字状に屈曲する甕で、体部が丸く、底部が台状に突出する。体部内外面ともに、ハケ調整されている。25は口縁部が逆く字状を呈する甕で、丸みを帯びた体部の内外面がハケ調整される。24は甕上半部で、口縁部がく字状に屈曲する。外面に縦方向のハケ調整を行い、長胴気味の器形を呈することから、他の甕よりも新しい時期(古墳時代後期)のものである可能性が高い。27は有段口縁壺で、口縁部が厚く、頸部が短い。壺としてはかなり歪で作りが悪く、有段部の粘土接合痕も明瞭である。調整は若干不明瞭であるが、外面がミガキ・ハケ調整、内面がハケ調整されている。

28~31は縄文土器で、東部拡張区の地山上面から出土した。刺突や沈線によって文様を描く体部片で、

4点とも同一個体の可能性が高い。遺存状態の悪い破片資料ばかりのため詳細な時期比定は難しいが、文様や胎土などの諸特徴から判断すると、晩期初頭の御経塚式期またはその前後のものであろう。

以上から、河川2の1層が中世後半以降（Ⅱ層併行）、2層が古代、3層が古墳時代の堆積と判断する。

3) 遺構外の出土遺物

ここでは、遺構以外から出土した遺物を報告する。出土遺物は、層ごとに年代的なまとまりが認められることから、層位ごとに詳述する。なお、1層（表土層）から出土した遺物は、本来的に原位置をとどめていないものと判断されるが、各層の器種を補うものとして掲載した。

Ⅰ層（表土層）（図版14・57-32～38）

32・33は瀬戸美濃焼である。32の天目碗が大室2～3期（1530～90年）、33の志野皿が17世紀前半に位置付けられる。34は手づくね成形の上師器皿である。口縁部内外面にはスガが付着し、灯明皿として使用された可能性が高い。胴部下半に指頭圧痕が認められる。35は肥前系陶器皿で、見込みに胎土目積みの痕跡が認められる。36・37は越中瀬戸焼で、36は天目碗、37は鉄軸が施された皿である。

38は弥生土器で、有段口縁の壺である。外に開く有段口縁で、調整はミガキが施される。また内外面には赤彩が施されている。弥生時代後期、新潟シンボ編年〔日本考古学協会新潟大会実行委員会1993〕でいう2～3期頃の位置付けが考えられよう。

Ⅱ層（中世後半～近世初頭）（図版14・15・57-39～102）

39～49は船載陶磁器である。39～44は龍泉窯系の青磁で、すべて碗である。39は外面に弁幅の広い蓮弁文を片刃彫りしたB-I型の碗である。40・42・43は無文の碗であるが、40の口縁が内湾するのに対し、42・43は外反する。40は上田E型に比定され、42・43は軸厚端反碗〔水澤2004〕に比定される。41は緩やかに内湾する器形の碗で、外面口縁部下方に二重の沈線が巡る。44は外面口縁部に崩れた雷紋を巡らす碗で、直線雷紋帯碗〔水澤2004〕に比定される。45・46は景徳鎮窯系の青花である。45はC群〔小野1982〕の碗で、見込みに二重圏線と花文を描き、外面胴部には二重圏線と蛸姑文を、底部境には一重圏を配する。46は小野B1群の皿で、外面に草花文、内面口縁部付近に二重圏線を描く。47～49は白磁である。47・48はV類の皿で、48の見込みに刺花文が施される。49は軟質の胎土を有する皿で、扶高台全面施軸皿〔水澤2004〕である。見込みに重ね焼きの痕跡が2か所認められる。船載陶磁器の中で最古のものは47と48で、12世紀後半に比定される。また、39は13世紀末から14世紀初頭に比定されることから中世前半の遺物もないわけではない。ただし、その出土量は極めて少ない。大半は、上記のような14世紀中頃から16世紀に比定される青磁・白磁・青花で占められる。

50～57は瀬戸美濃焼である。50は古瀬戸後期様式I期の灰軸平碗である。51～54は天目碗であり、51の内面には褐色の付着物が認められる。55は口縁部に灰軸を施す緑軸小皿である。56は卸皿である。片口が部分的に遺存していたことから、全体を復元して実測した。57は鉄軸を施す耳付水注である。各個の年代はさまざまで、古瀬戸中期様式～大室期（14世紀～17世紀初頭）まで含まれる。

58～67は土師器の皿である。58～63はロクロ成形、64～67は手づくね成形である。64の口縁部にはスガが付着し、灯明皿として使用された可能性が高い。また、66・67の胴部下半には指頭圧痕が認められる。いずれも、15世紀～16世紀の所産である。

68～79は珠洲焼である。68～76は片口鉢で、口縁内側に平坦面を作出し、垂播き波状文を施すもの（71・73～75）が目立つ。77は注口部を欠損しているものの、水注と考えられる。78は樹文を篋描きし

た壺の胴部。79はタタキ成形による甕である。いずれも吉岡Ⅳ～Ⅵ期に含まれ、14世紀～15世紀後半に比定される。80は越前焼の甕の口縁部で、16世紀代の所産である。

81～83は肥前系陶器である。81・82は見込みに胎土目積みの痕跡が認められる皿である。83は部分的に鉄軸を施す擂鉢の口縁部である。大橋1～Ⅱ期前半に含まれ、16世紀末～1640年代頃に比定される。

84～89は越中瀬戸焼である。89は擂鉢の口縁部で、内外に赤褐色の鉄軸を掛けるが、口縁端部は平滑になっている。同様な事例は姫御前遺跡〔相羽2008〕にも見られる。84は丸碗、85～87は皿である。87は鉄軸、85は灰軸を施し、86は両者を掛け分ける。88は灰軸を施す向付である。いずれも、16世紀末～17世紀前半に取まる。90は近世瓦である。鼠色に焼き締められており、無軸である。1681年に廃城となった清崎城出土の瓦に類似する。

91～102は、Ⅱ層中からの出土であるが、Ⅱ層ないしはⅢ層中からの混入と判断されるものである。91～97は古代の土器である。91・92が須恵器の有台杯、93が無台杯である。産地は92・93が小泊窯、91は産地不明である。94～96は須恵器の杯蓋である。97は土師器の小甕である。春日Ⅴ～Ⅵ期(9世紀～10世紀初頭)の所産と考えられる。

98～100は古墳時代の土器である。98は小型器台の受部で、内外面ともに赤彩が施される。99は台付鉢(または台付甕)の底部と見られ、ミガキやユビオサエで調整される。100は壺の底部と見られるもので、内外面ともハケ調整され、さらに両面に赤彩が施される。

101・102は弥生土器である。101は甕または壺の口縁部で、ゆるい有段口縁に幅約1mmの擬凹線文が施される。口縁上半を欠損した小破片のため、詳細な時期は不明であるが、弥生時代後期〔金子ほか1999〕に位置付けられよう。102は甕または壺の口縁部である。端部を面取りした口縁が、外に大きく開く。口端面には刻み目が、内面には幾何形状刺突文が施される。北陸系柳井土器の一種であり、弥生時代中期後半〔高橋1990、田中・丸山1999〕に位置付けられる。

以上から、Ⅱ層は14世紀中頃～17世紀初頭を中心とする年代が与えられよう。

Ⅱ層(古代)(図版15・57～103～108)

103～106は須恵器で、103が有台杯、104・105が無台杯、106が杯蓋である。103の底部は回転ヘラ切りされた後に高台を貼り付けているが、底部中央には一本の直線的な刻線が認められる。104は底部を回転系切りで切り離され、「大」字に類似した墨書が認められる。産地は103が東頸城窯、104が西頸城窯、105が小泊窯の可能性が高い。107はロク口成形の土師器無台碗で、春日Ⅴ-2期(9世紀中頃)の所産と考えられる。

108は内面を黒色処理した鉢の口縁部で、若干外に開く。古墳後期の所産である可能性が高い。

Ⅲ層(古代～古墳時代)(図版15・57～109～110)

109は古代の土師器無台碗である。ロク口成形で内面を丁寧にナデ、外面胴部下はヘラケズリ調整を行う。春日Ⅳ-2～Ⅴ-1期(8世紀末～9世紀初頭)の所産と考えられる。110は古墳時代の有孔鉢の底部で、内外面ともハケ調整される。

B 石器・石製品(図版16・17・58)

横刃形石器(図版16・17・58～111～120)

円礫から剝離された横長剥片を素材とするもので、近年の糸魚川市域における発掘調査で類例が増加している。姫御前遺跡では、北陸地方の弥生時代の遺跡で認められる形態であることから、その名称を用い

「横刃形石器」とした〔加藤2008〕。横マクリ遺跡ではその砥面の有無及び砥面形成部位に注目し、寺村光晴氏によって提唱された「浜山型内磨砥石」〔寺村ほか1969〕を含む形で再分類を行い「内磨砥石」と報告している〔桑原2008〕。また、その素材の形状から、岩野E遺跡〔小池1986〕、六反田南遺跡〔畠野2008〕、前波南遺跡（平成18年度調査区）〔矢部2008〕などでは「貝殻状剥片」と呼称している。ここでは機能を限定したイメージを与えず、またその形状自体がそのまま使用可能な剥片であることから、「横刃形石器」の語を使用したい。なお石核と考えられる117・118、形状は異なるが同じ機能が想定される119・120もここで報告する。

石材の面から見ると、姫御前遺跡では細粒・緻密な砂岩が多く用いられているのに対し、横マクリ遺跡では粗粒の砂岩が多く用いられている。使用目的に応じて石材を選択していた可能性もある。今回図示した石材の内訳は、黒色の頁岩（111）、黒色で細粒の砂岩（112・113・119）、粗粒の砂岩（114～116・118）、安山岩（117・120）であり、特に石材に偏った傾向は認められなかった。また姫御前遺跡例で観察されている、素材剥片の「打点付近が著しく凹む」特徴は、すべての石材において共通に認めることができた。

111は節理が発達しており、刃部（打点と対称となる範囲）にも剥落が認められる。中央部はやや押し潰されたように見えるが、剥離は観察できない。112は刃部付近で階段状に剥離が進行している。刃部に二次加工的な細かな剥離が認められるが、打点部がやや潰れたようになっており、両極石器に見られるような正裏面に同時進行した剥離かもしれない。一方、113にも刃部に二次加工が認められるが、剥離は急斜面であり、銀歯状の刃部となっている。114及び116には使用痕が確認できるが、様相は少し異なる。114は背面に二次加工を施すが、腹面は打点付近にしか見られない。また腹面の使用痕（幅2～3mm程）が光沢を持つのに対し、背面は元々滑らかな自然面のためか判別できなかった。116は縦長の素材であるが、打点の凹みや階段状の剥離面を呈するなど、ほかの資料と共通性が多い。幅3mm程の使用痕が、刃部を囲むように連続して認められる。打点と離れた部分が最も顕著で、幅10mmに達している。115は幅16.9cmの大型品で、刃部に二次加工が施される。117・118は縦長剥片を得るための石核と考えられる。117は長軸方向に打点を設け、両極石器のような様相を呈する。118は何度も剥離が施されており、階段状の剥離が顕著に認められる。119は背面に見られる剥片を作出した後、打面転移して剥離されたことを示す資料である。剥離後、右側縁部に二次加工が施されている。120は剥片とは異なった礫の破片であるが、正裏・側面・稜線部のほぼ全域に使用痕が認められる。特に刃部となる側縁部は、度重なる使用のためか面を成している。この使用痕の状況は、130の内磨砥石の側縁の状況に類似している。今後このような礫片に対しても、使用痕の有無を注意していく必要がある。

磨石類（図版17・58～121～124）

磨痕・敲打痕・凹痕の認められるものを磨石類とした。石材で器面の風化程度は異なり、機能面が認められずに搬入礫と判断したものの中にも磨石類が含まれていた可能性がある。またその逆も同様である。特に磨痕のみの磨石類は判別が難しく、本遺跡のように河川の下流域または海岸に近い場合は、礫の摩擦が進むためその誤認の確率が高いものと思われる。121は安山岩製で、器面は荒れている。正面の大型の凹痕は径5.2～5.5cm、深さ0.7cm程である。扁平楕円礫は多く出土しているが、特に122は器面が滑らかであったため磨石類とした。右側縁中央部に浅い凹みが認められる。123は粗粒砂岩製の棒状の楕円礫で、磨痕以外にも上部（頂部）の器面がわずかに荒れているので、敲石として使用された可能性がある。124は花崗岩製で、123同様に敲石として使用される場合が多い石材である。

石 鏝 (図版17・58-125~127)

125~127は安山岩製の礫石鏝である。125は横断面円形の円礫で、縄掛け部として幅2cm弱、深さ0.3~0.4cmの溝が、短軸方向中央部に横位に巡る。河川2の最下層から出土していることから、古墳時代以前の時期に属するものである。126・127は扁平楕円礫を素材とし、縄掛け部として2極に剝離を持つ。126は風化や後世のガジリで器面が荒れており、剝離痕の境も明瞭でない。打点部はやや潰れており、垂直方向に敲かれることで、結果的に剝離が形成された可能性もある。127は正面の剝離は顕著だが、裏面にはほとんど認められない。正裏面は非常に平坦であり、研磨が加えられた可能性がある。

砥 石 (図版17・58-128~131)

128~131は砥石である。128は砂岩製でⅡ層から、129は凝灰岩製でⅠ層から出土した。形態や出土層位から中世以降の遺物と考える。128は上面の剝離が粗雑であるが、砥面は非常に滑らかで、断面は四角形を呈する。下部は欠損して不明だが、中央部が大きく凹む形状と考えられ、置砥石的な使用が想定される。129は全体形状が三角柱状を呈し、6面すべてに磨痕が認められる。破損後もそのまま利用されたものと思われる。

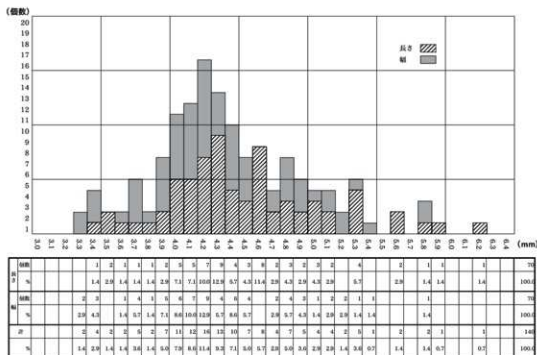
130・131は河川2の下層から出土しており、古墳時代のものである。どちらも粗粒の砂岩製である。130は糸魚川市横マクリ遺跡出土の、「内磨砥石」Ⅲ-4類〔桑原2008〕に該当する。「素材のほぼ全面に砥面が形成されているもの。両側縁はほぼ平行し、形状は薄い板状を呈している」としており、130も両側縁に見られる面は直線的では無いが、非常に滑らかである。上下に剝離が認められるが、その剝離面にも磨痕が及んでいる。下部の剝離は打点が共通する。131は筋砥石で、左・下部を欠損する。現状の左側縁寄りに2条の溝があり、断面弧状の溝は上幅8mm弱、下幅4mm弱である。130・131は玉作りとの関連が指摘されている砥石で、後述するように本遺跡でも未成品が多く出土している。

玉類・玉作関連資料 (図版17・58-132~147)

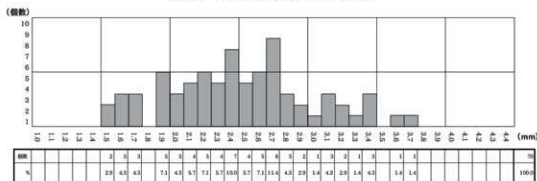
河川2から古墳時代(中期主体)の土器と共に、玉類・玉作関連資料が多く出土した。西側に隣接する六反田南遺跡でも、ヒスイ・滑石・緑色凝灰岩を素材とした玉作関連遺物が出土している〔春日ほか2008〕。

132は緑色凝灰岩の石核である。平面五角形で、それぞれに面を作出し、さらに厚みを減じため(正裏面を平らにするための)剝離を加えている。管玉製作を目的に、角柱状素材を得るための前段階の資料と考える。

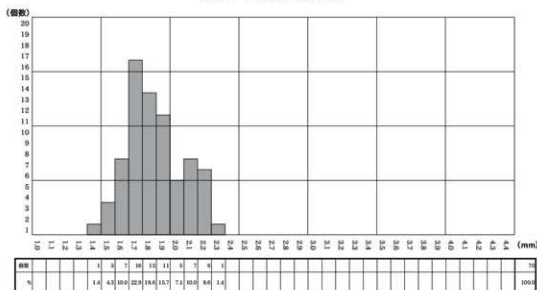
133は黒色を呈する滑石製品で、表面は滑らかだが、磨痕が明瞭に観察できる。上下面を欠損しており、現状は勾玉に似るが、背となる部分(図左面)に断面V字状(深6mm)の切り込みが認められる。製作上の未成品または成品欠損後の転用品、どちらの可能性もある。切り込み上面の左右頂部はほぼ平らで、磨きによって形成された面も左右同一であることから、切り込みを入れる前の段階で、ある程度平滑にしていたことがうかがえる。-2F21グリッドのⅡ層(中世の遺物包含層)からの出土であるが、河川2の古墳時代の遺物の出土状況や使用石材の面から考えて、133も古墳時代の装飾品の一種と思われる。もう一つの可能性として考えられるのが、縄文時代前期の夔状耳飾の未成品である。藤田富士夫氏は、形態や技術的特質から攻玉遺跡を3つの画期に大別し、画期ごとに製作過程を示している〔藤田1983〕。前波南遺跡と似た類例は、第Ⅰ期(前期初頭頃)C過程の代表とする富山県極楽寺遺跡例と、第Ⅱ期(前期前・中葉)C過程の代表とする長野県犬伏遺跡例に認められる。C過程は第Ⅰ・Ⅱ期共通で「形割り(第1工程)→整形(第2工程)→荒磨き(第3工程)→穿孔(第4工程)→横位分断(第5工程)→切目(第6工程)→孔修正(第7工程)→仕上げ研磨(第8工程)」とされる。この「横位分断(第5工程)」を示す例に



第8図 白玉の外形（長さ・幅）別数量表



第9図 白玉の厚さ別数量表



第10図 白玉の孔径別数量表

該当する。平成19年度調査区で出土した縄文時代前期と思われる土器は1点(10)のみであり、種別・所属時期の検討については類例を待ちたい。

134は滑石製の勾玉で、孔から上半部を欠損する。現存長12.7mmの小型品で、径2mm弱の孔は正面(図左)のみから穿たれる。裏面まで貫通していることから、欠損は完成後に生じたものと思われる。135は長さ26.1mmの滑石製管玉の完成品であるが、横断面は楕円形を呈し、丁寧な作りとは言い難い。上下両面から穿孔され、中央の径がやや狭くなっている。136は今回出土した管玉と白玉の中間的な大きさであるが、製作工程から考えて管玉に分類する。緑色凝灰岩製で、横断面は12～13面の多面体を呈し、磨痕方向はすべて左下がりとなる。上下面共に磨きで平滑だが、上面が長軸に対して水平であるのに対し、下面は斜めになっている。これは管玉の製作途上、おそらく穿孔作業中に折損したが、廃棄せずにそのまま転用した可能性がある。孔径は上面が大きく、下面が小さいのもその可能性を裏付けよう。下面方向からはさらに、角を取るような細かな剝離がいくつか認められる。137は青色を呈する、外径(長さ・幅)4.5～4.7mm、厚さ3.2mm、孔径2.1mmのガラス製の小玉である。ガラス製の小玉は1点出土したのみで、ほかの玉類と一緒に出土していることから古墳時代の所産と考える。138～146は滑石製の白玉である。138～142のような成品が73点(欠損3点)、143～146のようなある程度の形状をもった未成品が16点(欠損3点)、また素材として利用可能なチップ状のものが9点ある。成品のうち、欠損していない70点の外径(長さ・幅)・厚さ・孔径を比較してみたのが第8～10図である。外径は4.0～4.5mmに集中域が見られるのに対し、厚さにはそのような集中域は見られない。成品の規格として、外径の大きさを重要視していたことがうかがえる。厚みを減じたいのであれば、成品となった後でも欠損することなく研磨は可能であったと考える。孔径は最大2.3mm、最小1.4mmで、その差はわずか1.1mmであった。このことから穿孔工具には、径1.8mm前後のものを使用していたことが分かる。成品と未成品の磨痕を比較してみると、未成品は粗く、成品はきめ細かい。研磨回数よりも、その研磨道具自体の違いと考える。未成品の様々な痕跡を観察すると、石材から分割・剝離で一定の大きさの剝片・チップを得た後、①粗磨き(正裏面をなるべく平行な面となるように研磨)→②周縁剝離(円形及び多角形に打ち欠く)→③穿孔→④側面粗磨き(角を取り、円形に近づくように研磨)→⑤仕上げ磨き(全体を研磨)、などの工程を経たことが想定できる。また、粗磨き工程は、擦切りによる方法も考慮する必要がある。147も滑石製で、磨きで板状を呈する。勾玉または白玉などの素材と考える。

C 木器・木製品(図版18～23・59～62)

木器・木製品は、SD1・河川1・河川2及びその周囲から出土している。特に河川1・河川2からは、建築材と見られる大量の加工木が出土しており、本道跡の近隣で木材加工が行われていたことが推測される。建築材以外にも、木筒・曲物・形形類・農具類といった製品が少なからず出土しており、巧みな木材利用の一端がうかがわれる。この項では、種別ごとに記載する。

木筒(図版19・59～166)

166は、SD1と河川1の合流部から出土した木筒である。スギを板目取りしたもので、長さ17.2cm、幅2.5cm、厚さ0.3cmをはかる。長方形の材の下端を尖らせていることから、051型式に分類される。片面には「出雲真山」と書かれており、人名の可能性が高い。「出雲」の文字が記された木筒片は前年度調査区からも出土しているが、今年度調査区から出土したものはほぼ完成品である。この木筒に対して放射性炭素年代測定を実施したところ、古墳時代の年代(暦年較正年代AD390～540年)を示した(第三章4

節)が、考古学的見地からいえばこの測定値が木簡の使用時期を示しているとは考えられない。仮に木材そのものの年代は古いとしても、周囲から出土したほかの遺物の年代を勘案すれば、古代(9世紀前半)に位置付けるのが妥当のように思われる。「出雲」の字体は、福井県越前町田中遺跡から出土した9世紀前葉の「出雲」墨書土器に似ており〔釘谷2006〕、むしろそれに近い年代を考えるべきであろう。

なお、本遺跡が所在する糸魚川地域は、『古事記』や『出雲国風土記』における大国主命(八千矛神)と沼河比売(奴奈川姫)の通婚神話に見るように、古くから出雲地域との関係が伝えられている土地である〔浅香1978、上田1993、土田2003〕。また考古学的にも、弥生時代から玉類を通じた交流があったこと(出雲大社の糸魚川産ヒスイ製勾玉など)が知られている〔寺村1995〕。本遺跡から出土した「出雲」木簡は、そのような両地域の密接な関係を示唆する資料として、極めて重要な意義を持っていると言えよう。

曲 物 (図版20・23・59・61-168・187・188・194-199・229-235)

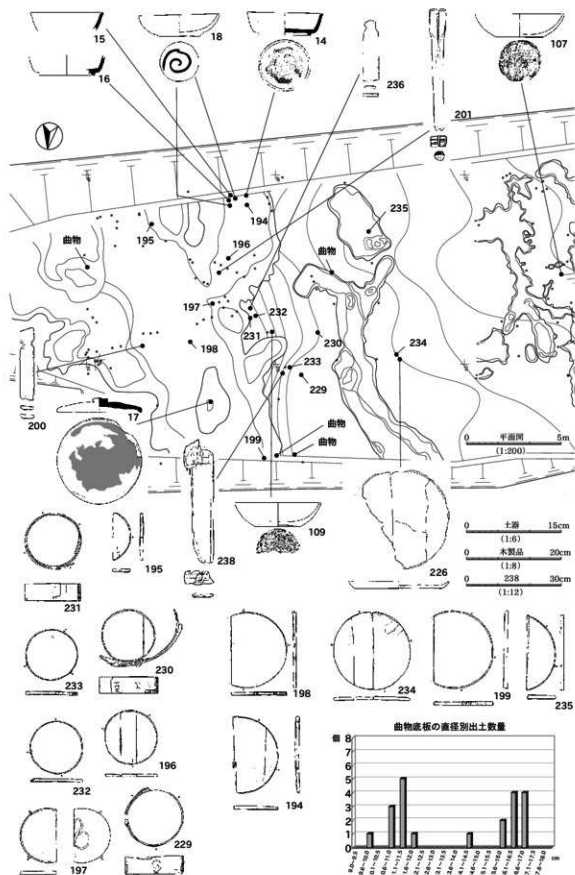
出土層位などから考えて、いずれも古代のものと考えられる。これらのうち229に対して放射性炭素年代測定したところ、弥生時代後期〔春成・今村2004〕～古墳時代前期の年代(暦年較正年代245～335AD)を示したが、後述する渦巻文墨書土器(18)と曲物(229)の関係や出土状況を総合すれば、古代のものとして捉えた方が妥当である。229・230は側板と底板が揃い、231は側板のみ、ほかは底板のみの出土である。側板・底板の揃った2点について樹種同定をしたところ、いずれもスギであった。底板はすべてクレゾコのもので〔中山1993〕、側面には木釘または木釘孔が認められる。完形の底板を見る限りでは、木釘は3か所に打たれる場合(196・229・232・233)と4か所に打たれる場合(187・188・231・234)の2種類があったようである。側板の3点には、いずれもケビキ線が残され、230は縦方向(中山分類A)、229・231は斜め方向(中山分類B)に糸線が走る。また197の外側にあたる面には、破損のため不明だが「8」字に類似した刻印(焼印)が認められる。同様に229の側板には渦巻文(外→内、左巻き)が刻印(焼印)されており特筆される。229の出土地点(-2G1グリッド)から約12m離れた-3F4グリッドでは、渦巻文(外→内、右巻き)が描かれた9世紀前半の墨書土器(18)が出土しており、その同時期性が推測される。さらに、古代の当地において、渦巻文に何らかの特別な意味があった可能性も想定されよう。ただし、曲物側板と墨書土器の渦巻文は渦の方向が逆であり、その意味には若干の違いがあるのかもしれない。

形代類 (図版18・19・21・23・59-62-165・178・179・182・200・236)

出土層位などから判断して、いずれも古代のものと考えられる。165・200・236は人形と見られ、いずれも抉りによって頭部と体部の境を作出している。ただし165は、ほかの形代と違ってかなり厚みがあり、別の用途を考えるべきかもしれない。周囲からは大足の横木と見られる部材が多数出土しており、それらに関係したものである可能性もあろう。178・179・182は武器形と見られる。178は剣形または鎌形、179・182は槍形または鎌形であろう。

農 具 (図版18・19・23・59・60・62-148・150-164・169・175・238・241)

148・175・241は、その形状や大きさから田下駄の類と見られる木製品である。出土層位などから判断して、いずれも古代に位置付けられる。3点ともスギを用いているが、木取り・形態は多種多様で、板目取りで板状のもの(148・241)、板目取りで立体的なもの(175)がある。5孔を有する241は、横木の圧痕らしきものが認められ、田下駄の一種である大足の足板の可能性もある。150～164は大足の横木と見られる部材である。その多くがSD1・SX25から出土しており、古代に位置付けられる。両端部を柄状に加工している形態が想定されるが、156以外は片方を破損しているため全長は不明である。



第11図 河川2周辺の遺物出土分布図

156は上部に抉りを有しており、横木というよりも足板横枠として区別すべきかもしれない。なお、これらの横木類のうち156・159について樹種同定を行ったところ、いずれもスギであった。ほかの横木類もよく似た材を使用しており、スギである可能性が高い。木取りの方向については、[細井2007]で指摘されるように規則性がなく、柁目取り・板目取りの両方が認められた。

169・238は、鋤・鎌類の可能性のある木製品である。169は、河川1の古代層から出土した部材である。スギを板目取りした板材に、方形に3孔が並んで穿たれる。中央の孔に柄が、左右の孔に支え木が入るとすると、横鎌・柄振の可能性があろう。しかし、完形品ではなく、農具以外の部材の可能性も否定できない。238は鋤身または鎌身に似たもので、出土層位から古代に位置付けられる。スギ材を板目取りしており、細長い刃床状の扁平部が作り出される。ただし遺存状態が悪いため全体形は不明な点が多く、農具以外の可能性もある。

椀・皿類 (図版23・62-226~228)

226は白木の盤である。古代の遺物包含層であるⅡ層から出土したもので、口径20.7cm、器高1.5cm、底径18.4cmを測る。ケヤキを使用しており、木取りは横木地柁目取りである。

227・228は漆器である。227は椀で、内面に赤漆が、外面に黒漆が施される。外面には、さらに赤漆で文様が描かれている。ブナ属を使用しており、木取りは横木地柁目取りである。228は皿で、内外面とも黒漆が施される。ケヤキを使用し、木取りは横木地柁目取りである。漆器はいずれもⅡ層からの出土で、中世以降に位置付けられる。

その他 (図版19~23・59~62)

239・240は、下駄である。2点とも歯の低い連歯下駄で、239はスギを柁目取りしている。いずれも2F3・7グリッドのⅡ層から出土し、中世以降に位置付けられる。これらは出土地点・層位が近いだけでなく、質感・形態も酷似していることから、一対のものであった可能性が高い。

237は鉤である。二股に分かれたマツ属複雑管束亜属の枝をそのまま利用しており、上端部に紐掛けが作出されている。Ⅱ層から出土したもので、中世以降の所産と考える。

167は、箸状・棒状木製品である。河川1の古代層から出土したもので、スギ材を削り出して角棒状に仕上げている。本報告では比較的残りの良い1点のみを図化したのが、本遺跡からはこれに近似した箸状・棒状木製品の折損片が多数出土している。ただし、いずれも複数の面取りが見られない断面長方形で、先端を尖らせたものも認められないことから、食事用の箸ではない可能性が高い。近年、糸魚川地域では箸状・棒状木製品が多数出土する遺跡が相次いで発見されており、中にはそれを地面に突き刺したような例も少なくない[相羽2002、入江2007、相羽・加藤2008]。本遺跡から出土した箸状・棒状木製品には地面に突き刺した例は見られなかったが、形状はよく似ており、一種の祭祀具だったのかもしれない。

170・174・176・177・180~193・201~225は、河川1・2から出土した建築部材または加工木の類である。板状または角材状のもの、板状で孔を有するもの(205~207)、板材状または角材状で抉りを有するもの(172・203・208)、板材の先端を尖らせた矢板状のもの(214~217)、棒・杭状のもの(201・202・218~225)、丸木両端を加工したもの(184・185)と、形態は多種多様であるが、いずれも具体的な用途は不明である。木取りにはある程度傾向が認められ、棒・杭・丸木以外は板目取りのものが多い。これらのうち、何点かに対して樹種同定を行ったが、184のアスナロ以外はすべてスギであった。建築材・加工木以外の木製品においても、ほとんどがスギを使用しており、本遺跡の特徴といえよう。所属時期については、その多くが古代に属すると見られるが、河川2の下層(3層)から出土した

もの(202・205～210・212・214～216・221・222)に限っては、古墳時代の土器(19～27)や玉類(132・134～147)が伴っており、古墳時代に属する可能性が高い。それを確かめるために、河川2の3層から出土した206に対して放射性炭素年代測定を実施したところ、弥生時代後期〔春成・今村2004〕～古墳時代前期の年代(1760±30年BP、暦年較正年代AD235～330年)を示した。このことから、河川2の3層から出土したものは基本的に古墳時代の遺物、それ以外のは古代以降の遺物と理解してよいようである。

D 金属製品(図版24・63～242～272)

金属製品は銭貨以外にも何か出土しているが、その大半はⅠ～Ⅱ層の出土であり、明確に古代～中世の所産と判断できるものがなかったため、図示しなかった。

銭貨の出土位置の傾向に偏りは見られず、調査区全域から32点(図示31点)出土した。調査面積の割には、比較的多く出土した印象を受ける。同じ糸魚川市内の姫御前遺跡でも似たような状況が認められ、中世の祭祀的遺物も数多く出土していることから、祭祀行為に伴うものであった可能性が指摘されている〔松永2008〕。Ⅱ層から出土したものが大半で、中世以前の渡来銭が24点(242～265)、江戸時代以降の寛永通寶が7点(266～272)ある。渡来銭は初鋳621年の開元通寶から初鋳1368年の洪武通寶まで出土しているが、北宋銭が17点(244～260)と最も多い。寛永通寶の内、266～269が「古寛永」、270～272が1697年以後鋳造された「新寛永」に分類できる。なお腐食などにより肉眼で銭種が判別しにくいものについては、X線透過撮影で判別を行った。

4 自然科学分析

A 樹種同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

1) はじめに

新潟県糸魚川市大和川に所在する前波南遺跡は、海岸沿いに発達した砂丘と丘陵間の沖積地に立地している。本遺跡のこれまでの発掘調査成果では、古墳時代中期及び奈良時代を中心とする遺物包含地であることが明らかになっている。今回の発掘調査では、流路や溝状遺構、ピット等が検出されている。このうち、流路跡内からは多くの遺物が確認されており、調査区中央の流路跡からは、伐採や枝打ちの痕跡が認められる自然木や古代の遺物とみられる木簡や田下駄等の木製品、調査区東側の流路跡からは古墳時代の遺物と推定される杭状・棒状・板状を呈する加工材や白玉や管玉、勾玉の成品・未成品が出土している。

本報告では、上記した流路跡から出土した木製品や加工材等を対象に樹種同定を実施し、木材利用について検討する。

2) 試料

試料は、流路跡や溝状遺構等から出土した木製品や加工材、自然木等50点(分析番号1~50)である。このうち、曲物2点(分析番号19・23)は、それぞれ底板と側板が残存していたことから、各部品を分析対象としている。したがって、分析対象試料は計52点となる。

3) 分析方法

各試料の外観や保存状況、さらに、木取り等の観察を行った後、剃刀を用いて木口(横断面)・柘目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を直接採取し、サンプル瓶内に水とともに封入する。採取した切片を実体顕微鏡で観察し、各断面に相当する切片を拾い出してガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。

同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東[1982]、Wheeler他[1998]、Richter他[2006]を参考にする。また、各樹種の木材組織については、林[1991]、伊東[1995・1996・1997・1998・1999]や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

4) 結果

結果を第1表に示す。木製品や加工材、自然木は、針葉樹3種類(マツ属複雑管束亜属・スギ・アスナロ)と広葉樹3種類(ブナ属・ケヤキ・トネリコ属)に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複雑管束亜属(*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急〜やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。

分析番号	報告番号	実測番号	出土位置			器種・形状・部位	木取	樹種		
			遺構番号	層位	グリッド					
1	200	403	河川 2	1	-3 F	22	人形	板目	スギ	
2	201	404	河川 2	1	-3 F	14	不明・(二重)	削出	スギ	
3	169	405	河川 1	II*	1 F	4ウ	えぶり	板目	スギ	
4	236	414		II*	-3 F	20ウ	人形	板目	スギ	
5	156	415	SD 1	1	3 E	21	大足	板目	スギ	
6	159	416	SD 1	1	3 E	22	大足	板目	スギ	
7	241	418		II	2 F	11	田下駄?・(大足)	板目	スギ	
8	148	419		II*~面	2 F	21	田下駄	板目	スギ	
9	166	420	SD 1	II*	1 F	9	木簡	板目?	スギ	
10	178	421	河川 1	II*	1 E	22ウ	削形・楕形	板目	スギ	
11	179	422	河川 1	下層・砂混	1 E	22	削形・楕形	板目	スギ	
12	237	426		II	1 F	3	筒	マツ属縮管束変異		
13	165	431	SD 1	1	3 E	18	人形?	板目	スギ	
14	182	434	河川 1	II	1 F	18	削形・楕形	板目	スギ	
15	226	436		II*	-2 F	24ウ (+ア)	筒	横木地紐目取	ケヤキ	
16	238	437		II	-2 G	1	筒	板目	スギ	
17	227	438		II	1 F	11	漆器・筒	横木地紐目取	ブナ属	
18	228	442		II	-1 F	8	漆器・皿	横木地紐目取	ケヤキ	
19	230	446		II	-2 F	22	曲物	側板 底板	板目 板目	スギ スギ
20	239	450		II	2 F	3	下駄(通面)		板目	スギ
21	190	452	SW 1	II*			杖状		分割角材	スギ
22	149	453	SX 77	-	2 E	22	棒状		削出丸棒	スギ
23	229	454		II*	-2 G	1	曲物	側板 底板	板目 板目	スギ スギ
24	175	455	SW 2	II*			田下駄		板目	スギ
25	208	456	河川 2	3	-4 F	15・20	部材	板目	スギ	
26	206	457	河川 2	3	-3 F	17	部材	板目	スギ	
27	219	458	河川 2	-	-3 F	19	杭	分割板状(板目)	スギ	
28	218	460	河川 2	-	-3 F	21	杭	分割角材	スギ	
29	180	461	河川 1	下層・砂混	1 E	21エ	板	板目	スギ	
30	215	464	河川 2	3	-3 F	22	矢板	板目	スギ	
31	217	465	河川 2	1~2	-3 G	4	矢板	板目	スギ	
32	183	468	河川 1	下層・砂混	1 F	13	板状?	板目	スギ	
33	202	470	河川 2	3	-4 F	15	棒状	削出丸棒	スギ	
34	224	472	河川 2	1	-3 G	4	杭	板目	スギ	
35	211	473	河川 2	1~3	-3 G	4	板状	板目	スギ	
36	222	474	河川 2	3	-3 F	22	杖状	分割角材	スギ	
37	171	477	SW 2	II*			杖状	板目	スギ	
38	203	478	河川 2	1	-3 G	10	部材	分割板状(板目)	スギ	
39	221	480	河川 2	3	-4 F	15	杖状	分割(ミカン削状)	スギ	
40	186	481	河川 1	下層・砂混	1 F	24ア	矢板	板目	スギ	
41	205	483	河川 2	3	-3 F	21	矢板	板目	スギ	
42	223	484	河川 2	1	-4 F	19	木製品	板目	スギ	
43	167	486	SD 1	II*	1 F	9イ	箸状木製品	削出丸棒	スギ	
44	172	487	SW 2				棒状	分割角材	スギ	
45	184	488	河川 1	下層・砂混	1 F	13・18	杖状	芯持丸木	アスナロ	
46	213	489	河川 2	1	-3 G	4・9・10	板状	板目	スギ	
47	207	490	河川 2	2	-4 F	9・10・14・15	部材	板目	スギ	
48	185	491	河川 1	下層・砂混	1 F	13	杖状	芯持丸木	スギ	
49	192	493	SW 1				板状	板目	スギ	
50	-	-	河川 2	5			自然木	-	トネリコ属(板状)	

第1表 樹種同定結果

放射組織は単列、1-10細胞高。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・アスナロ (*Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc.) ヒノキ科アスナロ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、内壁には茶褐色の樹脂が顕著に認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔及び階段穿孔を有し、壁孔は対列状~階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1-2列。孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

環孔性を帯びた散孔材で、道管は単独または2-3個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1-2細胞幅、1-20細胞高で単列の組織が多い。

組織の特徴から、トネリコ属の根材と考えられる。

5) 考 察

今回調査を行った木製品は、人形や田下駄、大足、盤、鋤、漆器碗、漆器皿、曲物、下駄、箸状木製品、杭・棒・板状を呈する加工材からなる。これらの木製品は、鉤にマツ属複雑管束亜属、漆器碗にブナ属、盤及び漆器皿にケヤキ、杭状にアスナロが認められた他はすべてスギであった。このことから、スギ材が様々な器種の木製品に利用されていたことが指摘される。このように、スギ材が多くの木製品に利用される傾向は、昨年度に本遺跡で実施した分析結果と調和的であり、隣接する六反田南遺跡〔春日Ⅱa-2008〕でも同様の傾向が認められている。

今回確認された木材の材質の特徴では、スギは、木理が通直で割裂性が高く、特に板状の加工に適した材質を有する。アスナロも木理が通直で割裂性が高く、板状の加工に適している点はスギと同様であるが、スギよりも晩材部が狭いために均質で、耐水性も高い。マツ属複雑管束亜属は、針葉樹材としては比較的強度が高く、松脂を多く含むために保存性が高い。ケヤキは重硬で強度・耐朽性が高い材質を有し、加工はやや困難な部類に入る。ブナ属は、ケヤキほどではないが、強度は比較的高く、加工は容易である。

スギ材の利用が認められた木製品は、人形や田下駄、大足など板状を呈する製品や加工材が多く、スギ材の割裂性を利用した加工が推定される。アスナロも板状の加工が容易であるが、本遺跡では芯持丸木の杭状に認められたのみであった。アスナロを含むヒノキ科は、本遺跡では前回の調査では芯持丸棒状の製品に1点認められたのみであり、全体的にヒノキ科の木材の出土数は少ない。これは、本地域におけるヒノキ科の生育状況や入手条件等を反映している可能性があるが、この点については古植生等の調査を行い検討する必要がある。

マツ属複雑管束亜属にはアカマツとクロマツがあり、いずれも現在の本地域に分布している。鉤は、枝が分かれた部分が利用されており、比較的強度を必要とする用途に利用されていたことが推定される。な

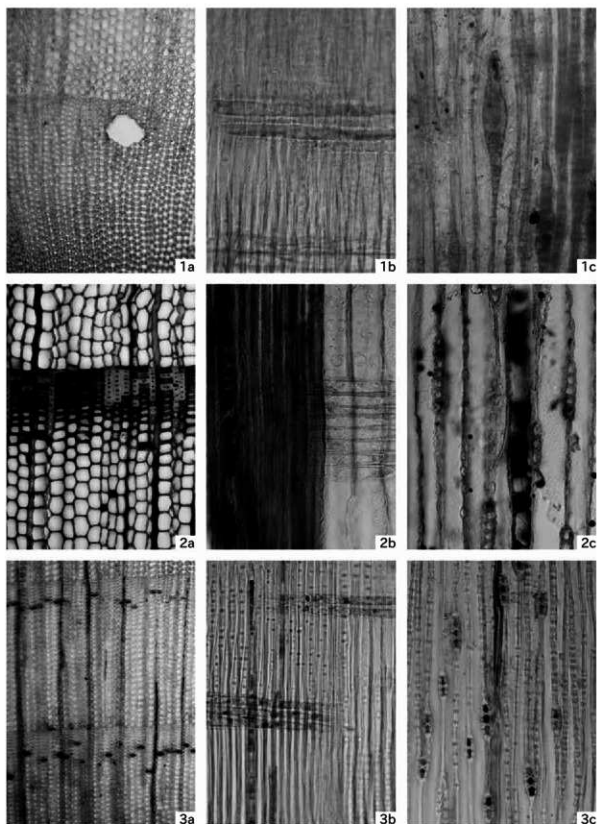
お、マツ属複雑管束亜属は、六反田南遺跡において杭や板材に利用された例が確認されている。

漆器碗・皿は、本地域では調査事例はないが、高田平野では多数の調査事例があり、ブナ属やケヤキが比較的多く利用される状況が確認されている〔バリノ・サーヴェイ株式会社1994・2004、株式会社パレオ・ラボ2002、三村・植田2003〕。今回の調査結果から、本遺跡においても同様の木材利用が指摘される。

河川2から出土した自然木は、トネリコ属の根材であった。トネリコ属には、湿地林を構成するヤチダモや溪谷林を構成するシオジが含まれることから、周辺の低地においてヤチダモやシオジが河畔林あるいは湿地林を形成していたことが推定される。

引用文献

- 林 昭三 1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31 京都大学木質科学研究所 81-181
- 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32 京都大学木質科学研究所 66-176
- 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33 京都大学木質科学研究所 83-201
- 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34 京都大学木質科学研究所 30-166
- 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35 京都大学木質科学研究所 47-216
- 株式会社パレオ・ラボ 2002 「木製品の樹種同定」『北陸自動車道上越春日・木田地区発掘調査報告書Ⅶ 八反田・高知遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第110集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 49-55
- 三村昌史・植田弥生 2003 「仲田遺跡出土木製品の樹種」『北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅱ 仲田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第128集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 35-41
- バリノ・サーヴェイ株式会社 1994 「一之口遺跡東地区から出土した木質遺物の同定」『北陸自動車道 上越春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ 一之口遺跡東地区(本文編)』新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 147-167
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2004 「木製品の樹種同定」『一般国道253号上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅱ 下智遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第134集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 39-44
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006 『針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修) 海青社 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. 2004 IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification]
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』地球社 176p
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修) 海青社 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. 1989 IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]



1. マツ属複雑維管束亜属 (報告番号237・実測番号426)

2. スギ (報告番号178・実測番号421)

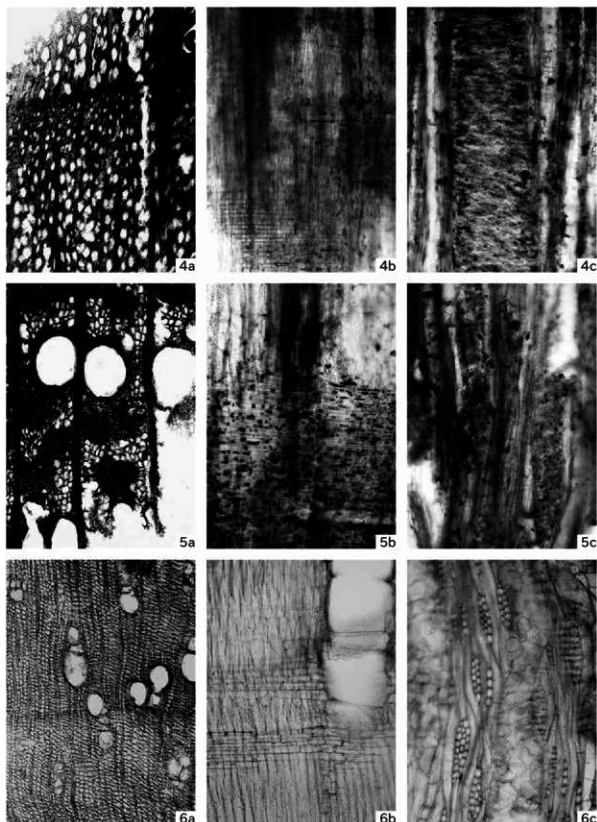
3. アスナロ (報告番号184・実測番号488)

a: 木口 b: 縦目 c: 板目

200 μ m: a

100 μ m: b, c

第12図 木材顕微鏡写真(1)



4. プナ属 (報告番号227・実測番号438)

5. ケヤキ (報告番号226・実測番号436)

6. トネリコ属 (分析番号50)

a: 木口 b: 柎目 c: 板目

300 μ m: a
200 μ m: b, c

第13図 木材顕微鏡写真(2)

B 放射性炭素年代測定 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1) 測定対象試料

前波南遺跡は、新潟県糸魚川市大和川字前波ほかに所在する。測定対象試料は、SD1 (1F9区) の底面付近から出土した木筒 (試料①: IAAA-72552)、-2G1区 のII'層から出土した曲物側板 (試料②: IAAA-72553)、河川1 (1F13区) の下層から出土した加工材 (試料③: IAAA-72554)、杭102 (-3F19区) の杭 (試料④: IAAA-72555)、河川2 (-3F17区) の3層から出土した加工材 (試料⑤: IAAA-72556)、河川2 (-3G17区) の5層から出土した自然木 (試料⑥: IAAA-72557)、合計6点である。試料①に関しては、木筒の形状と表面 (墨書面) を保護するために、裏面の亀裂による破損部の周辺から採取した。

2) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸 (80℃) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液 (80℃) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸 (80℃) を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素 (CO₂) を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出 (水素で還元) し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

3) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシウウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器で¹³C/¹²Cの測定も同時に行う。

4) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) ¹⁴C年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。
- 3) 付記した誤差は、複数回の測定値について χ^2 検定が行われ、測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値、みなせない場合には標準誤差から求めた値が用いられる。
- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定されるが、AMS測定の場合に同時に測定される δ

^{13}C の値を用いることもある。 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{As} - ^{14}\text{Ar}) / ^{14}\text{Ar}] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{As} - ^{13}\text{APDB}) / ^{13}\text{APDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ^{14}As ：試料炭素の ^{14}C 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_S$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_S$

^{14}Ar ：標準現代炭素の ^{14}C 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_R$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_R$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度 $(^{13}\text{As} = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C})$ を測定し、PDB（白亜紀のペレムナイト類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器で測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に（加速器）と注記する。

- 5) $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ （‰）であるとしたときの ^{14}C 濃度 (^{14}AN) に換算した上で計算した値である。（1）式の ^{14}C 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}\text{AN} = ^{14}\text{AS} \times 0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000)^2 \quad (^{14}\text{AS} \text{として } ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{AS} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000)) \quad (^{14}\text{AS} \text{として } ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{AN} - ^{14}\text{AR}) / ^{14}\text{AR}] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的良好よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

- 6) pMC（percent Modern Carbon）は、現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合を示す表記であり、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \quad (\text{‰})$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \quad (\text{‰})$$

国際的な取り決めから、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCで、 ^{14}C 年代が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

- 7) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。
- 8) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（ $1\sigma = 68.2\%$ ）あるいは2標準偏差（ $2\sigma = 95.4\%$ ）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04 データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv3.10 較正プログラム [Bronk Ransley1995 Bronk Ransley 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001] を使用した。

		IAA	
IAA Code No.	報告番号	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-72552	166	試料採取場所：新潟県糸魚川市大和川字前波 前波南遺跡	Libby Age (yrBP) : 1,620 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加算器) = -26.34 ± 0.81 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -182.7 ± 3.3 pMC (%) = 81.73 ± 0.33
		試料形態：木片 試料名(番号)：試料① 木簡 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -185.0 ± 3.0 pMC (%) = 81.50 ± 0.30 Age (yrBP) : 1,640 ± 30
IAAA-72553	229	試料採取場所：新潟県糸魚川市大和川字前波 前波南遺跡	Libby Age (yrBP) : 1,740 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加算器) = -26.09 ± 0.72 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -195.2 ± 3.1 pMC (%) = 80.48 ± 0.31
		試料形態：木片 試料名(番号)：試料② 曲物側板 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -197.0 ± 2.8 pMC (%) = 80.30 ± 0.28 Age (yrBP) : 1,760 ± 30
IAAA-72554	185	試料採取場所：新潟県糸魚川市大和川字前波 前波南遺跡	Libby Age (yrBP) : 1,420 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加算器) = -24.02 ± 0.67 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -161.6 ± 3.1 pMC (%) = 83.84 ± 0.31
		試料形態：木片 試料名(番号)：試料③ 加工材 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -159.9 ± 2.9 pMC (%) = 84.01 ± 0.29 Age (yrBP) : 1,400 ± 30
IAAA-72555	219	試料採取場所：新潟県糸魚川市大和川字前波 前波南遺跡	Libby Age (yrBP) : 1,520 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加算器) = -27.14 ± 0.73 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -172.5 ± 3.1 pMC (%) = 82.75 ± 0.31
		試料形態：木片 試料名(番号)：試料④ 杭 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -176.2 ± 2.8 pMC (%) = 82.38 ± 0.28 Age (yrBP) : 1,560 ± 30
IAAA-72556	206	試料採取場所：新潟県糸魚川市大和川字前波 前波南遺跡	Libby Age (yrBP) : 1,760 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加算器) = -24.64 ± 0.66 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -196.4 ± 2.9 pMC (%) = 80.36 ± 0.29
		試料形態：木片 試料名(番号)：試料⑤ 加工材 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -195.8 ± 2.7 pMC (%) = 80.42 ± 0.27 Age (yrBP) : 1,750 ± 30
IAAA-72557	-	試料採取場所：新潟県糸魚川市大和川字前波 前波南遺跡	Libby Age (yrBP) : 3,620 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加算器) = -29.45 ± 0.72 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -362.5 ± 2.5 pMC (%) = 63.75 ± 0.25
		試料形態：木片 試料名(番号)：試料⑥ 自然木 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -368.3 ± 2.3 pMC (%) = 63.17 ± 0.23 Age (yrBP) : 3,690 ± 30

第2表 放射性炭素年代測定の結果

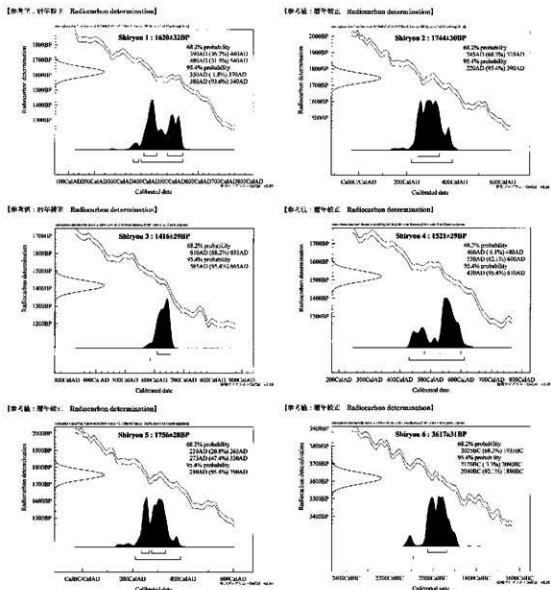
5) 測定結果

^{14}C 年代は、SD1 (1F9区)の底面付近から出土した木簡(試料①: IAAA-72552)が1620 ± 30yrBP、2G1区のII'層から出土した曲物側板(試料②: IAAA-72553)が1740 ± 30yrBP、河川1 (1F13区)の下層から出土した加工材(試料③: IAAA-72554)が1420 ± 30yrBP、杭102 (3F19区)の杭(試料④: IAAA-72555)が1520 ± 30yrBP、河川2 (3F17区)の3層から出土した加工材(試料⑤: IAAA-72556)が1760 ± 30yrBP、河川2 (3G17区)の5層から出土した自然木(試料⑥: IAAA-72557)が3620 ± 30yrBPである(付表)。

暦年較正年代($1\sigma = 68.2\%$)は、試料①が390 ~ 440AD (36.7%)・480 ~ 540AD (31.5%)、試料②が245 ~ 335AD、試料③が610 ~ 655AD、試料④が460 ~ 480AD (6.1%)・530 ~ 600AD (62.1%)、試料⑤が235 ~ 265AD (20.8%)・275 ~ 330AD (47.4%)、試料⑥が2025 ~ 1935BCである(第14図)。試料の炭素含有率は60%前後と十分であり、化学処理及び測定内容にも問題が無いことから、妥当な年代と考えられる。

參考文獻

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37 (2) , 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43 (2A) , 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43 (2A) , 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058



第 14 圖 曆年校正結果

參考資料：曆年校正用年代

IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-72552	試料①	1620 ± 32
IAAA-72553	試料②	1744 ± 30
IAAA-72554	試料③	1416 ± 29
IAAA-72555	試料④	1521 ± 29
IAAA-72556	試料⑤	1756 ± 28
IAAA-72557	試料⑥	3617 ± 31

校正曲線と年代 Age (yrBP) と年代 (cal yrBP) の関係を示す。

5 ま と め

本遺跡は、平成18(2006)年度と平成19(2007)年度に本発掘調査を実施した。各年度で検出された遺構・遺物を概観し、遺跡の性格についてまとめてみたい。なお、各年度で検出された遺構番号を区別するために、便宜的にこの節では頭に「06」及び「07」を付した。

検出した遺構種別は各年度で大差は無く、ピット160基、土坑8基、溝状遺構15条、性格不明遺構36基、自然流路3条などがある。ピットが集中するのは3L～O・4Nグリッド付近で、検出標高は3.9～4.1mである。調査区内では最も高い標高を示す。このピットの大半は建物を構成するものと考えられるが、残念ながら構造等は明らかにできていない。このピット群は南西～北東側に延伸する様相を示しており、ここが居住域の一角であったものとする。ただし、この区域にも溝状遺構や性格不明遺構が認められることから、常時水に浸からない程に安定していた場所(高地)とは言い難い。

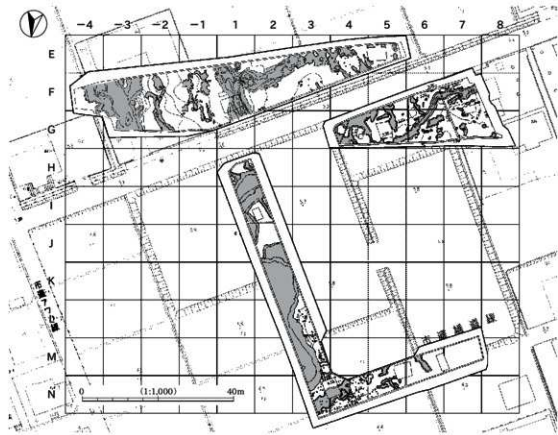
土坑・溝状遺構・性格不明遺構は、4～7・E～Gグリッドで多く検出されている。この区域での検出標高は3.8～3.9mで、前述の居住域よりわずかに標高は低い。溝状遺構や性格不明遺構の大半は、平面形が不整形で、深さ10cm以下と浅い。底面の覆土と地山は互いに巻き込むように混じっており、境は明瞭ではない。踏み荒らされた感であり、意図的な掘り込みではなく、自然形成の落ち込みの可能性もある。ただし、長軸は北西～南東方向でおおむね一致していることから、水流等で形成された可能性だけでなく、耕作等で形成された可能性も考えておく必要がある。これら遺構群の長軸とほぼ直交する長軸を持つ溝が、06SD2と07SD1である。特に07SD1は、07河川1と合流するまで直線的であり、合流付近で地形的に高所の南側へ折れ曲がっている。最大深度約30cmと決して深くはないが、緩傾斜地の水流を規制するには十分な深さと思われ、用水路的な性格が考えられる。またこの溝の近くで、田下駄の類と想定される部材が多く出土したことも、この区域が耕地であった可能性を否定するものではない。ピット群は古代～中世の所産と考えられるが、この遺構群は検出層位等から大半が古代の遺構と思われる。

調査区の東側(2・3グリッド列以東)では、規模が比較的大きい自然流路(06旧河道、07河川1、07河川2)が検出された。07河川1右岸(標高約4.0m)から07河川2左岸(標高約3.7m)に向かって地形は傾斜しており、調査区内では最も標高が低い区域である。古代に属する曲物は、この区域で最も多く出土している。07河川2の周辺では杭がまとまって検出され、3列の杭列が想定された。いずれも水流方向に対して直交方向に列をなすため、何らかの施設であった可能性が高い。これら3条の自然流路の中～下層から出土した遺物は、縄文時代～古代と時期幅が広く、地点的にも多少傾向は異なるが、おおむね古墳時代中期と奈良・平安時代(8～9世紀前半)にまとまりをもつ。自然流路は各時代の遺物とともに埋まっていき、中世の遺物を含む上層が堆積する頃にほぼ埋まり、湿地帯が形成されたと考えられる。また、自然流路からは木製品・自然木が多く出土した。形状から時期の特定はできないが、土器類の時期傾向と同様に、古墳時代中期と奈良・平安時代のものが大半と考える。木製品の加工材の形状は多種多様で、大きな板材に仕口の加工が施されるもの、矢板状のものなど、建築材も多く含まれている。06旧河道出土遺物は奈良時代、07河川2下層出土のものは古墳時代、中層出土のものが古代としてとらえられる。07河川1では加工材と共に、自然木の両端を削っただけのものも多く認められる。河川の規模から判断して、自然に流れ込んだとは思えない、長さ5mを超えるものもある。自然流路内で規格性がない木製品が集中する状況に対しては、上流からの流れ込み、近接地からの廃棄が容易に想像できるが、木製品製作素材を意図的

に集積した可能性もある。各年度で樹種同定を行った結果、平成18年度は60点のうち57点、平成19年度は50点のうち44点がスギであり、特定の樹種に偏る傾向が認められた。

本遺跡からは、I層(耕作土)出土遺物を除いて、縄文時代から江戸時代初期(17世紀初頭)までの遺物が出土した。基本層序のII層が室町時代～江戸時代初期の遺物包含層、II'層が古代の遺物包含層、III層が古墳時代～古代の遺物包含層である。前述のように、古墳時代中期と奈良・平安時代(8～9世紀前半)にまとまりを持つ。古墳時代中期は、[川村2000]編年によれば、平成18年度が9～11段階、平成19年度はやや古く8・9段階に主体を持つものとする。07河川2ではこの時期の遺物(前期・後期も少量含む)とともに、横刃形石器、玉類なども出土した。横刃形石器は調査区全域で出土しているが、出土状況・層位を考慮すれば、古墳時代に属するものと思われる。玉類の主体となるのは滑石製の白玉で、緑色凝灰岩製の管玉が少量ある。古代の遺物は、[春日1999]編年によれば平成18年度がⅢ・Ⅳ期、平成19年度はⅣ・Ⅴ期に主体をもつが、地点間で大きな時期差は認められない。形代類・曲物・農具類などの木製品は、検出層位から当該期に位置付けられる。また「出雲」と墨書された木簡が各年度1点ずつ出土しており、当地域と出雲地方との密接な関係(交流)を示唆する資料として注目される。中世の遺物は細片が多く、青磁・白磁・青花・珠洲焼・中世土師器・瀬戸美濃焼などが出土している。12～13世紀のものは極めて少なく、大半は14～16世紀のものである。銭貨は完形品が比較的多く出土している。当時低湿地化していた場所ではあるが、何らかの祭祀行為に伴う遺物の可能性がある。

今回の調査では、居住域の内容を明確にすることはできなかったが、古代や古墳時代における低地及び河川の利用方法の一端をうかがうことができた。特に自然流路から出土した建築材・加工材・自然木の存在は、本遺跡の近隣で木材加工が行われていた可能性を想定できる。



第15図 前波南遺跡の遺構分布図

第IV章 伝極楽寺跡

1 調査の概要

A グリッドの設定 (図版25)

本発掘調査範囲は、調査前から石垣及び大小複数の方形区画が遺存しており、中世「極楽寺」の推定地とされていた。伝極楽寺の関連施設も、これらの方形区画や石垣に伴い検出されることが想定された。そのため、グリッドは、最も明瞭で最大規模の平坦面を構築している石垣及び方形区画に沿うように設定した。すなわち、方形区画の西面と北面を区画する石垣の上面石列におおむね平行になるようにし、かつ、石垣を保護するためにそれぞれの石列から1m内側をグリッドラインが通るように主軸を設定した。この2本の主軸の交点(8G杭)を基点とし、調査範囲全域を覆うようにグリッドを設定した。そのため、南北方向の主軸は真北から $13^{\circ}58'53''$ 西偏している。

グリッドは大小2種あり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25等分したものである。大グリッドの呼称は、東西方向を算用数字、南北方向をアルファベットとし、両者の組合せで表示した。小グリッドは1～25の算用数字で表し、南東隅を1、南西隅を5、北東隅を21、北西隅を25となるように付した。これらを組み合わせて「10E8」などと呼称した。今回の基点となる杭の座標値は、8G杭で $X=116897.867$ 、 $Y=-52632.657$ を示す。なお、試掘調査が実施されなかった東部に遺跡が延伸する可能性も考慮し、グリッド番号を付した。

B 基本層序 (第16図)

本遺跡は、南側にそびえる丘陵の裾部に展開する。そのため、標高は基本的に調査区の北方が低く、南方が高い。その中でも、4・5Bグリッド付近と11Cグリッド付近は沢状の落ち込みを呈する。また、本遺跡の東方と西方も標高が高い。遺構は谷部の比較的平坦な場所を選んで構築されている。地山はⅦ～Ⅷ層である。

遺物包含層及び遺構確認面はそれぞれ2面ある。

下層はⅤ層を遺物包含層とし、Ⅵ～Ⅷ層上面で遺構確認を行った。基本的にはⅦa層を遺構確認面としていたが、本遺跡は傾斜地であるため、遺構が構築される層は一定していない。Ⅴ層は5～7グリッド列の標高17.5～18.0m程の平坦面に分布し、遺構の分布とも一致している。なお、8・9Eグリッド付近に分布する遺構はⅦ層上面での検出であり、同時期の遺構と考える。調査区西寄りには沢状の落ち込みが見られた。

上層はⅢ層を遺物包含層とし、Ⅳ層上面で遺構確認を行った。Ⅲ層は8～11グリッド列の標高14.5m付近の比較的低位な平坦面に分布する。Ⅲ層中及びⅣ層で検出した遺構からは、14世紀中頃～16世紀の遺物が出土した。

I層 表土 黒褐色土、耕作土。

Ⅱ層 近世以降の造成土

Ⅱa層 橙色土 近現代の遺物を含む。4～7D以南の小方形区画を構築する。

II b層	褐灰色粘質シルト	近現代の遺物を含む。4～7D以南の小方形区画を構築する。
II c層	灰黄褐色	方形区画の基盤層。
II d層	黒褐色土	方形区画の基盤層。5・6G付近の低地のみ分布する。方形区画造成の際に本層を低地に造成したのち、II c層を造成したものと考えられる。
III層	にぶい黄褐色土	遺物包含層（上層）。主に拳大までの円礫を多く含む。14世紀後半から16世紀の遺物を内包する。
IV層	明黄褐色砂礫層	間層。無遺物層。VII a層と比較するとやや色調が暗い。上層の遺構確認面である。
V層	黒褐色土	遺物包含層（下層）。主に12世紀後半から14世紀第1四半紀頃までの遺物を内包する。
VI層	漸移層	
VII層	地山	
VII a層	明黄褐色礫層	
VII b層	明白色シルト	
VIII層	礫層	地山

2 遺 構

A 遺構の概要

遺構確認面は3面ある。

8グリッド列から西方の遺構確認面は2面あり、上層はIII層を遺物包含層とし、IV層を遺構確認面とする。遺物包含層中と遺構内から、14世紀後半から16世紀の遺物が出土している。上層は後述する沢が埋没した後に構築される。8・9Eグリッドでは、IV層を除去した後も遺構群（下層）が検出されている。III層形成前に削平されたものに対応する遺物包含層は検出されなかった。下層から検出された遺構をI期、上層をII期と呼称する。

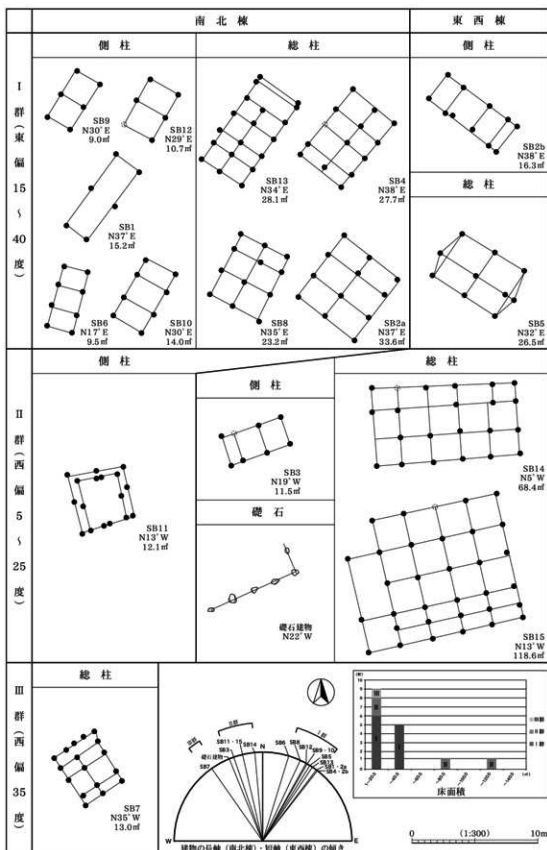
8グリッド列から東方も2面である。8グリッド列以東は方形に区画されており、8グリッド列付近の南北方向に構築された石垣で区画される。この時期の遺構は一部遺存しており、調査前から認識されていた。造成土中から明確な遺構は検出されていないものの、遺構確認面は造成土（II層）ということになる。この石垣と方形区画は江戸時代後期の造成で、III期と呼称する。これらの石垣と造成土（II層）を除去すると、Eグリッド列以南に遺構群が密集する。これらは、V層を遺物包含層とし、VI層以下を遺構確認面とする。一部、III期の造成で破壊されている。

B I 期

1) 掘立柱建物（図版27～30・32～39・66～68）

ビットは2か所で集中域が認められる。①8・9Eグリッド、②5～7C～Eグリッドである。集中域はどちらも、地形が比較的傾斜の緩い場所に位置する。

ビットの規則性から掘立柱建物と認定した。建物は16棟確認でき、その構造及び規模は様々である。建物は、その柱列の長軸がおおよそ南北に長い構造（南北棟）と、東西に長い構造（東西棟）の2種類に大



第17図 建物分類表

別で、それぞれに建物の建築方法の違いにより、側柱建物・総柱建物・礎石建物に分類される。南北棟と東西棟の建物は、いずれも主たる柱列の長軸方向と短軸方向が直交する構造をなすことから、南北棟の長軸方向と東西棟の短軸方向は同じ方向を示すことになる。南北棟の短軸方向と東西棟の長軸方向も同様である。そこで、認定した建物16棟について、南北棟の長軸方向及び東西棟の短軸方向の真北（世界測地系Ⅶを使用）に対する傾きを測定したところ、規則性が認められた（第17図）。

I群とした建物は、軸方向が $15 \sim 40^\circ$ 東偏するものである。面積は $9 \sim 34\text{m}^2$ と大規模な建物はない。

II群とした建物は、軸方向が $5 \sim 25^\circ$ 西偏するものである。面積が $11 \sim 13\text{m}^2$ と $68 \sim 119\text{m}^2$ と極端に二分される。大型の総柱建物と三面前の建物など、特殊な建物が見られる。

III群とした建物は、軸方向が 35° 西偏するものである。1棟しか認識できなかった。面積が 13m^2 とI群の建物に似る。

掘立柱建物の柱穴内からは、12～14世紀第I四半期の珠洲焼、土師器皿などが少ないながらも出土していることから、これらの建物は中世前期に位置付けられる。

2) 礎石建物 (図版28・30)

礎石建物は1棟のみの検出である。検出した礎は上面が比較的平坦で、大きさがほぼ同様であり、等間隔に並んでいることから建物の礎石と考えた。礎石は5つのみ、8・9Eグリッドで検出した。その内4つは等間隔に、軸方向が、東西に対し 22° 北偏して一列に並ぶ。その石列の東端から更に等間隔東に離れた地点は、地山が皿状に落ち込んでおり、もう一つ礎石が存在していた可能性が高い。また、石列からこの落ち込みの中心を結んだラインから直角に北側へ折れ曲がった場所には、更に同様な礎が認められ、これらを含めて礎石建物とした。これらの周辺を慎重に精査したが、礎石の可能性のある礎及びその痕跡を認めることはできなかった。したがって、厳密には建物と確定できないものの、ここでは可能性を提示しておきたい。なお、礎石を取り除き後、その下を確認したが、掘り込みや遺物の出土などは見られなかった。

この礎石建物は東西軸が東に対し 22° 北偏し、南北軸が北に対し 22° 西偏することから、掘立柱建物II群に相当する可能性が高い。

なお、礎石はI期の遺構確認面であるVIIa層に設置されており、IV層上面では検出できず、掘り込みなども確認できなかった。したがって、II期まで下がるものではない。

3) 櫓 (図版40・66)

5G・6Gグリッドでピット8基が等間隔に一列に並んで検出されたことから、櫓と認定した。この櫓を構成するP35とP36からは、珠洲焼の甕胴部片が出土している。ピットの覆土はI期の建物を構成する柱穴の覆土と共通することから、本遺構をI期に含めることとした。軸方向は東西方向に対し 19° 北偏し、掘立柱建物II群に相当する。本遺構から以北の地山面の落ち込みは昨今の掘削により失われたものであり、本遺構が掘立柱建物の一部である可能性も否定できないが、ここでは、櫓として報告しておく。本遺構が櫓であった場合は、本遺跡の北辺を区切る境界櫓である可能性がある。

本遺構の位置する5G・6Gグリッドは、本来的に地山面が低く落ち込んでいる場所で、近世に造成された際にも破壊を免れた可能性が高い。

4) 溝状・不明遺構 (図版32・36・38・39・66)

SD110は溝状の遺構で、遺物は出土していない。長軸方向は掘立柱建物I群に近似し、関連があるのかもしれない。本遺構の上位には焼土が認められた。

SX510は平面円形状の遺構であるが、南方から延びてくる沢と覆土が同一であることから、沢の北端と考えられる。珠洲焼が出土した。本遺跡からは井戸などの集水施設が検出されていないことから、沢の水を引き込んで、利用していたものと考えられる。

SX516は不定形の落ち込みである。珠洲焼が出土し、掘立柱建物を構成するピットに切られる。

5) 沢状落ち込み (図版27・31・68)

調査区西端を南西方向から西にカーブしながら北に落ち込んでいく。幅は18m、深さ2.2mを測る。沢の東側カーブ付近では平坦面が構築され、掘立柱建物群が認められる。沢の西側と南側は、急激に標高が高くなる。沢は17層からなる。沢肩部の11層中からは白磁・青磁・珠洲焼などが出土しているものの、中央の深い部分からは出土していない。沢の中は平行かややレンズ状に砂礫層が幾重にもわたり堆積し、度重なる土石流で埋没したものとする。埋没後の平坦面には、II期の遺構が構築されている。

C II 期

1) 溝状遺構 (図版41・42・69)

SD5は南北に長い。11D21グリッド付近では上面に拳大の礫が多量に検出された。覆土内からは珠洲焼片口跡と瓦器が出土している。SD7は長軸をやや東寄りにカーブさせる。SD6は東西に長いプランで、途中二股に分岐するものの、暫く平行したのち、3mほど離れた地点で再び合流する。

SD5・6・7は共に、掘り込みが浅く、平面プランも一定していない。よって、人工的な溝とは考え難く、自然地形の可能性もある。

2) 土 坑 (図版41・42・69)

SK4は南北2.2m、東西1.0mの不定形の遺構である。深さは0.58mである。覆土内からSD5出土品とは別個体の瓦器が出土している。SK8は平面円形の遺構であるが、上面には拳大ほどの円礫が集積していた。それらを取り除いて完掘してみたが、掘り込みは12cmと浅く、遺物も出土しなかった。

3) ピ ッ ト (図版41・42・69・70)

ピットは21基検出しているが、覆土は暗い褐色系の色調を呈するなど共通性が認められるものの、それぞれの配置・規模・平面形などに規則性は認められない。ただし、P23・24・33は直径が80cm程度の楕円形を呈し、人頭大ほどの平坦な礫が積み重なって出土している点が共通し、特筆される。

D III 期

III期の遺構は石垣 (図版43・65・71・72)のみである。石垣は幅26.4m、高さ2.2mを測る。石垣の下半は比較的大きな石を丁寧に積み上げているものの、上半は大きさも揃わず、隙間も空く。また、上面観も一列に並ばず、概して丁寧な造りとはいえない。

石垣の裏込め土は大きく3層に分層でき、その検討から石垣の構築方法と年代が判明した。

地山はⅦa層で本遺跡の基盤層である。下層はオリーブ色を基調とする細砂などの締まりの弱い層で、地山の傾斜に沿って堆積していることから、石垣構築前の自然堆積層と考えられる。本来は、自然堆積層で、人為的な堆積ではないので、裏込め土とはいえないが、石垣の構築方法を知る上で重要と判断し、下層として分類し、記載することにした。本層の最下層で地山直上から、18世紀前半の肥前系磁器が出土しており、石垣の上限年代が与えられる。中層は粗砂を基調とする層で、やや締まりが強い。自然堆積層の上位を覆い、一旦整地したものと考えられる。この段階では、石垣に向かい標高が下がるように傾斜をつけている。裏込めと合わせて石垣を積んでいったものと考えられるが、中層から下位には大型の石積みを行っている。上層は黒褐色と黄褐色系の土を交互に、石垣から遠いところから埋め立てている。埋土は硬く締まっている。あわせて石積みも行っているが、大きさは中層以下より小さくなり、揃っていない。形状も凹凸の顕著なものがある。また、隙間も目立つ。このようにして石垣を積んだのち、方形区画の基盤層であるⅡc層を造成したものと考えられる。なお、石垣の下位には下層に近似した土質を有するものの、非常に固く締まった層が検出された。石垣の重量で引き締まった可能性もあるが、土層断面が分断されていることから、石垣を積み上げる予定地にあらかじめ叩き締めを行ったか、あるいは土を入れ替えたものと判断される。

なお、純粋な石垣裏込め土である中層・上層からは、近世後期の遺物とともに中世前半の遺物も出土している。上層の埋土のなかには中世前期の遺物包含層であるⅤ層（黒褐色土）に近似した層もあり、近世後期の段階において、Ⅴ層を含む土砂を運搬して裏込め土に利用したものと考えられる。

石垣は方形区画の西面と北面西半を区画しており、方形区画と石垣は有機的な関係にあると考えられる。また、方形区画の基盤層であるⅡc層中からも、数は少ないものの近世後期の遺物群が出土しており、矛盾はない。

3 遺 物

中世以降の土器・陶磁器類がほとんどで、古代・縄文時代の遺物が少量出土した。中世以降の各遺物の分類・編年及び年代観については、青磁は〔上田1982〕、白磁は〔森田1982〕及び15世紀の青磁・白磁については〔水澤2004〕、青花は〔小野1982〕、瀬戸・美濃焼は〔藤澤1993・1995〕、珠洲焼は〔吉岡1994〕、越前焼は〔田中・木村2005〕、越中瀬戸焼は〔宮田1997〕、肥前系陶器は〔大橋1993〕、中世土師器は〔水澤2005〕の各論考を参考にした。また、人名の後に付すべき「編年」・「分類」などの語は省略して記述する場合がある。

A I 期 (図版44・45・73-1～50)

1～22は遺構内及び沢内からの出土である。遺物が出土した遺構は、掘立柱建物の柱穴及びピットと不明遺構であるが、その量は少ない。1～4は土師器皿である。1がロクロ成形で、2～4は手づくね成形である。1はSB6を構成するP211から、2はP501から、3はSB9を構成するP233から、4はP521からの出土である。4は器壁が厚く大型の法量であり、13世紀末～14世紀初頭に比定できる。完形品ではないものの、遺存率が高く、伏せた状態で出土した。5～10は珠洲焼である。5はP511からの出土で、吉岡1期の片口鉢である。6～8はタタキ成形された甕の胴部片で、6がP503、7がP512、8がP278

から出土した。9はP524から出土した珠洲焼で、吉岡Ⅰ期の壺である。後述する10と46とは接合関係にないものの、類似した胎土と器形である。10はP501からの出土であり、2と共伴関係にある。11はP506から出土したものであるが、粘土紐巻き上げ痕を調整せず、器壁が被熱してもろいことから、製塩土器と考えられる。新潟県では、中世段階での土器を用いての製塩は確認されておらず、古代の所産である可能性が高い。製塩土器片はほかに5D・6Dグリッド付近で11片出土している。それぞれ接合しないが、同一個体の可能性がある。12はP504から出土したもので、小泊窯産須恵器の杯の口縁部片である。春日編年V～VI期〔春日1999〕、9世紀頃の所産か。13と14はSX510からの出土である。共に珠洲焼の甕である。図化していないが、SX510からはほかに珠洲焼タタキ甕が1片出土している。15と16はSX516からの出土である。15は輪台技法の土師器壺の底部で、調整方法などから古墳時代前期である可能性がある。本遺跡からはほかに古墳時代に属する遺物は出土していないことから紛れ込みと考える。16は珠洲焼のタタキ成形による甕の底部である。SX516からはほかに13片の珠洲焼タタキ甕が出土している。17～22は調査区西端に位置する沢の肩部（11層）から出土したもので、17・18は口縁玉縁の白磁碗である。19は内面に柳描文を施す青磁碗である。20～22は珠洲焼で、20はタタキ成形の甕、21と22は片口鉢である。21は吉岡Ⅲ期～ⅣⅠ期とやや新相である。22は片口鉢の底部である。

よって、Ⅰ期の遺構内からの出土遺物は、古代に属する11・12及び混入品である15を除き、12世紀～14世紀初頭頃に取まる。

23～50は遺構外からの出土である。基本的には上記遺構の直上のV層中からの出土であるが、必要に応じて、V層から上位の層の出土品も加えて詳述する。

23～33は舶載陶磁である。23～29は白磁で、23～27が碗、28が皿、29が袋物である。いずれも〔山本1995〕編年のC期に属し、11世紀後半～12世紀前半の所産である。30～33は龍泉窯系青磁の碗である。30は内面に劃花文を描く。31は外面に蓮弁文を片刃彫りする。30と31は12世紀～13世紀に属するが、32は無文で玉縁口縁となる碗、33は厚手の碗底部であり、共に14世紀とやや新相になる。

34は瀬戸美濃焼の碗若しくは皿の底部であるが、外面に灰軸を掛け、内面は無軸である。年代不明。古瀬戸様式か。なお本遺跡からは、瀬戸美濃焼はほとんど出土していない。

35～39は土師器皿である。35は大型の碗の可能性ある。35～37はロク口成形、38・39は手づくね成形である。38の胴部下半には指頭圧痕が認められる。35～37は12世紀、38・39は13～14世紀初頭に位置付けられる。

40～50は珠洲焼である。40～45は片口鉢である。卸目がないタイプや、波状の卸目、印花を有するタイプなどが見られ、吉岡Ⅰ～Ⅱ期に位置付けられる。46～49は壺で、46は吉岡Ⅰ期、47～49は波状文を有し、47には耳が貼り付けられており、吉岡Ⅱ～Ⅲ期に比定される。50はタタキ成形の甕である。遺構外出土遺物と遺構内出土遺物に年代的な差違はない。

B II 期 (図版45・46・73-51～71)

51～54は遺構内からの出土である。Ⅱ期の遺構はⅠ期の沢が埋没した後に構築されたもので、検出された範囲はグリッド8～12列に限定される。51～53はSD5からの出土である。51は瓦器の浅鉢である。外面の胴部上半に二条の突帯を巡らせ、その中をスタンプによる雷文を連続的に施す。また、胴部と底部境に一条の突帯を巡らす。内面は布状の工具でナデて調整している。水滸分類の浅鉢Ⅲ類に比定され、14世紀末～16世紀の所産である。52は珠洲焼の片口鉢胴部である。53は玉髄製の不定形石器で、火打

石の可能性ある。54はSK4から出土したもので、瓦器の風炉である。遺存部は球状の胴部をなし、胴部に円形若しくは雲形の窓を開ける。最大径のやや上方には二条の突帯を巡らせ、その中に円錐状の突起及び菱形文と菊花のスタンプ文を配する。内面は51と同様に布状の工具でナデて調整していると判断されるものの、51ほど明瞭ではない。また、遺存部の上端は丸まり、鋭い破断面ではない。15～16世紀の所産である。

55～71は遺構外からの出土である。基本的には上記遺構の直上のⅢ層中からの出土である。Ⅲ層はⅡ期の遺構が構築されたグリッド8～12列にのみ存在する層で、Ⅰ期の包含層であるⅤ層とは間層(Ⅳ層)を積み堆積する。ここでは必要に応じ、Ⅱb層(近世造成土)あるいはⅠ層(表土)からの出土品も加えて詳述する。

55は瀬戸美濃焼の平碗である。古瀬戸中期様式Ⅳ期に比定され、14世紀中頃の所産である。

56は青花皿で、小野B1群に分類される。57は青磁の稜花皿である。共に15世紀後半～16世紀前半の所産である。

58～61は土師器皿である。58は手づくね成形、59～61はロクロ成形である。58の胴部下半には指頭圧痕が、内面はナデ痕が見られる。59の内外面にはスズとタールが付着し、灯明皿としての使用が想定される。14世紀後半～15世紀に比定されようか。

62～69は珠洲焼である。62～68は片口鉢で、底部片である65と66を除いて、口縁部片である。小片のため、年代の特定が困難であるが、吉岡Ⅱ～Ⅳ期に比定されようか。69はタタキ成形される裏で吉岡Ⅲ期に比定される。

70と71は越前焼の播鉢である。口縁部内面の下位に太い沈線が走り、16世紀前半に比定される。

遺構外から出土した遺物は、14世紀後半から16世紀前半頃を中心とし、遺構内から出土した遺物群とも矛盾はない。また、遺構内外から出土したⅡ期の遺物群は、Ⅰ期とは重複しない。ただし、15世紀後半～16世紀代の手づくね土師器皿が不在で、珠洲焼に当該期の製品が無く、やや古手のタイプで構成されている点の特筆される。

C Ⅲ 期 (図版46・47・73・74-72～102)

本遺跡は、江戸時代後期に方形区画が造成されたのち、大きな土地改変を経ずして、現在に至るのであるが、ここでは、方形区画に伴って築造された石垣の裏込め土及び基盤層(Ⅱc層)から出土した遺物と、石垣と南側丘陵の斜面の接合部(8D16・21グリッド)付近から出土した遺物群を報告する。

72～86は石垣の裏込め土及び基盤層からの出土である。上・中層は石垣の築造に伴う裏込め土である。下層は石垣を築造する以前から存在しており、本層を基盤として石垣及び裏込め土(上・中層)を積んでいく。つまり、下層の出土遺物の年代が石垣の構築年代の上限となる。

72～82は石垣裏込め土の上層からの出土である。72～74は肥前系陶器である。72は灰軸の碗、73は見込みに砂目が認められる灰軸の皿で、大橋Ⅱ期に位置付けられる。74は口縁部に鉄軸を施す播鉢で、17世紀代の所産である。75・76は玉縁口縁となる白磁碗、77と78は龍泉窯系蓮弁文碗である。79と80は土師器の皿である。79はロクロ成形、80は手づくね成形である。79は口縁部の遺存率が低く、図化した口縁部が真に口唇部であるかどうか断定しかね、本来はもう少し器高が高い可能性もある。81は珠洲焼の片口鉢である。82は縄文時代の磨製石斧であるが、表面には、製作時の擦痕とは別の、金属で擦ったような深く鋭い凹みが認められる。また、一部煤けているなど、本来の磨製石斧の用途では発生し

ない使用痕が随所に認められることから、本品は中世以降の段階において転用されたものと判断される。

75～81は中世前期に比定されるものである。このことは、これらの遺物を供給する堆積土が石垣から上段のI期の遺物包含層（V層）を含んでいる可能性を示唆している。

83と84は石垣裏込め土の中層からの出土である。83はロクロ成形の土師器皿、84は珠洲焼のタタキ成形の甕である。共に中世に属するが、遺存率が悪いので、詳細な年代は不明である。中層は細片が多く、上層に比べると出土量が少ないので、2点のみしか図化できなかった。出土品の中には近世後期の陶磁器もあり、上層と状況は変わらない。

85と86は石垣裏込め下層からの出土である。85は肥前系磁器の染付碗で、内面に一重網目文、外面に二重網目文を配する。大橋IV期前半に比定され、18世紀前半の所産である。86は京・信楽系陶器の灰軸平碗である。高台内には判読不明の墨痕が認められる。〔畑中2007〕編年4期に比定され、18世紀後半から19世紀前半の所産である。特に古段階（18世紀第3四半期）である勅旨53-1号窯の製品に似る。したがって、石垣の築造は18世紀後半以降と判断される。

87～102は8D16グリッド付近で集中して出土した遺物群である。比較的遺存率の良いまとまりで、石垣と南接する丘陵斜面に設置された敷石の上部から出土したものである。石垣が構築された時代の生活道具であった可能性があるので報告する。87～98は肥前系磁器である。87は腰折れの青磁染付碗である。88は波佐見窯の製品でくわんか手の碗である。89は外面に丸文を配する猪口、90・92・93は小丸碗、91は広東碗、94は端反碗である。95は白磁の小碗で口縁端部は無軸である。96は端反碗の蓋、97は七寸皿であるが、蛇ノ目凹型高台で高台裏には窯道具の焙着が見られる。98は外面に八卦文を配する小杯であるが、白色の緻密な胎土を有し、京焼である可能性もある。99～102は陶器である。100が萩焼であるほかは産地不明である。新潟県内では19世紀に入ると産地不明の陶器類が増加する。99は徳利である。外面には黄白色を呈した白釉を施すが、わずかに盛り上がるか所がところどころに見られ、色絵が施されていた可能性もある。100はピラ掛けの碗である。鉄軸と白濁軸を交互に斜位に掛ける。101と102は行平鉢である。どちらも蓋が対になる。101の把手の上位には「壽」字を意匠化した文様が陽刻される。102の把手の上位にも文様が掘り込まれているが、意匠不明である。102の露胎部にはススが付着している。

いずれも、18世紀後半～19世紀中頃の製品であり、石垣の基盤層（裏込め土の下層）から出土した遺物群と齟齬は生じていない。

D その他の遺物（図版47・74—103～113）

遺構外から出土し、I・II・III期のいずれにも属しない、若しくは所属年代の不明な遺物を一括した。

103～106はI層（表土）から出土したもので、16世紀末～17世紀前半の遺物群である。103・104は肥前系陶器で見込みに胎土目の痕跡を残す皿である。大橋I期に比定される。105は越中瀬戸の皿である。鉄軸が施される。106は瀬戸美濃焼の絵志野皿である。これらは、III期まで伝世して使用された可能性も否定できないが、17世紀中頃～後半の遺物がほとんど見られないことを助案すると、該地ないしは近隣でこの時期に小規模の活動がなされた結果と理解したい。

107は方形区画の造成土（IIc層）から出土した須恵器の有台杯である。生産窯は不明である。古代の遺物はP504とP506から製塩土器と須恵器の杯口縁部が出土しているものの、中世段階でのビットへの混入の可能性が高く、明確な古代に属する遺構や包含層は確認できていない。よって、本品も原位置を留

めているものではなく、混入と判断される。しかし、本調査区の近隣に古代の遺跡が存在している可能性を否定するものではないので、掲載することにした。

108と109は、管状土錘である。本遺跡からは、図化した2点以外には出土していない。前波南遺跡出土（図版13・56-12）と同様に、法量から「太型」に分類される。器表には、手づくね成形された際の指押さえの痕が明瞭に残る。108が両端部に明瞭な面を作出するのに対し、109は明確ではない。ともに、硬質な焼き上がりである。ただし、胎土には相違点が多く、同じ窯の製品とは考えられない。なお、2点とも、I層（表土）からの出土であり、所属年代は不明といわざるを得ない。

110～113は年代不明の石製品である。110～112は砥石で、すべて凝灰岩製である。110と112はきめの細かい石材で、111はやや粗い。110と111の図の上端面と112の正面には擦痕とは異なる粗い凹凸が認められ、砥石を切り出す際の鋸痕と考えられる。113は、五輪塔の火輪である。表土直下のⅡb層（近世造成土中）からの出土で、周辺にほかに組み合う製品もないことから、原位置を留めていないものと考えられる。角閃石安山岩製で、上面には空風輪を組み合わせるための方形の楕穴が穿たれている。

4 ま と め

A 出土した土器・陶磁器からみた遺跡の消長

本遺跡でもっとも古い遺物は縄文時代の磨製石斧であるが、器表に金属によると考えられる鋭い擦痕が認められ、調査区内からは縄文土器などの縄文時代の遺物は出土していない。したがって後世における転用品と考えられる。続いて、古代の須恵器（9世紀）と製塩土器が数点出土しており、一部は遺構内（ピット）からの出土であるが、その数量は少ない。該期の遺構も確認できないことから、これらも混入品と判断される。

遺物がまとめて出土ようになるのは12世紀からで、白磁やロクロ成形の土師器碗・皿、珠洲焼片口鉢などが見られる。それらは、V層（I期の遺物包含層）及びV層以下の遺構内からの出土で、14世紀第1四半期頃までの遺物が認められる。その構成は、供膳具に青磁と白磁、瀬戸美濃焼、土師器を使用し、調理具（播鉢類）と貯蔵具に珠洲焼を使用している。新潟県内の該期の遺跡では、極めて一般的な組み合わせである。I期は本遺跡の最盛期であり、遺構の数も多い。なお、V層中からは肥前系磁器が2点出土しているが、混入ないしはサンプリングエラーの可能性もある。

I期が14世紀第1四半期で終焉を迎えた後、埋没した沢の上面にⅡ期の遺構が構築される。Ⅱ期の遺構内及びその遺物包含層（Ⅲ層）中からは、14世紀後半～16世紀の遺物が出土している。ただし、その数は多くはない。供膳具には前代に見られた青磁・白磁、瀬戸美濃焼、土師器のほか青花がその組成に加わる。瀬戸美濃焼では新たに天目碗が登場する。調理具（播鉢類）と貯蔵具にはやはり前代に引き続き珠洲焼を使用している。また、瓦器が少量ながら搬入されている。新潟県においては、越前焼は15世紀後半～17世紀初頭にかけて珠洲焼に取って代わるように大量に流通し始める。本遺跡からは、表土中から播鉢が出土している。また、Ⅲ層中からは肥前系陶器の甕が1点出土しているが、近世に属する遺物がほかに出土していないことから混入と考えるべきであろう。

その後、近世造成土や表土中から16世紀末～17世紀前半にかけての遺物が若干量出土しているものの、まとまりを欠く。後述するⅢ期における伝世品である可能性もあるが、本遺跡では17世紀後半から18世紀初頭の遺物がほとんど出土していないことを勘案すると、調査区内からは遺構が検出されてはい

ないものの、該期に調査区内ないしは近隣で何らかの小規模な活動がなされていたと考えておきたい。

次に、遺物のまとまりが認められるのは、18世紀中頃に至ってからで、石垣及び方形区画から出土している。石垣裏込め土や方形区画基盤層(Ⅱc層)からは、中世の遺物と混じって該期の遺物が出土する。Ⅱd層はグリッド5G・6G付近のⅡc層の下位に分布する層であるが、色調は黒褐色を呈し、Ⅴ層に近似する。出土遺物も近世後半の遺物に混じって、中世前半の遺物が出土している。このことは、Ⅴ層を基層に用いて近世段階において造成を行ったことを示している。Ⅴ層の混入が少ないⅡc層より、大半をⅤ層で構成されるⅡd層に中世の遺物の比率が多いことは、矛盾のない結果といえる。また、石垣の南端付近の敷石内から、18世紀後半から19世紀前半の比較的遺存率の高い陶磁器がまとまって出土した。遺構内出土ではないものの、該期の生活様相を示す一資料となろう。そのほかは、石垣内出土の一部の遺物を除き、細片ではあるが一定量の出土を見ていることから、何らかの生活が営まれていたと判断されるものの、調査区内を居住スペースとして使用したとは考え難い。

その後は、現代に至るまで畑地として使用されていたようで、表土は耕作土に覆われていた。現代の畝の傍らには19世紀代の肥前系陶器の甕が正位に埋設されており、水澆として使用されていたものと考え

時期	分類	器種	供膳具				貯蔵具			その他	不明	合計	
			瓦	陶	磁	漆	瓦	漆	陶				
中世	前期	青花										0	
		青磁	11	2								13	
		白磁	5	9								14	
		瀬戸 瓦澆	1	1								2	
		陶器					14	R T	8 209				51
	後期	越前										0	
		不明		2					2			0	
		瓦器										0	
		土器	2	R T	17							18	
		土器										35	
近世	前期	肥前								1	1	2	
		瀬戸 瓦澆										0	
		不明										0	
		肥前										0	
		越中 瀬戸										0	
	後期	京 瓦澆										0	
		不明										0	
		合	0	19	29	0	0	14	29	1	0	21	119

【Ⅴ層】

時期	分類	器種	供膳具				貯蔵具			その他	不明	合計	
			瓦	陶	磁	漆	瓦	漆	陶				
中世	前期	青花										0	
		青磁		3								3	
		白磁										0	
		瀬戸 瓦澆	1									1	
		陶器							1	R T	0 3		4
	後期	越前										0	
		不明										0	
		瓦器										0	
		土器										0	
		土器			R T	2						1	5
近世	前期	肥前	11	3	1						3	3	
		瀬戸 瓦澆		1								1	
		不明										4	
		肥前		1	2	1						2	
		越中 瀬戸									1	1	
	後期	京 瓦澆		1								1	
		不明										0	
		合	1	16	4	1	1	1	9		3	0	28

【Ⅱc層】

時期	分類	器種	供膳具				貯蔵具			その他	不明	合計	
			瓦	陶	磁	漆	瓦	漆	陶				
中世	前期	青花	1									1	
		青磁		1								1	
		白磁		1								1	
		瀬戸 瓦澆	2	1								3	
		陶器					6	R T	0 4				10
	後期	越前										0	
		不明										0	
		瓦器									2	2	
		土器										0	
		土器			R T	1						9	
近世	前期	肥前										0	
		瀬戸 瓦澆										0	
		不明										0	
		肥前					1					1	
		越中 瀬戸										0	
	後期	京 瓦澆										0	
		不明										0	
		合	2	2	11	0	0	6	5	0	2	0	28

【Ⅱb層】

時期	分類	器種	供膳具				貯蔵具			その他	不明	合計	
			瓦	陶	磁	漆	瓦	漆	陶				
中世	前期	青花										0	
		青磁										0	
		白磁		3	2							5	
		瀬戸 瓦澆										0	
		陶器								R T	2 4		6
	後期	越前										0	
		不明										0	
		瓦器										0	
		土器										0	
		土器										5	
近世	前期	肥前	1	1								2	
		瀬戸 瓦澆										0	
		不明										0	
		肥前					2					2	
		越中 瀬戸										0	
	後期	京 瓦澆										1	
		不明										4	
		合	0	4	11	0	2	0	6	0	0	5	31

【Ⅱd層】

第3表 伝極楽寺跡出土遺物一覧

られる。

なお、全時期を通して新潟県内の一般的な陶磁器組成と同じであり、「極楽寺」の伝承を裏付けるような、宗教的な遺物や高級品の類は出土しなかった。

B 伝極楽寺跡における土地利用の変遷

I 期（12世紀～14世紀初頭）

本遺跡で最も多くの遺構が認められる時期である。丘陵の比較的緩やかな面を利用して掘立柱建物が建てられる。遺構が構築される面は、標高14.5～15.0mと17.5m付近の2面がある。両面の間は自然の崖で分断される。建物は掘立柱建物が16棟、礎石建物の可能性があるものが1棟あり、軸方向の傾きから3群に分類される。同群内でもプランが重複するものがあることから、同群といえどもすべて同時に存在していたわけではない。礎石建物については、一般的な集落というよりも、寺院などに採用される建築技法である。該地が「極楽寺」の伝承地であることも考え合わせると、小規模な寺院であった可能性も残される。しかし礎石と考えられる遺存している平礎礫が少なく、建物の規模及び構造が特定できないこと、そして、出土遺物の様相からは、積極的に寺院などの宗教施設が存在していたとは断定できないことから、ここでは、その可能性を提示するに留めておきたい。居住域内には井戸などの集水施設は検出されなかったが、調査区南東隅の沢からの湧水を利用していたものと考えられる。調査区の西端には幅18mの沢が開口しており、居住域の西端を区画していたものと考えられる。出土遺物の量及び質は新潟県内の該期の遺跡に共通しており、一般的な集落と判断される。

II 期（14世紀後半～16世紀）

建物が検出されず、自然に形成された溝状遺構及び小規模の土坑、規則性のないピットが散見される。遺構を検出したエリアは、調査範囲の西半の平坦部に限定される。遺物は定量出土しており、年代的まともりをもつものの、居住区域とは考え難い。遺跡の縁辺地に当たるのかもしれない。出土遺物の様相はI期と同様に県内の該期の遺跡と共通するが、瓦器が複数出土しており注目される。

III 期（18世紀後半以降）

I期・II期の地形を大幅に改変し、石垣を伴う大小複数の方形区画を造成した時期である。方形区画を構成する石垣は、本来の地形を利用して最小限の労力で造作できる位置に設置している。石垣の裏込め土にはI期の包含層も使用されており、造成の際にI期の包含層及び遺構の一部が破壊されたものと考えられる。

方形区画内から遺構は検出されず、用途は不明である。しかし、程なくして耕地として利用されたものと考えられ、方形区画の基盤層も耕作のため一部削平されている。

要 約

前波南遺跡

- 1 前波南遺跡は、新潟県糸魚川市大和川字前波ほかに所在する。
- 2 一般国道8号糸魚川東バイパス建設に伴い、平成19年度に発掘調査を実施した。調査面積は1,300m²である。
- 3 遺跡は、現在の前川右岸の海岸砂丘と丘陵間の沖積低地に立地する。遺構検出面の標高は約3.7～4.0mである。
- 4 調査によって、古墳時代～古代を中心とする遺構と、縄文時代～近世の遺物を検出した。
- 5 遺構は、自然流路2条・溝状遺構4条・ピット21基・土坑2基・杭状遺構22か所・性格不明遺構25基が検出された。自然流路の一部が古墳時代に遡る可能性が高いが、それ以外は基本的に古代の遺構と考える。
- 6 不整形の遺構や小規模な遺構が大平を占め、その配置も疎らなことから、本調査区は居住域とは考え難い。しかし自然流路からは多量の木器・木製品が出土しており、特筆される。この木器・木製品・自然木は意図的に集積されたものか、洪水による流れ込みなどは今後検討する必要がある。また、自然流路の内外で杭が数列検出され、流路に伴う施設であった可能性が指摘できる。
- 7 縄文時代～近世の遺物が出土したが、土器類は古墳時代中期（5世紀頃）、平安時代（9世紀前半）、室町時代（15世紀）、江戸時代（17世紀初頭）にまとまりがある。石器・石製品では、貝殻状の剥片を素材とした古墳時代の横刃形石器が多く、また滑石製の白玉を主体とした玉類の成品・未成品が多く出土した。木製品では古墳時代及び古代の加工材のほかに、古代の木簡1点や曲物、農具（田下駄など）がある。木簡には「出雲真山」と墨書きされており、現段階では人名ではないかと推測される。
- 8 居住の痕跡は検出できなかったが、古代や古墳時代における低地や河川の利用方法の一端がうかがえる。また、木簡に見られる「出雲」という文字が、当時の出雲（島根県）や都（京都府）以外で出土することは稀で、糸魚川と出雲の密接な関係（交流）を示唆する資料として注目される。

伝極楽寺跡

- 1 伝極楽寺跡は、新潟県糸魚川市大字田伏字高畑1175-1番地ほかに所在する。
- 2 一般国道8号糸魚川東バイパス建設に伴い、平成19年度に発掘調査を実施した。調査面積は2,585m²である。
- 3 遺跡は、早川の左岸に展開する金山に連なる丘陵の裾部に立地する。高さ2mの石垣を中央にして上段（標高17.5m）と下段（標高14.5m）の二つの平坦地からなる。
- 4 調査によって、鎌倉～室町時代及び江戸時代の遺構・遺物を検出した。
- 5 遺跡の時期は大きく3期（Ⅰ～Ⅲ期）に区分される。Ⅰ期は12世紀～14世紀初頭頃、Ⅱ期が14世紀後半～16世紀頃、Ⅲ期は18世紀後半以降が主体である。
- 6 『西頸城郡誌』に見られる「極楽寺」に伴うものと思われた石垣を、断ち割り調査したところ、裏込め土砂及び基底面以下の層から江戸時代後期の陶磁器類が出土した。したがって、石垣及びその上段の平坦地は江戸時代後期以降（Ⅲ期）に造成されたことが分かった。
- 7 Ⅰ期（鎌倉時代）では、上段は南寄りの山際に、下段は石垣と沢との間にそれぞれ遺構が集中している。建物は何度か立て替えられた形跡が認められ、繰り返し同じ場所で生活していた可能性が高い。
- 8 遺物については、珠洲焼、瀬戸美濃焼、青磁・白磁・青花、土師器、瓦器、磁石などが出土した。
- 9 建物などの多数の柱穴を検出したが、規模や配置から寺院跡とは考え難く、今回の調査範囲内に「極楽寺」が存在した可能性は低い。しかし、平安末～鎌倉時代（12～13世紀）の山際に立地する小規模集落の様相の一端をうかがうことができた。

引用・参考文献

- 相羽重徳 2002 「第IV章遺構 2D 自然流路」『寺地道跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第113集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 相羽重徳・加藤 学 2008 「第IV章遺構 2C 著状木製品等の出土状況」『姫御前遺跡1』新潟県埋蔵文化財調査報告書第184集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 相羽重徳 2008 「第V章遺物 1中世～近世の遺物 B土器・陶磁器」『北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅶ 姫御前遺跡1』新潟県埋蔵文化財調査報告書第184集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 浅香年木 1978 『古代地域史の研究』法政大学出版局
- 荒川隆史^{ほか} 2004 『青田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 安藤文一^{ほか} 1978 『笛吹田遺跡』新潟県糸魚川市教育委員会
- 飯坂盛泰^{ほか} 2005 『余川中道遺跡1』新潟県埋蔵文化財調査報告書第139集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 糸魚川市役所 1986 『糸魚川市史 資料集1 考古編』新潟県糸魚川市役所
- 入江清次 2007 「山岸遺跡Ⅱ」『新潟県埋蔵文化財調査年報 平成18年度』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 上田正昭^編 2003 『古代を考える 出雲』吉川弘文館
- 大橋康二 1993 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社
- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 春日真実 1998 「新潟県地方における古代の土器様相」『研究紀要』2 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 「第4章古代 第2節土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 春日真実^{ほか} 2008 『六反田南遺跡 前波南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第202集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学^{ほか} 2006 『大角地道跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第173集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金子拓男 1975 「新潟県青海町天神山経塚出土の陶製経筒と珠洲焼の成立について」『信濃』27-1 信濃史学会
- 金子正典・滝沢規朗・丸山一昭 1999 「第3章弥生時代・古墳時代 第2節土器 第3項弥生後期」『新潟県の考古学』高志書院
- 川村浩司 2000 「上越市の古墳時代の土器様相—関川右岸を中心に—」『上越市史研究』第5号 新潟県上越市
- 木島 勉^{ほか} 1986 『後生山遺跡』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書第13 新潟県糸魚川市教育委員会
- 木島 勉 1988 『三ツ又遺跡範囲確認調査報告書』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書第15 新潟県糸魚川市教育委員会
- 木島 勉 1989a 「糸魚川市三ツ又の古墳時代の集落」『新潟県考古学会第1回大会研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
- 木島 勉 1989b 「立ノ内遺跡・山崎三十三塚遺跡」糸魚川市埋蔵文化財調査報告19 新潟県糸魚川市教育委員会
- 木島 勉 2007 「山崎A・B遺跡」『第14回 遺跡発掘調査報告会』新潟県教育委員会・糸魚川市教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 釘谷 紀 2006 「出雲」『墨書土器について』『越前町文化財調査報告書1』越前町文化財調査報告書第2集 越前町教育委員会

- 桑原 健 2008 『第V章遺物 2B石器 2内磨砥石の分類』『横マクリ遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第188集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小池義人 1986 『第III章遺跡各説 C.岩野E遺跡 6.まとめ b.石器について』『中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集 新潟県教育委員会
- 小林敏雄 2000 『I地形分類図 2.地質概説』『新潟県地質図説明書(2000年度版)』新潟県商工労働部商工振興課
- 小林謙一 2004 『縄紋社会研究の新視点—炭素14年代測定の利用—』六一書房
- 佐藤敦史・相羽重徳ほか 2002 『寺地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第113集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 栢山林継 1972 『神坂峠』『神道考古学講座5 祭祀遺跡特説』雄山閣
- 鈴木郁夫 1982 『I地形分類図 1.地形概説』『新潟県上越地域土地分類基本調査 糸魚川』新潟県農地部総合整備課
- 鈴木俊成ほか 1988 『小出越遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第51集 新潟県教育委員会
- 関 雅之 1972 『田伏玉作遺跡』新潟県糸魚川市教育委員会
- 関 雅之 1990 『古代細型管状土跡考』『北越考古学』第3号 北越考古学研究会
- 高橋 保ほか 1986 『中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集 新潟県教育委員会
- 高橋 保 1988 『立ノ内遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第49集 新潟県教育委員会
- 高橋 保 1990 『県内の弥生中期の土器』『新潟考古学談話会会報』第6号
- 高橋保雄・遠藤孝司ほか 1987 『岩野下遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第46集 新潟県教育委員会
- 滝沢規朗 2005 『土器の分類と変遷—いわゆる北陸系を中心に—』『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』同シンポジウム実行委員会・新潟県考古学会
- 田中照久・木村安一郎 2005 『越前』『全国シンポジウム 中世産業の諸相～生産技術の展開と編年～』資料集 同実行委員会
- 田中 靖・丸山一昭 1999 『第3章弥生時代・古墳時代 第2節土器 第2項弥生中期後半』『新潟県の考古学』高志書院
- 辻 範朗 2006 『須沢角地遺跡』『財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成16年度』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土田孝雄 1978 『第2章調査の経過 1発掘調査に至るまで』『笛吹田遺跡』新潟県糸魚川市教育委員会
- 土田孝雄ほか 1988 『須沢角地A遺跡発掘調査報告書』新潟県青海町教育委員会
- 土田孝雄 2003 『奴奈川郷とヒスイ文化』奴奈川郷の郷をつくる会
- 寺崎裕助 1988 『第I章遺跡の立地と周辺の遺跡 1.位置と地形』『原山遺跡 大塚遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集 新潟県教育委員会
- 寺崎裕助・田中靖ほか 1988 『原山遺跡 大塚遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集 新潟県教育委員会
- 寺村光晴 1966 『古代玉作の研究』吉川弘文館
- 寺村光晴・安藤文一ほか 1979 『大角地遺跡—飾玉とヒスイの工房址—』新潟県青海町教育委員会
- 寺村光晴ほか 1978 『笛吹田遺跡』新潟県糸魚川市教育委員会
- 寺村光晴 1995 『日本の翡翠』吉川弘文館
- 中山正典 1993 『曲物の製作技法と形態』『食生活と民具』雄山閣出版
- 永井久美男 1994 『中世の出土銭—出土銭の調査と分類—』兵庫埋蔵財調査会
- 中野雄二 2000 『波佐見』『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 新潟県教育委員会・糸魚川市教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2007 『第14回 遺跡発掘調査報告会』
- 西頸城郡教育会都誌出版部 1930 『西頸城郡誌』
- 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993 『日本考古学協会1993年新潟大会シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』

- 畑中英二 2007 『続・信楽焼の考古学的研究』 サンライズ出版
- 島野義昭 2008 『第III章六反田南遺跡 3D石器』『六反田南遺跡 前波南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第202集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春成秀爾・今村峯雄編 2004 『弥生時代の実年代—炭素14年代をめぐって—』 学生社
- 平野団三・渡辺秀雄 1986 『西頸城郡』『日本歴史地名大系15 新潟県の地名』 平凡社
- 藤澤良祐 1993 『瀬戸市史 陶磁史篇四』 愛知県瀬戸市
- 藤澤良祐 1995 『中世陶器(古瀬戸)』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 藤田富士夫 1983 『珠状耳飾』『縄文文化の研究』第7巻 雄山閣出版
- 細井佳浩 2007 『木製農具「大足」について』『新潟考古学談話会会報』第32号 新潟考古学談話会
- 松永篤知 2008 『第V章遺物 1G 銭貨』『姫御前遺跡1』新潟県埋蔵文化財調査報告書第184集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 水澤幸一 2004 『15世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相』『貿易陶磁研究』24 日本貿易陶磁研究会
- 水澤幸一 2005 『越後の中世土器』『新潟考古』16 新潟県考古学会
- 宮田進一 1997 『越中瀬戸の変遷と分布』『中近世の北陸—考古学が語る社会史—』北陸中世土器研究会編 桂書房
- 森田 勉 1982 『14～16世紀の白磁の分類と編年』『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 矢部英生 2008 『第IV章3D 石器』『六反田南遺跡 前波南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第202集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山岸洋一 2001a 『下大野遺跡群』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書37 新潟県糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一 2001b 『糸魚川市遺跡地図(市内詳細分布調査報告書)』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書39 新潟県糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一・田村公一 2004 『水穂寺跡発掘調査報告書』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書47 新潟県糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一 2006 『平成17年度笛吹田遺跡発掘調査概要報告書』糸魚川市文化財調査報告書53 新潟県糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一 2007 『笛吹田遺跡—玉類・石製品の大規模な製作工房—』『第14回 遺跡発掘調査報告会』新潟県教育委員会・糸魚川市教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山本直人 2001 『縄文後・晩期土器型式群の校正暦年代と年代比較』『名古屋大学文学部研究論集140 史学47』名古屋大学文学部
- 山本信夫 1995 『中世前期の貿易陶磁』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 山本 肇^{ほか} 2003 『岩倉遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第114集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 吉岡康暢 1994a 『日本海域の土器・陶磁器〔中世編〕』六興出版
- 吉岡康暢 1994b 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 渡邊裕之^{ほか} 2008 『横マクリ遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第188集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

前波南遺跡 遺構観察表 自然流路(河川)

観測番号	平面図	断面図	写真	グリッド	長さ (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	層土	長軸方向	時期	出土 遺物	切り合い関係
1	4-5	5	49-53	3E-G, 3E-F	13.8	7.1	146	縦行	弧状	レンズ状	N50°W	古代	有	SD1*
2	7-10-11	9	49-54-55	3F-G, 4F	16.2	11.4	74	縦行	弧状	レンズ状	N32°W	古代	有	SX76*

前波南遺跡 遺構観察表 溝(SD)

観測番号	平面図	断面図	写真	グリッド	長さ (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	層土	長軸方向	時期	出土 遺物	切り合い関係
1	2-4	5	50-53	3E-F, 2E-F, 3E	19.7	44.6	25	直線	弧状	単層	N50°E	古代	有	河川・SX25*
33	2	-	-	2F13	0.9	32	5	直線	弧状	単層	N62°W	古代		
60	4	5	53	1G10	1.1	22	14	直線	半円状	レンズ状	N7°W	古代		
75	7	8	53	2F-G	13.0	240	26	縦行	弧状	レンズ状	N55-3E°W	古代		

前波南遺跡 遺構観察表 ビット(P)

観測番号	平面図	断面図	写真	グリッド	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	層土	長軸方向	時期	出土 遺物	切り合い関係
4	2	3	51	5E13	40	32	26	横河	扇斗状	単層	-	古代		
6	2	3	-	5E17・18	40	36	5	円	弧状	単層	-	古代		
7	2	-	-	5E17	28	24	3	横河	弧状	単層	-	古代		
8	2	3	-	5E16	24	24	10	円	弧状	レンズ状	-	古代		
14	2	3	-	4E14	46	32	9	横河	弧状	単層	-	古代		
15	2	3	51	4E23, 4F3	48	28	7	横河	弧状	単層	-	古代		
16	2	-	-	4E18	24	20	13	横河	扇斗状	単層	-	古代		
17	2	-	-	4E22	26	25	5	円	弧状	単層	-	古代		
18	2	3	-	4E17	40	32	8	横河	弧状	単層	-	古代		
19	2	-	-	4E13	36	24	8	横河	弧状	単層	-	古代		
20	2	-	-	4E12・17	36	24	4	横河	弧状	単層	-	古代		
22	2	3	5	4F1	30	28	10	円	弧状	レンズ状	-	古代		
26	2	-	-	3F9	46	32	6	横河	扇状	(単層)	-	古代		
28	2	-	-	3F3	33	24	7	横河	弧状	単層	-	古代		
29	2	-	-	3F8	36	24	9	横河	弧状	単層	-	古代		
31	2	3	-	3F1・2・6・7	80	24	7	横河	弧状	単層	-	古代		
34	4	-	-	2F17	24	22	9	円	弧状	単層	-	古代		
36	2	-	-	3E15・20, 4E11・16	45	32	12	横河	凸形状	単層	-	古代		SX21>
61	4	5	-	1F13	40	30	4	横河	弧状	単層	-	古代		
62	4	5	-	1F13	32	24	5	横河	弧状	単層	-	古代		
70	4	-	-	1E24	28	20	7	横河	弧状	単層	-	古代		SX68>

前波南遺跡 遺構観察表 土坑(SK)

観測番号	平面図	断面図	写真	グリッド	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	層土	長軸方向	時期	出土 遺物	切り合い関係
30	2	3	-	3F6・7	76	50	8	横河	弧状	単層	N1°E	古代		
32	2	3	-	3F6	67	30	4	横河	弧状	単層	N28°W	古代		

前波南遺跡 遺構観察表 性格不明遺構(SX)

観測番号	平面図	断面図	写真	グリッド	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	層土	長軸方向	時期	出土 遺物	切り合い関係
2	2	3	-	5E14・19	168	108	13	不整形	弧状	レンズ状	N10°W	古代		
3	2	3	51	5E8・9・14	208	132	20	不整形	弧状	レンズ状	N10°W	古代		
5	2	3	-	5E7	124	120	18	不整形	弧状	レンズ状	N28°W	古代		
9	2	3	-	5E6・7	68	40	4	不整形	弧状	単層	-	古代		

観 察 表

観内番号	平面図	断面図	写真	グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	層土	長短方向	時期	出土遺物	知り合い・関係
10	2	3	—	4E10、5E6	216	104	9	不整形	瓦状	単層	—	古代		
11	2	3	—	4E10・20・20、5E16・21	436	172	9	不整形	瓦状	単層	N-30'・W	古代		
12	2	3	—	4E19・20・24・25	356	276	15	不整形	瓦状	単層	N-28'・W	古代		
13	2	3	51	4E23・24	276	164	9	不整形	瓦状	単層	N-57'・W	古代		
21	2	3	51	3E、4E・F	924	752	19	不整形	瓦状	単層	N-57'・W	古代	P36-C	
25	2	3	50	3E	400	376	14	不整形	瓦状	単層	N-7'・W	古代	SD1=	
27	2	3	—	3F8・9	168	67	3	不整形	瓦状	単層	N-38'・W	古代		
35	4	5	51	2F21・22	186	86	13	不整形	瓦状	レンズ状	—	古代	有	
53	4	5	53	1F・G	376	68	21	不整形	半円状	レンズ状	N-16'・W	古代		
54	4	5	—	1F・G	480	72	7	不整形	瓦状	単層	N-23'・W	古代		
55	4	5	—	1G4・9	100	88	6	方形	瓦状	単層	—	古代		
56	4・7	5	53	1F	704	320	20	楕円形	瓦状	レンズ状	N-26'・W	古代	SX58・59=	
57	4	5	—	1F22	96	52	5	不整形	瓦状	単層	N-18'・W	古代		
58	4	—	—	1F18	300	76	9	不整形	瓦状	単層	N-78'・W	古代	SX56=	
59	4・7	5	—	1F17・22	230	50	22	不整形	半円状	レンズ状	N-18'・E	古代	SX56=	
60	4	—	—	1F13・18	96	30	6	不整形	瓦状	単層	N-14'・E	古代		
66	4・7	—	—	1F21・22	200	160	4	不整形	瓦状	単層	—	古代		
67	4・7	—	—	1F22	84	47	7	不整形	瓦状	単層	—	古代		
68	4	5	—	1E・1F	1004	104	10	不整形	瓦状	単層	N-22'・W	古代	P70-C	
74	7	8	53	3F	430	236	16	不整形	瓦状	単層	N-30'・W	古代		
76	7	8	53	2F21、2G1、3F25、3G5	218	136	19	不整形	瓦状	単層	—	古代	PH2=	

前波南遺跡 古代～近世 土器・陶磁器観察表

(黒上石=黒瓦, 白=白色砂子, 赤=赤色砂子, 黄=黄色砂子, 灰=灰砂, 黄=チヤーント, 角=角閃石, 骨=骨質砂粒, 雜=雜砂)

観測番号	分類	遺跡	通稱	アグリッド	アグリッド	小	開口	口径	高さ	底径	色調			製作時期	使用時期	備考		
											外面	内面	胎土					
3	灰磁器	長瀬橋	河川	1	F	4	11'	116	-	-	-	灰 2.5Y5/1	灰 2.5Y5/1	灰 10YR6/1	石 白			
4	灰磁器	釜 (本館)	河川	1	E	22	11'	-	-	-	灰 N5/0	灰 N5/0	灰 N7/0	石 白 磁	多クナ			
5	土師器	釜	河川	1	F	3	11'	566	-	-	灰黄 10YR6/3	灰黄 10YR7/4	灰黄 10YR6/3	石 白 磁				
6	土師器	釜	河川	1	F	9	11'	128	24	72	灰黄 10YR6/2	灰黄 10YR6/2	灰黄 10YR7/2	石 磁	口付成形	(内) 入土	中世 (13C～14C) 赤	
7	土師器	無白粉 輪付	古瓦	2	F	4	9	ス 3.0	-	76	灰黄 7.5Y7/3	灰黄 10YR7/3	灰黄 10YR7/2	石 長 磁			中世前期土師器中	
13	珠洲	片口鉢	河川	2	F	24	11'	310	-	-	灰 5Y5/1	灰 N6/0	灰 10Y5/1	石 長 磁				
14	灰磁器	有白粉 磁碗	川	-3	F	5	2	120	36	82	灰 5Y5/1	灰 N6/0	灰 5Y6/1	白 磁	(底) 同形赤瓦同 形口付高白		存在時期 (9C前～中)	
15	灰磁器	有白粉 (本館)	河川	2	F	4	4	Tr	116	-	灰 N6/0	灰 N7/0	灰 N6/0	白 磁			存在時期 (9C前～中)	
16	灰磁器	有白粉	河川	2	F	4	ユ	ス	-	88	灰 N6/0	灰 N7/0	灰 7.5Y6/1	白 磁			60日 割イノ 3C前～3C末	
17	灰磁器	林道 瓦形	河川	2	-3	G	9	26	-	23	黄灰 2.5Y5/2	黄灰 2.5Y5/1	灰 N6/0	白 磁			(内) 赤瓦 60日瓦 (9C前～)	
18	土師器	無白粉	河川	2	F	4	ユ	ス	126	34	62	黄 7.5YR6/6	黄 5YR7/6	黄 10YR8/3	石 長 磁	(底) 同形赤瓦同 形口付		存在時期 (9C前)
32	瀬戸 瓦器	天目鉢		-3	F	16	1	126	-	-	黄オリーブ 10Y3/3	黄オリーブ 2.5Y3/3	灰 2.5YR6/2	石 赤	(内) 鉄粒		大塚2～3期 (1530～90年)	
33	瀬戸 瓦器	志野鉢		2	F	15	1	114	-	-	灰白 2.5Y8/2	灰白 2.5Y8/2	灰 2.5Y8/1	石 長	(内) 灰石粒		17C前半	
34	土師器	皿		4	E	24	1	94	23	44	灰白 10YR8/2	灰白 10YR7/4	黄 10YR8/3	石 長	手づくね成形		(内) 赤 スス	16C
35	唐津	皿		-1	F	5	1	120	35	34	灰黄 10YR8/2	灰黄 2.5YR/2	灰 10YR8/3	白	(口・内) 鉄粒 (見込) 胎土付1+		大塚1～2期 (1094～1610年)	
36	越中 瀬戸	天目鉢		3	E	21	1	114	-	-	黄 7.5YR4/4	黄 7.5YR4/4	灰 5Y5/1	石 長	(内) 鉄粒		17C前半	
37	越中 瀬戸	皿		2	E	12	1	112	-	-	灰黄 10YR8/2	灰黄 10YR8/2	灰 2.5Y5/1	石 白	(内) 鉄粒		17C	
39	青磁	蓋付 文瓶		-3	G	5	11'	136	-	-	黄オリーブ 5Y5/3	黄オリーブ 5Y5/3	灰 2.5Y7/1	白 磁	(外) 白灰泥薄文			
40	青磁	瓶 (口付)		-3	G	10	11'	134	-	-	オリーブ 10Y6/2	オリーブ 10Y6/2	灰 N8/0	ナシ 磁			土師瓦 (14C前～15C中)	
41	青磁	無文瓶		-1	F	19	11'	144	-	-	緑灰 10G7/1	緑灰 10G7/1	灰 N8/0	白 中磁	(外) 洗練土		15C中～後	
42	青磁	瓶 (口付)		1	G	13	11'	170	-	-	オリーブ 10Y6/2	オリーブ 10Y6/2	灰 N8/0	白 磁			厚輪成形 (16C前～17C前)	
43	青磁	瓶 (口付)		2	F	2	11'	130	-	-	黄オリーブ 5G7/1	黄オリーブ 1.5G7/1	灰 7.5YR/1	白 中磁			厚輪成形 (16C前～17C前)	
44	青磁	青磁 文書瓶		-1	G	3	11'	136	-	-	黄オリーブ 5G7/1	黄オリーブ 5G7/1	灰 N8/1	白 磁	(外) 黄文		1440年～	
45	青花	瓶 (口付)		-3	F	5	11'	-	-	-	灰白 N8/0	灰白 N8/0	灰 N8/0	白 磁	(内) 草花文 (外) 黄文		小野1群 (15C末～16C前)	
46	青花	瓶 (口付)		2	F	6	11'	120	-	-	黄灰 10YR7/3	黄灰 5G7/1	灰 N8/0	白 磁			小野1群 (15C末～16C前)	
47	白磁	瓶 (口付)		-3	G	4	11'	-	-	44	灰白 5Y7/2	灰白 7.5Y7/2	灰 7.5Y7/1	ナシ 磁			山本C群 (13C末～12C)	
48	白磁	瓶 (口付)		-1	E	21	11'	-	-	46	灰白 2.5Y8/1	灰白 5YR/2	灰 5YR/1	白 中磁	(内) 黄文		山本白磁群 (12C末)	
49	白磁	奈良 白磁群		-3	G	13	11'	90	-	-	灰白 10YR8/1	灰白 10YR8/1	灰 10YR8/2	ナシ 磁	(内) 口付2+		1460年代～15C末	
50	瀬戸 瓦器	平鉢		-2	F	4	11'	158	-	-	黄 2.5Y7/2	灰白 5Y7/2	灰 10YR8/1	石 長	(内) 鉄粒		古瀬戸型式1群 (14C前半)	
51	瀬戸 瓦器	天目鉢		-3	F	10	11'	116	-	-	灰 10YR2/1	灰 7.5YR5/4	灰 10YR8/2	石 長	(内) 鉄粒		古瀬戸型式2群 (14C後半)	
52	瀬戸 瓦器	天目鉢		3	F	6	11'	128	-	-	灰 10YR1/1	灰 10YR1/1	灰 10YR8/1	石	(内) 鉄粒		古瀬戸型式3群 (14C後半)	
53	瀬戸 瓦器	天目鉢		3	F	3	11'	110	-	-	灰 10YR1/1	灰 10YR1/1	灰 10YR7/1	石	(内) 鉄粒		古瀬戸型式4群 (14C後半)	
54	瀬戸 瓦器	天目鉢		-3	F	8	11'	110	-	-	黄灰 10YR4/1	黄灰 10YR5/1	灰 5Y7/1	石 長	(内) 鉄粒		観音 (15C前～9)	
55	瀬戸 瓦器	鉢 小皿		-2	F	2	11'	114	18	60	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	灰 10YR8/2	石	(底) 同形赤瓦同 形口付		古瀬戸型式5群 土器 (15C前～)	
56	瀬戸 瓦器	鉢		3	F	3	11'	136	-	-	洗黄 10YR8/3	洗黄 10YR8/4	灰 7.5YR8/1	石 長	(内) 鉄粒+		古瀬戸型式6群 (14C後半)	
57	瀬戸 瓦器	耳付 水注		-2	F	6	11'	-	-	-	黄 7.5Y2/1	黄 2.5Y6/1	黄 2.5Y6/1	長 磁	(外) 鉄粒+黄		古瀬戸型式7群 (14C後半)	
58	土師器	皿		-2	F	3	11'	126	-	-	黄灰 2.5Y4/2	灰黄 10YR6/3	灰黄 10YR6/3	石 長 磁	口付成形	(口) 鉄粒		1460～80年
59	土師器	皿		4	E	12	11'	130	-	-	洗黄 10YR8/3	洗黄 7.5YR8/4	洗黄 7.5YR8/4	石 白 磁	口付成形	(内) 入土		
60	土師器	皿		-2	F	16	11'	112	24	70	黄灰 2.5Y5/2	灰 5Y6/1	灰 7.5Y4/1	石 白	口付成形 (底) 同形赤瓦同 形口付			
61	土師器	皿		4	E	20	11'	166	-	-	洗黄 10YR8/2	灰白 10YR8/2	洗黄 2.5YR8/4	石 白 磁	口付成形		15C	

観 察 表

観号 番号	分 類	通称	アップ 種別	アップ 番号	種別	口径 mm	筒長 mm	口径 mm	口径 mm	口径 mm	色 調			射口(2.5倍 7.5倍)	鏡筒仕様	使用 状態	備考
											外面	内面	鏡上				
62	上座部	銀		4 F 2	2	-	-	64			楕 5YR7.5/6	白 10YR7/4	楕 2.5YR7/6	石	ボックス成形		15C
63	上座部	銀		1 G 3	0	-	-	80			灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	黒 10YR3/1	石	ボックス成形 (外) 両面成形		15C
64	上座部	銀		1 G 6	0	104	-	-			白 10YR8/2	白 10YR8/2	白 10YR8/2	石 白	手づくね		(口) スス
65	上座部	銀		3 F 8	0	114	-	-			灰黒 2.5Y6/2	灰黒 2.5Y6/2	暗灰黒 2.5Y6/2	石 オヤ角	手づくね成形		
66	上座部	銀		3 F 6	0	128	-	-			灰黒 7.5Y6/2	黒 7.5Y3/1	灰黒 2.5Y6/1	石 白	手づくね成形 両面成形		(内外) スス
67	上座部	銀		1 F 25	0	140	-	-			白 10YR8/2	白 10YR8/2	白 10YR8/2	石 黒	手づくね成形 両面成形		
68	珠洲	月口鏡		1 F 1	0	288	-	-			黒 10YR6/1	黒 10YR7/1	黒 10YR7/1	石 長筒	(鏡口) 5金一単位 鏡上		古銅7.1期 (14C1/4)
69	珠洲	月口鏡		4 E 12	0	334	-	-			灰 N5/0	灰 N5/0	灰 10Y8/1	石 管筒			
70	珠洲	月口鏡		3 E 20	0	300	-	-			灰 N5/0	灰 N4/0	灰 2.5Y8/1	石 管筒			
71	珠洲	月口鏡		2 F 12	0	346	-	-			灰 N6/0	灰 N6/0	灰 N6/0	石 管筒	(鏡口) 5金一単位 鏡上 (口) 波状文		古銅7.1期 (14C1~15C中)
72	珠洲	月口鏡		2 F 16	0	372	-	-			灰黒 2.5Y7/2	灰白 5Y7/1	灰 5Y5/1	石 長筒			(内) スス
73	珠洲	月口鏡		1 E 25	0	338	-	-			暗灰 10YR6/1	暗灰 10YR5/1	灰白 10YR7/1	石 長筒	(口) 波状文 (鏡口) 7金一単位		
74	珠洲	月口鏡		2 F 4	0	346	-	-			灰黒 2.5Y6/1	灰 N6/0	灰白 2.5Y8/1	石 管筒	(口) 波状文		
75	珠洲	月口鏡		3 F 5	0	390	-	-			楕 2.5YR7/8	楕 2.5Y3/1	楕 2.5Y7/8	石 管筒	(口) 波状文		
76	珠洲	月口鏡		2 F 18	0	284	-	-			灰 5Y8/1	白 5YR6/3	灰 7.5Y6/1	石 長筒	(鏡口) 5金一単位		
77	珠洲	水口		1 E 19	0	-	-	-			灰 N5/0	黒 N2/0	灰白 10YR8/1	石 管筒	(鏡) 波状文		(内外) スス
78	珠洲	意匠鏡 (法鏡)		2 F 9	0	-	-	-			灰 N5/0	灰 N5/0	灰 10Y6/1	石 長筒			
79	珠洲	鏡		3 F 12	0	474	-	-			灰 N6/0	灰 N6/0	灰 N6/0	石 管筒			古銅7.1期 (14C1~15C中)
80	越前	鏡		2 F 19	0	334	-	-			灰黒 5YR4/2	灰オリーブ 7.5Y3/3	灰白 2.5Y8/1	石 長筒	(口) 白波紋		
81	唐津	鏡		2 G 7	0	110	30	40			白 10YR8/2	灰オリーブ 5Y4/2	灰白 10YR7/1	長	(内・口) 灰黒		A類12期 (15B~16B中)
82	唐津	鏡		1 F 23	0	102	35	40			暗灰黒 2.5Y4/2	灰オリーブ 5Y3/2	白 5YR6/2	石	(内外) 灰黒		A類12期 (15B~16B中)
83	唐津	鉢鏡		2 F 12	0	260	-	-			暗灰 10YR1/1	白 10YR8/2	暗灰 10YR4/1	石 白長	(口) 波紋		A類13期 (16B~40年代)
84	越中 鏡	丸鏡		1 F 7	2	98	-	-			灰黒 10YR4/2	白 10YR6/3	灰白 2.5Y8/1	白	(内外) 波紋		17C
85	越中 鏡	丸鏡		2 F 2	0	114	21	66			灰白 2.5Y6/1	灰白 2.5Y8/1	赤赤 2.5YR7/4	石 白長	(内外) 灰黒		17C
86	越中 鏡	鏡		1 F 9	0	110	27	46			灰黒 2.5Y6/2	白 2.5Y6/3	灰黒 2.5Y6/1	石 長	(内外) 灰黒・波紋 縁付設計		17C
87	越中 鏡	鏡		1 F 22	0	112	23	60			赤赤 2.5YR4/1	赤赤 7.5R2/1	灰黒 7.5YR6/6	長	(内外) 波紋		17C
88	越中 鏡	内付		1 F 15	0	100	26	48			オリーブ 7.5Y3/3	灰オリーブ DVS/3	灰 5Y6/1	石 長	(内外) 灰黒		磨面部・灰褐色 5YR6/2)
89	越中 鏡	鉢鏡		1 F 2	0	310	-	-			暗灰 5YR3/1	暗灰 10R3/1	灰白 10YR8/2	石 長筒	(内外) 波紋		(口) 平 17C第2期中
90	瓦 平瓦			2 G 11	0	長さ 124	45	80			暗灰 N5/0	灰 2.5Y4/1	灰白 2.5Y8/1	長筒			
91	東志部	有白粉 小部		1 F 8	0	124	31	72			灰白 2.5Y6/1	灰 N6/0	灰白 N7/0	石 白筒			存在V期 (9C前~9C)
92	東志部	有白粉 小部		2 F 14	0	-	-	74			灰白 N7/0	灰白 N7/0	灰白 N7/0	筒			存在V期 (9C前~9C)
93	東志部	有白粉 小部		2 F 5	0	128	-	-			灰白 10Y7/1	灰白 5Y7/1	灰 5Y6/1	石 白筒			存在V~VI期 (9C~10C前)
94	東志部	鉢蓋		1 F 1	0	-	-	-			灰白 10YR7/1	灰 5Y6/1	暗灰 7.5YR5/1	石 筒			存在V期 (9C前~9C)
95	東志部	鉢蓋		3 F 6	0	140	-	-			灰白 N7/0	灰 N7/0	灰 N7/0	石 長筒			存在V期 (9C前~9C)
96	東志部	鉢蓋		3 F 21	0	200	-	-			灰黒 2.5Y5/1	灰 5Y6/1	灰白 2.5Y7/1	白 筒			
97	上座部	小鏡		2 F 17	0	132	-	-			楕 5YR6/6	楕 5YR6/6	楕 5YR6/6	石 筒			存在V~VI期 (9C前~10C前)
103	東志部	有白粉 小部		2 F 1	0	120	37	82			灰 N6/0	灰 N6/0	灰白 10YR7/1	白 筒	(鏡) 両面→9切		(鏡)へ 少鏡付
104	東志部	有白粉 小部		1 F 1	0	114	36	70			灰 10YR6/1	灰 7.5Y7/1	灰 5Y6/1	石 白長	(鏡) 両面成形		(鏡) 磨 面付
105	東志部	有白粉 小部		1 F 1	0	114	-	-			灰白 5Y7/1	灰 5Y8/1	灰白 2.5Y7/1	石 白長			存在V~VI期 (9C前~10C前)
106	東志部	鉢蓋		1 F 8	0	144	-	-			灰黒 2.5Y5/1	赤赤 10R5/1	赤赤 10R5/1	白 筒			存在V期 (9C前~9C)
107	上座部	有白粉		1 F 13	0	138	37	70			灰黒 2.5Y6/2	白 2.5Y6/3	楕 7.5Y7/6	石 筒	(鏡) 両面成形		存在V~VI期 (9C前)
109	上座部	有白粉		3 F 25	0	136	38	72			灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	暗灰 10YR7/6	石 白 筒			(下) 9.5C

前波南遺跡 縄文～古墳時代 土器観察表

(黒)上石=石瓦, 白=白色粘土, 赤=赤色粘土, 黒=黒色粘土, 灰=灰石, 雲=雲母, チャ=チャート, 角=角閃石, 骨=骨質成分, 隕=隕石

報告番号	種別	通期	層位	グリッド	形状	口径 mm	高さ mm	底径 mm	色 調		胎土 (土段・色調・下段：採人等)		装 飾		産地地	備考	
									外面	内面	外面	内面	外面	内面			
1	高林	SD	1	2	F	6.5	-	-	洗灰層 10YR6/3	洗灰層 10YR8/3	洗灰層 10YR8/3	灰 土				養生土器 分級器	
2	壺 (黒底)	SD	1	2	E	20	-	-	灰 N5/0	灰 N5/0	灰黒層 10YR6/2	白				信「信」-0103 法隆寺	
8	壺	河川	1	1	F	14			洗灰層 7.5YR7/4	灰黒層 10YR6/2	灰 土	5YR5/6	灰 土	灰 土	ハナナデ	(黒) 古墳時代	
9	壺	河川	1	1	F	14			洗灰層 10YR4/3	灰黒層 10YR4/2	灰黒層 10YR6/2	灰 土				(黒) 養生土器	
10	深鉢 (縄文)	河川	1	1	F	14			洗灰層 10YR7/3	洗灰層 2.5Y7/3	灰 土	2.5Y7/2				結末前縄文	
11	深鉢 (縄文)	河川	1	1	F	4		104	洗灰層 10YR7/3	洗灰層 10YR7/3	灰黒層 2.5Y7/2	灰 土				結末前縄文	
19	高林	河川	2	-3	F	17 22 23	3	160 134 120	洗灰層 10YR6/2	灰黒層 10YR4/1	洗灰層 7.5YR6/3	灰 土	ハナナデ	ハナナデ			(受胎) ミガキ (胎部) ヘラケズリ (胎底) ミガキ
20	高林	河川	2	-3	F	11 18	3	-	洗灰層 7.5YR7/3	洗灰層 7.5YR7/4	洗灰層 7.5YR7/3	灰 土	不明	不明			
21	鉢	河川	2	-3	F	22 エ	3	100 38 52	洗灰層 10YR7/2	洗灰層 10YR7/2	灰 土	10YR5/1	ハナ	ハナナデ			
22	鉢	河川	2	-3	F	9.7	3	108 98 20	灰黒層 7.5YR6/1	灰黒層 10YR7/1	灰 土	10YR4/1	ハナケズリ	ハナケズリ			(胎部) ヘラケズリ (胎底) ミガキ
23	壺	河川	2	-3	F	16 地山 直土	3	60 17 61	洗灰層 10YR7/2	灰黒層 10YR6/2	洗灰層 10YR7/2	灰 土	胎部有チャート 胎底ニチャート	(黒) ハナナデ			
24	壺	河川	2	-3	F	16 ウ 18.2	3	136	洗灰層 5YR6/6	洗灰層 5YR6/6	洗灰層 5YR7/3	灰 土	ハナ	ハナ			(赤) 白 →胎底
25	壺	河川	2	-3	F	3.ウ	3	160	洗灰層 10YR7/2	洗灰層 10YR7/3	洗灰層 10YR7/3	灰 土	(口) ミガキナデ (胎) ハナ	(口) ミガキナデ (胎) ハナ			
26	壺	河川	2	-3	F	22 エ	3	194 270 66	洗灰層 10YR6/3	洗灰層 10YR7/3	洗灰層 10YR7/2	灰 土	胎底有チャート (胎) ハナ	ハナ			(黒) 胎底
27	壺	河川	2	-3	F	14 21	3	152	洗灰層 5YR7/4	灰黒層 7.5YR6/2	灰 土	7.5YR5/1	(口) 胎底 (胎) 胎底有チャート	(胎) ハナナデ (胎底) ハナ			口と胎底で 結合
28	壺	河川	2	-4	F	13 エ	3		灰黒層 10YR4/1	灰黒層 10YR5/2	灰 土	10YR4/1	洗灰文				焼物跡 胎底有チャート
29	壺	河川	2	-4	F	13 エ	3		灰黒層 10YR4/1	灰黒層 10YR5/2	灰 土	10YR4/1	洗灰文				焼物跡 胎底有チャート
30	壺	河川	2	-4	F	13 エ	3		灰黒層 10YR4/1	灰黒層 10YR5/2	灰 土	10YR4/1	洗灰文				焼物跡 胎底有チャート
31	壺	河川	2	-4	F	13 エ	3		灰黒層 10YR4/1	灰黒層 10YR5/2	灰 土	10YR4/1	洗灰文				焼物跡 胎底有チャート
38	有蓋壺 (赤土)		-1	F	1	134	-	-	赤土 10R5/6	赤土 10R5/6	洗灰層 10YR6/3	灰 土	赤土 + ミガキ	赤土 + ミガキ			胎底有チャート・胎底 (赤土あり)
98	高林 (赤土)		-1	G	3	84	-	-	赤土 10R5/6	赤土 10R5/6	洗灰層 10YR7/3	灰 土	赤土 + ミガキ	赤土 + ミガキ			
99	白磁石 或		-1	F	12	8	-	-	洗灰層 10YR5/3	洗灰層 10YR6/3	洗灰層 10YR8/3	灰 土	ミガキ	コビナデ 又はオサレ			
100	壺		1	F	24	8	-	-	胎 7.5YR4/6	胎 2.5YR6/6	洗灰層 7.5YR6/4	灰 土	ハナ + 赤胎	ハナ + 赤胎			
101	陶師土 灰土層		1	F	3	8	-	-	洗灰層 10YR7/2	洗灰層 10YR7/2	洗灰層 10YR7/2	灰 土	(口) 胎底				養生土器 等
102	灰土		-1	G	10	8	204	-	洗灰層 10YR5/3	洗灰層 10YR7/3	灰黒層 10YR6/2	灰 土	(口) 胎底 (胎) 胎底有チャート				養生土器
105	内面 黒色鉢		4	E	19	8	140	-	洗灰 2.5Y7/3	黒 N2/0	灰 土	7.5Y4/1					黒色胎部 古墳時代
110	有蓋鉢		1	F	21	8	-	26	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	灰 土	10YR4/1	ハナ				胎底 2mmO孔 ハナ

前波南遺跡 管状土鐘観察表

報告番号	分期	通期	層位	グリッド	長さ mm	最大径 mm	口径 mm	厚さ mm	重さ (g)	備考		
12	太郎	河川	1	II	1	E	22	31	32	18	40.3	(口) 内径不定

前波南遺跡 石器・石製品観察表

報告番号	種別	石材	出土位置		長さ	幅	厚さ	重さ	孔径	備考		
			通期名	層位								
111	扁平形石器	灰岩 (黒色)	SD1	1	3	E	11	55	95	23	123.2	
112	扁平形石器	砂岩 (黒色細粒)	II	5	E	17	62	96	13	95.8		
113	扁平形石器	砂岩 (黒色細粒)	河川2	3	-3	F	21	73	131	13	171.9	
114	扁平形石器	砂岩 (粗粒)	河川1	スナ	1	F	14	ウ	85	125	15	220.8
115	扁平形石器	砂岩 (粗粒)	河川2	3	-4	F	9		108	169	35	551.5
116	扁平形石器	砂岩 (粗粒)	II	4	E	21	145	112	34	255.3	使用済みあり	
117	石錐	安山岩	I	-1	F	3	124	111	45	822.9		
118	石錐	砂岩 (粗粒)	河川2	3	-4	F	10	152	107	35	728.5	
119	扁平形石器	砂岩 (黒色細粒)	II	3	E	20	71	70	12	49.4		

観 察 表

報告番号	種類	石材	出石位置			属性 (単位: mm/g)					備考
			道幅名	解位	グリップ	長さ	幅	厚さ	重量	孔隙	
120	積り形石造?	安山岩	Ⅱ	1	F 5		86	73	33	164.8	
121	礫石類	安山岩	Ⅱ	1	F 11		93	78	30	196.7	使用済み石
122	礫石類	安山岩	Ⅱ	2	F 10		144	95	39	830.7	粒径 52 ~ 55mm
123	礫石類	砂岩 (粗粒)	Ⅱ	2	F 16		130	63	59	67.46	
124	礫石類	花崗岩	河川1	5+	F 12	イ	102	72	60	866.3	
125	石塊	安山岩	河川2	3	-3 F 11 4 F 10		93	69	61	474.9	有溝
126	石塊	安山岩	Ⅱ	5	E 7		58	73	19	109.3	打欠
127	石塊	安山岩	Ⅱ	2	F 14		49	61	12	45.0	打欠
128	礫石	砂岩	Ⅱ	-2	F 6		119	61	54	320.4	
129	礫石	粗粒状	1	-4	E 17		49	40	28	63.5	
130	礫石	内巻礫石 砂岩 (粗粒)	河川2	3	-4 F 10	ア	128	47	13	100.5	
131	礫石	粗粒石 砂岩 (粗粒)	河川2	3	-3 F 16	エ	148	87	23	461.7	粒径 > 8mm
132	石塊	緑色粗粒状岩	河川2	3	-3 F 22	ア	41	55	22	40.2	
133	玉型?	礫石	Ⅱ	-2	F 21	ア	41	17	13	16.6	
134	毎玉	礫石	河川2	3	-4 F 16	イ	12.7	5.9	3.7	0.37	欠損
135	管玉	未成品	河川2	3	-3 F 21	ウ	7.5	6.7	26.1	1.99	2.1
136	管玉	未成品	河川2	3	-3 F 11	ウ	6.7	6.5	8.1	0.59	2.3
137	若干大小玉	-	河川2	3	-3 F 16	エ	4.7	4.5	3.2	0.10	2.1
138	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 21	ア	5.9	5.8	3.7	0.30	2.3
139	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 21	ア	5.6	5.4	2.4	0.12	2.2
140	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 22	ア	4.5	4.4	2.7	0.09	1.6
141	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 22	ウ	4.3	4.2	2.2	0.67	1.7
142	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 21	ア	3.5	3.4	1.6	0.03	1.7
143	白玉	未成品	河川2	3	-3 F 21	ア	7.9	6.3	3.2	0.23	1.6
144	白玉	未成品	河川2	3	-3 F 21	ア	7.6	6.5	2.9	0.24	1.5
145	白玉	未成品	河川2	3	-4 F 25	エ	7.2	5.9	3.0	0.31	1.6
146	白玉	未成品	河川2	3	-3 F 22	ウ	7.7	6.6	2.7	0.24	
147	玉型	素材	河川2	3	-3 F 22	ウ	30.0	21.0	5.7	4.7	
整理番号											
0102	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 16	イ	5.6	4.8	2.0	0.08	2.1
0103	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 16	イ	4.1	4.0	2.4	0.06	1.7
0105	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 16	エ	4.6	4.3	3.4	0.11	1.6
0106	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 16	エ	4.1	4.0	1.6	0.04	2.2
0107	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 16	エ	6.2	5.8	3.2	0.14	1.8
0108	白玉	未成品	河川2	3	-3 F 16	エ	7.4	6.6	3.1	0.22	1.7
0109	玉型	素材	河川2	3	-3 F 16	エ	8.8	5.4	3.9	0.30	
0110	玉型	素材	河川2	3	-3 F 16	エ	8.4	5.7	2.4	0.10	
0111	白玉	未成品	河川2	3	-3 F 16	エ	6.9	4.5	2.3	0.11	欠損
0112	玉型	素材	河川2	3	-3 F 16	エ	7.1	4.5	2.5	0.13	
0113	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 16	エ	4.5	4.4	2.7	0.08	1.8
0114	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 16		4.4	4.3	2.4	0.05	2.2
0115	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 16		4.2	4.1	2.8	0.07	2.1
0116	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 16		3.7	3.6	1.9	0.04	1.8
0117	白玉	未成品	河川2	3	-3 F 16		7.9	5.8	3.1	0.19	1.6
0118	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 16		4.4	4.2	2.9	0.06	1.9
0119	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 21	ア	4.6	4.4	2.7	0.08	1.9
0120	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 21	ア	5.0	4.9	2.6	0.11	2.0
0121	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 21	ア	5.1	5.0	2.2	0.09	2.0
0122	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 21	ア	4.6	4.5	2.4	0.08	1.5
0123	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 21	ア	4.6	4.4	2.5	0.08	1.6
0124	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 21	ア	4.4	4.3	3.3	0.12	1.7
0125	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 21	ア	5.1	4.8	1.9	0.07	2.2
0126	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 21	ア	4.7	4.4	3.4	0.10	1.7
0127	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 21	ア	4.4	3.7	2.9	0.05	1.8
0128	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 21	ア	4.0	3.9	2.5	0.06	1.9
0129	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 21	ア	3.9	3.7	3.2	0.06	1.6
0130	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 21	ア	3.5	3.4	1.7	0.04	1.8
0131	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 21	ア	4.5	4.2	2.3	0.06	1.8
0133	白玉	礫石	河川2	3	-3 F 21	ア	4.5	4.1	1.9	0.04	欠損

測定 番号	種類	石種	加工位置			属性 (単位: mm/g)					備考			
			通線径	線径	グリップ	長さ	幅	厚さ	重量	孔距				
0004	白玉	磨石	河川2	3	3	F	21	ア	5.8	3.3	1.9	0.06	欠損	
0007	白玉	未成品	磨石	河川2	3	3	F	21	ア	6.6	6.0	3.0	0.19	1.5
0008	白玉	未成品	磨石	河川2	3	3	F	21	ア	6.8	5.7	3.2	0.12	1.6
0009	白玉	磨石	河川2	3	3	F	21	ア	5.3	5.3	2.6	0.11	2.1	
0041	白玉	磨石	河川2	3	3	F	21	ア	4.9	4.8	2.7	0.12	1.9	
0042	白玉	磨石	河川2	3	3	F	21	ア	4.9	4.8	2.2	0.09	1.9	
0043	白玉	磨石	河川2	3	3	F	21	ア	4.6	4.5	2.3	0.08	1.6	
0044	白玉	磨石	河川2	3	3	F	21	ア	4.2	4.1	2.0	0.05	1.8	
0045	白玉	磨石	河川2	3	3	F	21	ア	3.4	3.3	2.6	0.04	1.8	
0046	白玉	磨石	河川2	3	3	F	21	ア	3.8	3.4	1.5	0.03	1.6	
0047	白玉	磨石	河川2	3	3	F	21	イ	5.3	5.3	2.7	0.12	2.1	
0048	玉髄	森林	磨石	河川2	3	3	F	21	イ	8.4	5.7	2.7	0.14	
0050	白玉	磨石	河川2	3	3	F	21	ウ	5.3	5.2	2.4	0.11	1.9	
0051	白玉	磨石	河川2	3	3	F	21	ウ	4.8	4.2	1.9	0.06	1.9	
0052	白玉	磨石	河川2	3	3	F	21	エ	5.0	4.9	2.1	0.08	1.9	
0053	白玉	未成品	磨石	河川2	3	3	F	21	エ	7.4	6.7	2.9	0.20	1.7
0054	白玉	磨石	河川2	3	3	F	21		4.1	4.0	2.3	0.06	1.7	
0055	白玉	磨石	河川2	3	3	F	21		4.7	4.3	3.2	0.10	1.4	
0056	玉髄	森林	磨石	河川2	3	3	F	21		6.9	5.3	2.5	0.12	
0058	白玉	磨石	河川2	3	3	F	21		4.6	4.4	3.6	0.10	1.9	
0059	白玉	未成品	磨石	河川2	3	3	F	21		8.1	3.3	2.8	0.11	欠損
0060	白玉	未成品	磨石	河川2	3	3	F	21		7.4	3.3	2.3	0.08	欠損
0061	玉髄	森林	磨石	河川2	3	3	F	21		11.3	4.6	2.8	0.16	
0062	白玉	磨石	河川2	3	3	F	21		4.3	4.1	1.5	0.03	2.0	
0063	玉髄	森林	磨石	河川2	3	3	F	22	ア	18.2	10.3	8.2	1.46	
0064	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ア	4.8	4.7	2.2	0.08	2.2	
0066	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ア	4.6	4.5	2.3	0.07	1.8	
0067	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ア	4.3	4.2	3.1	0.08	1.8	
0068	玉髄	森林	磨石	河川2	3	3	F	22	ア	13.1	7.0	2.2	0.26	
0069	玉髄	森林	磨石	河川2	3	3	F	22	ア	8.5	5.6	3.3	0.22	
0070	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ア	5.3	5.2	2.5	0.12	2.1	
0071	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ウ	4.8	4.7	2.4	0.07	2.2	
0072	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ウ	4.3	4.2	2.8	0.09	1.7	
0073	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ウ	4.3	4.0	3.0	0.10	1.7	
0074	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ウ	4.3	4.2	2.4	0.09	1.7	
0075	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ウ	4.6	4.5	3.1	0.12	1.8	
0076	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ウ	4.2	4.1	3.1	0.10	1.7	
0077	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ウ	5.8	5.3	2.5	0.12	2.1	
0078	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ウ	4.3	4.2	1.7	0.04	1.9	
0079	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ウ	4.2	4.0	2.7	0.07	1.8	
0080	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ウ	4.2	4.1	2.6	0.08	1.7	
0082	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ウ	4.3	4.2	2.7	0.09	1.6	
0083	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ウ	4.0	3.9	2.8	0.07	1.8	
0084	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ウ	3.9	3.7	2.6	0.06	1.9	
0085	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ウ	4.2	4.1	2.0	0.06	1.7	
0086	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ウ	4.0	3.9	1.9	0.05	1.7	
0087	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ウ	4.3	4.1	1.7	0.05	1.5	
0088	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ウ	4.2	3.9	3.1	0.06	2.0	
0089	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ウ	4.1	3.8	2.7	0.06	2.1	
0090	白玉	磨石	河川2	3	3	F	22	ウ	4.3	2.5	2.1	0.04	欠損	
0091	白玉	未成品	磨石	河川2	3	3	F	22	ウ	7.1	6.7	3.0	0.20	1.5
0093	白玉	未成品	磨石	河川2	3	3	F	22	ウ	7.6	6.1	2.7	0.23	
0094	白玉	磨石	河川2	3	4	F	13	エ	4.0	3.7	1.6	0.04	1.7	
0096	白玉	磨石	河川2	3	4	F	25	イ	4.1	4.0	2.1	0.05	2.0	
0097	白玉	磨石	河川2	3	4	F	25	イ	4.0	3.9	2.1	0.04	1.7	
0098	白玉	未成品	磨石	河川2	3	4	F	25	イ	8.1	7.2	2.8	0.25	1.4
0099	白玉	未成品	磨石	河川2	3	4	F	25	イ	6.0	5.0	1.9	0.09	1.5
1100	白玉	磨石	河川2	3	4	F	25	エ	5.0	4.9	3.4	0.15	1.7	
1101	白玉	磨石	河川2	3	4	F	25	エ	3.6	3.3	1.9	0.03	1.5	

観 察 表

前波南遺跡 木製品観察表

報告番号	整理番号	分析番号	器種・形状	素材	本器り	加工位置			長さ 口徑	幅 底径	厚さ 器高	備考			
						遺物番号	部位	加工法							
148	419	8	田下駄	スギ	縦目	SX	35	2	F	21	300	358	27		
149	453	22	神杖	スギ	横出丸神	丸	77	-	E	22	335	26	24	例3つてい-6	
150	423		大足	-	縦目	SX	25	1	3	E	19	90	35	16	取No.3/5
151	424		大足	-	縦目	SX	25	1	3	E	19	177	32	15	取No.2
152	425		大足	-	縦目	SX	25	1	3	E	19	225	40	18	取No.3/7
153	427		大足	-	縦目	SX	25	1	3	E	19	200	47	17	取No.3/10
154	428		大足	-	縦目	SX	25	1	3	E	19	227	38	19	取No.3/6
155	429		大足	-	縦目	SX	25	1	3	E	19	235	39	19	取No.3/1
156	415	5	大足	スギ	縦目	SD	1	1	3	E	21	437	54	17	取No.3/22
157	407		大足	-	縦目	SD	1	1	2	E	25	210	31	17	取No.3/28
158	411		大足	-	縦目	SD	1	1	3	E	21	201	32	16	取No.3/46
159	416	6	大足	スギ	縦目	SD	1	1	3	E	22	301	33	19	取No.3/21
160	432		大足	-	縦目			3	E	18	266	31	15		
161	409		大足	-	縦目			3	E	20	262	32	19		
162	406		大足	-	縦目			3	E	22	213	30	15	取No.3/20	
163	408		大足	-	縦目			3	F	1	231	32	17	取No.3/23	
164	430		大足	-	縦目			3	F	3	143	33	18		
165	431	13	人形?	スギ	縦目	SD	1	1	3	E	18	251	41	16	取No.3/14
166	420	9	木盤	スギ	縦目?	SD	1	1	F	9	172	25	3	「出雲高山」	
167	486	43	葉状木製品	スギ	横出丸神	SD	1	1	F	9.4	194	10	9		
168	440		器物 底板	-	縦目	河川	1	1	E	24.4	162	62	10	断面に木打2ヶ所(120mm)	
169	405	3	人形?	スギ	縦目	河川	1	1	F	4.9	248	71	26		
170	447		板状	-	縦目	SW	2	1			365	85	16	取No.3	
171	477	37	板状	スギ	縦目	SW	2	1			728	162	18	取No.26 円孔有り	
172	467	44	棒状	スギ	分置角材	SW	2				666	37	25	取No.11	
173	485		矢板	-	縦目	SW	2	1			1,076	125	61	取No.3	
174	492		板状	-	縦目	SW	2	1			2,521	125	31	取No.6	
175	455	24	田下駄	スギ	縦目	SW	2	1			469	231	141	取No.7	
176	463		板状	-	縦目	河川	1	1	F	4.9	1,214	115	43		
177	462		不明	-	縦目	河川	1	1	F	2	134	40	11	円孔有り	
178	421	10	楕形 鏡形	スギ	縦目	河川	1	1	E	22.9	116	27	4		
179	422	11	楕形 鏡形	スギ	縦目	河川	1	1	E	22	209	30	4		
180	461	29	板状	スギ	縦目	河川	1	1	E	21.4	892	41	12		
181	459		板状	-	縦目	河川	1	1	F	14	853	40	27		
182	434	14	楕形 鏡形	スギ	縦目	河川	1	1	F	18	125	37	5		
183	468	32	角材	スギ	縦目	河川	1	1	F	13	203	163	75		
184	488	45	加工木	アサギロ	志持丸木	河川	1	1	F	13 + 18	1,336	67	56		
185	491	48	板状	スギ	志持丸木	河川	1	1	F	13	977	262	178		
186	481	40	矢板	スギ	縦目	河川	1	1	F	24.7	504	128	53		
187	444		器物 底板	-	縦目	河川	1	1	G	2	140	143	8	断面に木打4ヶ所(142mm)	

報告番号	整理番号	分析番号	腐蝕・形状	腐蝕	本取り	加工位置				長さ 目録 mm	幅 目録 mm	厚さ 目録 mm	備考		
						連絡番号	部位	ドリッド							
188	443		虫物 腐蝕	-	縦目	河川	1	粘土	1	G	2	316	114	8	断面に4打2ヶ 径115mm
189	448		帆状	-	縦目	SW	1	下層 砂礫	1	G	4ア	352	50	24	
190	452	21	帆状	入平	分置内材	SW	1	Ⅱ'				428	28	18	取No.27
191	451		帆状	-	縦目	SW	1	Ⅱ'				522	85	14	取No.34
192	403	49	帆状	入平	縦目	SW	1					1,003	29	5	取No.8
193	494		帆状	-	縦目	SW	1					1,692	46	5	取No.11
194	441		虫物 腐蝕	-	縦目	河川	2	風結土 泥上	-3	F	5ウ	161	92	8	断面に4打2ヶ 径161mm
195	435		虫物 腐蝕	-	縦目	河川	2	Ⅰ	-3	F	7	100	27	7	取No.147 断面に4打1ヶ 径100mm
196	439		虫物 腐蝕	-	縦目	河川	2	2	-3	F	14	115	110	6	取No.397 河床砂下層 断面に4打3ヶ 径112mm
197	412		虫物 腐蝕	-	縦目	河川	2	2	-3	F	19	115	76	8	取No.511 断面 断面に4打2ヶ 径115mm
198	417		虫物 腐蝕	-	縦目	河川	2	Ⅰ	-3	F	23	359	117	7	写点No.379 断面に4打3ヶ 径110mm
199	433		虫物 腐蝕	-	縦目	河川	2	Ⅰ	-3	G	15	364	125	9	取No.226 断面に4打3ヶ 径164mm
200	403	1	人形	入平	縦目	河川	2	Ⅰ	-3	F	22	154	31	8	
201	404	2	不明 (二股)	入平	断面砂	河川	2	Ⅰ	-3	F	14	257	34	22	
202	470	33	棒状	入平	断面丸棒	河川	2	下層	-4	F	15	798	38	35	取No.797
203	478	38	部材	入平	分置帆状 (縦目)	河川	2	上層	-3	G	10	642	79	35	取No.224 方形取り有り
204	466		不明	-	縦目	河川	2	中層	-3	F	22	210	52	16	取No.435 方形取り有り
205	483	41	帆状	入平	縦目	河川	2	下層	-3	F	21	802	102	23	取No.488
206	457	26	部材	入平	縦目	河川	2	下層	-3	F	17	1,134	142	30	
207	490	47	部材	入平	縦目	河川	2	下層 泥上	-4	F	9-10 18-15	1,372	310	50	
208	456	25	部材	入平	縦目	河川	2	下層	-4	F	15 20	1,349	174	30	
209	409		帆状	-	縦目	河川	2	下層	-3	F	23	297	105	8	取No.382
210	479		帆状	-	縦目	河川	2	下層	-4	F	15	250	83	14	取No.808
211	473	35	帆状	入平	縦目	河川	2	上層~ 下層	-3	G	4	604	80	30	取No.303 口っぺい
212	467		帆状	-	縦目	河川	2	下層	-3	F	22	617	144	23	中央ベルト内
213	489	46	帆状	入平	縦目	河川	2	上層	-3	G	4、9 10	1,999	112	16	取No.225
214	476		矢板	-	縦目	河川	2	下層	-3 3	F G	22 2	1,359	137	42	取No.526 (中央ベルト)
215	464	30	矢板	入平	縦目	河川	2	下層	-3	F	22	1,208	283	34	取No.521
216	471		矢板	-	縦目	河川	2	下層	-3	F	17	596	196	18	取No.480
217	465	31	矢板	入平	縦目	河川	2	上層~ 中層	-3	G	4	655	93	23	取No.271 口っぺい
218	460	28	帆	入平	分置内材	河川	2	-	-3	F	21	721	157	38	帆118
219	456	27	帆	入平	分置帆状 (縦目)	河川	2	-	-3	F	19	869	75	32	帆102
220	475		帆状	-	縦目	河川	2	上層	-3	G	4	641	42	32	取No.397
221	480	39	帆状	入平	分置(文字 少減)	河川	2	下層	-4	F	15	660	53	42	取No.786
222	474	36	帆状	入平	分置内材	河川	2	下層	-3	F	22	530	45	33	取No.454
223	484	42	帆状	入平	縦目	河川	2	Ⅱ' ~ 上層	-4	F	19	725	86	24	
224	472	34	帆	入平	縦目	河川	2	上層	-3	G	4	688	63	26	取No.259
225	482		帆状	-	縦目	河川	2	上層~ 下層	-3	F	24	732	69	25	取No.359 口めになっている
226	436	15	型	ケヤキ	熊本地 盤目取			Ⅱ'	-2	F	24ウ (=7)	207	184	15	
227	436	17	漆部 材	ケヤキ	熊本地 盤目取			Ⅱ	1	F	11	-	-	-	川床目 (内) 漆部+漆部 (外) 漆部+漆部+漆部
228	443	18	漆部 材	ケヤキ	熊本地 盤目取			Ⅱ	-1	F	8	-	-	-	(内側) 漆部

観 察 表

観号 番号	標準 番号	分類 番号	種類・形状	規格	本取り	出土位置				長さ 口徑	幅 底径	厚さ 底高	備考	
						遺構番号		グリッド						
						層位								mm
229	454	23	動物 骨・瓦板	大平	観取：柱目 瓦板・板目		II'	2	G	1	119	123	38	取No.130 断面に本打3× 底板厚：116mm
230	446	19	動物 骨・瓦板	大平	観取：柱目 瓦板・板目		III	-2	F	23	129	124	34	取No.117 底板厚：111mm
231	445		動物 瓦板	-	板目		III	-3	F	20	-	119	37	取No.128 断面に本打4× 底板厚：107mm
232	410		動物 瓦板	-	板目		II'	-3	F	20×	131	111	6	取No.136 断面に本打3× 径131mm
233	413		動物 瓦板	-	板目		III	-2	G	1	107	108	7	取No.118 断面に本打3× 径108mm
234	402		動物 瓦板	-	板目		II'	-2	F	24×	163	161	8	断面に本打4× 径162mm
235	401		動物 瓦板	-	板目		II'	-2	F	8	158	60	8	断面に本打2× 径160mm
236	414	4	人形	大平	板目		II'	-3	F	20×	128	34	6	取No.135
237	426	12	駒	ツツ瓦	芯持丸木		II	1	F	3	93	95	13	
238	437	16	駒身	大平	板目		III	-2	G	1	289	93	45	取No.119
239	450	20	下駄	大平	板目		II	2	F	3	269	78	21	240と一対か
240	449		下駄	-	板目		II	2	F	7	162	64	20	239と一対か
241	418	7	田下駄? (大足)	大平	板目		II	2	F	11	408	95	15	
-	50		白磁本	トネリコ蓋 (板取)	-	河川	2	5			-	-	-	

前波南遺跡 銭貨観察表

観号 番号	標準 番号	銭貨名	名称	王 朝	製造年 (西暦)	出土位置				外径 mm	内径 mm	内径 mm	銭厚 mm	重さ g	備考	
						層位		グリッド								
						層位										mm
242	323	開元通寶	-	唐	621	II	2	F	7	25.25	25.00	6.35	6.60	1.20	2.9	
243	301	開元通寶	-	唐	621	II	-3	F	20	24.25	24.25	6.75	6.75	0.90	2.5	「背下月」
244	323	太平通寶	-	北宋	976	II	-2	F	22	24.30	24.30	5.90	5.65	1.60	2.6	
245	327	咸平元寶	-	北宋	998	I	1	G	2	22.90	21.80	5.35	5.50	0.70	1.7	
246	210	天聖元寶	兼清	北宋	1023	II	1	E	21	24.70	24.90	7.50	7.55	0.95	2.5	
247	304	天聖元寶	兼清	北宋	1023	II	1	F	9	23.95	23.90	7.95	7.40	0.95	2.1	
248	322	景祐元寶	-	北宋	1034	II	-2	F	4	21.90	22.40	6.00	5.90	0.90	1.7	
249	315	景祐元寶	-	北宋	1034	兼清	-3	G	-	23.50	23.55	7.20	6.80	0.80	2.1	
250	328	嘉祐通寶	兼清	北宋	1056	II	2	E	18	24.00	23.65	7.15	7.05	1.05	2.9	
251	324	嘉祐元寶	兼清	北宋	1064	II	4	F	2	22.30	22.60	6.40	6.10	1.60	1.6	
252	306	熙寧元寶	兼清	北宋	1068	II	1	F	21	23.30	23.30	6.65	6.85	0.90	2.1	
253	309	元豐通寶	行清	北宋	1078	II	-1	G	4	24.00	24.30	6.50	6.60	0.90	2.3	読み入り
254	302	元祐通寶	行清	北宋	1086	II	-2	G	14	22.45	22.45	6.10	5.65	0.90	2.6	
255	321	紹聖元寶	兼清	北宋	1094	II	3	E	16	23.40	23.40	5.90	6.25	1.60	2.4	
256	331	紹聖元寶	兼清	北宋	1094	II	-3	F	10	24.40	24.40	6.30	6.35	1.25	4.1	
257	316	聖宋元寶	兼清	北宋	1101	II	3	F	16	22.60	22.60	6.00	5.80	1.20	2.5	
258	312	聖宋元寶	行清	北宋	1101	II	2	F	9	22.30	23.35	6.70	6.70	1.30	2.6	
259	326	大觀通寶	-	北宋	1107	II	2	F	23	23.25	23.60	6.35	6.40	0.75	(1.2)	
260	311	政和通寶	兼清	北宋	1111	II	4	E	22	24.45	24.40	6.25	6.35	1.60	2.6	
261	330	嘉祐通寶	-	南宋	1208	II	-3	F	10	23.70	23.70	6.25	6.20	1.20	3.1	「背下三」
262	308	洪武通寶	-	明	1368	II	1	E	21	23.30	23.20	5.80	5.70	0.95	2.4	寧波南遺跡
263	302	洪武通寶	-	明	1368	II	-2	G	10	23.55	23.60	5.35	5.20	1.60	2.9	銭熱?
264	314	不明	-	-	-	II	4	E	25	(22.85)	(11.25)	-	-	1.15	(1.0)	遺存率5/12 「□□元寶」
265	313	不明	-	-	-	II	2	F	12	(8.60)	(11.40)	-	-	1.05	(0.4)	遺存率5/12 「□□□□」
266	329	寛永通寶	古銭本	江戸	1636	II	3	E	11	24.70	24.85	5.75	5.70	1.60	2.6	
267	317	寛永通寶	古銭本	江戸	1636	I	1	F	21	24.80	24.65	5.30	5.50	1.10	3.5	
268	307	寛永通寶	古銭本	江戸	1636	II	-1	F	9	24.50	24.40	6.00	6.00	0.90	2.6	
269	318	寛永通寶	古銭本	江戸	1636	II	-2	F	7	24.05	24.10	5.35	5.40	1.10	3.2	
270	319	寛永通寶	新銭本	江戸	1697	I	1	F	19	22.90	22.85	6.80	6.80	0.70	1.6	
271	305	寛永通寶	新銭本	江戸	1697	II	-1	F	24	24.50	24.40	5.60	5.60	1.05	3.0	
272	320	寛永通寶	新銭本	江戸	1697	II	-3	G	10	23.20	23.20	6.45	6.45	0.90	2.0	

伝極楽寺跡 遺構観察表 掘立柱建物・礎石建物

SB1

図版番号	39・67	グリッド	5D・6D	新行 (m)	6.9	梁行 (m)	2.2	床面積	15.2	時期	I期	構造	部材	長軸方向	南北
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	礎石高 (m)	底面高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	距離 (m)	向き	N37° E (I群)				
115	楕円	階段状	92	64	18.0	17.4	0.56	115-116	3.22	柱穴間隔	距離 (m)				
116	円	台形状	36	32	18.0	17.7	0.32	116-117	3.62	117-118	1.94				
117	楕円	階段状	52	40	17.9	17.3	0.54	118-119	3.56						
118	楕円	扇形状	36	34	17.8	17.3	0.50	119-120	3.44						
119	楕円	U字状	34	32	17.7	17.4	0.35	115-120	2.02	出土遺物					
120	楕円	扇形状	92	76	17.9	17.5	0.42	116-119	2.38	-					

SB2a

図版番号	33・67	グリッド	6D・6E	新行 (m)	6.0	梁行 (m)	5.6	床面積	33.6	時期	I期	構造	部材	長軸方向	南北
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	礎石高 (m)	底面高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	距離 (m)	向き	N37° E (I群)				
103	円	台形状	30	28	17.4	17.2	0.24	103-104	2.20	柱穴間隔	距離 (m)				
104	円	台形状	36	32	17.5	17.1	0.30	104-105	1.96	127-122	2.76				
105	円	U字状	40	38	17.4	17.0	0.38	105-113	2.08	105-620	2.68				
113	楕円	台形状	34	30	17.4	17.3	0.07	126-127	1.50	620-621	2.86				
126	楕円	U字状	34	24	17.4	17.3	0.13	127-620	2.24	113-129	2.60				
127	円	U字状	24	22	17.4	16.9	0.50	630-129	2.02	129-124	3.12				
620	楕円	扇形状	20	18	17.4	17.2	0.10	121-122	1.56						
129	楕円	扇形状	26	20	17.3	17.2	0.12	122-621	2.22						
121	楕円	階段状	52	40	17.7	17.5	0.27	621-124	2.24						
122	楕円	台形状	60	48	17.6	17.4	0.19	109-126	2.62						
621	楕円	扇形状	40	36	17.5	17.1	0.35	126-121	2.82	出土遺物					
124	円	扇形状	32	30	17.6	17.2	0.36	104-127	2.78	-					

SB2b

図版番号	33・67	グリッド	6D・7D	新行 (m)	6.8	梁行 (m)	2.4	床面積	16.3	時期	I期	構造	部材	長軸方向	東西
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	礎石高 (m)	底面高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	距離 (m)	向き	N35° E (I群)				
274	-	台形状	-	22	17.4	17.3	0.14	274-622	1.58	柱穴間隔	距離 (m)				
622	楕円	U字状	28	24	17.3	17.0	0.30	622-623	2.54	623-626	2.36				
623	円	U字状	22	20	17.5	17.1	0.45	623-271	1.74	271-276	2.50				
271	楕円	U字状	40	32	17.6	17.1	0.62	271-624	0.98	624-625	2.54				
624	円	U字状	24	22	17.7	17.5	0.23	114-627	1.80						
114	円	U字状	24	24	17.5	17.1	0.37	627-125	0.58						
627	楕円	U字状	34	26	17.4	17.1	0.33	125-626	1.98						
125	楕円	弧状	38	34	17.4	17.2	0.16	636-276	1.84						
626	楕円	台形状	44	36	17.5	17.3	0.11	676-625	0.88						
276	円	扇形状	32	30	17.6	17.3	0.29	274-114	2.38	出土遺物					
625	円	台形状	24	24	17.6	17.5	0.10	622-627	2.38	-					

SB3

図版番号	34・68	グリッド	6D・7D	新行 (m)	5.0	梁行 (m)	2.3	床面積	11.5	時期	I期	構造	部材	長軸方向	東西
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	礎石高 (m)	底面高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	距離 (m)	向き	N19° W (I群)				
134	楕円	台形状	46	40	17.4	17.1	0.22	134-136	2.96	柱穴間隔	距離 (m)				
136	楕円	扇形状	40	34	17.4	17.0	0.38	136-137	1.86	137-696	2.20				
137	円	U字状	34	32	17.5	17.3	0.21	696-131	2.04						
696	楕円	U字状	32	28	17.7	17.4	0.26	131-132	2.02						
131	円	U字状	50	48	17.6	17.3	0.32	132-133	1.02						
132	円	U字状	28	26	17.5	17.1	0.37	134-133	2.46	出土遺物					
133	円	弧状	28	26	17.5	17.3	0.17	136-131	2.24	-					

SB4

図版番号	34・68	グリッド	6D	新行 (m)	6.6	梁行 (m)	4.2	床面積	27.7	時期	I期	構造	部材	長軸方向	南北
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	礎石高 (m)	底面高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	距離 (m)	向き	N38° E (I群)				
633	楕円	台形状	40	26	17.4	17.3	0.16	633-111	2.12	柱穴間隔	距離 (m)				
111	円	扇形状	36	32	17.4	17.2	0.27	111-638	3.42	1423-634	1.98				
638	楕円	台形状	40	28	17.4	17.2	0.27	638-133	1.04	124-635	1.70				
133	円	U字状	28	26	17.5	17.3	0.18	141-142	1.82	638-636	4.24				
141	円	台形状	40	40	17.6	17.4	0.25	142-124	1.64	133-604	2.16				
142	楕円	U字状	-	28	17.7	17.5	0.20	124-604	2.66	604-637	2.10				
124	円	階段状	34	32	17.6	17.2	0.36	138-634	2.08						
604	楕円	台形状	36	32	17.6	17.4	0.23	634-635	1.56						
138	楕円	弧状	40	36	17.8	17.3	0.46	635-636	1.70						
634	楕円	U字状	40	34	17.7	17.3	0.39	636-637	1.28						
635	円	U字状	20	20	17.7	17.3	0.37	633-141	2.38						
636	楕円	U字状	46	42	17.8	17.3	0.55	141-128	1.92	出土遺物					
637	楕円	U字状	34	30	17.7	17.4	0.29	111-142	2.04	P504 (12)					

観 察 表

SB5

図版番号	35	グリッド	6D-7D	軒行 (m)	6.8	梁行 (m)	4.2	床面積	26.5	時期	1期	構造	総社	長軸方向	東西
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	礎高 (m)	底面高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	距離 (m)	向き	N32° E (1群)				
146	楕円	弧状	44	40	17.4	17.2	0.17	146-144	2.96	柱穴間隔	距離 (m)				
144	円	弧状	34	32	17.5	17.3	0.17	144-631	2.76	144-109	2.32				
631	楕円	階段状	42	36	17.8	17.3	0.41	628-109	3.38	109-108	1.84				
628	楕円	台形状	34	32	17.4	17.2	0.24	109-630	3.12	631-630	2.40				
109	楕円	台形状	38	20	17.4	17.2	0.25	630-632	0.74	630-629	1.92				
630	楕円	U字状	48	24	17.6	17.2	0.34	145-108	2.96	631-632	2.40				
632	楕円	台形状	44	40	17.6	17.3	0.27	108-629	2.94	632-629	1.98				
145	楕円	弧状	40	36	17.4	17.3	0.07	146-628	2.36						
108	楕円	U字状	-	-	17.5	17.3	0.22	628-145	1.86	出土遺物					
629	円	U字状	20	20	17.7	17.2	0.50	146-145	4.06						

SB6

図版番号	29	グリッド	8E	軒行 (m)	5.0	梁行 (m)	1.9	床面積	9.5	時期	1期	構造	総社	長軸方向	南北
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	礎高 (m)	底面高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	距離 (m)	向き	N17° E (1群)				
218	楕円	半円状	40	38	14.7	14.5	0.18	218-217	1.52	柱穴間隔	距離 (m)				
217	楕円	弧状	44	40	14.7	14.6	0.09	217-216	1.70	216-213	2.12				
216	楕円	U字状	34	30	14.7	14.5	0.16	216-215	1.66	215-214	2.16				
215	楕円	台形状	46	38	14.8	14.7	0.15	211-212	1.74						
211	楕円	弧状	58	40	14.7	14.6	0.09	212-213	2.00						
212	楕円	台形状	68	44	14.8	14.4	0.29	213-214	1.34						
213	楕円	階段状	60	50	14.8	14.4	0.43	218-211	1.74	出土遺物					
214	円	弧状	36	34	14.7	14.6	0.13	217-212	2.02	P211 (1)					

SB7

図版番号	29	グリッド	8E	軒行 (m)	3.6	梁行 (m)	3.6	床面積	13.0	時期	1期	構造	総社	長軸方向	南北
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	礎高 (m)	底面高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	距離 (m)	向き	N35° W (1群)				
230	楕円	U字状	36	32	14.7	14.4	0.31	230-617	1.18	柱穴間隔	距離 (m)				
617	楕円	U字状	40	32	14.8	14.5	0.31	617-618	1.68	230-613	0.94				
618	円	弧状	32	32	14.8	14.6	0.12	618-619	0.72	613-614	1.30				
619	円	弧状	32	32	14.8	14.7	0.08	216-221	0.94	614-615	0.78				
216	楕円	台形状	34	30	14.7	14.5	0.16	221-214	1.80	615-217	0.86				
221	円	台形状	32	32	14.8	14.6	0.10	214-220	0.76	217-616	1.02				
214	円	台形状	36	34	14.8	14.6	0.13	222-223	1.02						
220	円	弧状	44	44	14.8	14.7	0.10	223-224	1.80						
222	楕円	扇牛状	44	40	14.8	14.6	0.14	224-219	0.88						
223	楕円	扇牛状	44	40	14.8	14.6	0.23	230-216	1.46						
224	円	台形状	50	48	14.8	14.5	0.29	216-222	2.12						
219	楕円	U字状	54	48	14.7	14.5	0.21	617-221	1.54						
613	円	台形状	30	28	14.6	14.5	0.07	221-223	2.12						
614	円	台形状	30	22	14.7	14.6	0.14	618-214	1.42						
615	楕円	台形状	28	22	14.7	14.6	0.08	214-224	1.86						
217	楕円	台形状	44	40	14.7	14.6	0.09	619-220	1.68	出土遺物					
616	円	台形状	38	38	14.7	14.6	0.13	220-219	1.78						

SB8

図版番号	29	グリッド	8D-8E-8F-8G	軒行 (m)	5.4	梁行 (m)	4.3	床面積	23.2	時期	1期	構造	総社	長軸方向	南北
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	礎高 (m)	底面高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	距離 (m)	向き	N25° E (1群)				
610	円	台形状	32	30	14.6	14.4	0.17	610-206	1.24	柱穴間隔	距離 (m)				
206	楕円	弧状	48	44	14.5	14.3	0.19	206-204	1.96	229-226	1.86				
204	円	弧状	28	28	14.5	14.3	0.13	204-205	2.10	204-228	2.00				
205	円	台形状	32	32	14.4	14.2	0.28	611-229	1.42	228-227	2.26				
611	楕円	台形状	34	30	14.6	14.5	0.08	229-228	1.98	205-252	1.98				
229	楕円	半円状	34	28	14.6	14.5	0.14	228-252	2.12	252-612	2.46				
228	楕円	台形状	56	28	14.5	14.4	0.11	261-226	1.20						
252	円	U字状	34	32	14.5	14.3	0.25	226-227	1.98						
261	楕円	台形状	48	40	14.8	14.6	0.17	227-612	2.32						
226	円	半円状	36	34	14.7	14.6	0.15	610-611	2.06						
227	円	扇牛状	48	46	14.6	14.2	0.36	611-261	1.90	出土遺物					
612	楕円	台形状	52	40	14.7	14.6	0.16	206-229	2.28						

SB9

図版番号	29	グリッド	8E	新行 (m)	4.3	梁行 (m)	2.1	床面積	9.0	時期	I期	構造	館社	長軸方向	南北
穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	礎高 (m)	底高 (m)	深さ (m)	穴間隔	距離 (m)	軸き		N30° E (I群)			
608	円	U字状	40	38	14.7	14.5	0.14	608-234	2.26	穴穴間隔		距離 (m)			
234	円	階段状	28	26	14.7	14.4	0.27	234-233	2.06	233-232		距離 (m)		2.04	
233	楕円	台形状	72	42	14.6	14.4	0.28	609-231	2.22						
609	楕円	階段状	56	44	14.8	14.5	0.29	231-232	2.08						
231	楕円	台形状	40	32	14.8	14.5	0.25	608-609	2.12						出土遺物
232	楕円	U字状	40	36	14.7	14.2	0.52	234-231	2.12						P233 (3)

SB10

図版番号	30	グリッド	8E・9D・9E	新行 (m)	5.2	梁行 (m)	2.7	床面積	14.0	時期	I期	構造	館社	長軸方向	南北
穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	礎高 (m)	底高 (m)	深さ (m)	穴間隔	距離 (m)	軸き		N30° E (I群)			
262	円	半円状	56	54	14.6	14.4	0.19	262-263	1.32	穴穴間隔		距離 (m)			
263	楕円	台形状	24	22	14.6	14.5	0.13	263-264	2.12	264-260		距離 (m)		2.72	
264	楕円	階段状	28	26	14.5	14.3	0.22	264-606	1.58	606-607		距離 (m)		2.66	
606	楕円	台形状	64	48	14.5	14.3	0.17	261-265	1.56						
261	楕円	台形状	46	42	14.8	14.6	0.17	265-260	2.04						
265	円	階段状	38	36	14.7	14.5	0.26	260-607	1.68						
607	円	階段状	42	40	14.6	14.3	0.30	262-261	2.54						出土遺物
260	円	台形状	32	32	14.7	14.6	0.10	263-265	2.72						-

SB11

図版番号	30	グリッド	8E・9E	新行 (m)	3.9	梁行 (m)	3.1	床面積	12.1	時期	I期	構造	館社	長軸方向	南北
穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	礎高 (m)	底高 (m)	深さ (m)	穴間隔	距離 (m)	軸き		N130° W (I群)			
250	円	弧状	46	44	14.5	14.3	0.18	250-253	2.66	穴穴間隔		距離 (m)			
253	楕円	弧状	56	48	14.5	14.3	0.13	253-202	2.32	260-227		距離 (m)		0.50	
202	楕円	弧状	48	40	14.5	14.1	0.38	202-206	2.28						
206	円	弧状	46	44	14.5	14.3	0.19	206-209	2.12						
209	円	弧状	22	20	14.6	14.5	0.13	209-257	1.72						
257	円	弧状	38	36	14.6	14.5	0.13	257-227	2.26						
227	円	U字状	48	46	14.6	14.3	0.39	251-266	1.76						
203	円	半円状	28	26	14.5	14.3	0.15	266-203	2.42						
266	楕円	弧状	62	28	14.4	14.3	0.15	203-208	1.54						
251	円	半円状	44	44	14.5	14.2	0.27	208-207	0.36						
208	楕円	U字状	34	30	14.5	14.2	0.26	207-259	1.28						
207	楕円	弧状	46	36	14.5	14.3	0.24	259-258	1.72						
259	円	階段状	34	32	14.6	14.4	0.19	258-260	1.76						
258	楕円	台形状	60	40	14.6	14.2	0.40	250-251	0.76						
260	円	U字状	42	40	14.6	14.3	0.30	251-254	1.12						
254	楕円	台形状	62	40	14.5	14.3	0.25	254-255	0.46						出土遺物
255	楕円	半円状	50	44	14.5	14.4	0.16	255-260	1.38						-

SB12

図版番号	30	グリッド	8E・9E	新行 (m)	4.1	梁行 (m)	2.6	床面積	10.7	時期	I期	構造	館社	長軸方向	南北
穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	礎高 (m)	底高 (m)	深さ (m)	穴間隔	距離 (m)	軸き		N29° E (I群)			
601	楕円	台形状	36	32	14.6	14.5	0.17	601-603	1.94						
603	楕円	U字状	36	34	14.6	14.4	0.22	602-604	1.96						
602	円	台形状	44	36	14.8	14.7	0.15	604-605	2.12						
604	円	台形状	38	36	14.7	14.5	0.15	601-602	2.46						出土遺物
605	楕円	弧状	32	24	14.6	14.5	0.09	603-604	2.74						-

SB13

図版番号	35	グリッド	6D	新行 (m)	7.6	梁行 (m)	3.7	床面積	28.1	時期	I期	構造	館社	長軸方向	南北
穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	礎高 (m)	底高 (m)	深さ (m)	穴間隔	距離 (m)	軸き		N34° E (I群)			
639	楕円	台形状	60	36	17.7	17.5	0.24	639-641	0.48	穴穴間隔		距離 (m)			
641	楕円	U字状	48	36	17.7	17.2	0.42	641-643	1.50	643-631		距離 (m)		1.46	
643	円	U字状	18	16	17.6	17.2	0.38	643-646	1.64	631-645		距離 (m)		2.08	
646	円	U字状	34	32	17.5	17.2	0.30	646-649	1.68	646-647		距離 (m)		1.72	
649	円	U字状	30	28	17.6	17.1	0.54	649-652	1.12	647-648		距離 (m)		2.06	
652	楕円	U字状	32	28	17.5	17.2	0.33	652-655	1.64	649-650		距離 (m)		1.90	
655	楕円	U字状	24	20	17.6	17.4	0.16	631-647	1.36	650-651		距離 (m)		2.08	
631	楕円	U字状	42	36	17.8	17.4	0.41	647-650	1.82	652-629		距離 (m)		1.76	
647	楕円	U字状	30	28	17.5	17.3	0.22	650-629	1.20	629-654		距離 (m)		2.06	
650	円	U字状	22	20	17.8	17.6	0.32	629-656	1.68	655-656		距離 (m)		1.64	
629	円	U字状	20	18	17.7	17.3	0.50	640-642	0.36	656-657		距離 (m)		2.16	
656	楕円	U字状	36	30	17.7	17.3	0.32	642-645	1.52						
640	円	U字状	32	30	17.9	17.4	0.48	645-648	1.60						

観 察 表

642	円	U字状	24	22	17.9	17.4	0.48	648-651	1.72		
645	円	U字状	28	26	17.8	17.5	0.24	651-654	1.26		
648	楕円	U字状	30	20	17.8	17.5	0.27	654-657	1.54		
651	円	U字状	30	26	17.8	17.6	0.25	639-640	3.68		
654	楕円	U字状	40	20	17.7	17.6	0.11	641-642	3.78		出土遺物
657	楕円	U字状	22	18	17.5	17.4	0.16				

SB14

探検番号	36	グリッド	形状	長径 (cm)	短径 (cm)	敷設高 (m)	深さ (m)	穴間隔	68.4	時期	I 期	構造	総括	長径方向	東西
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ高 (m)	穴間隔 (m)	深さ (m)	穴間隔	距離 (m)	向き	N5° W (日群)				
696	楕円	U字状	32	24	17.5	17.3	0.22	696-681	1.90	柱穴間隔		距離 (m)			
681	円	弧状	36	32	17.5	17.5	0.04	681-691	4.26	684-685					1.84
691	楕円	U字状	72	52	17.5	17.2	0.29	682-686	2.16	686-687					2.26
682	円	台形状	32	32	17.4	17.3	0.14	686-692	2.20	687-637					2.44
686	円	U字状	32	32	17.5	17.2	0.25	638-687	3.76	637-689					2.24
692	楕円	階段状	60	56	17.5	17.1	0.44	687-693	2.18	689-690					2.28
638	楕円	台形状	40	24	17.4	17.2	0.28	131-271	1.48	691-692					2.06
687	楕円	U字状	30	24	17.6	17.2	39.00	271-637	2.20	692-693					2.42
693	楕円	U字状	84	56	17.6	17.1	0.50	637-694	2.22	693-694					2.38
131	円	U字状	28	28	17.6	17.3	0.33	679-684	1.42	694-672					2.26
271	楕円	階段状	42	28	17.6	17.1	0.52	689-672	2.18	672-511					2.26
637	楕円	U字状	34	28	17.7	17.4	0.29	680-685	1.50						
694	楕円	U字状	40	36	17.7	17.3	0.41	685-690	2.30						
679	楕円	U字状	22	18	17.6	17.4	0.17	690-511	1.86						
684	円	U字状	26	26	17.7	17.5	0.20	696-638	4.22						
689	楕円	弧状	36	34	17.6	17.4	0.14	638-131	2.24						
672	楕円	階段状	68	46	17.8	17.3	0.57	131-679	2.96						
680	円	U字状	24	22	17.8	17.5	0.36	679-680	1.78						
685	楕円	台形状	34	24	17.9	17.7	0.17	681-682	2.02						
690	円	U字状	22	20	17.9	17.6	0.32	682-271	4.62						出土遺物
511	円	U字状	34	34	17.9	17.4	0.47	271-684	2.88						PS11 (5)

SB15

探検番号	37	グリッド	形状	長径 (cm)	短径 (cm)	敷設高 (m)	深さ (m)	穴間隔	118.6	時期	I 期	構造	総括	長径方向	東西
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ高 (m)	穴間隔 (m)	深さ (m)	穴間隔	距離 (m)	向き	N13° W (日群)				
659	楕円	階段状	34	28	17.5	17.4	0.16	659-667	4.96	柱穴間隔		距離 (m)			
667	楕円	台形状	48	36	17.6	17.4	0.17	667-673	2.60	662-130					2.48
673	楕円	台形状	68	54	17.6	17.3	0.29	658-660	2.58	130-663					2.48
658	楕円	U字状	64	40	17.5	17.1	0.35	660-664	2.42	664-665					2.48
660	円	U字状	30	30	17.4	17.2	0.29	664-668	2.60	665-666					2.52
664	円	U字状	32	30	17.6	17.4	0.15	668-670	1.10	666-403					2.48
668	楕円	U字状	48	42	17.5	17.3	0.21	670-674	1.40	403-521					2.10
670	楕円	階段状	58	40	17.5	17.2	0.28	145-661	2.50	667-668					2.56
674	円	台形状	42	42	17.6	17.3	0.21	661-665	2.56	668-669					2.48
145	楕円	弧状	40	36	17.4	17.3	0.07	665-669	2.40	669-513					2.70
661	楕円	U字状	44	36	17.4	17.1	0.36	669-671	1.28	513-519					2.24
665	楕円	U字状	48	42	17.5	17.2	0.34	671-675	1.28	519-512					2.40
669	円	U字状	26	26	17.6	17.2	0.46	662-666	2.54	670-671					2.52
671	楕円	階段状	60	56	17.6	17.2	0.47	666-513	2.56	671-514					2.60
675	円	U字状	40	36	17.7	17.3	0.38	513-514	1.20	514-672					2.46
662	円	U字状	40	36	17.6	17.1	0.53	514-676	1.32	672-511					2.28
666	円	台形状	64	62	17.6	17.2	0.39	137-130	2.48	673-674					2.50
513	楕円	U字状	42	32	17.7	17.3	0.40	130-403	2.52	674-675					2.66
514	楕円	U字状	34	30	17.7	17.3	0.39	403-519	2.44	675-676					2.38
676	楕円	U字状	94	32	17.7	17.3	0.37	519-672	1.50	676-677					2.46
137	円	U字状	36	32	17.5	17.3	0.22	672-677	1.16	677-509					2.42
130	円	U字状	40	40	17.6	17.1	0.48	122-663	2.60						
403	楕円	U字状	72	60	17.8	17.3	0.49	663-521	2.12						
519	楕円	U字状	40	36	17.6	17.2	0.44	521-512	2.42						
672	楕円	階段状	68	48	17.8	17.3	0.57	512-511	1.60						
677	楕円	弧状	60	52	17.9	17.4	0.53	511-509	1.06						
122	円	台形状	44	40	17.6	17.4	0.18	658-145	2.46						出土遺物
663	円	U字状	48	46	17.6	17.2	0.40	145-137	5.02						
521	楕円	U字状	64	28	17.8	17.3	0.48	137-122	2.52						
512	楕円	U字状	64	44	17.9	17.2	0.70	659-660	2.54	PS11 (5)・PS12 (7)・PS21 (4) PS09 (珠洲)・PS13 (土師器)・ PS14 (土師器)・PS19 (珠洲)					
511	円	U字状	34	34	17.9	17.4	0.47	660-661	2.54						
509	楕円	U字状	38	32	17.9	17.3	0.58	661-662	2.50						

礎石建物

図面番号	30	グリッド	8E-9E	新行 (m)	-	梁行 (m)	-	床面積	-	時期	1期	構造	-	基礎形式	-
礎石番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	基礎高 (m)	花高 (m)	厚さ (m)	礎石間隔	距離 (m)	向き	N22° W (日群)				
1	-	-	58	32	14.6	14.4	0.28	1-2	1.92						
2	-	-	84	52	14.7	14.4	0.28	2-3	1.90						
3	-	-	48	42	14.8	14.5	0.22	3-4	1.74						
4	-	-	62	36	14.8	14.7	0.18	4-5	1.90						
(5)	-	-	-	-	-	-	-	5-6	1.78						出土遺物
6	-	-	50	30	14.8	14.6	0.20								-

観 察 表

伝来乗跡 遺物観察表

(胎土石=石瓦、白=白色粒子、赤=赤色粒子、黒=黒色粒子、長=長石、雲=雲母、骨=海綿骨針、砂=砂)

向 番 号	企 業 名	種 別	通 路	ア ラ ブ	解 説	1層 m	2層 m	3層 m	包 装			取 出 部 位	製 作 年 代	製 作 材 質	使 用 場 所	備 考
									外 箱	内 箱	動 土					
1	土師器	皿	SH (P 211)	6 E 17	-	76	24	44	漆布 2.5YR7/4	漆布 5YR8/3	陶瓦 10YR4/1	右 溝	ロウロ成形			
2	土師器	皿	F	501 6 D 2	-	88	-	-	に赤い染 10YR7/2	に赤い染 10YR7/2	灰白 10YR8/1	右 長 チヤ	手づくね成形			
3	土師器	皿	SH (P 212)	9 E 10	-	116	-	-	に赤い染 10YR7/2	灰白 10YR8/1	陶瓦 10YR4/1	右 長 チヤ	手づくね成形			
4	土師器	皿	SH (P 213)	6 D 7	-	112	29	62	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/3	浅黄緑 10YR8/4	右 長 チヤ	手づくね成形			13C末～14C初
5	珠洲焼	月口鉢	SH (P 214)	14-15 511	6 C 22	-	240	-	灰 N5/0	灰 N4/0	灰白 7.5YR/1	右 長 骨	手づくね成形			古河1期 (12C末)
6	珠洲焼	壺 (T形)	F	503 6 D 3	-	-	-	-	黒陶 10YR3/1	黒陶 10YR3/1	灰白 10YR7/1	右 長 骨				
7	珠洲焼	壺 (T形)	SH (P 215)	15 512	6 C 22	-	-	-	磁灰 N2/0	灰 N5/0	灰白 10YR7/1	右 長 骨				
8	珠洲焼	壺 (T形)	F	278 6 D 3	-	-	-	-	陶瓦 10YR6/1	陶瓦 10YR5/1	灰白 10YR8/1	右 長 骨				
9	珠洲焼	壺	F	524 6 C 22	-	244	-	-	灰 N5/0	灰 N5/0	灰白 5YR/0	右 長 骨				古河1期 (12C末)
10	珠洲焼	壺	F	501 6 D 2	-	224	-	-	灰 N6/0	灰 N5/0	灰 N6/0	右 長 骨				古河1期 (12C末)
11	土師器 (古瓦)	製造 土器	F	506 6 D 18	-	-	-	-	骨 5YR6/2	骨 5YR6/2	灰瓦 10YR5/1	右 長 骨		焼熱	鑑定1層15.3cm	
12	東国焼	赤 (付塗)	SH (P 204)	6 D 10	-	139	-	-	灰白 7.5YR7/1	灰 2.5Y/1	灰瓦 2.5Y/1	右 溝				内口V→V形 9C末～10C初
13	珠洲焼	壺	SX	510 5 C 12 13	3	-	140	-	灰 N5/0	灰 N4/0	灰白 N7/0	右 長 骨	(底)砂付			
14	珠洲焼	壺 (T形)	SX	510 5 C 20 24	1	-	-	-	磁灰 N3/0	N4/0	雲灰 5P/1	右 長 骨				
15	土師器 (古瓦)	壺	SX	516 6 C 17	1	-	68	-	骨 5YR6/2	陶瓦 2.5Y/1	灰瓦 2.5Y/1	右 チヤ	輪切技法 (内底)ヘラナデ			
16	珠洲焼	壺 (T形)	SX	516 6 C 12 2	V	-	132	-	灰白 2.5Y7/1	灰 N5/0	灰瓦 2.5Y/1	右 長 骨				
17	白磁	瓶 (古瓦)	沢	1 E 1 11 11	148	-	-	-	灰オリーブ 5Y5/3	オリーブ染 5Y5/3	灰白 5YR/1	白 染・中やね				山本2期 (11C末～12C初)
18	白磁	瓶	沢	9 E 4 11 11	-	-	-	-	灰白 2.5YR/2	灰白 2.5YR/1	灰白 N8/0	白 磁				
19	青磁	腰掛 文箱	沢	9 E 18 11 11	164	-	-	-	灰オリーブ 7.5Y5/2	灰オリーブ 7.5Y5/2	灰白 N7/0	白 磁				
20	珠洲焼	壺 (T形)	沢	9 E 24 11 11	-	-	-	-	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5YR/2	右 白 磁				タテタ成形
21	珠洲焼	月口鉢	沢	9 E 17 11 11	358	-	-	-	灰 7.5Y/1	灰 7.5Y/1	灰瓦 2.5Y7/2	右 長 骨	(口内)12条一単位 以上			古河2～V1期
22	珠洲焼	月口鉢	沢	1 E 1 C 25 11	-	136	-	-	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y/1	灰白 2.5Y7/1	右 長 骨	(口内)10条一単位以上 (底)黒→赤?			
23	白磁	瓶	沢	6 D 3 V 168	-	-	-	-	灰白 7.5Y5/1	灰白 7.5Y5/1	N8/0	白 磁				
24	白磁	瓶 (古瓦)	沢	8 E 11 1 160	-	-	-	-	灰白 5Y7/2	灰白 5Y7/2	灰白 5YR/1	白 磁				山本2期 (11C末～12C初)
25	白磁	瓶 (古瓦)	沢	6 G 3 0 132	-	-	-	-	灰白 2.5GYR/1	灰白 2.5GYR/1	白色	白				山本2期 (11C末～12C初)
26	白磁	瓶	沢	6 E 8 1 -	-	-	-	-	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	灰白 5YR/1	白 磁				
27	白磁	瓶	沢	6 G 1 0 -	60	-	-	-	灰白 2.5YR/2	灰白 10Y7/1	灰白 2.5YR/2	ナシ				
28	白磁	皿	沢	5 D 23 V 84	-	-	-	-	灰白 5Y7/2	灰白 5Y7/2	灰白 10YR7/1	白 磁				
29	白磁	不明	沢	6 D 9 V -	-	-	-	-	灰白 5YR/2	灰白 5YR/1	灰白 2.5YR/1	白				
30	青磁	瓶	沢	7 D 22 1 140	-	-	-	-	灰オリーブ 7.5Y5/3	灰オリーブ 7.5Y5/3	灰白 10YR8/1	白 染・中やね	(内) 藍文			
31	青磁	浅弁 文箱	沢	6 G 1 0 162	-	-	-	-	オリーブ染 2.5GYR/1	灰オリーブ 7.5Y5/2	灰白 7.5YR/1	白 磁				
32	青磁	瓦文箱	沢	5 D 22 2	V	160	-	-	磁オリーブ 2.5GY7/1	磁オリーブ 2.5GY7/1	灰白 7.5Y7/1	中 やね				
33	青磁	瓶	沢	6 D 13 V -	48	-	-	-	灰オリーブ 7.5Y/2	灰オリーブ 7.5Y/2	灰白 N8/0	白 磁				14C初～1430年 代
34	土師器	瓶+蓋 土器	沢	6 D 8 V -	68	-	-	-	陶瓦 7.5Y/2	浅黄 7.5Y7/3	灰白 10YR8/2	瓦	(底) 灰粒			
35	土師器	瓶+蓋 土器	沢	7 D 22 V -	62	-	-	-	骨 5YR6/2	骨 7.5YR6/6	骨 7.5YR6/6	右 長 骨	ロウロ成形 (底) 同灰赤色			12C
36	土師器	皿	沢	8 F 1 1 78	20	40	-	-	灰瓦 2.5Y7/2	灰瓦 2.5Y/2	灰瓦 2.5Y/2	右 チヤ	ロウロ成形 (底) 同灰赤色			12C
37	土師器	皿	沢	6 G 1 0 18	78	17	44	-	灰瓦 10YR6/2	に赤い染 10YR6/2	に赤い染 7.5YR6/4	右 長 骨	ロウロ成形 (底) 同灰赤色			12C
38	土師器	皿	沢	6 D 20 V 94	18	61	-	-	に赤い染 7.5YR7/4	に赤い染 7.5YR7/4	灰白 10YR8/1	右 長 チヤ	手づくね成形 ナデ磨面付			13C
39	土師器	皿	沢	5 G 9 0 146	32	98	-	-	骨 7.5YR7/6	骨 7.5YR7/3	浅黄緑 10YR8/6	右 長 チヤ	手づくね成形			14C初100年 頃
40	珠洲焼	月口鉢	沢	6 D 24 1 236	-	-	-	-	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	5Y/1	右 長 骨				古河1期 (1170～80年頃)

報告番号	分類		通称		グリッド		測点	口径 mm	筒長 mm	口径 mm	色温			照度 (lx) 色温 (K)	製作内容	使用材料	備考
	種別	部 品	種別	番号	大	小					外周	内周	軸上				
41	珠洲鏡	片口鏡			6 D	4 V	276	-	-	黒鏡 2.5V3/1	黒鏡 2.5V3/1	灰白 2.5V7/1	石 長 鏡				古阿古期 (12C末)
42	珠洲鏡	片口鏡			6 D	9 B	330	-	-	黒鏡 N5/0	黒鏡 N4/0	灰白 10V87/1	石 長 鏡				古阿古期 (13世紀前半)
43	珠洲鏡	片口鏡			5 D	10 V	-	-	-	黒鏡 N4/0	黒鏡 N5/0	灰 5V6/1	石 長 鏡	(内) 印文文			古阿古期か (13世紀前半)
44	珠洲鏡	片口鏡			6 D	13 V	-	-	-	硝灰 N3/0	灰 7.5V5/1	灰 5V6/1	石 長 鏡	(内) 痕状印行			古阿古期か (13世紀前半)
45	珠洲鏡	片口鏡			5 E	11 B	184	-	-	黒鏡 2.5V3/1	黒鏡 2.5V3/1	灰黄 2.5V6/2	石 長 十 字 鏡				古阿古一期
46	珠洲鏡	鏡			6 C	17 V	252	-	-	黒鏡 N6/0	灰白 N7/0	灰白 N7/0	石 長 鏡				古阿古一期
47	珠洲鏡	耳付型			5 C	15 V	-	-	-	黒鏡 N6/0	灰白 N8/0	灰白 2.5V8/1	長 鏡	(外) 波状文			古阿古二期
48	珠洲鏡	鏡			8 D	1 I	-	-	-	黒鏡 2.5V3/1	灰白 2.5V7/1	灰黄 2.5V7/2	石 長 鏡			OP 文	古阿古二期
49	珠洲鏡	鏡			8 D	14 I	-	-	94	灰 5V6/1	灰白 10V87/1	灰白 10V88/1	石 長 鏡	(外) 波状文			古阿古二期
50	珠洲鏡	鏡 (刀型)			5 F	16 I	-	-	-	黒鏡 2.5V3/1	灰白 2.5V7/1	灰白 10V87/1	石 長 鏡	多々年成印			古阿古二期
51	瓦葺	切縁 結縁	SD	5	1 E	3 I	474	125	426	洗灰磨 10V88/4	灰 5V5/1	灰 5V6/1	石 長 十 字 鏡	(外) 変型2条+印文			14C末~16C
52	珠洲鏡	片口鏡	SD	5	1 E	2 I	-	-	-	灰白 5V7/1	灰白 5V8/1	灰白 5V8/1	石 長 十 字 鏡	(印行) 9条一単位			
53	石葺	切縁 切縁	SD	5	1 E	3 I	-	-	-	灰白 5V7/1	灰白 5V8/1	灰白 5V8/1	石 長 十 字 鏡	5条一単位			
54	瓦葺	切縁	SK	4	1 E	3 I	282	-	-	灰 5V5/1	灰 2.5V4/1	灰白 2.5V8/1	石 長 鏡	(外) 変型2条			
55	黒瓦 葺	平焼			9 E	6 田	160	71	56	オリーブ灰 5V8/4	オリーブ灰 5V8/4	灰白 10V8/1	石 長 鏡	(印) 切縁赤塗り + 縁付付釘台			古阿古中期後半 (14世紀末) 末焼
56	青瓦	葺			5 G	16 I	144	-	-	硝灰 10G7/1	硝灰 10G7/1	灰黄 2.5V8/1	十 字 鏡				小阿古群 (IV期) 15C末~16C前
57	青瓦	種花葺			9 E	24 田	162	-	-	オリーブ灰 10V6/2	オリーブ灰 10V6/2	灰白 2.5V7/1	白 中や組				1470年代~14C
58	土葺	葺			1 O	21 田	166	-	-	灰白 10V88/1	灰 10V85/1	灰 10V85/1	石 長 十 字 鏡	手づくね成印	(外) 文		
59	土葺	葺			9 E	2 田	94	20	65	にぶい+硝灰 10V7/4	にぶい+硝灰 10V7/4	にぶい+硝灰 10V7/4	石 長 十 字 鏡	口白成印	(内) タテ		
60	土葺	葺			8 E	12 田	98	17	76	硝灰 10V7/6	硝灰 10V4/1	硝灰 10V4/1	石 長 十 字 鏡	口白成印			
61	土葺	葺			8 E	17 田	96	19	72	にぶい+硝灰 10V7/4	にぶい+硝灰 10V7/4	黒鏡 10V2/1	石 長 十 字 鏡	口白成印 (底) 硝灰赤塗り			
62	珠洲鏡	片口鏡			5 E	8 I	308	-	-	灰 7.5V3/1	灰 10V5/1	灰黄 2.5V7/2	石 長 鏡	(印行) 7条一単位以上			古阿古期 (13C末)
63	珠洲鏡	片口鏡			1 O	3 田	246	-	-	灰 5V5/1	灰 5V5/1	灰 7.5V6/1	石 長 鏡	(印行) 7条一単位以上			古阿古期 (13C末)
64	珠洲鏡	片口鏡			1 I	21 田	334	-	-	灰黄 2.5V6/1	灰 2.5V7/1	灰 5V6/1	石 長 鏡	(印行) 11条一単位以上			
65	珠洲鏡	片口鏡			10 E	25 田	-	-	104	灰白 2.5V7/1	灰 2.5V6/1	灰白 2.5V7/1	石 長 鏡	(印) 8条一単位以上 (底) 赤塗り	(内) 文		
66	珠洲鏡	片口鏡			1 O	8 田	-	-	188	灰 2.5V7/1	灰 10V5/1	洗灰磨 10V8/4	石 長 十 字 鏡	(印行) 9条一単位			
67	珠洲鏡	片口鏡			1 I	16 田	-	-	-	灰 5V6/1	灰 5V6/1	灰 5V6/1	石 長 鏡				
68	珠洲鏡	片口鏡			1 I	16 田	-	-	-	灰 5V5/1	灰 5V5/1	灰白 5V8/1	石 長 鏡				
69	珠洲鏡	大鏡 (刀型)			8 E	12 田	506	-	-	灰 2.5V3/1	灰 2.5V4/1	灰白 2.5V7/1	石 長 鏡	多々年成印			古阿古期 (1250~1300年)
70	越前鏡	鏡			6 C	20 B	356	-	-	にぶい+硝灰 10V8/1	灰黄 2.5V7/2	灰白 5V8/1	石 長 鏡	(印行) 4条一単位以上			
71	越前鏡	鏡			8 D	23 I	274	-	-	にぶい+硝灰 7.5V7/4	にぶい+硝灰 10V7/2	洗灰磨 10V8/4	石 長 鏡	(印行) 5条一単位以上			
72	肥後赤 陶器	丸瓶	HT	8	E	21 上層	108	-	-	灰白 7.5V7/2	灰白 7.5V8/2	洗灰磨 10V88/3	長 鏡	(内) 灰			大鏡古期 (1610~50年代)
73	肥後赤 陶器	瓶	AT	8	F	16 上層	-	-	40	洗灰 5V7/2	洗灰磨 10V87/4	にぶい+硝灰 10V87/3	石 長 鏡				大鏡古期 (1610~50年代)
74	肥後赤 陶器	鏡	AT	8	F	11 上層	252	-	-	にぶい+硝灰 5V8/3	にぶい+硝灰 2.5V8/4	灰 2.5V5/1	石 長 鏡	(口) 磨			No.12
75	白磁	瓶 (古加)	CT	8	E	16 上層	160	-	-	灰白 7.5V7/1	灰白 7.5V7/1	灰白 5V8/1	白 中や組				
76	白磁	瓶 文様	AT	7	F	14 上層	118	-	-	灰黄 2.5V7/2	灰黄 2.5V7/2	灰黄 2.5V6/2	白 中や組				
77	青磁	湯 文様	AT	8	F	16 上層	158	-	-	灰オリーブ 7.5V6/2	灰オリーブ 7.5V6/2	灰黄 2.5V7/2	白				
78	青磁	湯 文様	CT	8	E	16 上層	161	-	-	灰オリーブ 5V5/3	灰オリーブ 5V5/3	灰白 8V7/1	白				
79	土葺	葺	CT	8	E	11 上層	68	15	38	洗灰磨 7.5V88/6	洗灰磨 7.5V88/6	洗灰磨 7.5V88/4	石 長 鏡				No.53
80	土葺	葺	CT	7	E	15 上層	96	-	-	硝 7.5V87/6	硝 2.5V86/6	洗灰磨 7.5V88/6	石 長 十 字 鏡				No.28
81	珠洲鏡	片口鏡	石葺	CT	7	E	15 上層	-	-	128	灰白 5V7/2	灰 5V6/1	白 長 十 字 鏡	(印行) 8条一単位 (底) 赤塗り			

観 察 表

報告番号	分類	種類	形状	通眼	グリッド	断面	口径	高さ	底径	色澤			裏面(口縁)	裏面(口縁)	使用	備考
										外面	内面	口上				
82	石部	磨製石斧														
83	土器類	甕	石部	CTy	8 E 11	中層	90	-	-	黒	赤い-黄緑	赤い-黄緑	石 黒 赤	口上白磁		
84	土器類	甕(横)	石部	CTy	8 E 11	中層	-	-	-	黒	黒	黒	石 黒 赤			
85	土器類	丸瓶	石部	HTy	8 E 21	下層	-	-	-	灰白	灰白	灰白	白	(外) 赤黒付文 (内) 赤黒付文	大槌前期前半 (18C前)	
86	土器類	瓦輪	石部	HTy	8 E 21	上層	-	-	40	灰白	灰白	灰白	白	(内) 赤黒	(底) 赤黒 中期4層 (18C前-19C前)	
87	土器類	青磁染付鉢			8 D 16	21	1	124	60	48	オリーブ黒	灰白	灰白	白	(口) 西方書文 (内底) 西方書文	大槌前期後半 (1750-60年代)
88	土器類	丸瓶			6 F 3	8 D 13	1	96	51	40	2.5GY/1	灰白	灰白	白	(外) 黒線文	
89	土器類	釜口			8 D 16	21	1	94	61	49	明緑灰	明緑灰	灰白	白	(外) 丸文 (内底) 「大槌」	大槌前期 (1600-1780年代)
90	土器類	小丸瓶 作飯瓶			8 D 16	21	1	84	54	33	灰白	灰白	灰白	白		中期V-2層 (1750-70年代)
91	土器類	広草瓶			8 D 16	21	1	120	70	74	明緑灰	明緑灰	灰白	白		大槌V層 (1830-40年代)
92	土器類	小丸瓶 作飯瓶			8 D 16	21	1	86	55	33	灰白	灰白	灰白	白		
93	土器類	丸瓶			8 D 16	21	1	84	-	-	明緑灰	明緑灰	灰白	白		大槌V層 (19C中)
94	土器類	筒豆瓶			8 D 16	21	1	110	58	48	明緑灰	明緑灰	灰白	白		
95	土器類	白磁瓶			8 D 16	21	1	82	44	34	灰白	灰白	灰白	石 白 赤		
96	土器類	高 瓶(横)			8 D 16	21	1	94	20	39	明緑灰	明緑灰	灰白	白		大槌V層 (18C前-中)
97	土器類	肥田 器			8 D 16	21	1	120	30	85	灰白	灰白	灰白	白		大槌V層後半-V層 (18C前-19C前)
98	土器類	小鉢			8 D 16	21	1	68	38	28	明緑灰	明緑灰	灰白	白		大槌前期
99	土器類	網紋鉢			8 D 16	21	1	26	-	-	灰白	赤い-黒	赤い-黒	白	(外) 白磁	
100	土器類	丸 瓶			8 D 2	1	80	55	38	明緑灰	灰白	灰白	白	(外) ヒラ掛け	19C中	
101	土器類	行平皿			8 D 16	21	1	204	-	-	オリーブ黒	オリーブ黒	灰白	白		
102	土器類	高 行平皿			8 D 16	21	1	136	32	26	オリーブ黒	オリーブ黒	灰白	白		
102	土器類	行平皿			8 D 16	21	1	140	87	66	オリーブ黒	オリーブ黒	灰白	白		
103	土器類	甕			6 C 19	1	-	-	40	赤線	赤線	赤線	石 黒	(内) 筋土目	大槌1-2層 (1804-1610年代)	
104	土器類	甕			5 E 9	1	-	-	50	赤い-黒	赤い-黒	赤い-黒	石 赤	(内) 筋土目	大槌1-2層 (1804-1610年代)	
105	土器類	高 戸瓶			7 F 9	1	-	-	50	赤い-黒	赤い-黒	赤い-黒	石 黒	(外) 灰土目		
106	土器類	高 結志野			5 E 25	1	-	-	86	灰白	灰白	灰白	石 黒		大槌4層後半 (17C前)	
107	土器類	有白線			6 E 6	II c	-	-	60	黒	黒	黒	黒		大槌前期 9C	
108	土器類										赤線	赤線	石			
109	土器類										赤い-黒	赤い-黒	石 黒			
110	磁石	石部			8 F 13	I	-	-	-	-	-	-	-			
111	石製品	磁石														
112	磁石															
113	石製品	瓦輪														

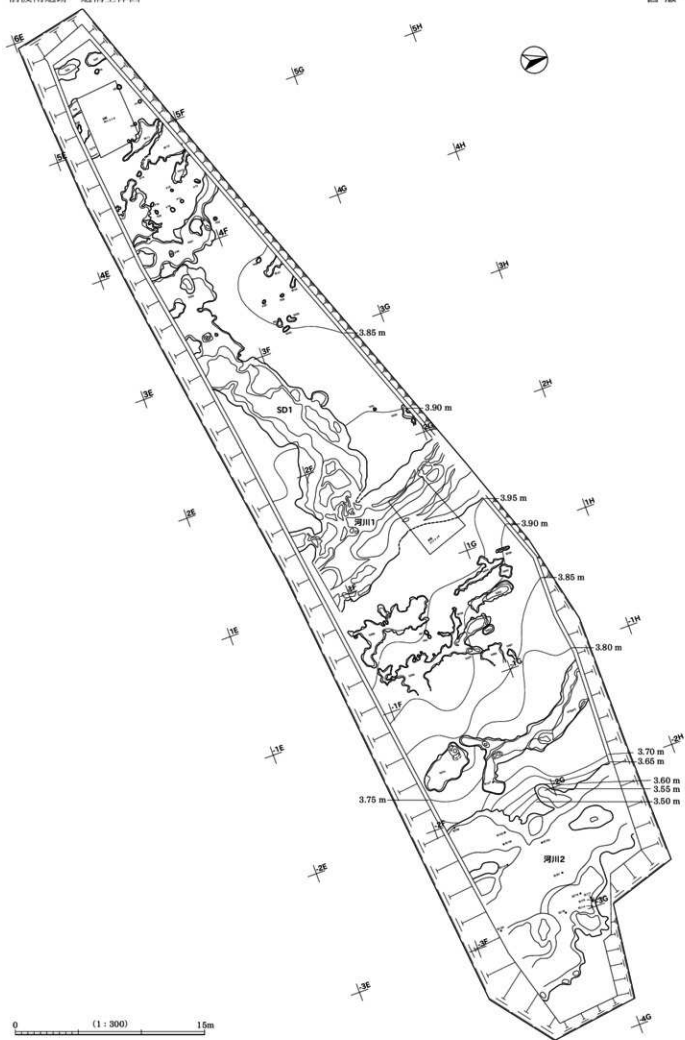
伝極楽寺跡 石器・石製品観察表

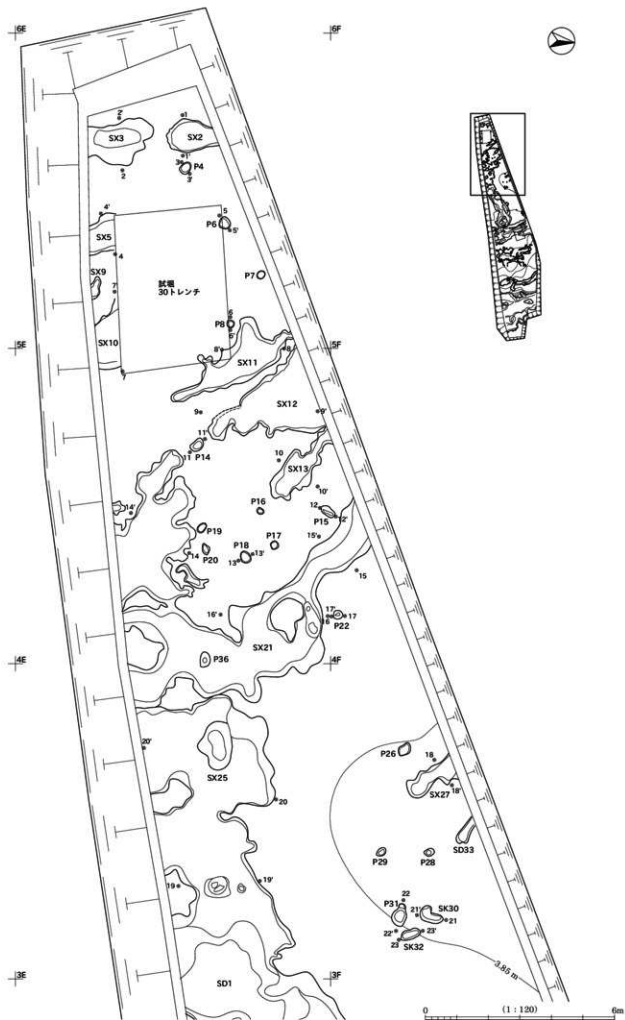
報告番号	種類	分類	石材	出土位置		高さ	幅	厚さ	重さ (グラム)	備考	
				通眼	グリッド						
53	石器	大石臼	玉部	S15	1	11	11	35	20	12	33
82	石器	磨製石斧	肥後石	G14A7	上層	7	F 15	15	15	15	26.5
110	石製品	磁石	肥後石		I	8	F 13	170	32	16	58.8
111	石製品	磁石	肥後石		I	6	E 4	51	45	22	113.8
112	石製品	磁石	肥後石		II	8	D 22	210	40	20	302.0
113	石製品	瓦輪	西阿石(宝山石)		II b	6	G 24	255	261	125	95.0

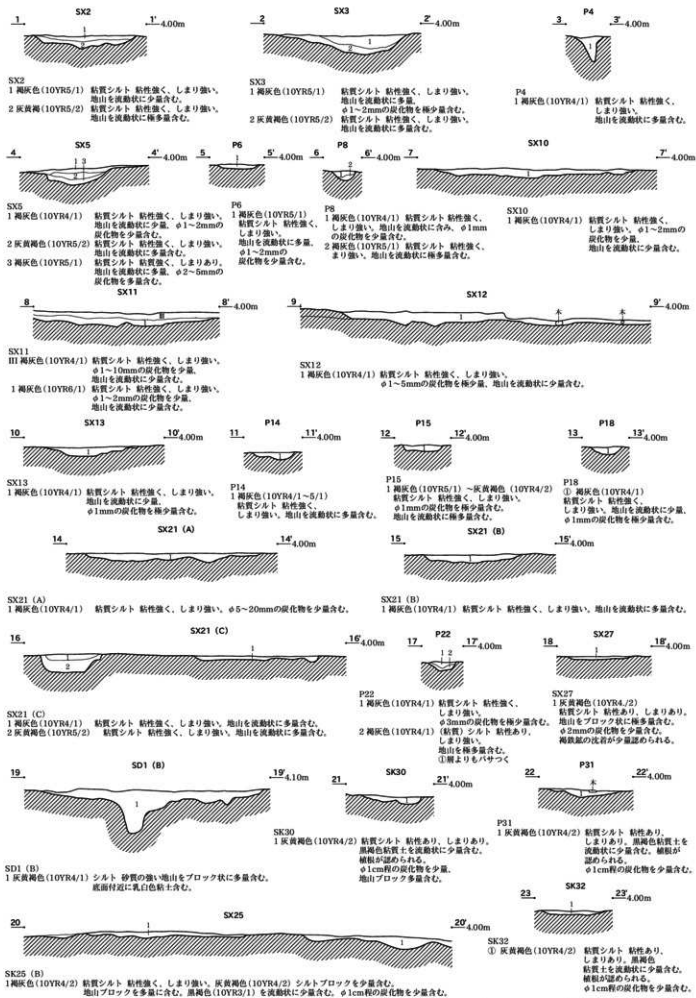
伝極楽寺跡 管状土鍾観察表

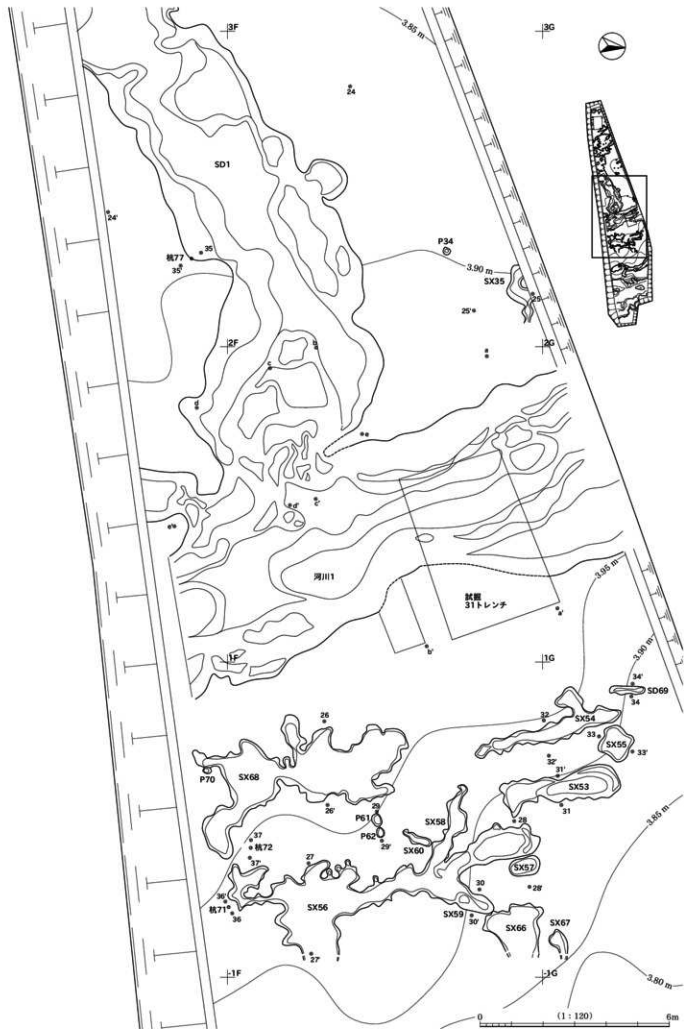
報告番号	分類	出土位置		高さ	最大径	口径	厚さ	重さ (グラム)	備考
		グリッド	層位						
108	土器	I	-	54	39	13	13	63.6	
109	土器	I	8 E 22	71	(36)	(12)	15	39.2	

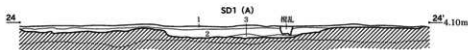
图 版







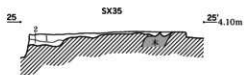




SD1 (A)

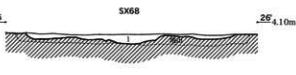
目録 褐色粘質シルト及び黒褐色粘質シルトをブロック状に多量含む。地山を流動状に少量。φ2mmの炭化物少量含む。

1 褐色 (7.5YR4/1) 粘質シルト 粘性の強い地山を流動状に多量含む。2層との境目に乳白色の粘性が強いブロックが認められる。火山灰の可能性もある。
2 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質シルト 1層を流動状に多量含む。地山の色より明るく、粘性がある。



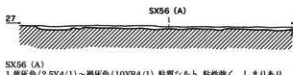
SX35

1 褐色色 (10YR5/1) 粘質シルト 粘性あり、しまり強い。地山を流動状に多量含む。
φ0.5mm以下の炭化物粒子を極少量含む。鉄分の沈着が少量認められる。
2 褐色色 (10YR5/1) 粘質シルト 粘性強く、しまりあり。1層よりも明るく。地山を流動状に極少量含む。鉄分の沈着が多量に認められる。



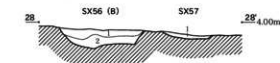
SX68

1 褐色色 (10YR4/1) 粘質シルト 地山ブロックを多量。φ2mmの炭化物を少量含む。



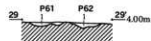
SX56 (A)

1 黄灰色 (2.5Y4/1) ~ 褐色色 (10YR4/1) 粘質シルト 粘性強く、しまりあり。地山を流動状に多量含む。φ5~10mmの炭化物を少量含む。



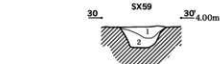
SX56, SX57

SX56 1 褐色色 (10YR5/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。φ1mmの炭化物を少量。地山を流動状に多量含む。
SX56 2 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。φ1mmの炭化物を少量。地山を流動状に極少量含む。
SX57 1 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質シルト 地山を流動状に多量。φ1mmの炭化物を少量含む。



P61, P62

P61 1 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質シルト 粘性強く、しまりあり。地山を流動状に極少量含む。
P62 1 黒褐色 (10YR3/1) 粘質シルト 粘性強く、しまりあり。地山を流動状に多量含む。



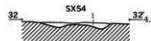
SX59

1 褐色色 (10YR5/1) ~ 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。地山を流動状に多量。φ1~2mmの炭化物を少量含む。2層よりもみみ・落ちが強い。
2 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。地山を流動状に極少量含む。地山に鉄が、やや赤みがある。



SX59

1 黄灰色 (2.5Y4/1) ~ 褐色色 (10YR4/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。地山を流動状に多量。φ1~15mmの炭化物を多量含む。
2 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質シルト 粘性強く、しまりあり。地山に鉄が、より柔らかく腐植物を少量含む。



SX54

1 褐色色 (10YR4/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。地山を流動状に多量。φ1~2mmの炭化物を少量含む。



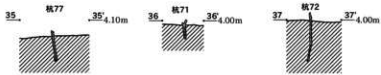
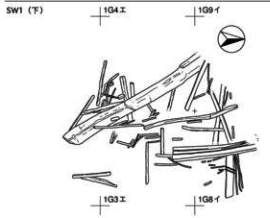
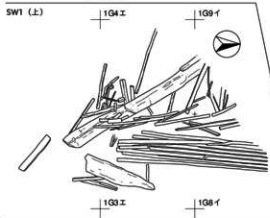
SX55

1 褐色色 (10YR4/1) 粘質シルト 粘性あり、しまりあり。φ5~10mmの炭化物を極少量。地山を流動状に少量含む。

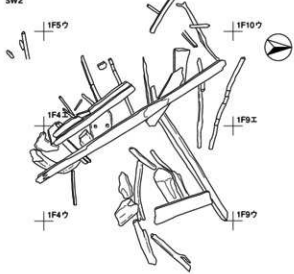


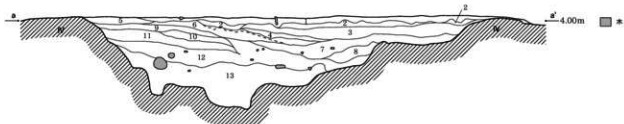
SD69

1 褐色色 (10YR5/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。地山を流動状に含む。
2 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。地山を流動状に極少量含む。



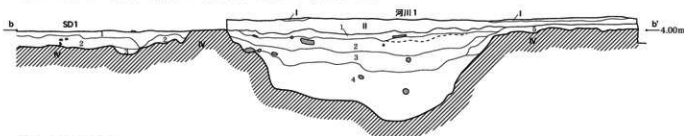
SW2





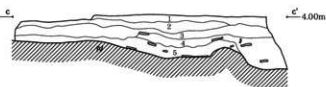
[河川1 北側セクション]

- 1 黒褐色(10YR2/1)土 基本層序の日層に対応。
- 2 黒褐色(10YR2/3) 腐植粘質土 粘性あり、しまりあり、基本層序の日層に対応。
- 3 にぶい黄褐色(10YR4/3) 腐植粘質土 粘性あり、しまりあり、有機物、炭酸含む。
- 4 暗褐色(10YR2/3) 腐植粘質土 粘性あり、しまりあり、有機物多量含む。
- 5 黄褐色(10YR4/1) 粘質土 粘性あり、しまり強い、基本層序の日層に対応。
- 6 黄灰色(2.5Y5/1) 粘質シルト 粘性あり、しまりあり、有機物、炭酸物含む。2・4層の境付近に浅黄褐色(10YR8/4)粘質シルトを帯状に含む。火山灰の可能性もある。7層との境は明確ではない。
- 7 灰黄褐色(10YR5/2) 粘質土を基本ににぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土 黄褐色中砂が混じり、互層になる部分あり。右側の平坦面は灰黄褐色粘質シルトが大部分となる。
- 8 灰黄褐色(10YR4/2) 粘質土 粘性強く、しまりあり。地山の黄灰色粘質土少量混じり、炭酸含む。
- 9 灰黄褐色(10YR6/2) 粘質シルト 粘性あり、しまりあり。有機物少量含む。
- 10 灰黄褐色(10YR6/2) 粘質シルト 粘性あり、しまりあり。右側(東側)底面付近に砂質シルト混じる。
- 11 灰黄褐色(10YR4/2) [左側]~黒褐色(10YR3/1)[右側] 粘質シルトを基本に腐植含む。炭酸少量含む。
- 12 黒褐色(10YR2/3)ににぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土の互層。粘性強く、しまりあり。有機物多量含む。
- 13 暗オリーブ灰色 (5GY7/1) 細砂+暗褐色(10YR3/3)腐植質土+灰白色(10YR5/1)砂質土の互層。



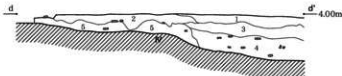
[河川1 中央セクション]

- 1 黒色(10YR2/1)土に灰黄褐色(10YR4/2)腐植質土の混じり。粘性なし、しまりあり。下層方向の漸移層。有機物混じり、炭酸物少量含む。
- 2 黒褐色(10YR3/2)土 有機物が比較的多く混じる。基本層序の日層に対応。植物が変色したφ1~2mmの黒色粒を多量含む。東側の浅黄褐色(10YR8/4)粘質シルトを帯状に含む。火山灰の可能性もある。
- 河川1 3 灰色(N4) 砂質シルトを基本ににぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルトが混じる。有機物の軟質な炭酸物を多量含む。所々に帯状またはブロック状に砂質土が混じる。大形材も含む。
- 河川1 4 暗オリーブ灰色(5GY7/1) 細砂+暗褐色(10YR3/3)腐植質土+灰白色(10YR5/1)砂質土の互層。有機物、炭酸物を極多量含む。トナリの実(表皮含む)・クルミ等も含まれる。大形材が多く含まれる。
- 河川1 5 黄褐色(10YR5/1) 粘質土 粘性あり、しまり強い。にぶい黄褐色(10YR4/3)腐植質土が混じる。基本層序の日層に対応。
- S D 1 にぶい黄褐色(10YR4/3) 腐植粘質土 粘性弱く、しまり弱い。炭酸、有機物、小木片が多く含まれる。
- S D 1 2 灰黄褐色(10YR5/2)+灰白色(10YR7/1)粘質土 粘性あり、しまりあり。有機物、小木片が多く含まれる。
- S D 1 3 灰黄褐色(10YR5/2)+灰白色(10YR7/1)粘質土 粘性あり、しまりあり。空層と同じ色が混入している。



[河川1 合流部北側セクション]

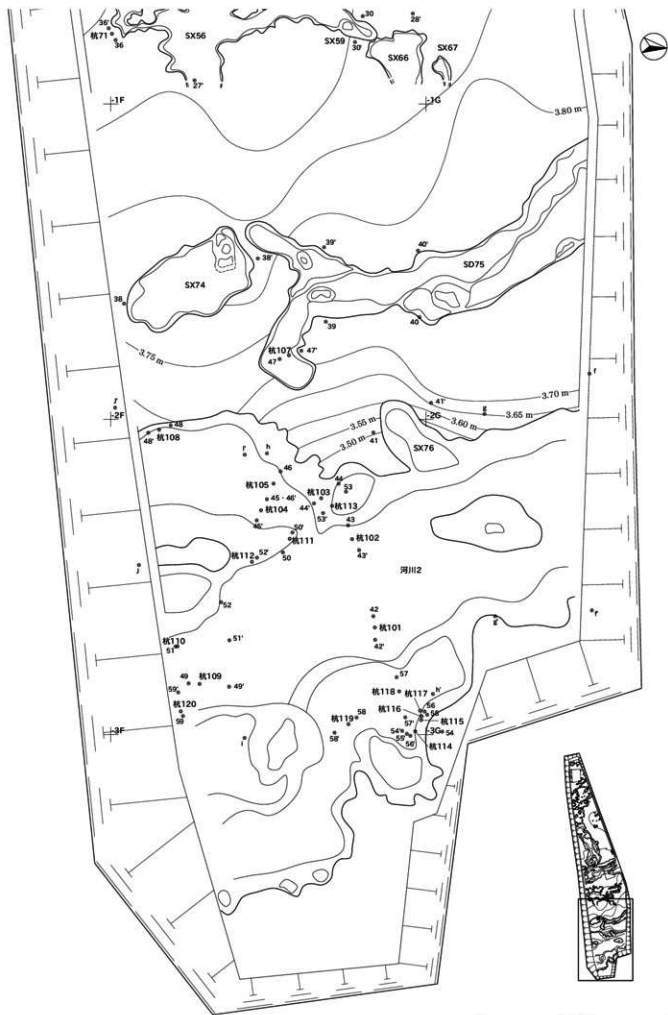
- 1 黒褐色(10YR2/1)土 基本層序の日層に対応。底面付近に空層混じる。南セクション(左側)と対応。
- 2 黒褐色(10YR5/2)粘質シルト 有機物多く、基本層序の日層、南セクション空層に対応。右側(河川中央部)に行くほど粘質土、植物が強くなる。
- 3 灰色(5Y5/1)粘質シルト 粘性あり、しまりあり。有機物含む。横木より右側は細砂が所々に含まれ、炭酸物も多くなる。右側の方が粘性は弱く、ボサボサしている。注層との境は不明瞭だが、注層の方が有機物多量含む。
- 4 灰色(5Y4/1)粘質土を基本に砂・砂質土が混じる。河川内は砂。粘質土が互層状になる。植物の炭化したものも、大粒のものが多い。
- 5 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土+暗褐色(10YR7/1)地山粘質土の混じり。黄灰色のみで漸移層だが、右側に行くに従って混じりが少なくなり、黄灰粘質土だけになる。有機物も注層と比べ少なくなる。

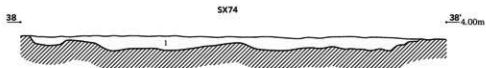


[河川1 合流部南側セクション]

- 1 黒色(10YR2/1)土に灰黄褐色(10YR4/2)腐植質土の混じり。粘性なし、しまりあり。下層方向の漸移層。有機物混じり、炭酸物少量含む。
- 2 黒褐色(10YR5/2)粘質シルト 粘性あり、しまりあり。φ2~3mmの炭酸粒・有機物を多量に含む。右側に行くに従って有機物が多く含まれる。空層との境は不明瞭。
- 3 黒褐色(10YR3/2)土 有機物が比較的多く混じる。基本層序の日層に対応。植物が変色したφ1~2mmの黒色粒を多量含む。東側の浅黄褐色(10YR8/4)粘質シルトを帯状に含む。
- 4 灰色(N4) 砂質シルトを基本ににぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルトが混じる。有機物の軟質な炭酸物を多量含む。所々に帯状またはブロック状に砂質土が混じる。底面付近は中~細砂が多くなる。
- 5 黄褐色(10YR5/1)粘質土+灰白色(2.5Y7/1)粘質土 有機物少量含む。注層との境は不明瞭で、漸移的である。

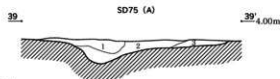






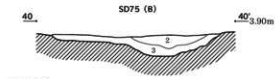
SX74

1 灰黄褐色(10YR4/2) 粘質シルト 粘性あり、しまり弱い、 $\phi 1\sim 10\text{mm}$ の炭化物を少量含む。
黒色粘質シルトを流動状に多量、地山ブロック・有機物を多量含む。根木痕の可能性ある。



SD75 (A)

1 褐色(10YR5/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い、 $\phi 1\sim 10\text{mm}$ の炭化物を少量含む。
褐鉄鉱の沈着が少量認められる。にぶい黄褐色シルトブロックを少量。
地山ブロックを少量含む。
2 褐色(10YR4/1) 粘質シルト 粘性強く、しまりあり、 $\phi 1\text{mm}$ の炭化物を多量、
 $\phi 3\text{mm}$ の地山粒子を少量含む。
3 灰黄褐色(10YR4/2) 粘質シルト 粘性強く、しまりあり、 $\phi 1\text{mm}$ の炭化物を少量含む。
黒色粘質シルト層を流動状に少量含む。
地山をブロック状に少量含む。



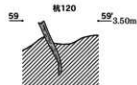
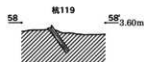
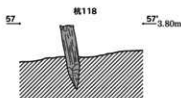
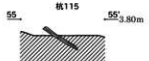
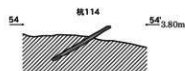
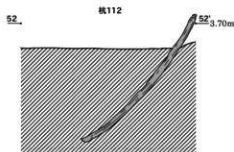
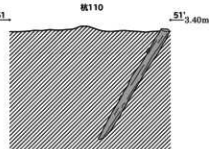
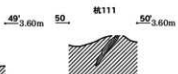
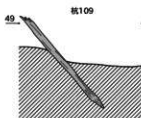
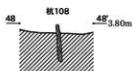
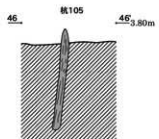
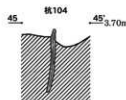
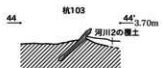
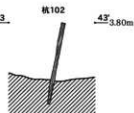
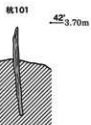
SD75 (B)

2 褐色(10YR4/1) 粘質シルト 粘性強く、しまりあり、 $\phi 1\text{mm}$ の炭化物を多量含む。
 $\phi 3\text{mm}$ の地山粒子を少量含む。
3 灰黄褐色(10YR4/2) 粘質シルト 粘性強く、しまりあり、 $\phi 1\text{mm}$ の炭化物・
地山ブロックを少量含む。黒色粘質シルト層を流動状に少量含む。

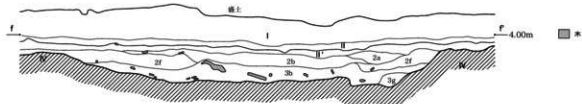


SX76

1 黒褐色(10YR3/1) 土 粘性あり、しまりあり。有機物を多量。
地山粒子を稀少量含む。
細砂を含み、河川の冲積に似る。

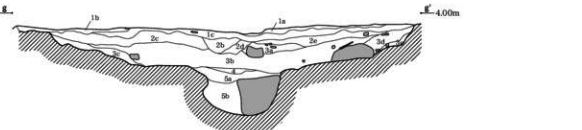


0 (1:40) 2m



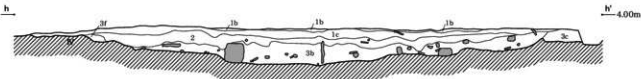
【河川2 北西セクション】

- 2a 褐色色(10YR4/1) 粘質シルト 粘性あり、しまり強い。地山を流動状に含む。細砂・φ1~5mmの炭化物を極少量、腐植物を少量含む。
- 2b 褐色色(10YR4/1) 粘質シルト 粘性あり、しまり強い。細砂・φ1~5mmの炭化物を極少量、腐植物を少量含む。地山を流動状に少量含む。
- 2f 黄灰色(2.5Y/7) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。細砂・φ1~5mmの炭化物を極少量含む。
- 3b 褐色色(10YR4/1)~近い黄褐色(10YR4/3) 腐植物混じり細砂 腐植物をフナミ状に少量含む。褐色色(10YR4/1)粘質シルトを少量含む。地山を流動状に極少量含む。
- 3g 灰色(5Y/5/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。腐植物・細砂を少量含む。



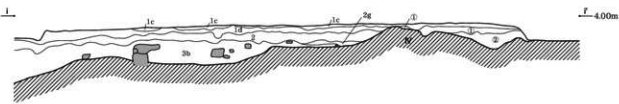
【河川2 北西セクション】

- 1a 黒褐色(10YR3/1) シルト 粘性弱く、しまり強い。粗砂を少量含む。
- 1b 褐色色(10YR4/1)~灰黄褐色(10YR4/2) シルト 粘性弱く、しまり強い。φ2~10mmの炭化物・細砂・粗砂を少量。地山・黒褐色(10YR3/1)シルトを流動状に少量含む。
- 1c 褐色色(10YR4/1)~灰黄褐色(10YR4/2) シルト 粘性あり、しまり強い。φ5~10mmの炭化物を極少量、細砂・粗砂・腐植物を少量。地山(5Y5/1)を流動状に多量含む。
- 2b 褐色色(10YR4/1) 粘質シルト 粘性あり、しまり強い。腐植物を極少量。地山を流動状に少量。細砂を極少量含む。
- 2c 黄灰色(2.5Y/4/1)~褐色色(10YR4/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。φ5~10mmの炭化物・粗砂を極少量。地山を流動状に多量含む。
- 2d 褐色色(10YR4/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。黄褐色(10YR3/1)粘質シルト・地山を流動状に含む。φ5mmの炭化物を極少量。腐植物・細砂を少量含む。
- 2e 褐色色(10YR4/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。地山を流動状に少量。φ5mmの炭化物を極少量。腐植物・細砂を少量含む。
- 3a 褐色色(10YR4/1) 腐植物混じり細砂黄じり粘質シルト 粘性弱く、しまり強い。腐植物を極少量。φ5mmの炭化物を少量。細砂を含む。
- 3b 褐色色(10YR4/1)~近い黄褐色(10YR4/3) 腐植物混じり細砂 褐色色(10YR4/1)粘質シルト・腐植物を少量。地山を流動状に極少量含む。
- 3c 黒褐色(10YR3/1)~褐色色(10YR4/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。地山を流動状に多量。φ1~10mmの炭化物を極少量。細砂を含む。
- 3d 灰色(5Y5/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。地山に似るやや黄色い。φ1mmの炭化物を極少量。腐植物を少量含む。
- 4 灰色(5Y6/1) 粘質シルト 粘性弱く、しまり強い。地山を流動状に含む。腐植物・φ1mmの炭化物を少量含む。
- 5a 褐色(7.5YR4/3) 腐植土 粘性あり、しまりあり。地山をブロック状に極少量含む。空気に触れると数秒で黒褐色(10YR3/1)に変色する。
- 5b 褐色(7.5YR4/3) 腐植土 粘性あり、しまりあり。地山をブロック状に含む。φ5mmの炭化物を少量含む。5a層とほとんど同じだが、地山ブロックが多く、炭化物が混じって区別される。



【河川2 中央セクション】

- 1b 褐色色(10YR4/1)~灰黄褐色(10YR4/2) シルト 粘性弱く、しまり強い。φ2~10mmの炭化物・細砂・粗砂を少量。黄褐色(10YR3/1)シルトを流動状に少量含む。
- 1c 褐色色(10YR4/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。φ5~10mmの炭化物を極少量。細砂・粗砂を少量。腐植物を少量含む。
- 2 褐色色(10YR4/1)~黄灰色(2.5Y/4/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。地山を流動状に多量。細砂・φ1~5mmの炭化物を極少量。腐植物を多量含む。
- 3b 褐色色(10YR4/1)~近い黄褐色(10YR4/3) 腐植物混じり細砂 粘性弱く、しまり強い。腐植物を多量。腐植物をフナミ状に多量含む。褐色色(10YR4/1)粘質シルトを少量含む。地山を流動状に極少量含む。
- 3c 褐色色(10YR4/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。地山を流動状に極少量含む。細砂を含む。
- 4 褐色(5Y5/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。地山を流動状に少量含む。φ5mmの炭化物を少量含む。5a層とほとんど同じだが、地山ブロックが多く、炭化物が混じって区別される。



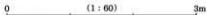
【河川2 南西セクション】

- 1c 褐色色(10YR4/1) シルト 粘性あり、しまり強い。φ5~10mmの炭化物を極少量。細砂・粗砂・腐植物を少量。地山を流動状に多量含む。
- 1d 褐色色(10YR4/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。地山を流動状に多量。φ5~10mmの炭化物を極少量。細砂・粗砂・腐植物を少量含む。
- 2 褐色色(10YR4/1)~黄灰色(2.5Y/4/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。地山を流動状に多量。細砂・φ1~5mmの炭化物を極少量。腐植物を多量含む。
- 2g 黒褐色(10YR3/1) 粘質シルト 粘性あり、しまり強い。細砂・腐植物を少量。地山を流動状に少量含む。
- 3b 褐色色(10YR4/1)~近い黄褐色(10YR4/3) 腐植物混じり細砂 粘性弱く、しまり強い。腐植物をフナミ状に多量。褐色色(10YR4/1)粘質シルトを少量含む。地山を流動状に極少量含む。
- 4 褐色色(10YR4/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。細砂・φ1mmの炭化物を少量。腐植物を少量。地山を流動状に多量含む。
- 5a 灰色(5Y5/1) シルト 粘性強く、しまり強い。黄褐色(10YR4/1)~灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルトを流動状に多量。腐植土・φ1~10mmの炭化物を極少量含む。地山とほとんど同じだが、腐みの強い粘質シルトや腐植土・炭化物が混じって区別できる。



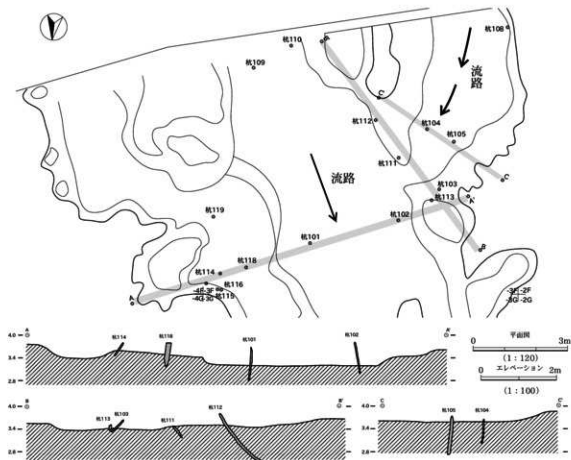
【河川2 南西セクション】

- ① 灰黄褐色(10YR4/2) シルト 粘性弱く、しまり弱い。黒褐色(10YR3/1)粘質シルトをブロック状に多量。細砂を少量含む。φ3mmの炭化物・有機物・地山ブロックを少量含む。②層に似る。
- ② 褐色色(10YR4/1) シルト 粘性弱く、しまり弱い。砂質が多い。①層をブロック状に多量含む。φ5mm程度の炭化物・地山ブロックを少量含む。下位ほど多くなる。粘性は①層より低い。

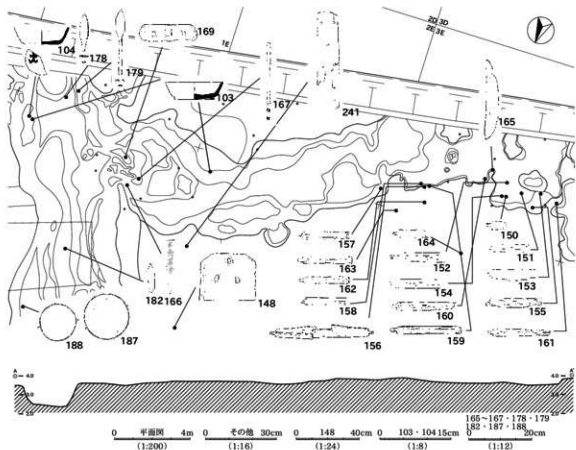






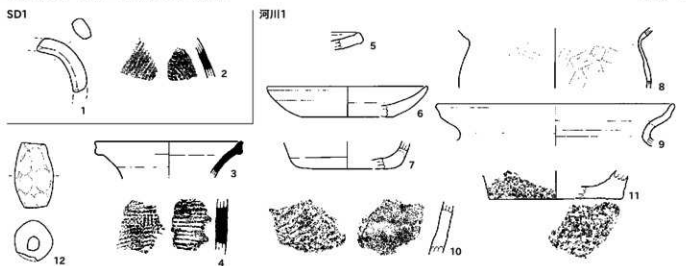


河川2と杭列

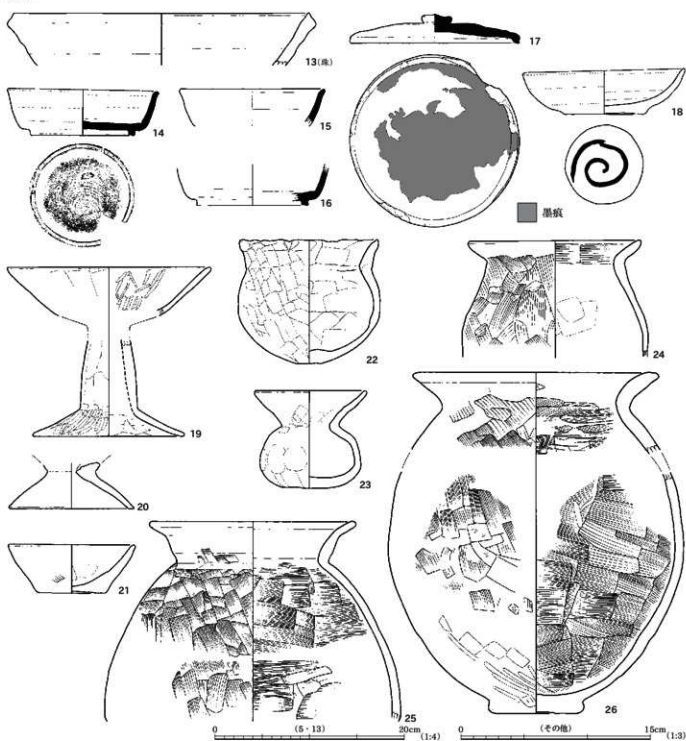


SD1・SX25 出土遺物分布図

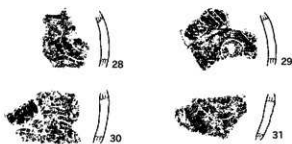
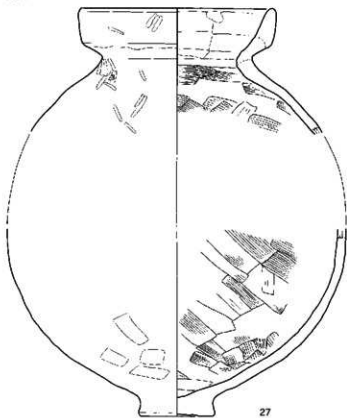
SD1



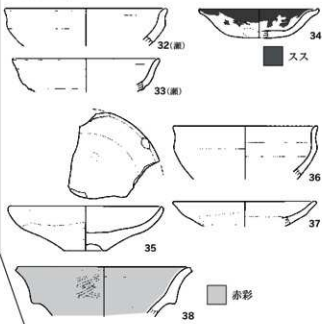
河川2



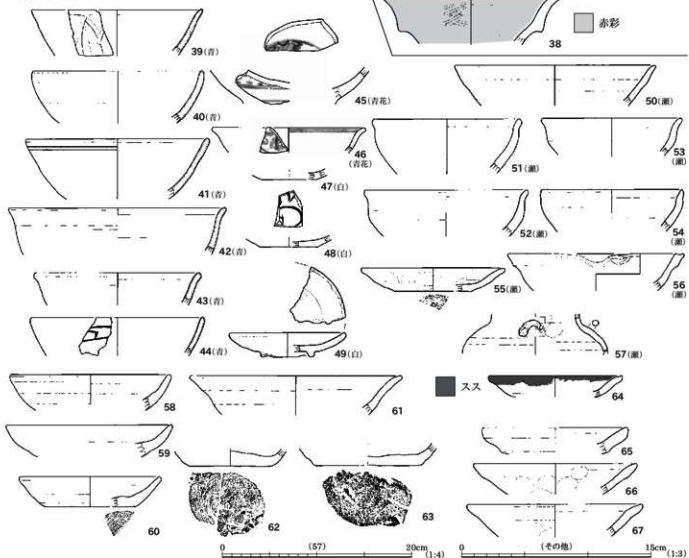
河川2



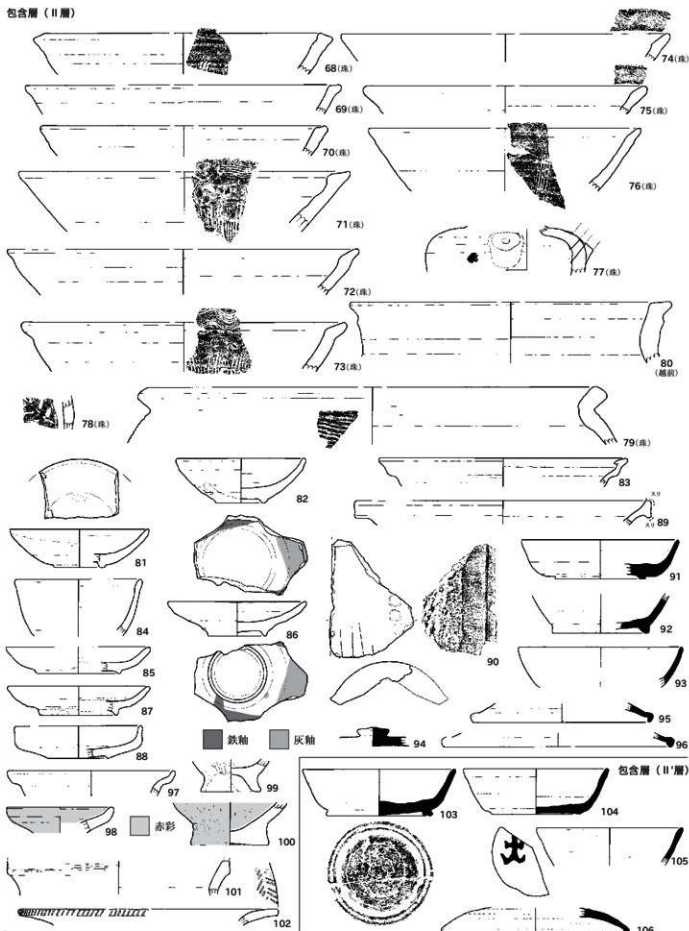
包含層 (I層)



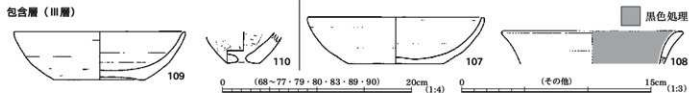
包含層 (II層)

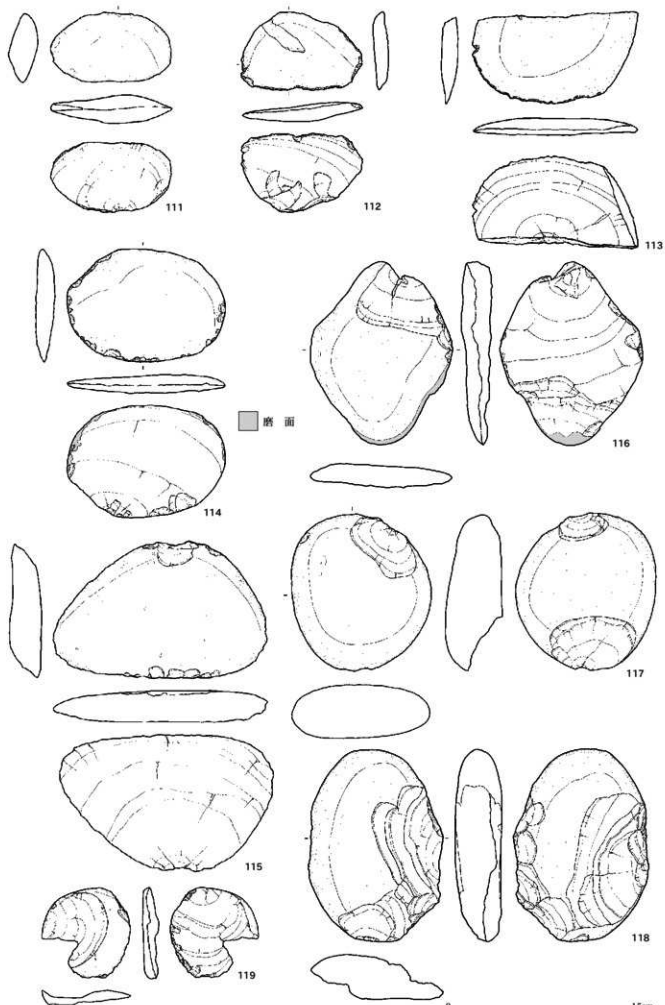


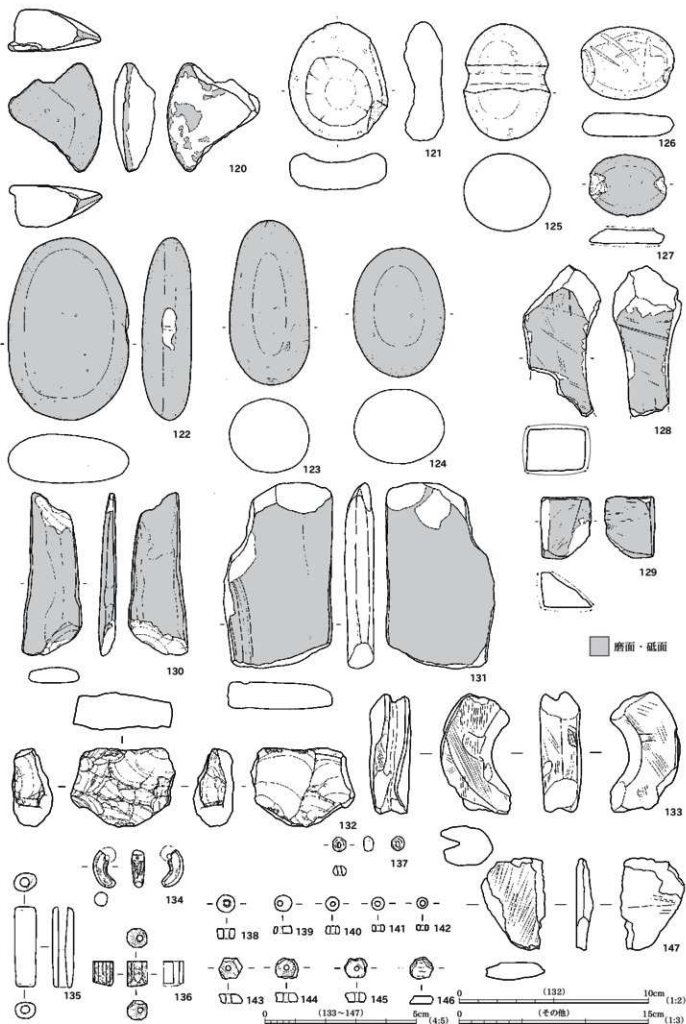
包含層 (II層)



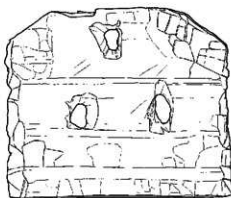
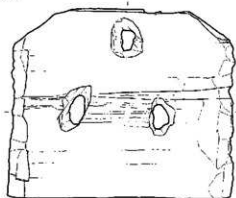
包含層 (III層)



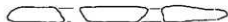




SX35



148



杭77

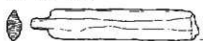


149

SX25 (150~155) · SD1 (156~159 · 165~167)



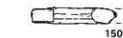
150



151



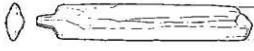
152



154



155



156



157



158



159



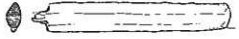
160



161



162



163



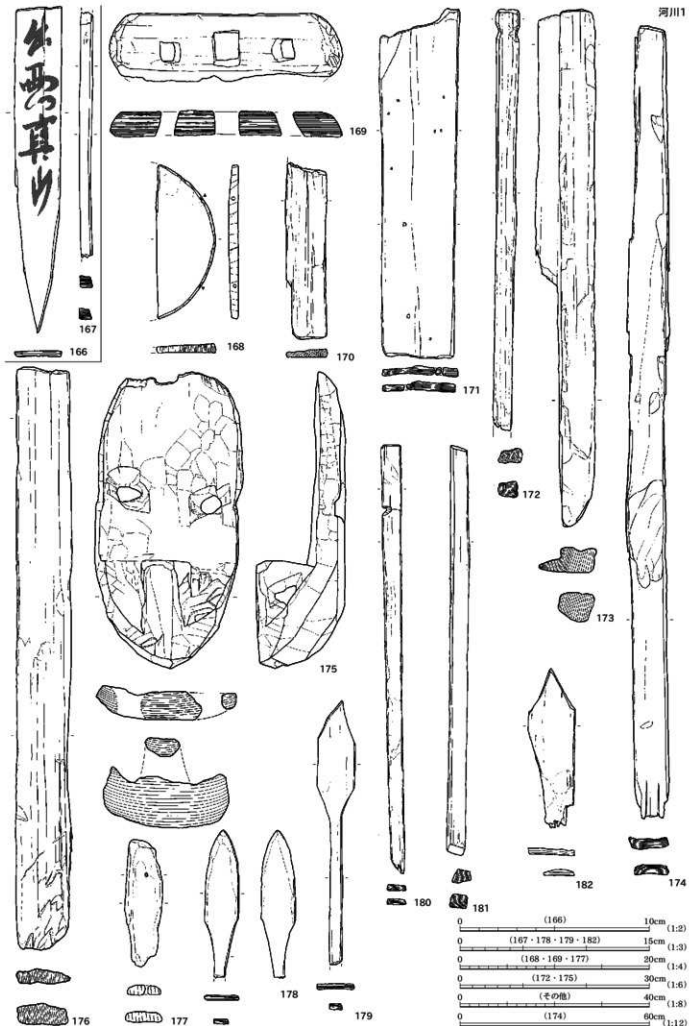
164



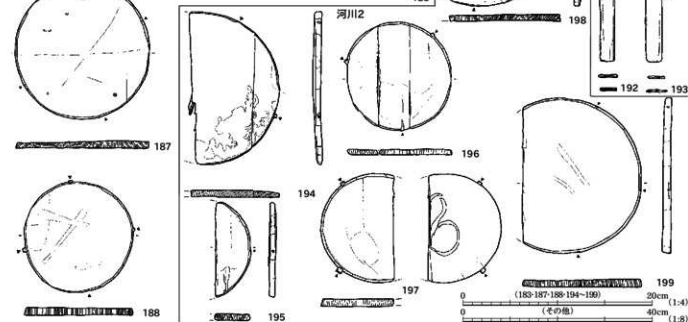
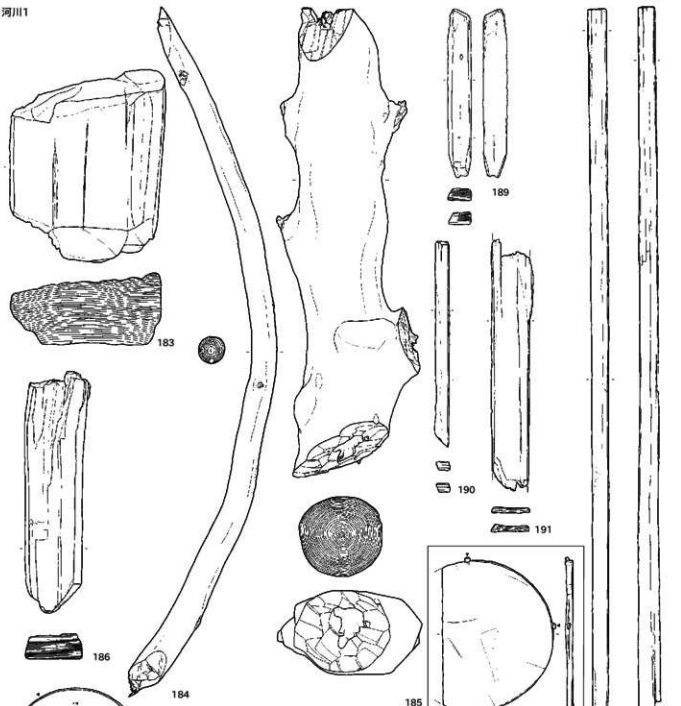
165



165



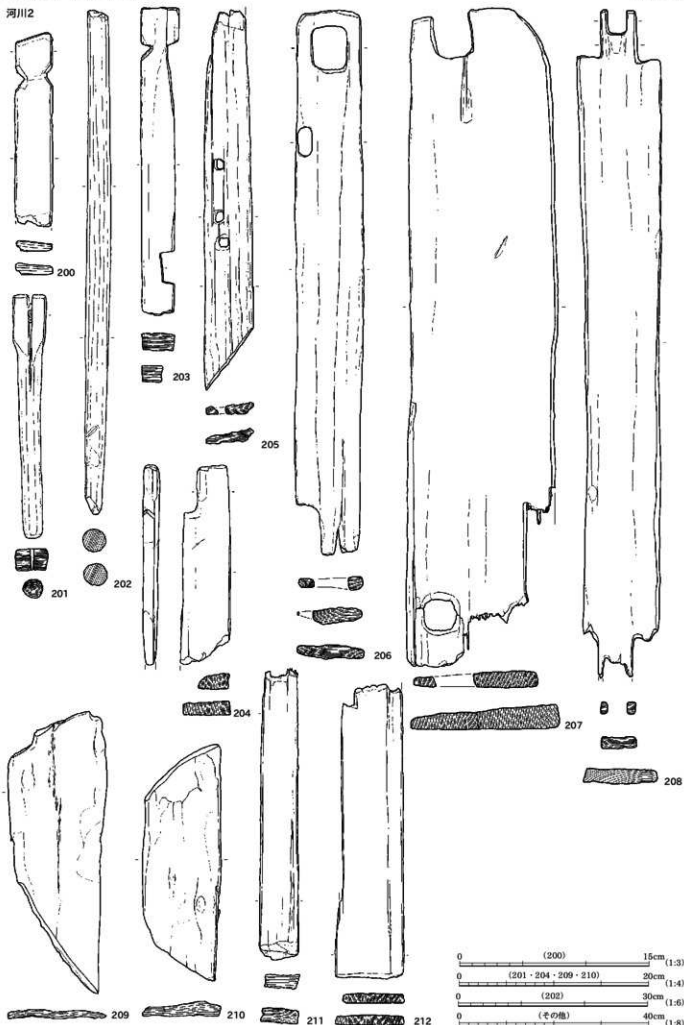
河川1

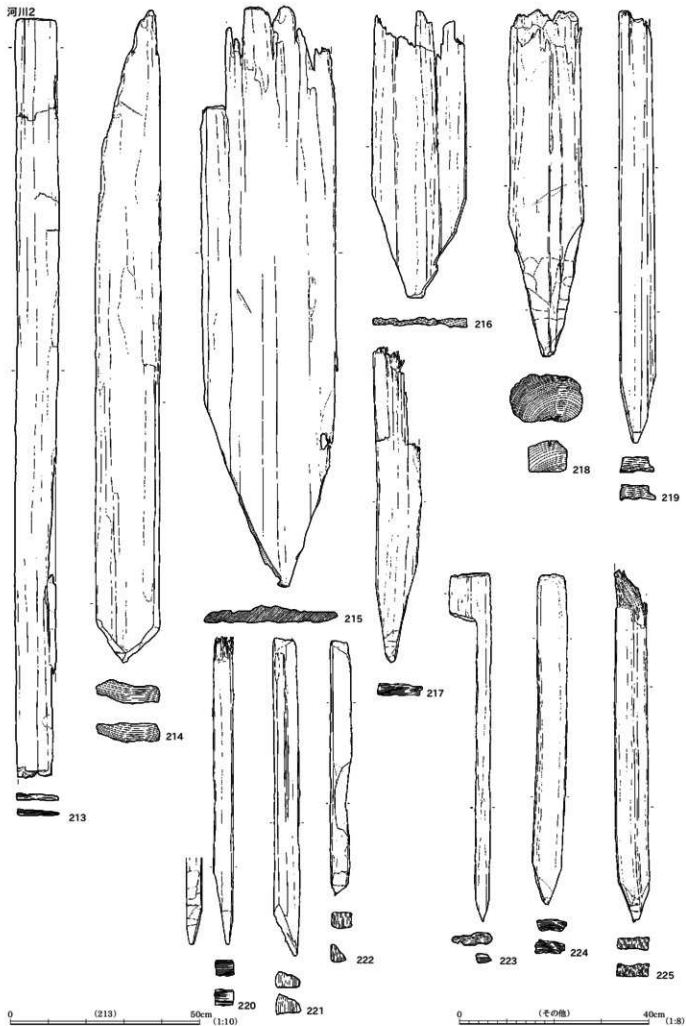


河川2

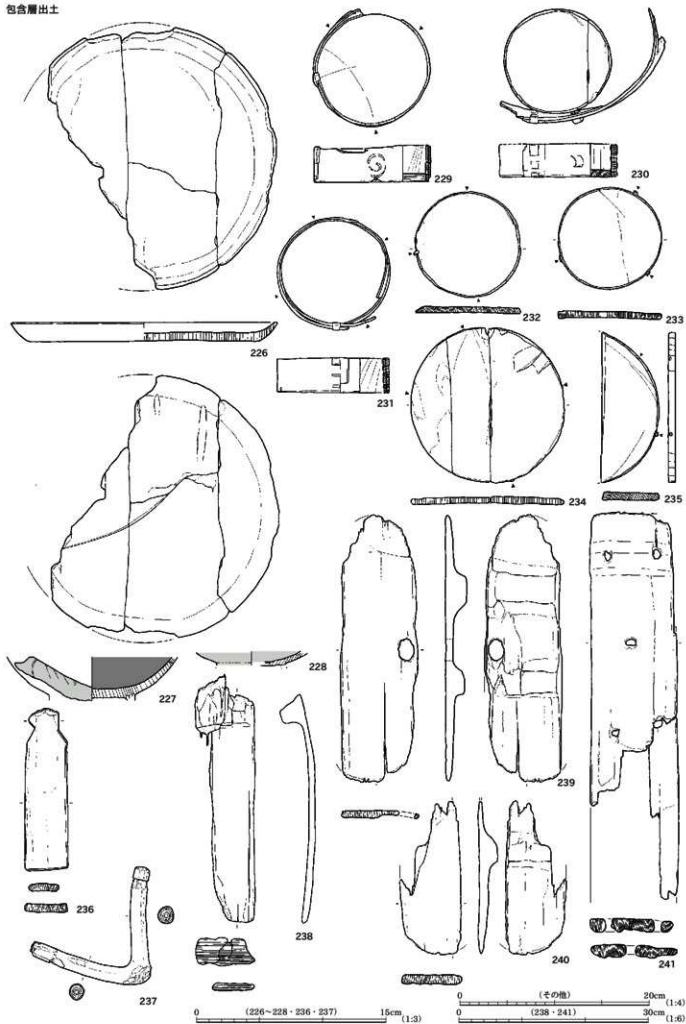
0 (183-187-188-194-190) 20cm (1:4)
 0 (その他) 40cm (1:8)

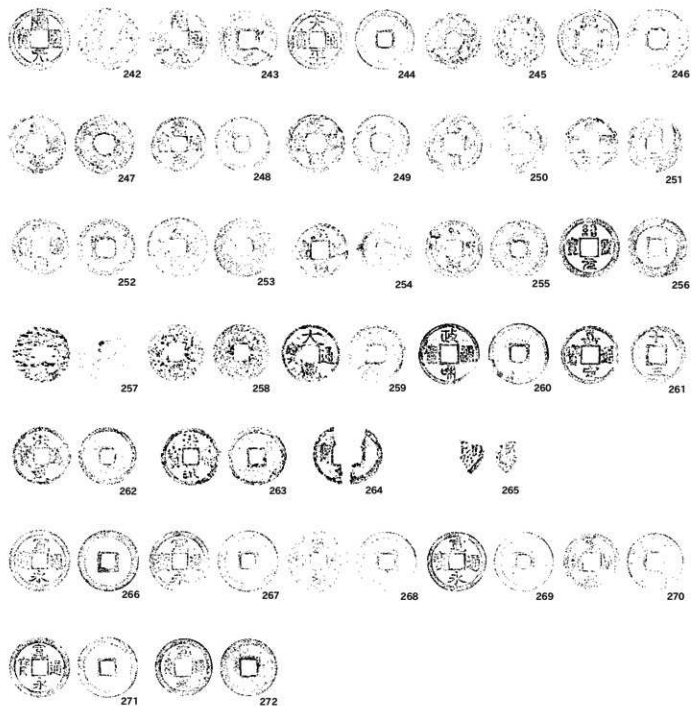
河川2

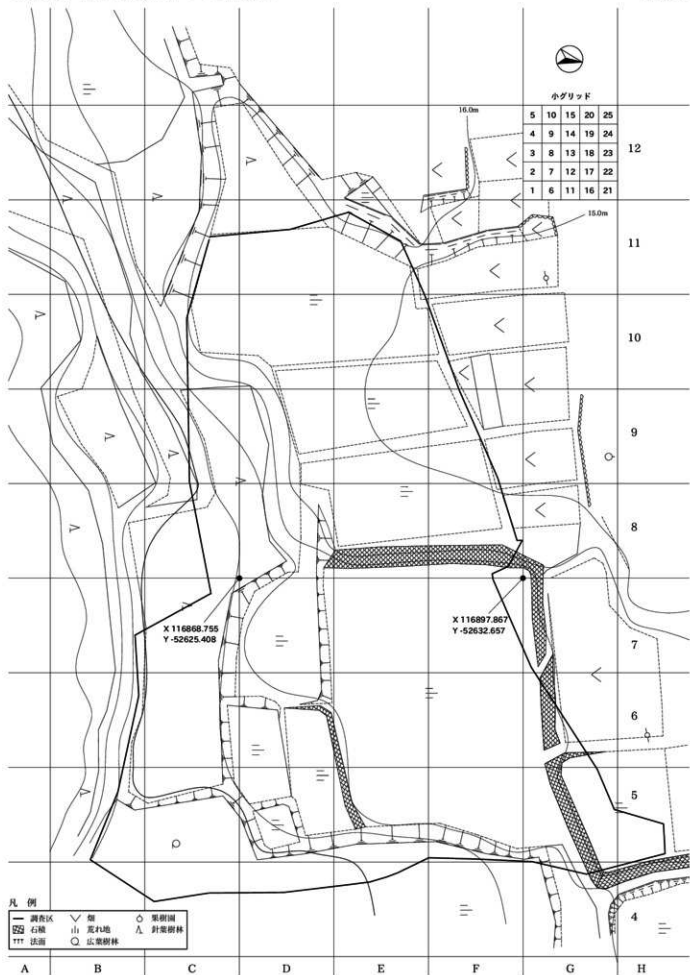


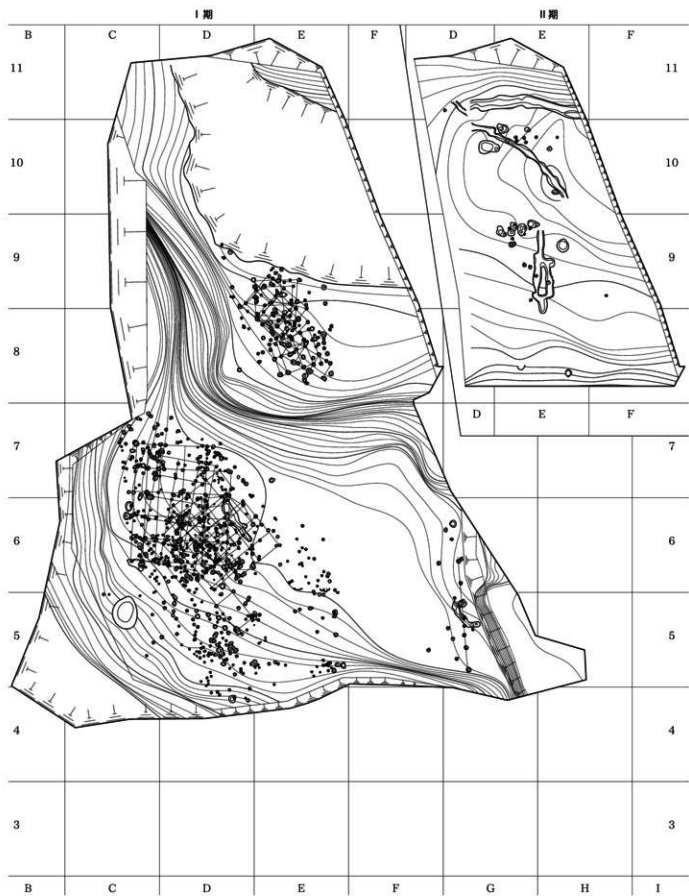


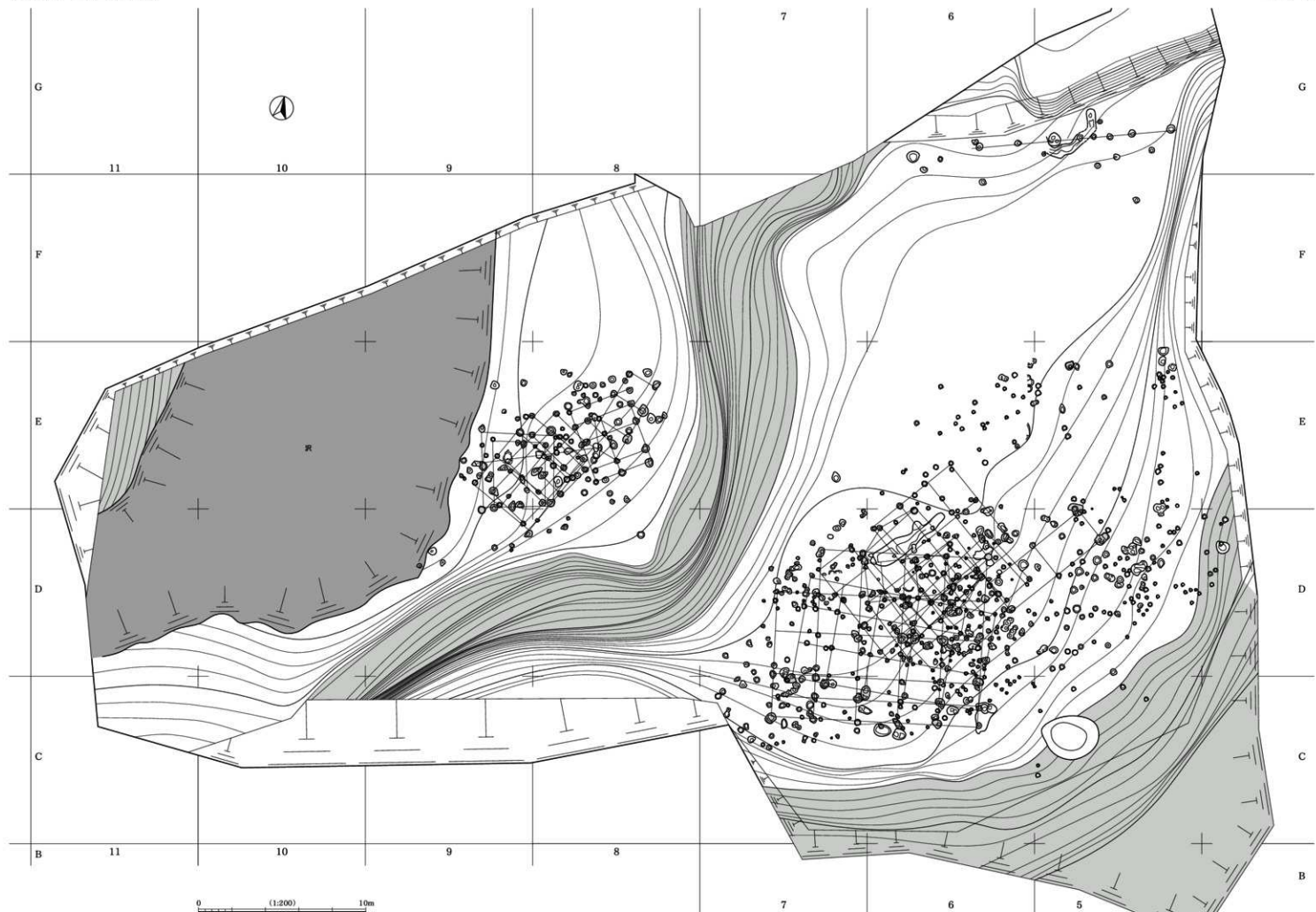
包含層出土

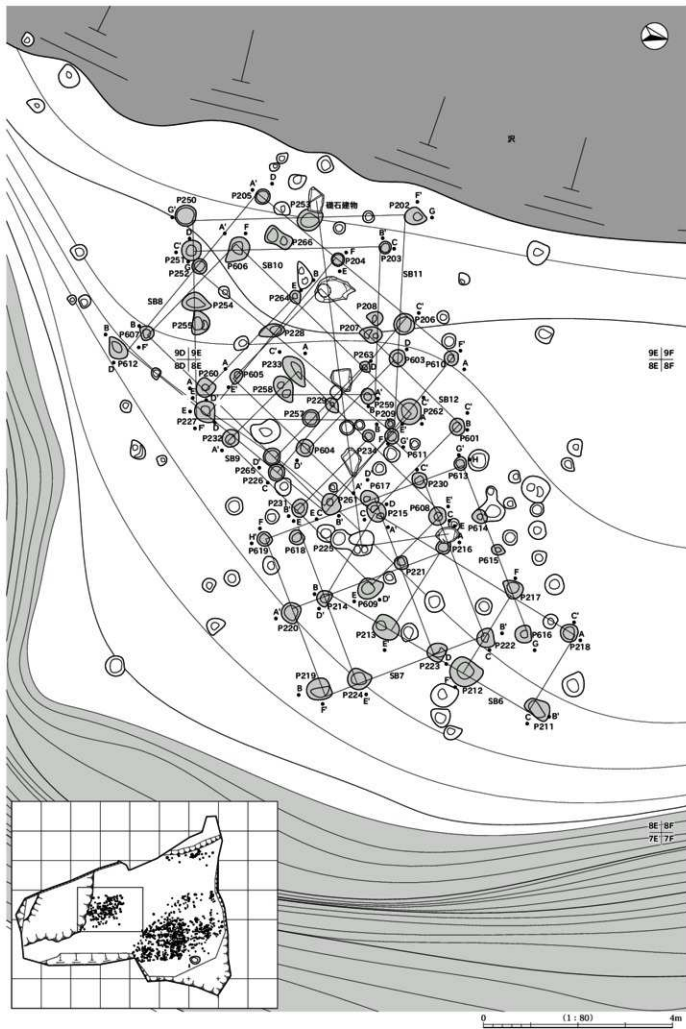


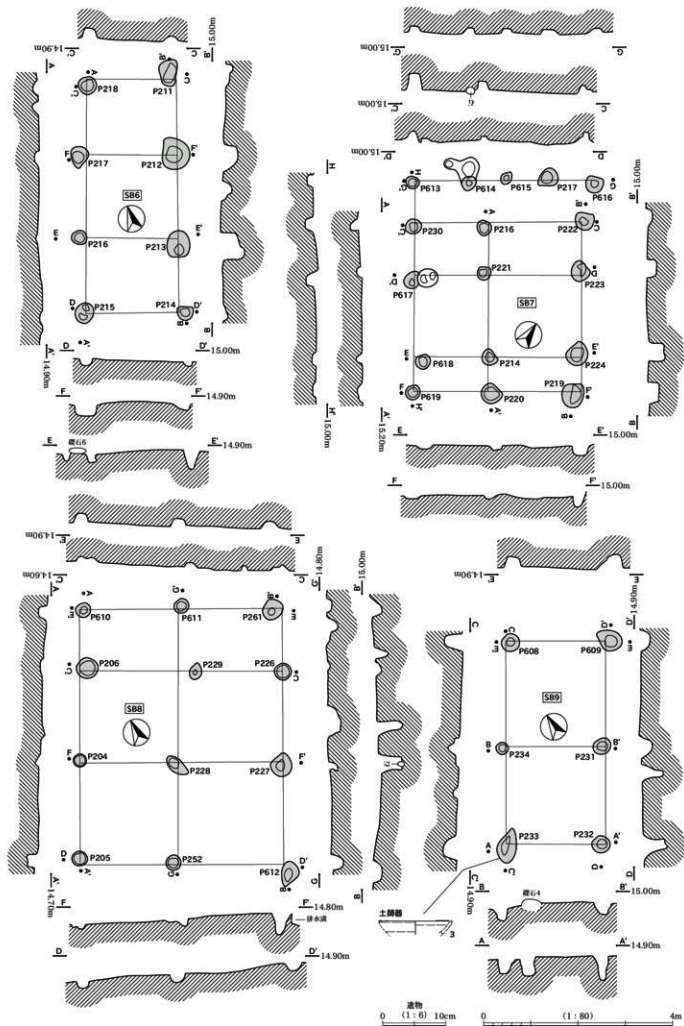


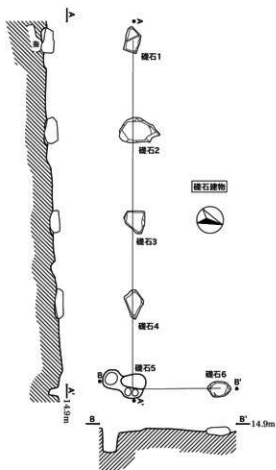
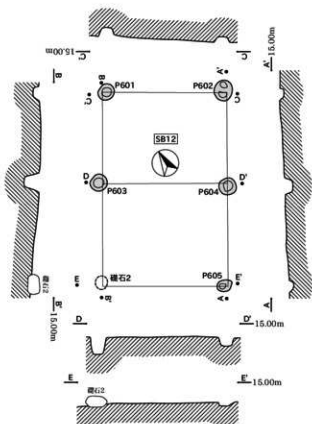
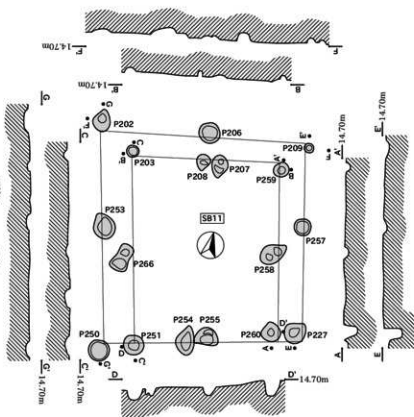
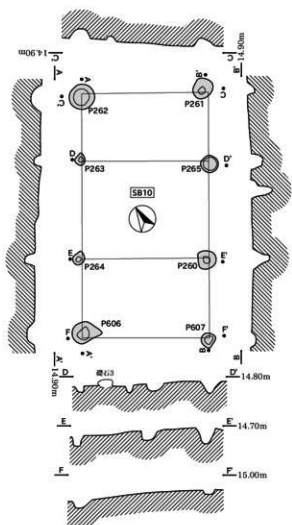


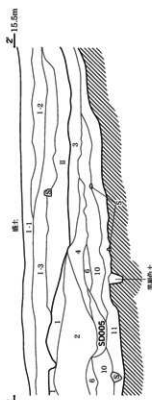
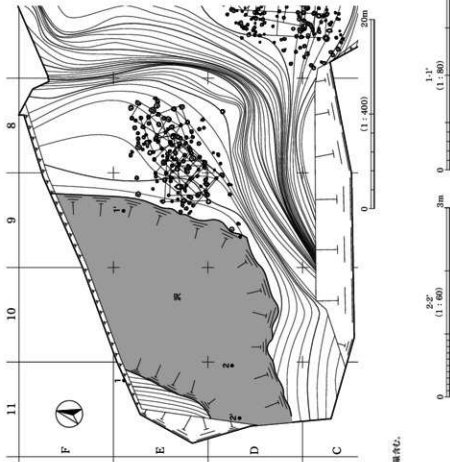
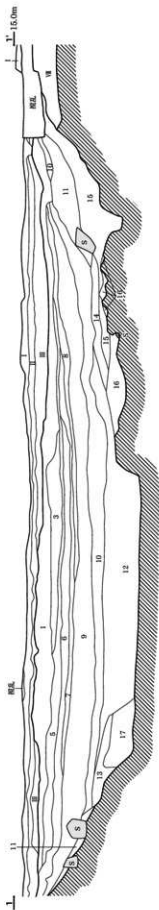






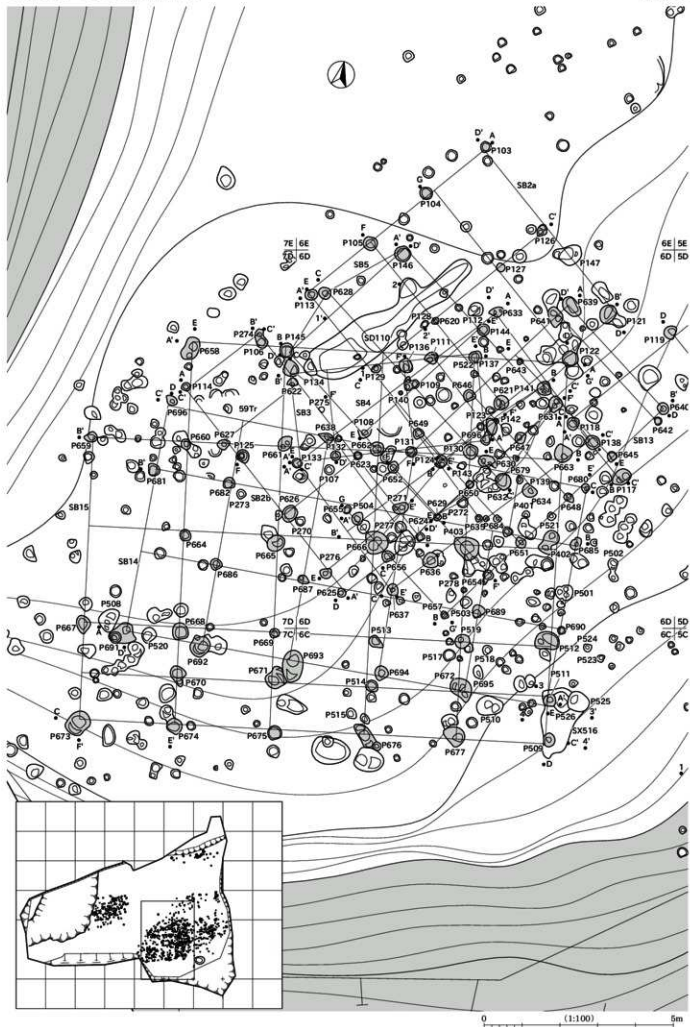


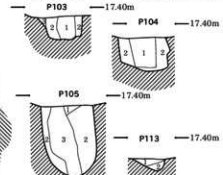
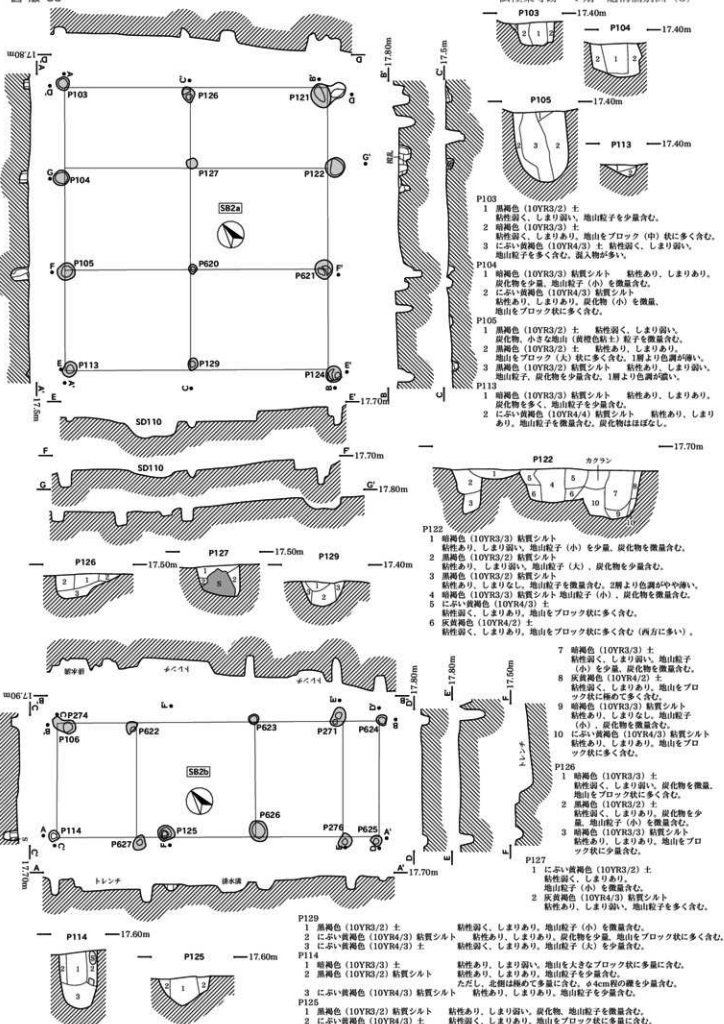




- 基本層序**
- I 1 暗褐色 (10YR3/3) 土
 - I-1 褐色土 (10YR2/2) 土
 - I-2 暗褐色 (10YR3/3) 土
 - I-3 暗褐色 (10YR3/3) 土
 - II 褐色 (10YR4/4) 土
 - III 赤い・黄褐色 (10YR4/3) 土
- 沢中土層**
- 1 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂層
 - 2 暗褐色 (10YR6/3) 粘土
 - 3 暗褐色 (10YR3/3) 土
 - 4 赤い・黄褐色 (10YR4/3) 土
 - 5 暗褐色 (10YR3/3) 土
 - 6 暗褐色 (10YR3/3) 土
 - 7 赤い・黄褐色 (10YR4/3) 土
 - 8 暗褐色 (2.5Y5/3) 砂層
 - 9 暗褐色 (2.5Y5/3) 砂層
 - 10 暗褐色 (10YR4/4) 土
 - 11 明黄褐色砂層
 - 12 暗褐色 (10YR4/4) 土
 - 13 赤い・黄褐色 (10YR6/3) 粘土
 - 14 赤い・黄褐色 (10YR3/3) 土
 - 15 暗褐色 (10YR3/3) 土
 - 16 黄褐色 (10YR6/5) 砂層
 - 17 暗褐色 (10YR3/3) 粘土
 - 18 赤い・黄褐色 (10YR4/3) 粘土
- 遺跡土層**
- 1 耕作土、粘性弱く、しりとり強い。
 - 2 硬質土
 - 3 近世遺物区外層。粘性弱く、しりとりあり。φ3cm程度の礫を散見含む。
 - 4 遺物区外層。粘性弱く、しりとり強い。
 - 5 近世遺物区外層。粘性弱く、しりとりあり。φ3cm程度の礫を散見含む。
 - 6 遺物区外層。粘性弱く、しりとりあり。φ3cm程度の礫を散見含む。
 - 7 遺物区外層。粘性弱く、しりとりあり。φ3cm程度の礫を散見含む。
 - 8 遺物区外層。粘性弱く、しりとりあり。φ3cm程度の礫を散見含む。
 - 9 遺物区外層。粘性弱く、しりとりあり。φ3cm程度の礫を散見含む。
 - 10 遺物区外層。粘性弱く、しりとりあり。φ3cm程度の礫を散見含む。
 - 11 遺物区外層。粘性弱く、しりとりあり。φ3cm程度の礫を散見含む。
 - 12 遺物区外層。粘性弱く、しりとりあり。φ3cm程度の礫を散見含む。
 - 13 遺物区外層。粘性弱く、しりとりあり。φ3cm程度の礫を散見含む。
 - 14 遺物区外層。粘性弱く、しりとりあり。φ3cm程度の礫を散見含む。
 - 15 遺物区外層。粘性弱く、しりとりあり。φ3cm程度の礫を散見含む。
 - 16 遺物区外層。粘性弱く、しりとりあり。φ3cm程度の礫を散見含む。
 - 17 遺物区外層。粘性弱く、しりとりあり。φ3cm程度の礫を散見含む。
 - 18 遺物区外層。粘性弱く、しりとりあり。φ3cm程度の礫を散見含む。

0 2m 4m
0 20m
1:100 (1:100)
1:400 (1:400)



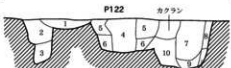


P103
 1 黒褐色 (10YR3/2) 土 粘性弱く、しまり強い。地山粒子を少量含む。
 2 暗褐色 (10YR3/3) 土 粘性弱く、しまりあり。地山をブロック (中) 状に多く含む。
 3 におい黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性弱く、しまり弱い。地山粒子を多く含む。混入物が多い。

P104
 1 暗褐色 (10YR3/3) 粘質シルト 粘性あり、しまりあり。炭化物を少量。地山粒子 (小) を微量含む。
 2 におい黄褐色 (10YR4/3) 粘質シルト 粘性あり、しまりあり。地山をブロック (大) 状に多く含む。1層より色調が濃い。
 3 黒褐色 (10YR3/2) 粘質シルト 粘性あり、しまり弱い。地山粒子。炭化物を少量含む。1層より色調が薄い。

P105
 1 黒褐色 (10YR3/2) 土 粘性弱く、しまり弱い。炭化物。小さな地山 (黄褐色粘土) 粒子を微量含む。
 2 黒褐色 (10YR3/2) 土 粘性あり、しまりあり。地山をブロック (大) 状に多く含む。1層より色調が濃い。
 3 黒褐色 (10YR3/2) 粘質シルト 粘性あり、しまり弱い。地山粒子。炭化物を少量含む。1層より色調が薄い。

P113
 1 暗褐色 (10YR3/3) 粘質シルト 粘性あり、しまりあり。炭化物を多く。地山粒子を少量含む。
 2 におい黄褐色 (10YR4/3) 粘質シルト 粘性あり、しまりあり。地山粒子を微量含む。炭化物はほぼなし。



P122
 1 暗褐色 (10YR3/3) 粘質シルト 粘性あり、しまり弱い。地山粒子 (小) を少量。炭化物を微量含む。
 2 黒褐色 (10YR3/2) 粘質シルト 粘性あり、しまり弱い。地山粒子 (大)。炭化物を少量含む。
 3 黒褐色 (10YR3/2) 粘質シルト 粘性あり、しまりなし。地山粒子を微量含む。2層より色調が濃い。
 4 暗褐色 (10YR3/3) 粘質シルト 地山粒子 (小)。炭化物を微量含む。
 5 におい黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性弱く、しまりあり。地山をブロック状に多く含む。
 6 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 粘性弱く、しまりあり。地山をブロック状に多く含む (両方に多い)。

7 暗褐色 (10YR3/3) 土 粘性弱く、しまり弱い。地山粒子 (小) を少量。炭化物を微量含む。
 8 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 粘性弱く、しまりあり。地山をブロック状に極めて多く含む。
 9 暗褐色 (10YR3/3) 粘質シルト 粘性あり、しまりなし。地山粒子 (小)。炭化物を微量含む。
 10 におい黄褐色 (10YR4/3) 粘質シルト 粘性あり、しまりあり。地山をブロック状に多く含む。

P126
 1 暗褐色 (10YR3/3) 土 粘性弱く、しまり弱い。炭化物を微量。地山をブロック状に多く含む。
 2 黒褐色 (10YR3/2) 土 粘性弱く、しまりあり。炭化物を少量。地山粒子 (小) を微量含む。
 3 暗褐色 (10YR3/3) 粘質シルト 粘性あり、しまりあり。地山をブロック状に少量含む。

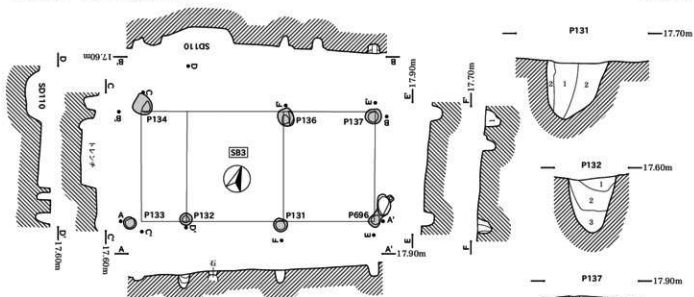
P127
 1 におい黄褐色 (10YR3/2) 土 粘性弱く、しまりあり。地山粒子 (小) を微量含む。
 2 暗褐色 (10YR3/3) 粘質シルト 粘性あり、しまりあり。地山をブロック状に多く含む。

P129
 1 黒褐色 (10YR3/2) 土 粘性弱く、しまりあり。地山粒子 (小) を微量含む。
 2 におい黄褐色 (10YR4/3) 粘質シルト 粘性あり、しまりあり。炭化物を少量。地山をブロック状に多く含む。
 3 におい黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性弱く、しまりあり。地山粒子 (大) を少量含む。

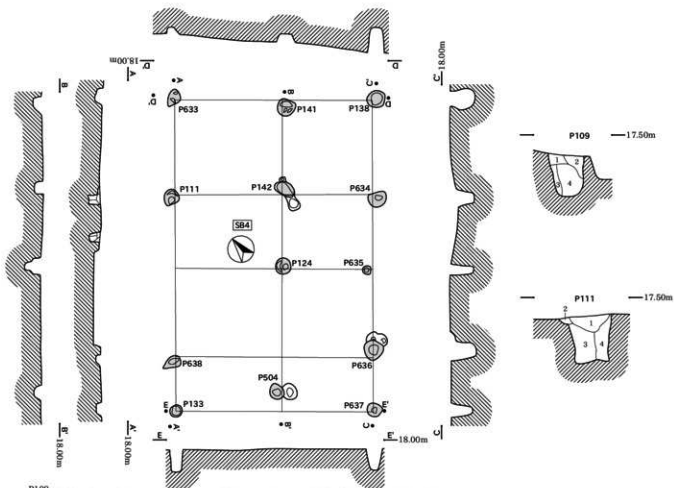
P114
 1 暗褐色 (10YR3/3) 土 粘性あり、しまり弱い。地山を大きなブロック状に多量に含む。粘性あり、しまりあり。地山粒子を少量含む。ただし、北端は極めて多量に含む。φ4cm程度の少量含む。
 3 におい黄褐色 (10YR4/3) 粘質シルト 粘性あり、しまりあり。地山粒子を少量含む。

P125
 1 黒褐色 (10YR3/2) 粘質シルト 粘性あり、しまり弱い。炭化物。地山粒子を微量含む。
 2 におい黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性弱く、しまりあり。地山をブロック状に多量に含む。



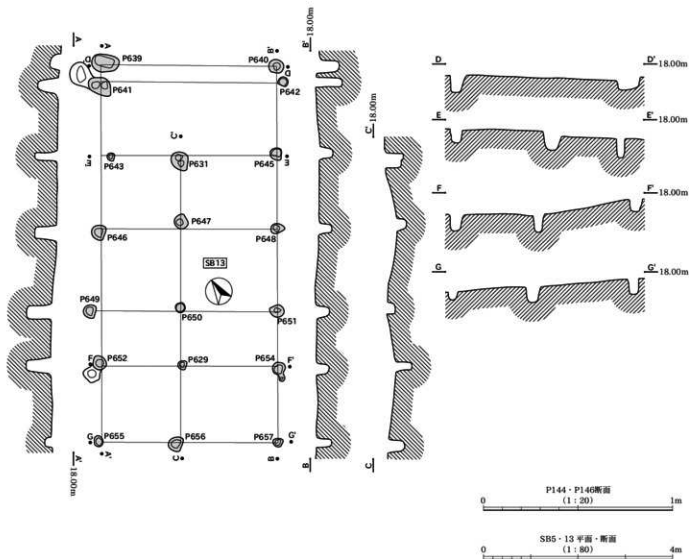
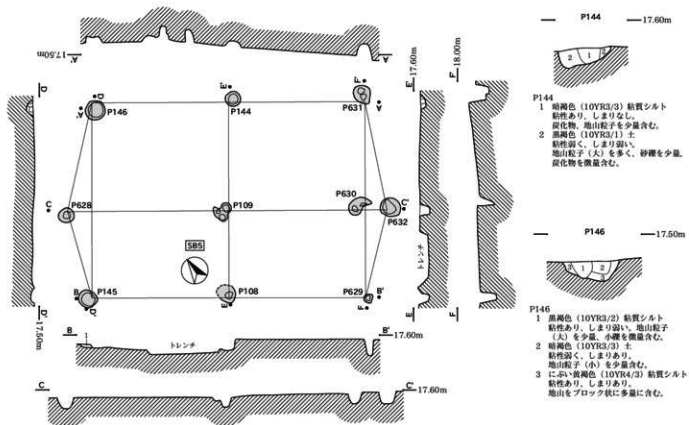


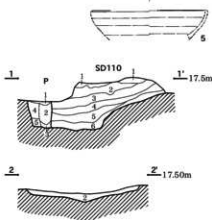
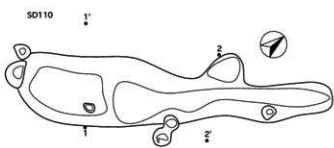
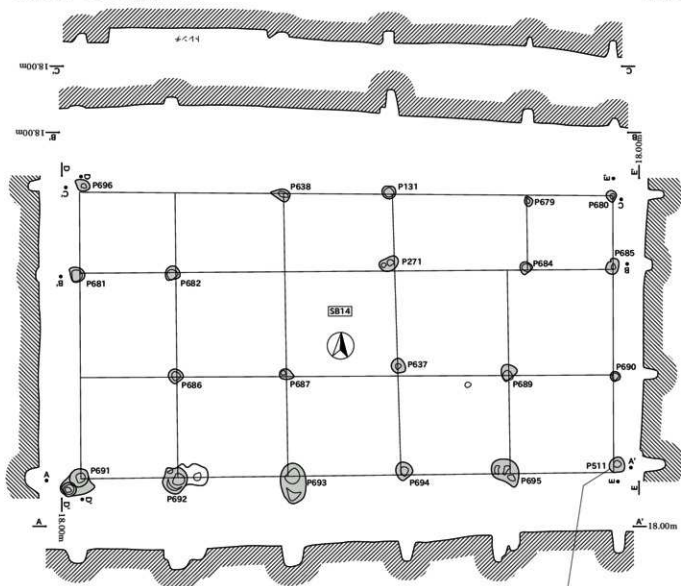
- P131**
 1 黒褐色 (10YR3/2) 粘質シルト 粘性あり、しまりあり。炭化物を微量、地山粒子 (小) を少量含む。
 2 暗褐色 (10YR3/3) 粘質シルト 粘性あり、しまりあり。炭化物を微量、地山をブロック状に多く含む。
- P132**
 1 暗黒褐色 (10YR3/3) 土 粘性弱く、しまり弱い。炭化物を微量含む。
 2 におい黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性弱く、しまりあり。炭化物を微量含む。
 3 黒褐色 (10YR3/2) 粘質シルト 粘性あり、しまりあり。地山粒子 (小) を微量含む。
- P137**
 1 暗褐色 (10YR3/3) 粘質シルト 粘性あり、しまり弱い。炭化物を少量、地山粒子 (小) を多く含む。中位に黒褐色層をベルト状に含む。
 2 におい黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性弱く、しまり弱い。地山粒子 (小) を少量含む。
 3 黒褐色 (10YR3/2) 土 粘性弱く、しまりあり。地山をブロック状に極めて多く含む。



- P109**
 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 粘性弱く、しまり弱い。炭化物、地山粒子 (小) を多く含む。
 2 におい黄褐色 (10YR4/3) 粘質シルト 粘性あり、しまり弱い。地山粒子 (小)、φ5mm程の小礫を微量含む。
 3 におい黄褐色 (10YR4/3) 粘質シルト 粘性あり、しまりあり。斜め方向に地山ブロックを多量に含む。2層に同じか。
 4 暗褐色 (10YR3/3) 粘質シルト 粘性あり、しまり弱い。地山粒子 (小)、炭化物、φ3cm程の円礫を微量含む。
- P111**
 1 におい黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性弱く、しまり弱い。地山粒子を多く含む。
 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 粘性あり、しまり弱い。地山をブロック状に極めて多く含む。
 3 暗褐色 (10YR3/3) 粘質シルト 粘性あり、しまり弱い。炭化物を微量含む。
 4 暗褐色 (10YR3/3) 粘質シルト 粘性あり、しまりあり。3層よりやや色調が濃い。地山をブロック状に少量、炭化物を微量含む。





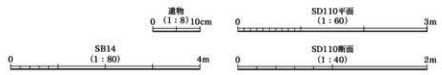


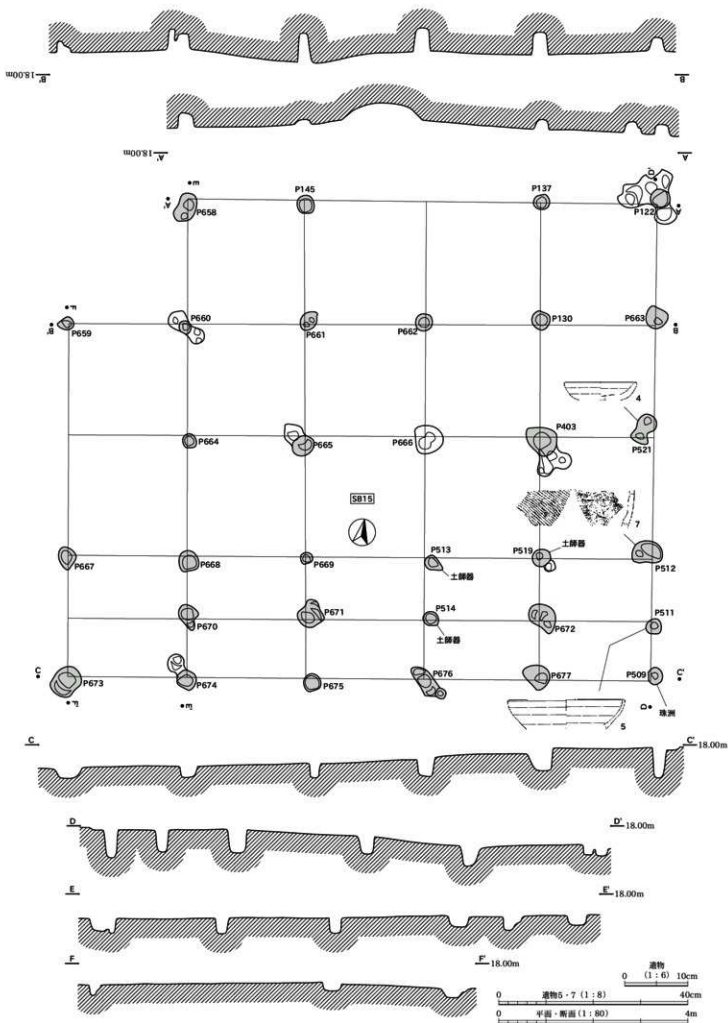
SD110

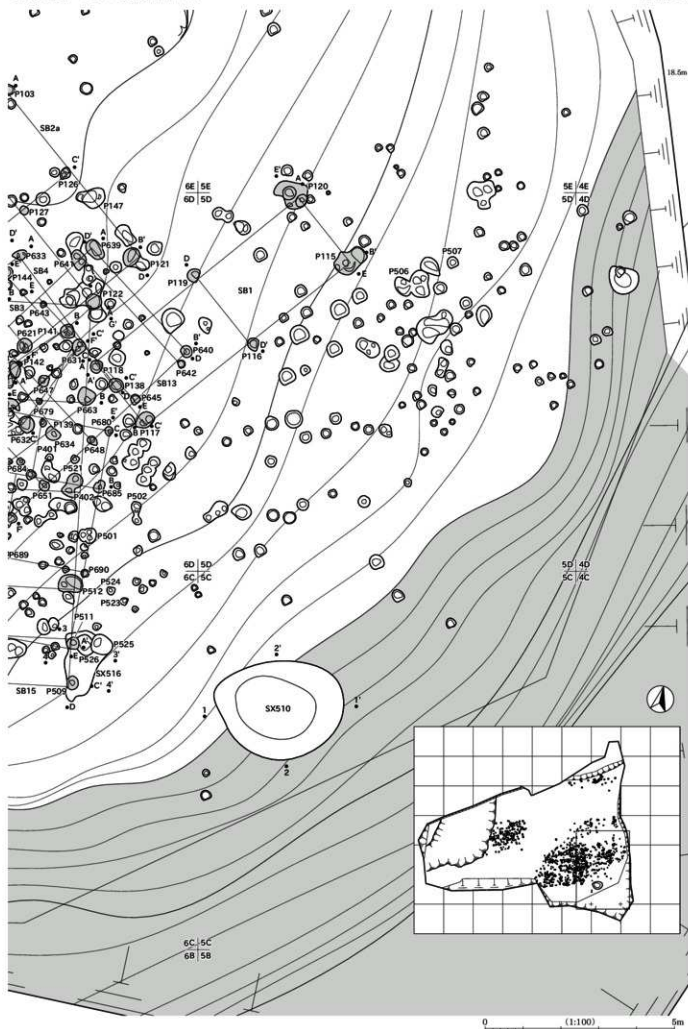
- | | |
|------------------------|---------------------------------------|
| 1 粘土 | 粘性あり、しまりあり。地山（灰黄褐色粘質シルト）をブロック状に多量に含む。 |
| 2 にがい黄褐色（10YR4/3）粘質シルト | 粘性強く、しまり強い。地山粒子を微量含む。 |
| 3 暗褐色（10YR3/3）粘土 | 粘性強く、しまり強い。地山粒子を少量含む。 |
| 4 褐色（10YR4/4）粘質シルト | 粘性あり、しまりあり。地山粒子（小）を微量含む。炭化物を微量含む。 |
| 6 にがい黄褐色（10YR4/3）粘質シルト | 粘性あり、しまりあり。地山をブロック状に多量に含む。 |

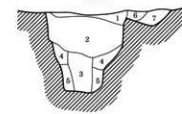
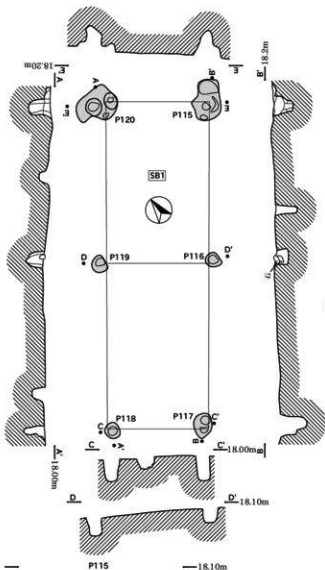
P

- | | |
|---------------------|-----------------------------------|
| 1 褐色色（10YR4/1）粘質シルト | 粘性あり、しまり弱い。地山粒子（大）を少量含む。 |
| 2 暗褐色（10YR3/3）土 | 粘性あり、しまり弱い。地山をブロック状に極めて多く含む。 |
| 3 灰黄褐色（10YR4/2）土 | 粘性あり、しまりあり。炭化物を微量含む、地山粒子（大）を少量含む。 |
| 4 にがい黄褐色（10YR4/3）土 | 粘性あり、しまりあり。地山を多く含む。 |
| 5 灰黄褐色土（10YR4/2）土 | |

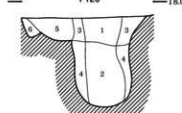




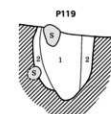




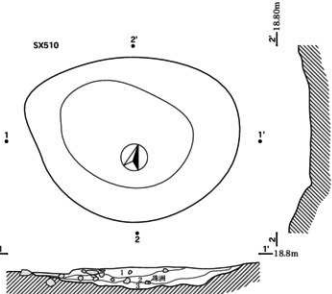
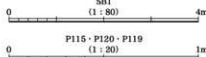
- P115**
- 1 黒褐色 (10YR3/2) 土
粘性弱く、しまり強い。
炭化物、砂礫、φ3cm程の礫を少量含む。
 - 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 土
粘性弱く、しまりあり。
小礫を少量、砂礫を多く、炭化物を微量含む。
 - 3 暗褐色 (10YR3/3) 粘質シルト
粘性あり、しまり強い。地山粒子を少量含む。
 - 4 にがい黄褐色 (10YR4/3) 土
粘性弱く、しまりあり。地山をブロック状に多量に含む。
 - 5 黒褐色 (10YR3/2) 粘質シルト
粘性あり、しまりあり。地山粒子 (小) を多量に含む。
 - 6 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質シルト
粘性あり、しまり強い。
 - 7 暗褐色 (10YR3/3) 粘質シルト
粘性あり、しまり強い。
地山粒子を多く、炭化物を微量含む。
砂やφ5cm程の円礫を微量含む。



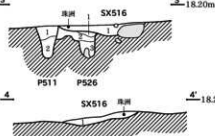
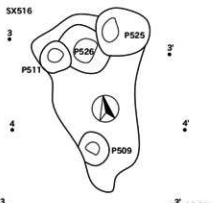
- P120**
- 1 黒褐色 (10YR3/2) 土
粘性弱く、しまり弱い。明黄褐色砂礫混雜。炭化物を微量含む。
 - 2 暗褐色 (10YR3/3) 粘質シルト
粘性あり、しまり強い。地山粒子、炭化物を微量含む。
 - 3 にがい黄褐色 (10YR4/3) 土
粘性弱く、しまりあり。炭化物、φ4cm程の礫を微量含む。
 - 4 暗褐色 (10YR3/3) 土
粘性弱く、しまりあり。地山をブロック状に少量含む。
 - 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 土
粘性弱く、しまり弱い。単土の礫を極めて多く含む。
 - 6 にがい黄褐色 (10YR4/3) 土
粘性弱く、しまりあり。地山粒子を多量に含む。



- P119**
- 1 黒褐色 (10YR3/2) 粘質シルト
粘性あり、しまり強い。
地山粒子 (小) を少量、炭化物を微量含む。
 - 2 にがい黄褐色 (10YR4/3) 土
粘性弱く、しまりあり。
地山 (明黄褐色砂礫) をブロック状に多量に含む。

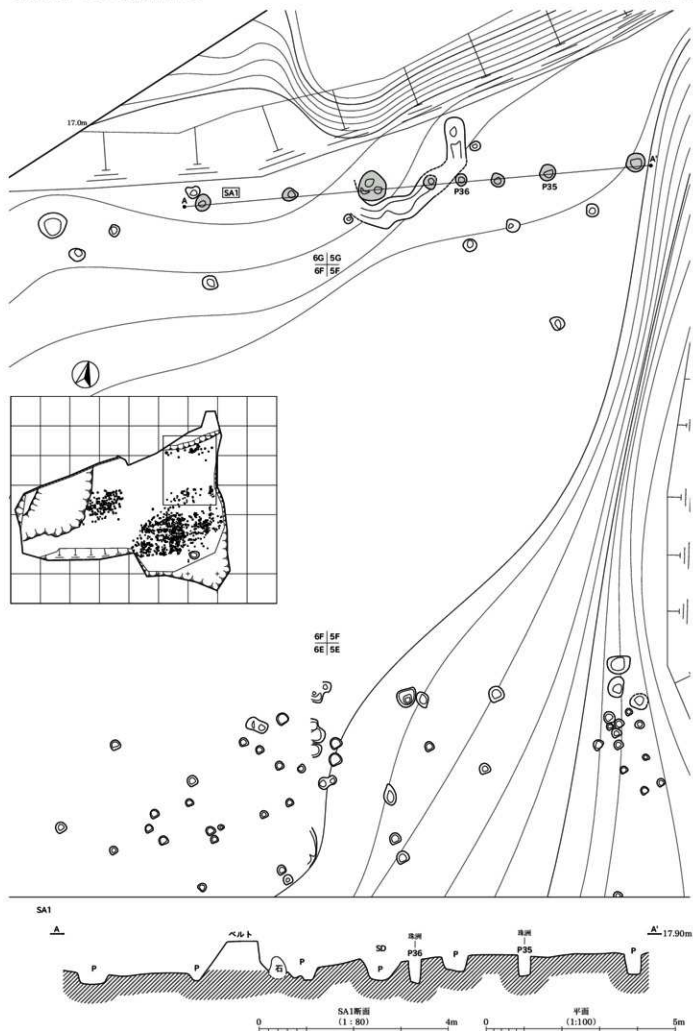


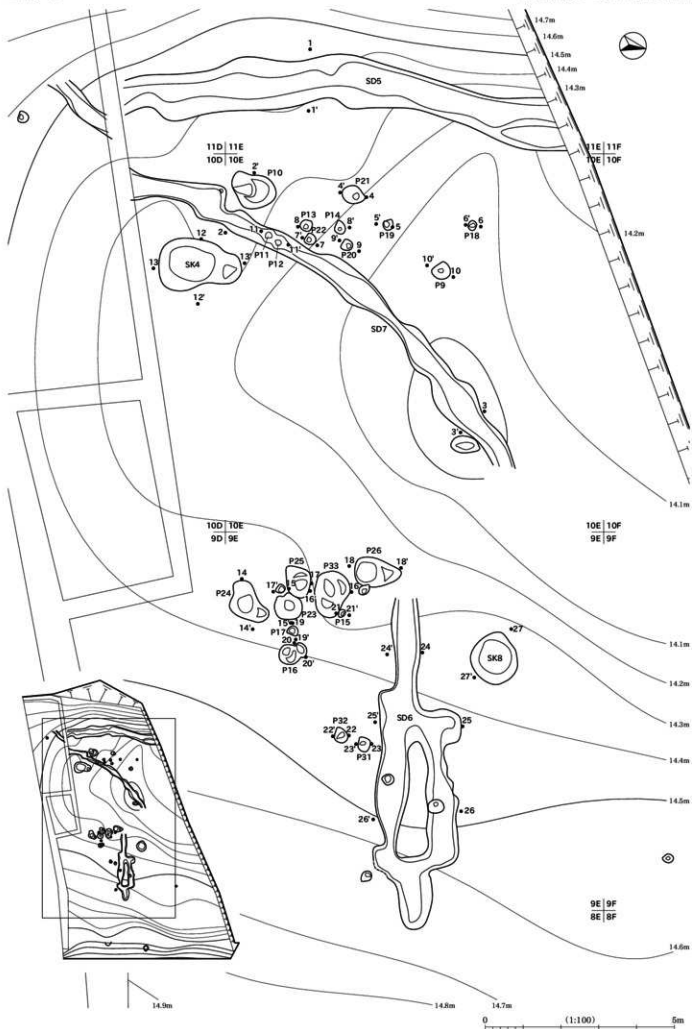
- SX510**
- 1 灰オリーブ (7.5Y5/2) 粘質土
粘性強く、しまりなし。
炭化物を微量、φ4cm程の円礫を少量含む。
 - 2 緑灰色 (6G5/1) 粘質土
粘性強く、しまりなし。礫を微量含む。
 - 3 灰色 (10Y4/1) 粘質土
粘性強く、しまり強い。
細かい砂礫を多く、炭化物を少量含む。珠洲焼を含む。

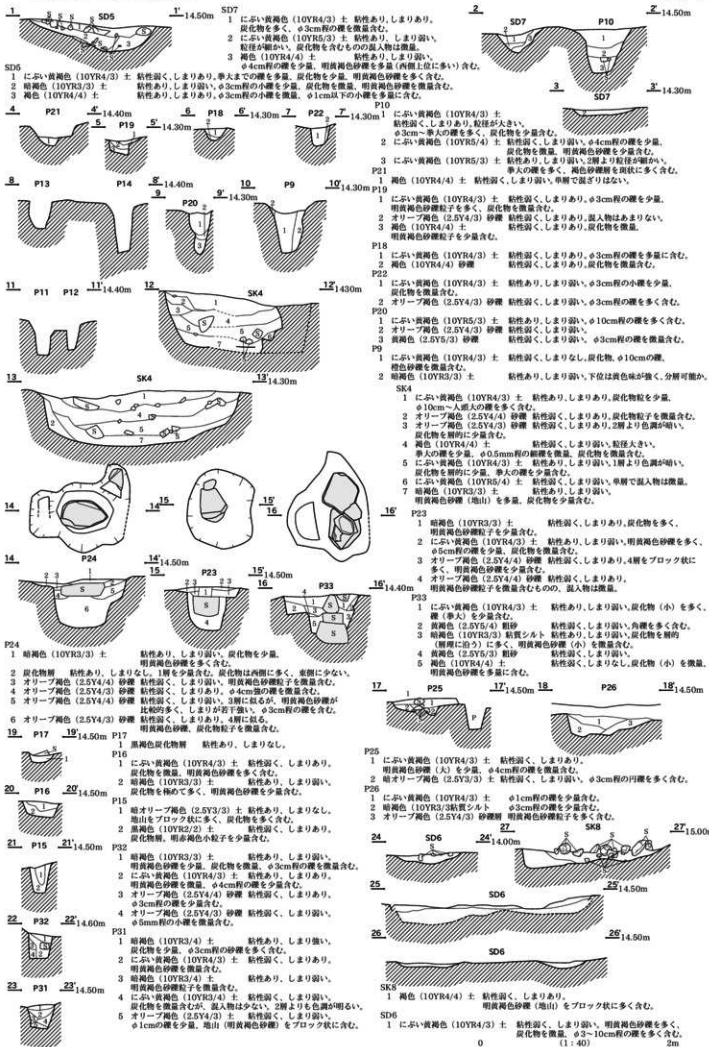


- SX516**
- 1 暗褐色 (10YR3/3) 土
粘性弱く、しまり弱い。炭化物を微量、礫・角礫 (φ1cm~入道大) を多く含む。
- P511**
- 1 黒褐色 (10YR3/2) 粘質シルト
粘性あり、しまりあり。
明黄褐色砂礫、炭化物を少量含む。珠洲焼を含む。
 - 2 黄褐色 (10YR3/1) 粘質シルト
粘性あり、しまり強い。明黄褐色砂礫 (1層より粒径は大きい) を少量、炭化物を多量に含む。
- P526**
- 1 暗褐色 (10YR3/4) 土
粘性弱く、しまり弱い。
炭化物を多く、明黄褐色砂礫を微量含む。
 - 2 褐色 (10YR4/4) 土
炭化物を微量。明黄褐色砂礫をブロック状に極めて多く含む。粒径は大きい。
 - 3 にがい黄褐色 (10YR4/3) 土
粘性弱く、しまり弱い。
炭化物、明黄褐色砂礫を少量含む。









0 (1:40) 2m

I 期 (鎌倉時代) 遺構内出土

P211
(SB6)



P501



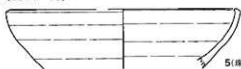
P233
(SB9)



P521
(SB15)



P511 (SB14・15)



P503



P512 (SB15)



P278



P524



P506



P504 (SB4)



P501

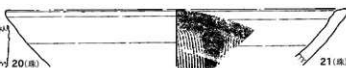
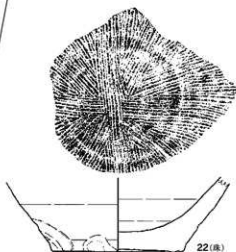
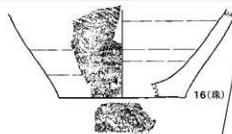


SX510

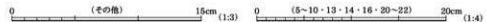
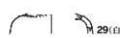


沢

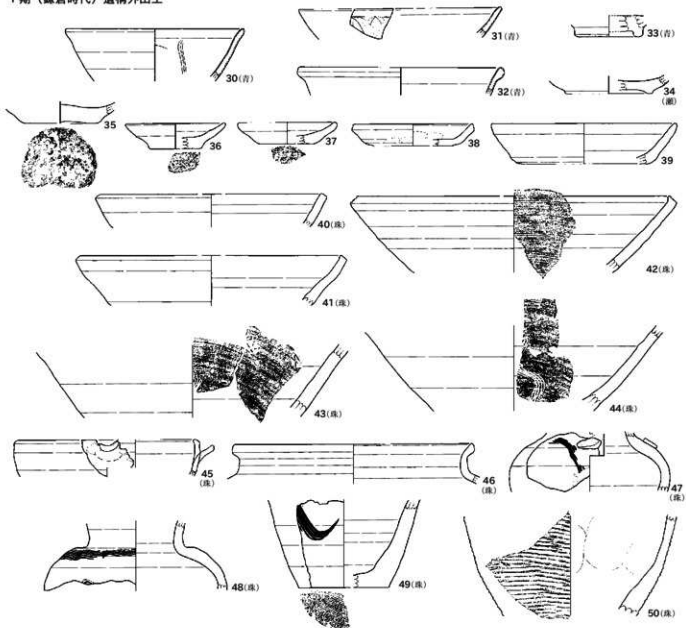
SX516



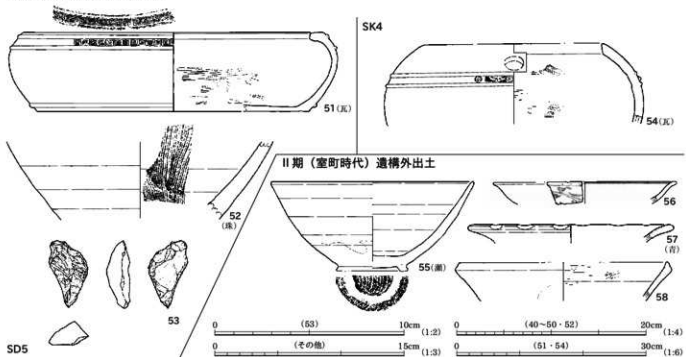
I 期 (鎌倉時代) 遺構外出土

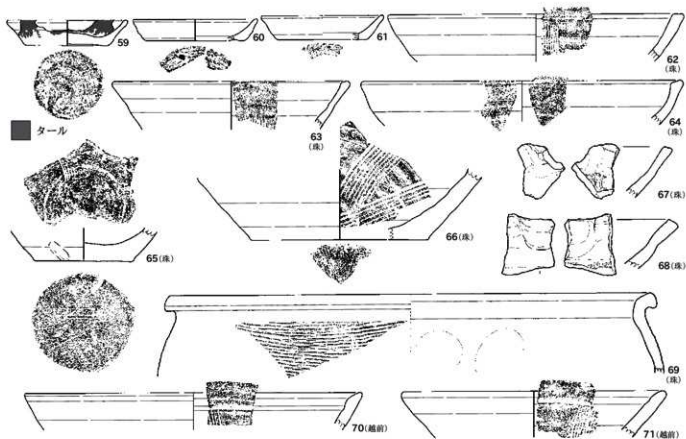


I期(鎌倉時代)遺構外出土



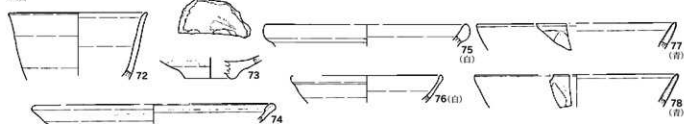
II期(室町時代)遺構内出土





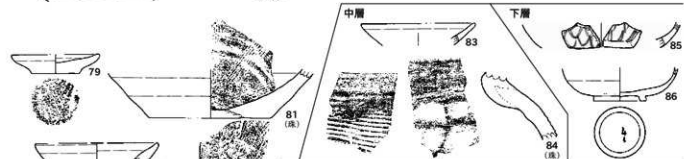
III期 (江戸時代) 石垣裏込め内出土

上層

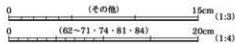
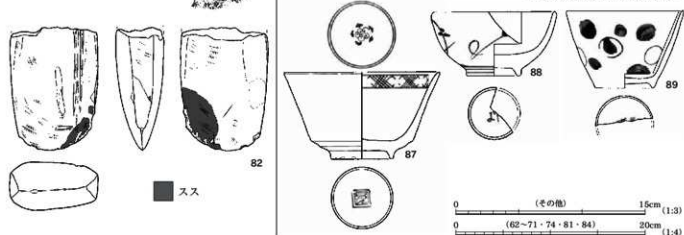


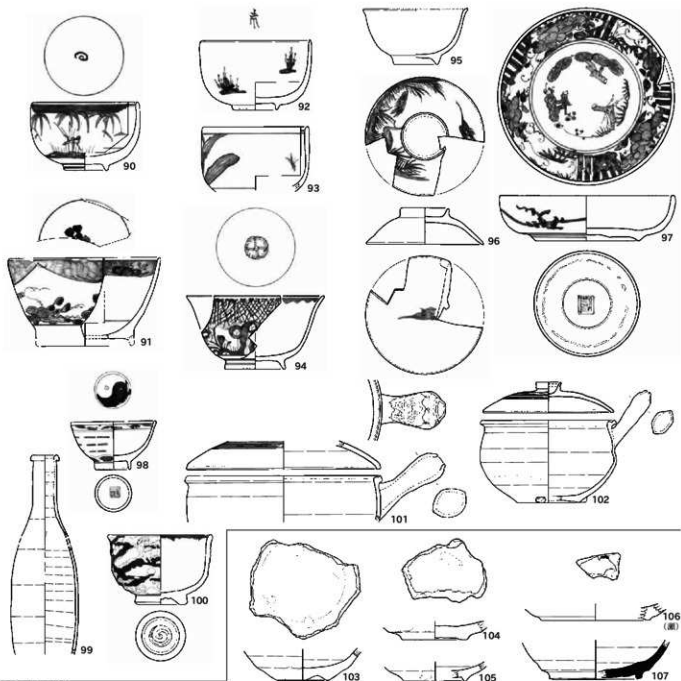
中層

下層

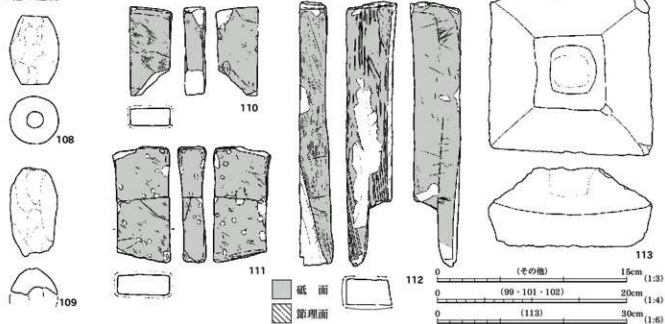


III期 (江戸時代) 遺構外出土





その他の遺物





遺跡近景 北から



遺跡近景 上空北から



河川1 bセクション(南から)



河川2 木製品出土状況(南から)



調査区完掘状況(西から)



4F1 基本層序(西から)



2F1・2基本層序、SD1セクション(西から)



1G1 基本層序(西から)



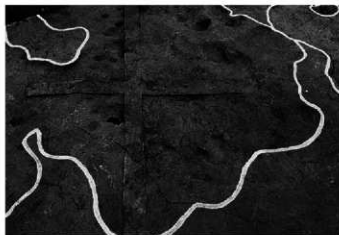
SD1 木製品出土状況(東から)



SD1 完掘状況(北から)



4E・F 完掘状況(南東から)



SX25 完掘(北東から)



SX3 セクション (北西から)



P4 セクション (南から)



SX13 セクション (南東から)



P15 セクション (南東から)



SX21A セクション (西から)



SX21C セクション (西から)



P22 セクション (西から)



SX35 田下駄出土状況 (西から)



河川1 aセクション(南から)



河川1 木製品等出土状況(南から)



河川1 完掘状況(南から)



河川1 SW1 検出状況(南西から)



河川1 cセクション(南から)



河川1 SW2 検出状況(南から)



河川1・SD1合流部 棒状木製品出土状況(南から)



河川1・SD1合流部 木構出土状況(東から)



河川1 合流部出土状況(東から)



河川1(前)・SD1(奥) 湛水状況(東から)



SX53セクション(北から)



SX56セクション(南から)



SD69セクション(北から)



SX74セクション(東から)



SD75Aセクション(北から)



SX76セクション(東から)



河川2 木製品出土状況 (北西から)



河川2 gセクション (南から)



河川2 hセクション (南から)



河川2 iセクション (北から)



河川2 木製品出土状況 (北西から)



河川2 拡張区出土状況 (南から)



河川2 完掘状況 (南から)



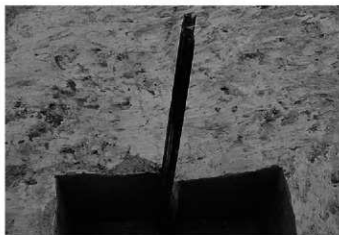
河川2 拡張区完掘状況 (南から)



河川2 土器出土状況(東から)



河川2 土器出土状況(南から)



杭102断面(南から)



杭105断面(南から)



杭110断面(西から)



杭114断面(西から)

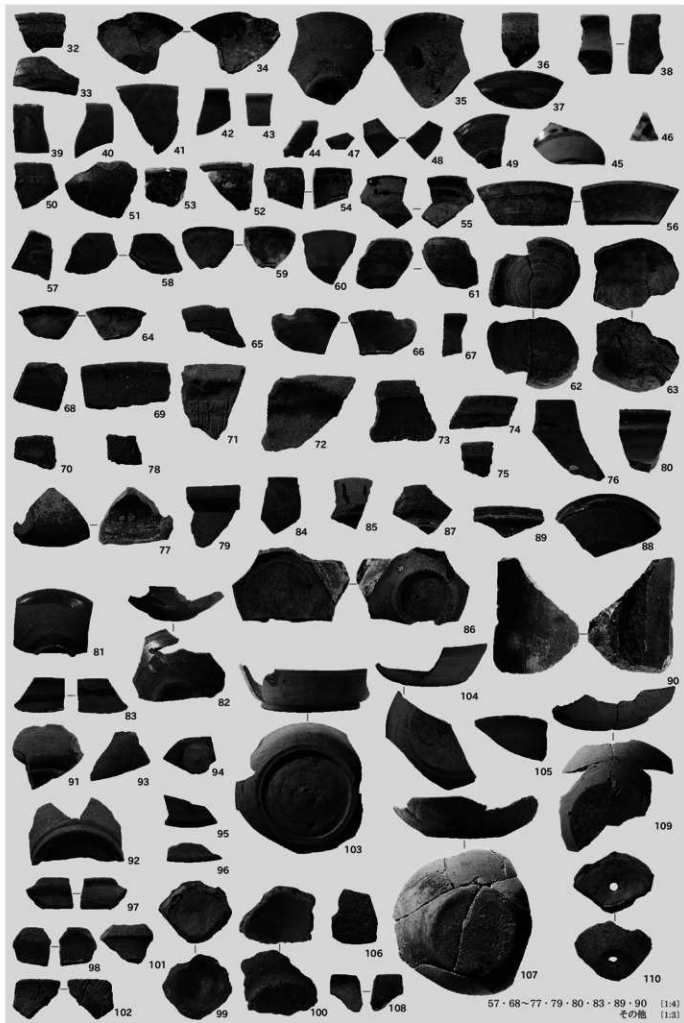


杭118断面(南から)

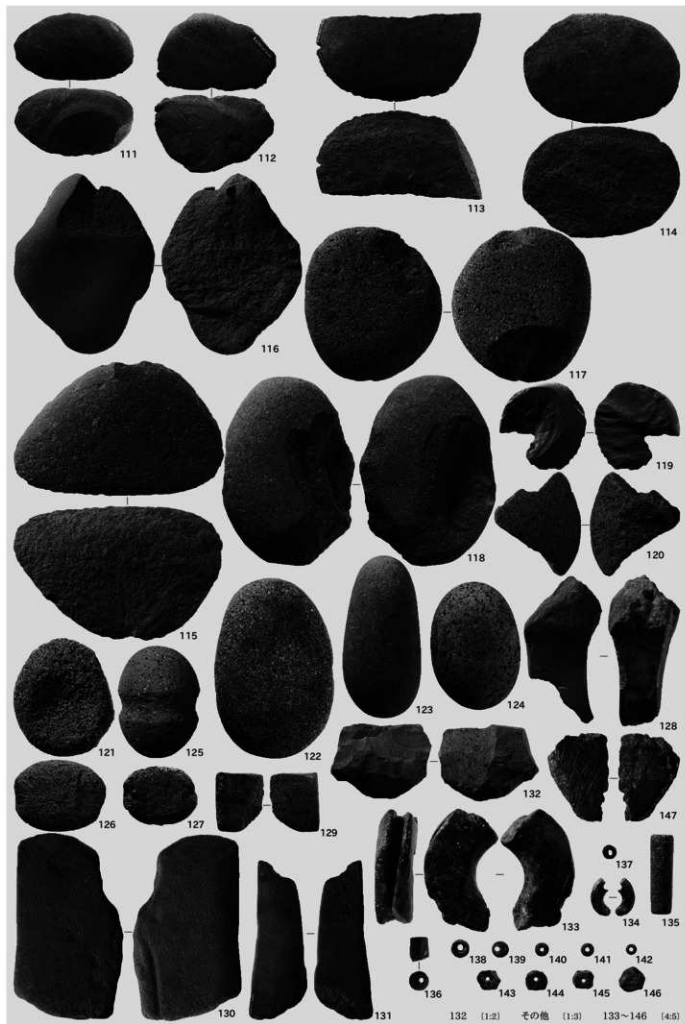


-2F24 木製品出土状況(西から)

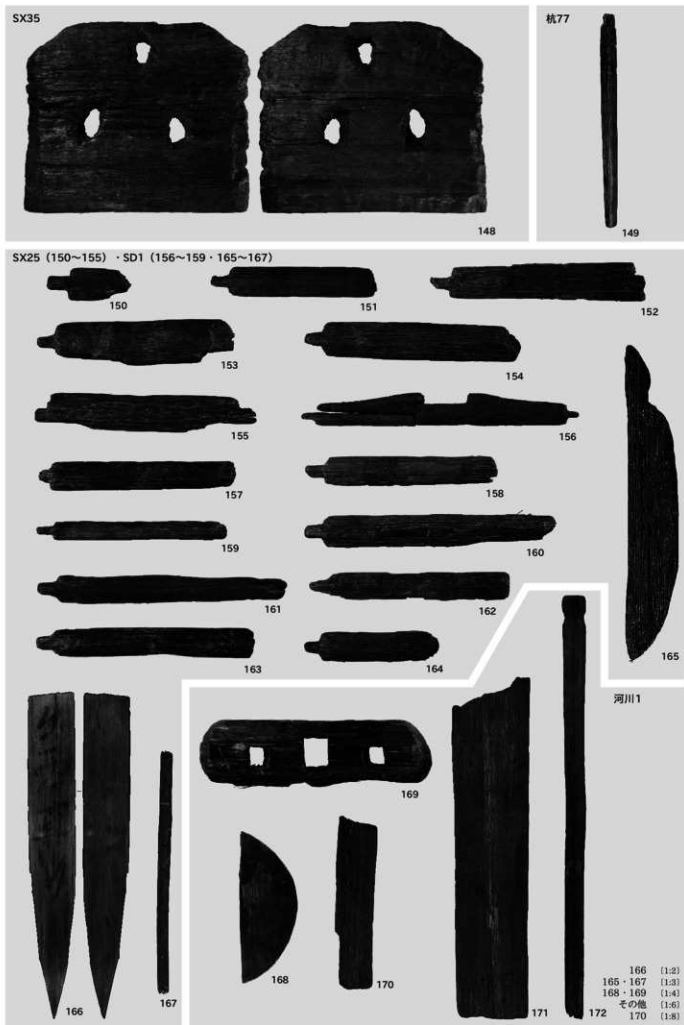


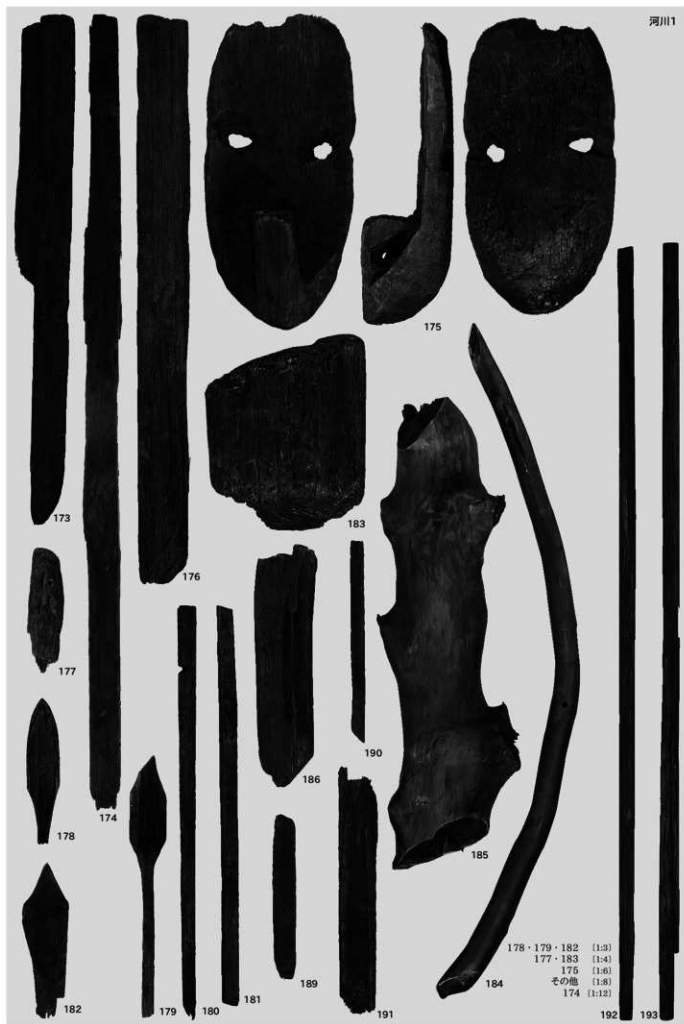


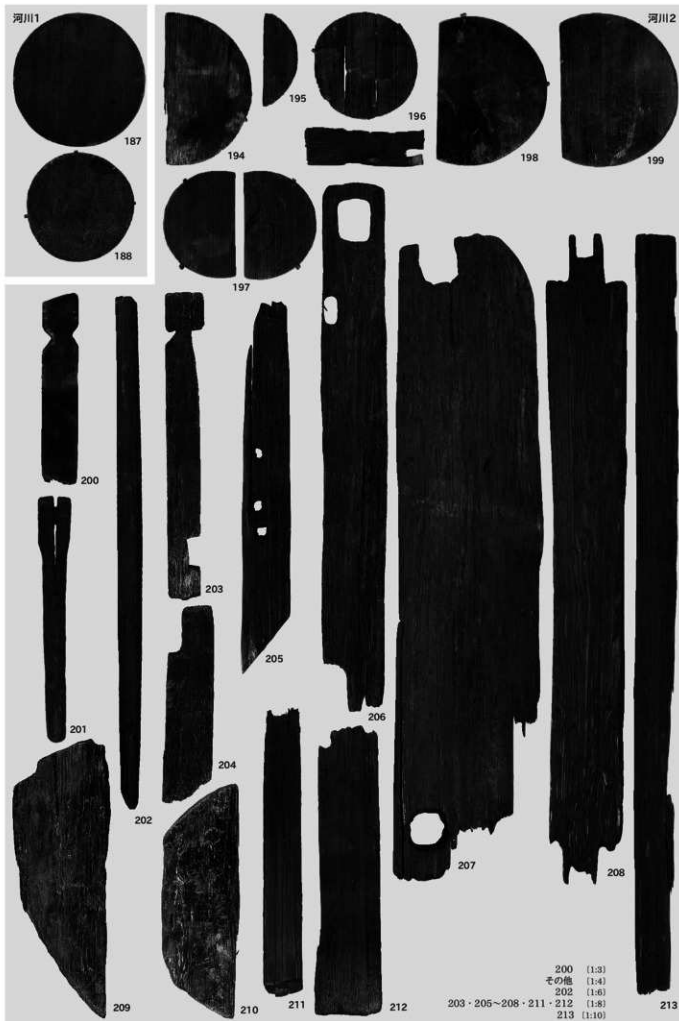
57・68~77・79・80・83・89・90 [1:4]
その他 [1:3]

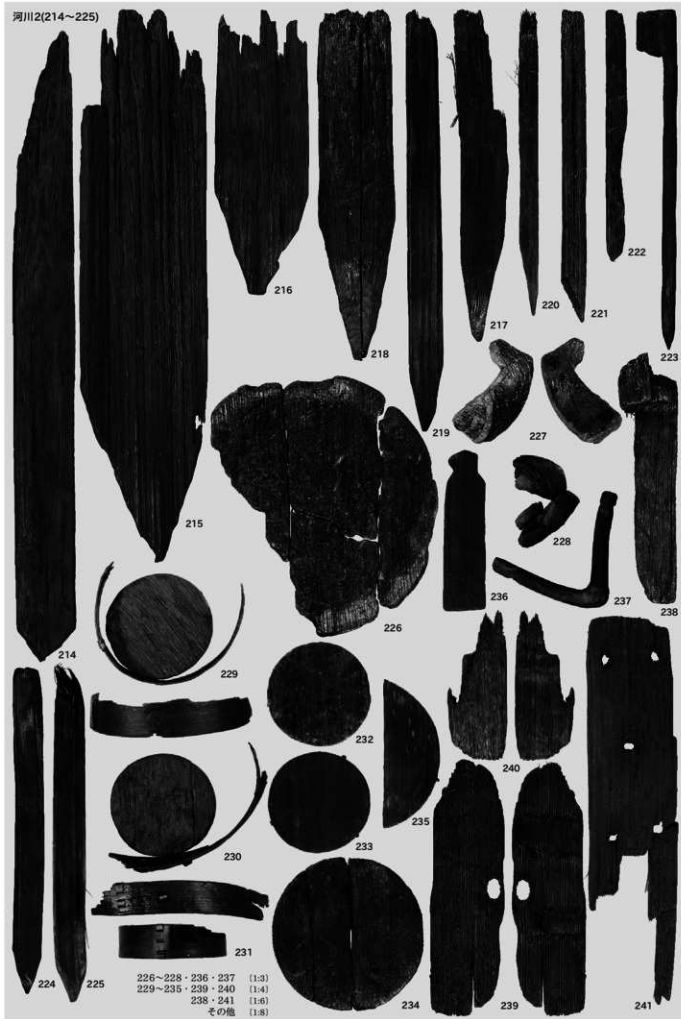


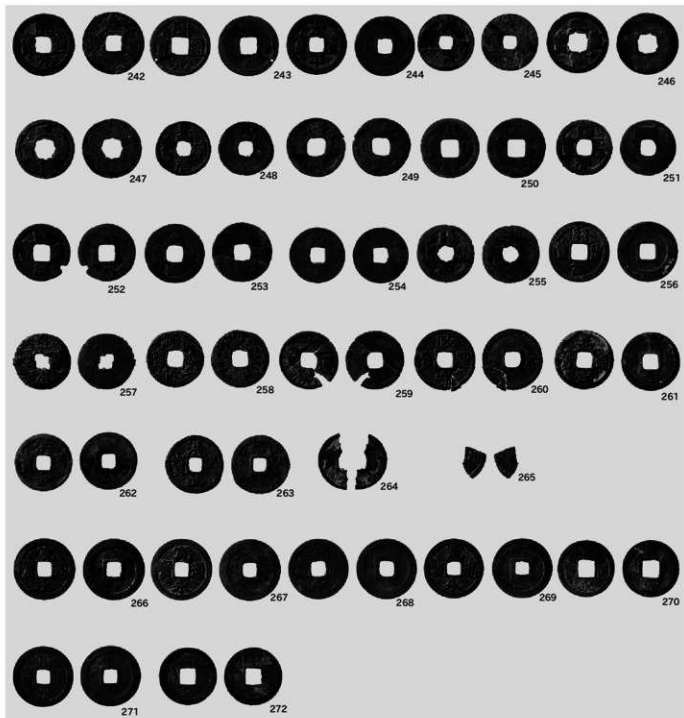
132 (1:2) その他 (1:3) 133~146 (4:5)













遺跡周辺の地形 南東から



遺跡近景 上空南から



調査前現況 (西から)



遺跡近景 (上空北から)



遺跡近景 (北西から)



石垣検出状況 (南西から)



上段下層 遺構検出状況 (南西から)



下段下層 遺構検出状況 (南から)



西面石垣 Bセクション (南東から)



西面石垣 Cセクション (南東から)



上段下層 完掘 (北西から)



上段下層 完掘 (南西から)



上段下層 横列完掘 (東から)



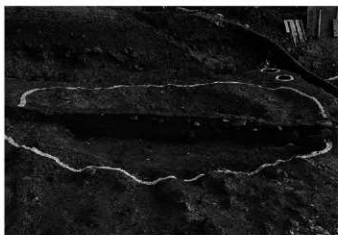
下段下層 完掘 (北西から)



上段下層 SD110セクション (東から)



上段下層 SX516完掘 (北から)



上段下層 SX510完掘 (北から)



上段下層 SX510完掘 (北西から)



SB1-P120 セクション (北から)



SB1-P115 セクション (南から)



SB2a-P103 セクション (北西から)



SB2a-P104 セクション (北西から)



SB2a-P105 セクション (北西から)



SB2a-P122 セクション (南東から)



SB2a-P127 セクション (南東から)



SB2b-P125 セクション (南西から)



SB3-P131 セクション(南から)



SB3-P137 セクション(北から)



SB4-P111 セクション(北西から)



SB5-P109 セクション(北西から)



SB5-P144 セクション(東から)



SB5-P146 セクション(北西から)



下段下層 沢 検出状況(西から)



下段下層 沢 セクション(南西から)



下段上層 SK4 セクション(南から)



下段上層 SK4 セクション(東から)



下段上層 SK8 検出状況(南から)



下段上層 SD6 完掘(西から)



下段上層 SD5 検出状況(南から)



下段上層 SD5 セクション(南から)



下段上層 SD7 セクション(北から)



下段上層 P10 セクション(北から)



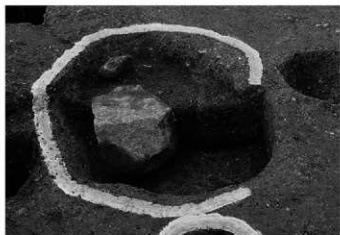
下段上層 P9 セクション (西から)



下段上層 P18 セクション (西から)



下段上層 P19 セクション (西から)



下段上層 P23 セクション (南から)



下段上層 P24 セクション (南から)



下段上層 P31 セクション (西から)



下段上層 P32 セクション (西から)



下段上層 P33 セクション (西から)



石垣 調査前清掃後の状況(南西から)



石垣 表土除去後の状況(西から)



石垣 Bセクション(南西から)



石垣 Bセクション西側(南から)



石垣 Cセクション(南西から)



石垣 Cセクション(南から)



石垣 南隅検出状況(北西から)



石垣 検出状況(南西から)



上段上層・石垣 完掘状況(北西から)



上層 完掘状況(西から)



上段南東区画 検出状況(北西から)



上段南東区画石垣 セクション(東から)



上段南東側 セクション(南西から)



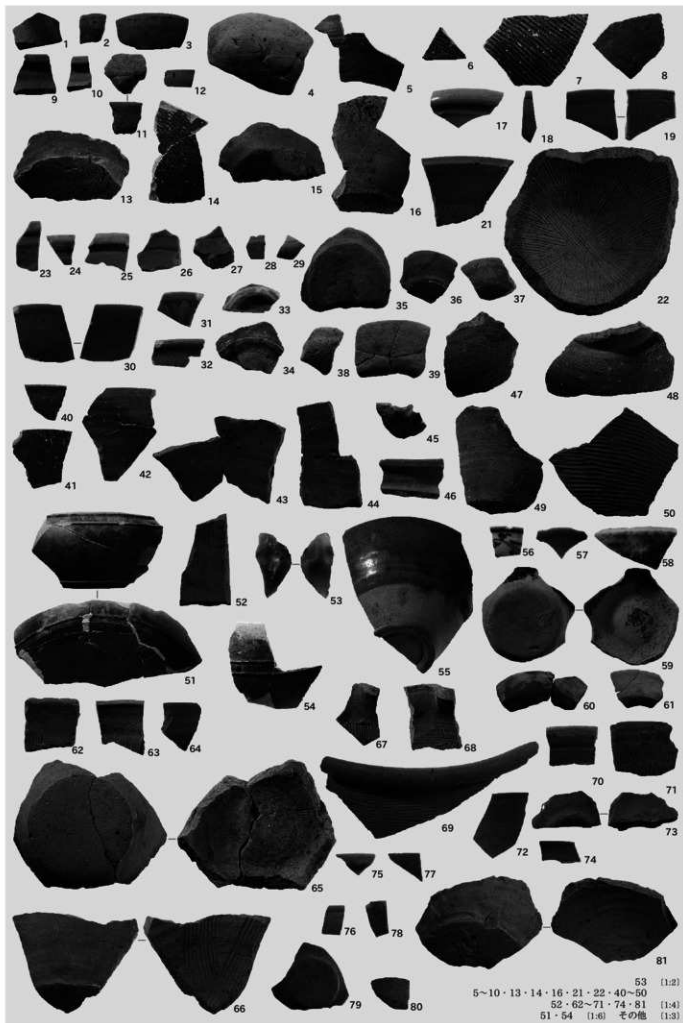
南西斜面部 トレンチ調査状況(南東から)



調査区南東側 完掘状況(北西から)



調査区東側 完掘状況(北から)





報告書抄録

ふりがな	ぜんなみなみないせきⅡ・でんごくらくじあと						
書名	前波南遺跡Ⅱ・伝極楽寺跡						
副書名	一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書						
巻次	V						
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第209集						
編者名	石川智紀・樋口重正・春日真実・加藤学・小川真一（以上、新潟県埋蔵文化財調査事業団）、相羽重徳・松水篤知（以上、株式会社古田組）、高橋政（パリオ・サーヴェイ株式会社）、鹿又喜隆（株式会社加速器分析研究所）						
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL. 0250 (25) 3981						
発行年月日	2010（平成22）年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
前波南遺跡	新潟県糸魚川市大字 大和川字前波ほか	15216	276	37度 02分 54秒	137度 53分 55秒	20070423 ～ 20070806	1,300m ² 国道8号糸魚川 東バイパス建設
伝極楽寺跡	新潟県糸魚川市大字 山伏字高畑1175-1 番地ほか	15216	158	37度 03分 07秒	137度 54分 30秒	20070801 ～ 20080123	2,585m ² 国道8号糸魚川 東バイパス建設
所収遺跡名	種別	時期	主な遺構	主な遺物		特記事項	
前波南遺跡	遺物包含地	縄文時代 弥生時代		縄文土器 弥生土器		「出雲」の文字を含む木 簡が出土した。当時の出 雲（鳥根県）や郡（京都 府）以外の地で出土する ことは稀で、糸魚川と出 雲の密接な関係（交流） を示唆する資料として注 目される。	
		古墳時代	自然流路	土師器、須恵器、石器（横 刃形石器）、石製品（砥石）、 玉作関連資料（白玉・管 玉・勾玉・剣片）、木製品 （建築材・加工材等）			
	古代	ビット・土坑・溝・ 杭・性格不明遺構・自 然流路	須恵器、土師器、木製品 （木簡・曲物・形代・農具 等）				
	中世		青磁、白磁、青花、珠洲焼、 瀬戸美濃焼、越前焼、中世 土師器、木製品、銭貨				
	近世		肥前系陶器、越中瀬戸焼、 銭貨				
伝極楽寺跡	集落	鎌倉時代 ～ 室町時代	独立柱建物・礎石建 物・櫓・ビット・土 坑・溝・性格不明遺構	青磁、白磁、珠洲焼、瀬 戸美濃焼、越前焼、中世 土師器、瓦器、石製品 （砥石・火輪）		寺院跡とは考え難く、 「極楽寺」が存在した痕 跡を確認できなかった が、12～13世紀の山際 に立地する集落の様相が うかがえる。	
		近世	石垣・方形区画	肥前系陶磁器、越中瀬戸焼 須恵器、土師器、製塩土 器、石器、土製品			
	遺物包含地	その他					

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第209集

一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書V

前波南遺跡Ⅱ・伝極楽寺跡

平成22年3月30日印刷
平成22年3月31日発行

編集・発行 新潟県教育委員会

〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1
電話 025 (285) 5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1
電話 0250 (25) 3981
FAX 0250 (25) 3986

印刷・製本 新高速印刷株式会社

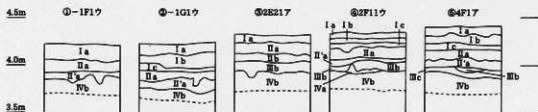
〒950-0963 新潟市中央区南出来島2-1-25
電話 025 (285) 3311

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第209集『前波南遺跡 伝極楽寺跡』 正誤表追加

頁	位置	誤	正
抄録	前波南遺跡 北緯	37度02分54秒	37度03分06秒
抄録	前波南遺跡 東経	137度53分55秒	137度53分44秒
抄録	伝極楽寺跡 北緯	37度03分07秒	37度03分18秒
抄録	伝極楽寺跡 東経	137度54分30秒	137度54分18秒

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第209集
『前波南遺跡Ⅱ 伝極楽寺跡』の訂正について

		誤	正
14頁	第6図		下の欄外図
19頁	25行目	【鈴木・遠藤1998】	【鈴木ほか1988】
56頁	19行目	上田正昭編 2003	上田正昭編 1993
56頁	追加	加藤 学 2008 「第V章 遺物 3D 石器」『姫御前遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第184集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	
57頁	追加	鈴木都夫 2000 「Ⅰ 概説 1.地形概説」『新潟県地質図説明書(2000年度版)』新潟県商工労働部 商工振興課	
61頁	報告番号 49	口径90mm 器高 - 底径 -	口径90mm 器高19mm 底径42mm
62頁	報告番号 96	口径200mm 器高 - 底径 -	口径180mm 器高 - 底径 -
図版18	スケール		



第6図 前波南遺跡グリッド設定と基本順序